
ノスタルジア管理局

彩人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ノスタルジア管理局

【Nコード】

N2261J

【作者名】

彩人

【あらすじ】

ここは閻魔庁直属の『ノスタルジア記憶管理事務所』。

人は死後、現世での記憶を持ち閻魔庁を訪れる。それは事故・寿命・自殺いずれによっても同じように扱われ、水先案内人により川を渡りて辿り着く。

その後、現世での行いを裁判官ならぬ、閻魔大王様に裁かれ行き先を決められる。

その過程で、時折記憶を落したり、紛失する奴がいたりするから性質が悪い。

そういう奴の面倒をみるのが『記憶管理事務所』内「管理局」の仕事だったりする。

そしてまた、一人の男がここを訪れた……。

男の名は「J」……すべてを忘れ、管理官である「雪」と共に記憶を探す事となる。

挿絵挿入開始しました。

イメージを壊したくないと言う方は挿絵機能をオフにしてください

^^

序章

『記憶』・・・それは過去に経験した事や、一度覚えたことを時間の経った後までも、大体その通り思い出せること。また、「心」に残って消えないこと。

青空。どこまで行っても、見渡しても青い、空。

別段いつもと変わることもなくそこにある空に、彼は心を奪われる。

この時間が好きだと思う。

一人誰もいないビルの屋上に佇み、ただ好きなだけ空を見つめる。平和で長閑な時間。

時折、風が頬を擦り誰かの訪れを知らせる・・・。丁度今のよう

に。「雪ー、雪ー、雪ー？」

遠くから聞こえる声に耳を澄ませながらも、彼は自分から声をかけるような事はしない。

それは現実逃避というか・・・声の主が持ってくる面倒事を知っているからである。

決して狭くもない屋上を声の主はくまなく探す。それこそ鼠が通るような細かな隙間でさえもだ。

そうしてようやく自分の足元に長い影が出来ている事に気付くと探していなかった「頭上」を見上げた。

「雪。こんなところにいたのか」

息切れしながらも、ようやく見つけたとでも言いたそうな声の主

に、彼は内心”俺はネズミか！”と僅かな憤りを感じながら「罫ゑい。そんなに慌てて、どうした？」と惚けた返事をする。

「どうした？・・・じゃないでしょ。」

分かり切った答えに罫は半ば溜息混じりに応えると「また」が迷

つてたよ。」と要件を伝えた。雪は「あゝ」と予想通りの面倒事に頭を抱える。

ここは閻魔庁直属の『記憶管理事務所』ノスタルジア。

人は死後、現世での記憶を持ち閻魔庁を訪れる。それは事故・寿命・自殺いずれによっても同じように扱われ、水先案内人（いわゆる『死神』デスリッパー）により川を渡りて辿り着く。

その後、現世での行いを裁判官ならぬ、閻魔大王様に裁かれ行き先を決められる。まあ、これは空想の様なホントのような・・・実際に見たことも会ったこともない自分には、まるで遠い出来事なのだが。

その過程で、時折記憶を落としたり、紛失する奴がいたりするか
ら性質が悪い。

そういう奴の面倒をみるのが『記憶管理事務所』内「管理局」の
仕事だったりする。そして、その管理局で働いてるのが自分と、『
罌』である。

大まかに云ってみたものの、実のところ他にも仕事はあるし、メ
ンドクサイ組織図やら省庁同士の関係やら表に出てるのは氷山の
一角でしかない。

とにもかくにも、そんな『記憶管理局』で働いてたりする。

「雪、独り言？」

そんな彼の説明空しく、隣で一部始終を見ていた罌が唐突に、割
り込んだ。

「アホか、そんな寂しくないわ！これは読んで下さってる方々に
対しての最低限の・・・」

「読んで下さってる？・・・最低限？」

罌は訳が分からないという顔で訝しがり、雪はそれを見て更に落
胆すると「もうええわ・・・」とぼそぼそ呟き「先行くで」と平和
で長閑なビルの屋上を後にした。

時、同じく記憶管理事務所内・階段。

「せーつ、雪さん」

螺旋階段内に男の声が響き渡る。男というよりは少し若い『青年』という言葉の方が当てはまる、その風貌はしきりに一人の名を呼んでいた。

屋上からゆつくりとした足取りで、その人物は現れる。

「おいっ、その」

突然、頭上からかけられた声に反応して青年は上を見る。そこには吹き抜けの螺旋階段から見える青空と陽の光を背負った小柄な人物がいた。

「雪さん！」

青年は急いで階段を駆け上り、また雪はそれに構わず階段を下りていく。青年の様子を眺めながら（犬みてえ・・・）なんてぼんやりと雪は思い、そんな自分の考えに自嘲気味に苦笑した。

「あゝ良かったあ。一瞬マジで迷子になったかと思いましたよ。」
そんな風に明るく笑う青年を見て「立派な迷子だよ」と呟いては見たものの、目の前の人物はそれを気にする風でもなく笑顔を向けている。

（尻尾と耳が見える・・・）

お尻にふさふさと機嫌良さそうに揺れ動く尻尾と、犬耳が見えた気がして雪は微かに頭を抱えると「ところで・・・」と話を切り出す。
「記憶の在処おとしものは見つかったのか？」

急に真面目に問われ、青年はその佇まいを直すと「さっぱり」と殊更明るく返答した。

（笑い事じゃねえよ、おいっ）

雪はその場に座り込み、心の中で一人突っ込みをして落胆する。目に見える見事なまでの落胆ぶりに青年も「あれ・・・すいません。なんか・・・」と言葉を付け足して雪の様子を気遣った。

この青年は『ジェイ』。

推定年齢16歳。男。何故に推定なのかといえば、自分がどこの誰で何で記憶管理局にいるのかも覚えていない『名無しの権兵衛』さんだからである。

ここまで記憶のない人間は特例以外の何者でもない。殆どの人は記憶を紛失おとしても自分の名前や年齢、家族構成などある程度の事は覚えている。ところが彼に至っては名前はるか、自分の生死さえも覚えていなかった。

これは『記憶探し』において致命傷といえる。

本来なら、個人の持っている情報をもとに閻魔庁の『記憶の海』メザールコンピュータに問い合わせし、それをあるべき場所に拾いに行くのが仕事だが、彼には検索にかけられるような情報が一つも無い。

その為、普段なら管理官が探す記憶ものも本人同行を許可し、些細な情報をパズルのピースをつなぎ合わせる様に集めることになったのだ。

(全く、厄介なのを連れてきてくれるよなあ。メンドクサイ事この上ないね・・・)

雪は心の中で憎まれ口を叩きながらも、真剣に考えていた。彼がここに連れて来られたのが三日前。もし彼がお亡なくなりになっているのなら、葬儀にしろ告別式にしろ何処かで何らかの動きがあってもいい頃合いだ。

管理局内には様々な人間がいる。情報探索のスペシャリストと云って過言ではない者も。

だからこそ地上でその様な動きがあれば、それは逐一報告され、否応にも管理官の耳に入る仕組みになっている。ところがその報告が無いのだ。いや、正しくは「かれ」に当てはまりそうな情報がない。

「とりあえず一旦、局に戻るか・・・」

ここにも出来る事は何も無い。雪は情報を求めに管理局のある事務所に戻ることにした。

空は青く、澄み渡る・・・長い長い「記憶」探しの始まりだった。

始まり

「だーかーらー！他の情報は無いかって言ってるの!？」
管理局内に雪の音が響き渡る。

「これ以上は無理だつて！大体、そっち」の情報が少なすぎるんだよ！」
暖かい昼下がり、雪とJは管理局内にいた。窓際のつい立ての向こう、言い争う二人のやりとりに局内にいた人間は「またか・・・」と半分呆れ顔で机に向かい、一人取り残されたJは不安顔でそれを見守る。

「『年齢16歳位、男、日本人』なんて、見りゃあ俺だつて分かるつっーの!」

「んな事言つたつて、他に何も無いんだから仕方ないだろうが!」
Jは自分の事を言われているだけに肩身の狭さを味わうが、かれ「自身何も覚えていないだけにこのやり取りを止める事が出来ない。いつのまにか視線は逃げ場を求め局内を彷徨う・・・」
ふと、その視線は墨の元で止まった。

「二人とも、その位にしたらどう?」かれも困ってるじゃないか。」
墨はその視線に気づいたのか、ゆっくりと歩いてくると仲裁に入る。二人は近づいてくる墨に気がつく、睨み合っていた視線を互いから墨へと移した。

「墨、聞いてくれよ。雪がまた無茶ばつかり言うんだけど」
「どつちが!・・・お前が役に立たないからだろ」が。」
お互いに一步も譲らず、そんな姿に墨は溜息を漏らす。

「雪も雀も子供じゃないんだから、いい加減にしたら?」
墨は「呆れてモノも言えないよ」と小言の様に呟くと、後ろで立ち尽くすJに向き直る。

「J、君も少しは止めなさい。少なくとも君の事でもめてるんだから。」
「。」

諭すように墨に言われると、Jは素直に「すみません・・・」と謝つ

た。

「ところで」君、彼の事知ってっただけ？」

墨は今更ながら気づいたように疑問を口にする。「J以外の二人も「えっ?!」と慌てて振り返り、三人の視線はJに集中した。

「いや、あの、俺、」

歯切れの悪いJの言葉に雪は徐々にイライラを募らせる。Jはそれに気づくわけもなく、視線を彷徨わせてしまう。

「・・・おつまえ・・・本当に・・・」

震える声で雪が怒れる拳を握りしめると、それを見て墨は「まあまあ」と宥めるように雪の拳を治め、面識のない男を紹介し始める。

「彼はね、雀。綾瀬あやせ 雀すずめといって記憶管理局の情報探索管理官なん

だ。君の情報は彼によって検索にかけられ、その情報ソレを元に僕は動くんだよ。」

丁寧に説明してくれる墨をよそに、当の本人はどこ吹く風で興味も薄そうにPCパソコンの画面に向き直っていた。

「雀。知ってると思うけど、こいつが『J』な。」

墨がJに紹介し終えたのを見て、雪は雀カレにJを紹介する。紹介というほど丁寧なものでは無かったが、何もされないよりは余程いいと思えた。

それでも雀カレはやはり目を合わせるでもなく、「ん」と生返事を返す。どうやら「人間ヒト」に興味が無いらしい。それとも単に『J』のことに興味が無いのかも知れない・・・。

「あ、あの、俺名前分かんなくて・・・『J』って呼ばれてます。よろしく、お願いします」

Jはそれでも深々と頭を下げた。興味を持って貰えない人に挨拶するというのは、想像していたより空しいものだと感じながら・・・。そして、ある疑問に辿り着く。

「・・・ところで、何で俺って『J』なんですか？」

今更ながらの質問に、今度は興味の無さそうだった雀もJのことを見た。

「今更かよ!？」

軽い突っ込みと同時に雀がJの目をまっすぐに見つめると、Jはびっくりして少し視線を外す。雀の瞳は驚くほど綺麗な灰褐色で、全体に色素が薄い印象を与える。だが、眼光は鋭く見つめられると怯んでしまう感じがした。

「まあまあ、雀。それにしても・・・本当に何も聞いてなかったんだね」

壘が頭を抱え「同情するよ」と付け足し、雪の方を横目で見る。雪は居心地が悪そうに視線を下に落とすと「うるせえ」と小さく悪態をつき、急に顔をあげ叫んだ。

「俺は、こいつと組むなんて認めてないからな!!」

「雪、それとこれとは違うでしょ？」

「誰がなんと言おうと、俺は反対だね!」

二人が何を言っているのかJには皆目見当もつかず、雀は興味を削がれたようにまたPCに向き直る。

「ちよっ、ちよっと。何がどうなってるんです?認めないとか・反対とか・・・さっぱりなんですけど」

雀がこの場をどうにかしてくるだろうとは思えなかったから、仕方なくJは二人の中に声をかけた。

壘とのやりとりを阻まれ、雪は機嫌も悪そうに雀の横の空いていた席に腰掛ける。

「要するに、お前は、今、管理局こくの一員扱いなんだよ、」
文節を切られ語尾が強められた文章は、雪の心情こころそのものに聞こえた。雪の埒も無い説明に、壘が慌てて言葉を付け足していく。

「つまり、君の記憶を探すのに君がここで自由に動く為には、それなりの準備というか・・・手順というか・・・とにかく、ただの人間に内部を動かれる訳にはいかないんだ。」

壘も説明の意図が見えないのか、自分の中で考えながら話す。まとめるところだ。

『記憶管理局』は特殊な機関であり、その全てが閻魔庁預かりの下謎に包まれている。ここで働く『管理官』についても年齢・性別・職業などが明かされず、個々の生死についても不明。また、閻魔庁の許可を受諾し、制限のもと現世や記憶の眠る「記憶の海」に行くことが出来るのも管理局内、管理官なのである。

「で、言っちゃうけど」

墨が徐に言葉を続けた。

「実は現在、管理局内には九人の管理官がいるんだ。」

「えっ？・・・それって俺、聞いちゃって良いんですか？？」

全てが謎に包まれている筈の管理局・管理官の情報をいとも簡単に言われて、Jは一人焦る。

「・・・」

「・・・」

墨の発言を気にする風もなく、雪も雀も黙ったまま動かない。Jはもう一度墨の顔を見つめる。

「うん。だからね、君にこの管理官になって貰おうと思うんだ」

墨はニコツと微笑み、その言葉を聴いてJは目の前が真っ白になった気がした。

「え〜・・・と？」

聞き取れなかったとでも言うようにわざとらしくJが聞き返すと、墨は改めて「いらっしやい。管理官・J」と言い直す。どうやら「これは決定事項らしい。Jに拒否はない。」^{カレ}

「阿呆、一時的に、だ」

固まるJを見て、雪が嫌そうに言い放つ。

「一時的？」

「ん〜・・・まあ、そういうこと。」

墨も雪の言葉に相槌を返すと、「それとね」と呼び名についても説明してくれる。

「君の呼び名コトネームなんだけど」

「呼び名?・・・」ですか

「うん」

管理官の間で呼び合う名前。『呼び名』コトドネームは、全てを謎に包まれる彼らにとつては必要不可欠なものである。本来なら、生前の自分の名や、記憶に残る言葉を使う管理官が多い。実際、雪や墨はその手のつけ方をした。

「君には一切の記憶がない。本当は自分でつけるのが定例なんだから・・・僕らも呼び名がないのは困るし。」

「はあ・・・」

墨の言葉にJは頷く。確かに、急に名前を考えると言われても多分困るだろうと彼は心の内で思う。

『名無しの権兵衛』とは呼ばれたくないし、誰かがつけてくれるのなら、それもまた良いんじゃないかと考えた。その時だった。

「だから、単純にアルファベットの10番目、『J』ってつけたんだよ」

「丁度10人目だったしな」

雪と雀がどうでも良さそうに種明かしをする。雀に至っては楽しそうにニヤニヤと笑っていた。

「何が可笑しんですか?」

Jが不愉快そうに言い返すと、雀は白けたように笑うのを止め、またそっぽを向く。

「二人とも、そんな言い方は・・・J、違うんだ。あのね」

墨のフォローを遠くで聞きながら、Jはとんでもない処に来てしまったと今更ながらに後悔していた。

空は快晴。季節は春から夏に移り変わろうとしている。

記憶を紛失なくした『J』は記憶管理局でこれから、自分を探す事になる・・・。

自分が誰であり、何故ここに迷い込んだのか。今の彼にそれを知る

術はない。

全ては、ここから始まるのだ・・・。

覚悟

呼び名・『J』。

記憶管理局内で管理官と認められた、10番目の男。

その能力や、存在自体が謎の彼は名前の由来に『JOKER』の意味を含んでいる。最も、今はただの「名無しの権兵衛」であり、「厄介者」な訳だが……。

「雪さん、ちよつ・ちよつと待つて下さいよ」

「遅い!!早くしろ」

大量のファイルを詰めた段ボール箱を顔の前で抱え、Jはあるかないかの視界で前を行く雪を見る。それを上から見下ろして雪はピシヤリと冷たく言い放った。Jが管理局に仲間入りして3日が経とうとしていたが、現状は何も変わっていない。それに怒りを感じてか雪は相変わらずイライラを募らせている。

「J君、これも試練なんだ……」

Jの横を同じく荷物を持った墨が通り過ぎていく。通り際「頑張つてね」と優しさを見せる辺りに「なんていい人なんだ」とJは感動した。

「ってというか……何処に……行くんです?」

荷物の重さにかろうじて耐えながら雪の元まで辿り着くと、雪は「黙ってついてこい」と呟きまた更先に行ってしまふ。

小さくなる後ろ姿を見つめ、Jは深く溜息を一つ吐くと「よし」ともう一度荷物を抱え直して雪の後を追ひ、歩きだした。

『記憶管理事務所』

ドアには確かにそう書かれている。

「失礼します、空間移動管理官・雪。入ります」

「同じく、中間管理官・墨です」

二人はドアの前で立ち止まると、今までに聞いたことのないような真剣な声でそう告げる。その声を受け、扉がゆっくりと開く。Jはゴクリと息をのんだ。

開いた扉の先には更に幾重にも続く廊下とドア。不思議な感覚の場所だった。

無数のドアは色とりどりに彩られ、けれども全てが閉ざされている。長い廊下を歩いて行くと、ふと二人は足を止めた。Jも慌てて立ち止まり二人の間から、その先をのぞき見る。

「うわっ・・・」

思わず言葉を漏らしたその先には、まるで森のような空間が広がっていた。木漏れ日が射し、風が心地よく吹き抜ける。緑は多すぎず、少なすぎず鳥のさえずりまで聞こえてくるんだから本物なのかも知れない。

「要、いるんだろ」

その森に向かい、唐突に雪が言う。墨も雪の視線の先を見つめていた。

辺りはそれでも変わることなく、木々の葉がざわめく音を伝える。

Jは一点を見つめる二人を不安そうに見つめた。

「要。」

雪がもう一度低く名前を呼ぶ。今度は反応があったようだ。

Jの目にも分かるくらい緑が動き、先ほどまでなかった筈のものがそこにある。景色によく似合う木製椅子とテーブル。椅子はこちらに背を向けていて、そこにいる人物の顔までは分からなかったが暖かな湯気が踊っているのが見えた。

「要、連れてきたぞ」

雪は椅子に腰掛ける相手を確かめるまでもなく、話を切り出す。それを横で見ていた墨が「雪、ちゃんとしないと」と改めて言葉を訂正する。

「管理官候補・Jをお連れしました。」

「えっ・・・って、俺ですか!？」

「お前以外の誰がいるんだよ」

墨から出た自分の名前に一体何が起こったのか状況を掴めず聞き返すと、やはり雪に冷たくあしらわれた。墨が「まあまあ」と苦笑いを返し、「要さん」と椅子の向こうの相手に問いかける。ゆっくりと椅子が動く。

「やれやれ、騒がしいな」

椅子から立ち上がったその人は、黒いズボンに、黒いシャツ、長身の上に・・・美形だった。

「まあ、そんなことを言わないで下さいよ」

「お前がこんなところに呼ぶのが悪いんだろ、要」

「雪。いちを上司だよ」

「いちを・・・だろ」

雪より頭一つか、一つ半位違う長身の男は椅子に寄りかかり雪と墨のやり取りを聞いている。その手にはいつのまに点けたのだろうか、タバコが赤く燃え、その煙が黒いシャツによく映えた。

「・・・エイ?・・・」?

名前を呼ばれ、我に返る。目の前に墨の顔があった。

「へ?墨・・・さん」

「大丈夫?なんかぼうつとしてたみたいけど」

「え・・・」

そう言われて初めて、自分が彼に「要」に見とれていたことに気づく。男の人に見とれたのは(覚えていないけれど)初めてだと思っ。それくらい彼は人間離れしていた。

「彼が、『J』君？」

要がタバコを口に運び、まっすぐにJに視線を向ける。Jの体が少し強張った。何故かその眼には人を縛り付けるような力があるんじゃないかと錯覚さえさせる。

「ああ。連れてきた」

雪の相槌に、要は「ふうん」と興味も薄そうに上から下まで・・・文

字通り頭の先からつま先まで品定めするように見回すと一旦目を閉じ、「それで？」と今度は隣にいた雪に視線を向けた。

「ありそうか？」

「いや。まだだ」

「そうか」

端的な言葉のやり取りが「自分の記憶」の事を差しているのだと気づくのに数秒かかる。二人は互いに目を合わせるでもなく、片言の会話を続ける。要は終始タバコの煙に視線を上げ、逆に雪は自分の影を見るように視線を落としていた。

「それで、許可は頂けますか？」

埒の明かない会話を聞いていた墨が、核心に触れる。要は視線を墨へと戻すと「そうだなあ」と小さく呟いて雪を見た。

「なんだ？」

雪もそれに気づいて訝しげに眉根を寄せる。要は表情を変えることなく、煙を吐き出すと

「この件は、雪に一任する。」

「……」

「……」

要の唐突な責任転嫁ともとれる一言に、皆一瞬固まった。そして三人に思考が戻った頃、

「ばつっつっ、かじゃね〜の!!」

「要さん、それはいくらなんでも乱暴すぎやしませんか?!」

雪と墨の二人は、同時に要にくっついてかかる。もうJには理解が出来なかった。

多分、この『要』という人は二人にとって「上司」で、偉い人で、何かの決定権を持っているのだろう。そんな人が簡単に「一任」しては、仕事放棄ともとれるのではないか。Jはそんなことを思った。ようするに「要」にとって自分は、取るに足らない存在で、他人に一任してしまえる程どうでもよくて……そう思うと自然と言葉が口について出た。

「可笑しくないですか・・・それって」

自分の口から出た言葉に「は、ハツとなる。慌てて三人の方を見ると、墨と要は驚き、雪は・・・ニツと笑ってくれていた。ここにきて初めて見た「雪」の笑顔に「は背中を押される。」

「俺、諦めたくないんです。自分自身が何者か知りたいたいです。」それは誰にも言えずにいた言葉。ずっと不安がなかったわけじゃない。何も思い出せなくて、ここが何処だかも、なんでここにいるのかもまだよく解らなくて。この先どうすればいいのかも、どうなっていくのかも知れない世界で、今誰かに決められようとしている。自分は何もしいままで。

「何も分らないけど、出来る事があればしたい」

「J」の中の止まっていた時計の針が動き出したような気がした。もう立ち止まったりしない。諦めない。そう固く心に誓って、

「お願いします。協力してください!」

「Jは頭を下げる。そこに迷いはなかった。」

「J・・・」

墨が呟くのが聞こえる。「Jは頭を上げず、そのまま要の言葉を待つ。少しして、見つめていた地面に影が伸びてくるのが見えた。「Jは緊張を深くし、握っていた拳により力をこめる。」

「おいっ、顔上げる」

「っっ」

聞こえてきたのは予想外に厳しい「雪」の声で、やっぱりあの人には伝わらなかったのかと「Jは肩を落とし顔を上げた。そこに要の姿はない。」

「なんで・・・です」

「・・・」

「あんたたちが勝手に『管理官』になれって言ったのに、なんであの人は何も言わずに去るんですか?!」

恨みごとのような台詞がとめどなく溢れた。もうぐちゃぐちゃで、自分が無くなってしまうようで・・・その怒りを目の前の雪にぶつ

ける。

自分が情けなくて、八つ当たりなんかする気もなかったのに・・・
一粒の涙が零れた。

モウ、コワクナイ

聞き覚えのある声が聞こえる。いや、聞こえた気がした。一瞬。
すぐに消えた声は、もう聞こえない。

ポンツ

不意に頭の上に、優しく手が置かれる。雪の手だった。

「せ・・・っさん？」

訳が分からなくて「は雪の顔を見つめる。その表情は先程と同じ・・・
いや、それよりもっと優しく笑ってくれていた。

「何で」

「よく言った」

「えっ？」

雪はそれだけ言うと、手を離す。後ろで墨も優しく微笑んでくれていた。

「どういうこと・・・ですか？」

目を瞬かせ「は眉根を寄せる。墨は口元に人差し指を立てると「上
出来っってこと」と悪戯っぽく呟く。

「要さんは記憶管理事務所及び管理局の最高責任者に当たるんだけど、
彼が君に何も言わなかった。実はそれだけで十分なんだ。」

墨は続けてこう言った。

「もともと、彼が協力体制をとってくれるなんて思ってたないし。と
りあえず雪に一任してくれたのと、君の本音が聞けたのでここに来
た目的は果たせたんだよ」

頭の中はショート寸前で、何も言えずに只、相槌を返す。

「どの道、今の要に決定権はない。実体じゃなかったからな」

「それって・・・」

「やっと、本音言いやがって」

雪は嬉しそうにJの背中を叩いた。

「ここでは意志の力が絶対だからね。」

意志のない人間、意志の弱い人間の望みは叶わない。ここでは意志の力こそが全てで、「生きたい」・「知りたい」そういう欲が自分自身を動かす。墨はそう説明してくれる。

今までのJには、その欲が無かった為何の手がかりも見つからなかったのかもしれない。こどもも言った。

「欲・・・生きたいと思う願い」

「まっ、死んでるかも知れないんだけどな」

前向きになったJに、釘をさすように雪が野次を入れる。雪の一言に急激に沈むJを見て「雪！」と墨が雪を窘める。

「とにかく・・・だ」

目の前に雪の手が出される。墨も気づいたように手をJへと伸ばす。

「改めて『ノスタルジア記憶管理局』へ、ようこそ。」

二人は微笑む。Jは言い表せない気持ちになって下を向くと「よろしく、お願いします」とその手を握った。

はれて『管理官・J』の誕生である。

依頼

モウ、コワクナイ

あの時間こえた「声」は何だったのだろうか……？

何処かで聞いたことがあるような、懐かしい感覚。君は誰？

「J、ちよつと来い」

「は……はい」

管理局オフィス内で雪に声をかけられ、Jはコピー機持ち場から離れる。管理局の一員と認められたものの、彼に出来る事は少ない。とりあえずのところ、荷物持ちに始まってコピー取りや書類整理、掃除に花の水変えまで……いわゆる雑用係としての仕事を任命された。勿論、Jに拒否権は渡されていない。断る理由もなかったが。

雪の席は管理局内一番奥、日当たりの良い処にある。隣の席には「綾瀬 雀」が座っているらしいが、彼は殆ど自席に落ち着いている事がなく、今日もそこは空席のまま主人が帰るのを待たされていた。

「ちよつと座れ」

「え……？」

雪はJが近づいてくるのを足音で確認すると、顔を見るでもなく指示だけを出す。その指示があまりにも端的で、Jは聞き取れずに聞き直してしまった。

「良いから、そこに座れ」

雪はJに聞き返され、今度はわざわざ雀のデスクの椅子を引き出し座るように促す。これなら間違える筈もない。Jは「失礼します」と周りに雀がいないことを確認してから、席に着いた。

「何ですか？」

何となく慣れない位置に、Jは早く要件を済ませようと雪に詰め寄るが、当の本人はまたデスクに向かい何やら頭を抱えている。

「雪さん？」

「……」

名前を呼んでも返事さえない。「座れ」と言ったからにはJの存在に気づいているであろうし……。もしこの距離で忘れられていたら、それはそれで悲しいを通り越して尊敬できると思う。そんなことを思いながら、Jはもう一度だけ名前を呼んでみる事にする。

「……雪さん？」

「……」

やはり返つて来たのは沈黙で「駄目だこりゃあ」と、Jは気づかれないように溜息一つ吐く。あくまで気づかれないようにした、つもりだった……。なのに。

「だあ……」

「うわあ！」

頭を抱えていた雪が……。吠えた。

雪の雄叫びにも似た唸り声に、Jは椅子からひっくり返りそうになる。

「な……。何なんですか??」

とりあえず姿勢を直し、バクバクいう心臓に手を当てながらまたもや雪の顔を覗く。雪はそれに気づいたのか「キッ」と視線でJを黙らせ「うるせえんだよ……」と聞こえるか、否かの声で唸った。「ごちゃごちゃ、ごちゃごちゃ……。少しは大人しく待てないのかよ?!……えっ?!」

鋭いその視線に圧されJは椅子の上で縮こまってしまふ。すぐにも正座したい気分を抑え、シユンと頂垂れると頭上から「そんなんじゃ立派な犬になれね」と、冗談混じりの雪の声が聞こえた。「……?」

すぐには理解できず、Jは雪の言葉を脳内で反復させる。

『そんなんじや立派な犬になれね〜ぞ』

「そんなんじや立派な・・・犬う?!」

「やっと思い付いたのか」は慌てて「雪さん!!」と、凄じ剣幕で雪に詰め寄った。

「どーいうことですか、誰が『犬』なんです?!」

「んっ」

「・・・」

雪はそれでも平然とデスク上の書類に目を向け、指で「お前だよ」と返答する。「は絶句した。

「・・・冗〜談じゃないですよ!人の事呼んどいて、何なんですか、あなたは」

とうとう堪忍袋の緒も切れたのか、「」は「持ち場に戻ります!」と勢いよく席を立ちあがる。その時だった。

「おいつ、」

雪が静かな声で名前を呼ぶ。歩きだそうと一歩を踏み出したものの、「」はその声に逆らえず渋々振り返った。

「座れ」

雪は予想以上に真剣な表情で、もう一度「」を椅子に促す。その眼に先程までの悪戯っぽさはなく、ようやく話を切り出すつもりになつたらしい。「」も落ち着いて椅子に座り直した。

「何なんです」

雪の言葉に従ってしまったのが、ちょっと悔しいのか「」は少し視線を外し呟いてみる。

雪はそんな「」の態度を気にする風でもなく、先程まで自分が見ていた書類の束を彼に手渡した。

「これは?」

「ここの規則」

「・・・規則?ですか」

「ああ」

手渡された書類をばらばらと捲ってみるが、言葉が難しくすぐに

は理解できそうにない。どうしたものと目の前にいる人の顔を覗き込むが、雪は頼ずえをついたまま固まってしまっていた。

(後で辞書でも引くか・・・)

仕方なく諦めると「これだけですか？」と要件が済んだのかを確認する。その言葉に気づいて「いや」と視線を合わせると、

「何か、変化がなかったか？」

「変化？」

急に何の事を言っているのか分からず、「Jは戸惑う。

「昨日、覚悟を決めたる」

昨日、雪と壘に連れられ「管理事務所」を訪れたJは、要という『最高責任者』の元で『記憶探し』をする覚悟を決めた。確かにそうだ。でも、その事と雪の言う「変化」と何の関わりがあるのだろうか。

Jの気持ちを知ってか知らずか、雪は「まあいい」と呟いたあとデスクへと向き直った。

「・・・？」

雪が何を言おうとしていたのかは分からなかったが、その様子から、それ以上話をする気が見られなかったので、Jは「戻ります」と雪に一礼して席を立つ。その後ろで「嘘はつくなよ」と雪の悲しそうな声が聞こえた。いや、聞こえた気がした。

「・・・」

何となくもやもやした気分では持ち場である「コピー機」前まで戻ってくる。

「おかえり」

と、そこには壘が立っていた。

「壘さん」

「ごめんね。ちょっと借りてるよ」

壘はコピー機を指差しながら、申し訳なさそうに微笑んでいる。

Jはこの人物が意外とお気に入りだった。壘は見た目こそ女性の様だが、本当は芯の強い優しい男だと雪が呟いていたのを聞いたこと

がある。その通りなのだろうと思う。

(墨さんって、なんで髪の毛伸ばしてるんだろ)

墨は前髪を目の上あたりで切りそろえ、耳の下にかかる位に段力ツト、後は真っ直ぐに肩甲骨まである髪をおろしている。いわゆる「お姫様カット」だと言っている。背丈も160後半で、外を歩けばよく女性に間違われる事があるという。

「J? どうかした?」

「墨さん・・・」

Jの呟きに、墨は「うん?」と不思議そうな表情を浮かべた。

「あの」

「よっ!!」

言葉を発そうとした途端、背後から元気よく声がかけられる。こんな風に表れるのは知っている中で一人しかない。綾瀬 雀。こいつだ。

「雀さん、急に出て来ないください」

話の出鼻を挫かれ、Jはその怒りの矛先を雀に向けた。振り向いた先にいたのは変わりなく飄々とした顔の雀で、その視線はJを捉える事なく墨へと向けられていく。

「墨、急ぎの仕事なんだけど・・・手、空く?」

「今?・・・本当に急だね」

二人の会話の中に、すでにJの存在はない。Jはその場に取り残されてしまう。尚も会話は続く。

「キツネは?」

「あいつは今、無理」

「イチは?・・・と言いたい処だけど、彼も今は動けないと思うよ」

「どちらにしろ今回はイチじゃ駄目だな」

「そうなの?・・・僕もこれから用事があるからなあ」

仕事の折り合いがつかないのか、二人はJの知らない人物の名前を出し合っては肯定と否定を繰り返す。そして最後に墨が出した名

前は、やはりというか・・・「雪」だった。

「雪・・・か。雪なら申し分ないな」

墨の一言に雀は解決策を見出し、「あんがとな」と軽く挨拶を交わすとすぐさま雪の元へ行こうとする。その背中を墨が呼びとめた。

「待って、雀」

雀が振り向く。「も墨の顔を見た。

「何?・・・墨」

予想外の墨の声に訝しげな雀は、墨の言葉を待つ。墨は少し考える仕種をしてから「思うんだけど・・・」と口を開く。その眼はいつの間にか雀から「へ」と向けられていた。

「「君も一緒に行ってほしい」

「はあ?」

「俺ですか??」

墨の言葉に雀と「は顔を見合わせて疑問符を浮かべる。その意図が分からなかった。

「何でよりによって「^{うす}」?!」

「いや、その言われようも何ですけど・・・でも何で俺?」

二人は思い思いに発言する。墨は少し困ったような顔をしてから「行けば分かるよ」と悪戯っぽく微笑んだ。その墨の微笑みに二人はそれ以上何も言えなくて、ただ墨の顔を見つめていた。

謎の老人・1

管理事務所の一室。あの色とりどりに彩られていた部屋の「茶色」の扉の部屋。

そこに雪と、Jはいる。目の前に腰掛けるは80を過ぎたであろう立派な白髪と髭の丸メガネの老人。

部屋の空気は張り詰め、誰も口を開こうとしない。何故こうなったのかと言えば、始まりはこうだ。

昨日の昼間。綾瀬 雀が急な仕事の依頼だと墨さんに話を持ちかけた。

その時、別の用事があつた墨さんは代役に他の管理官の名を口にするが、手の空いている管理官はなく、その矛先は奥のデスクで考え事をしていた「雪」へと向けられる。ここまでは良かった。

だが、墨さんは何を思ったのか少し考えてからトンデモナイ事を言い出す。

『J、君も一緒に行ってほしい』

これだ。

「はあ？」

「俺ですか??」

勿論、俺と（この人に言われるのは腑に落ちないけど）綾瀬 雀は驚いて、その真意を問おうと墨さんに詰め寄った、が、

『行けば分かるよ』

と悪戯っぽく微笑んだ墨さんにそれ以上何も言えなくなってしまったのだ。

そして、今に至る……。

先刻より黙り続ける二人。事前に雪さんからの指示は特になく、

墨さんから「Jも同行するよ」と告げられた時も彼は驚き一つ見せなかった。

（雪さんって男前だよな。肝が据わってるといっつか・・・）

今も難しい顔をしたまま固まる「ご老人」と対峙し続けている・・・。そんなことを考えているとふと雪が動き出す。頭を二度ほど掻くと、急激に態度を悪くする。足を組み、頬杖をつき、溜息まで吐いてから手元の書類に目を落とす。

「雪さん？」

Jは老人の機嫌を損ねるのではないかと心配になり、キョロキョロと老人へ視線を向けながら小声で雪に問いかける。雪は億劫そうに「あん？」と返事を返してくるが、その態度を変えるつもりはないようだ。

「何してるんですか、そんな態度で」

「心配ないぜ」

「何言ってる・・・」

Jは雪の言っている事が理解できずに、雪を窘めようとするが次の瞬間「寝てるから」という彼の言葉と共に豪快な鼾が聞こえてきた。目の前のご老人から。

「ぐお・・・んがっ」

Jはその鼾を聞いて落胆する。先程まで緊張していただけに、その分余計にどつと疲れが襲ってきた気がした。

「雪さん？」

「・・・」

今の気持ちを誰かに知って欲しくて、Jは隣で飄々としている雪へと同意を求めてみたが、やはりそこに返事はない。気にも留めないように書類を見つめ、自分のペースで動く。それが彼だ。

「・・・はあ」

言葉に出るほどの溜息をつくとき、ようやく「辛気臭いな」と雪が反応してくれる。視線を書類からJへと移し「ほらっ」と持っている書類をJに手渡す。

「これは？」

「情―報―」

「情報つて・・・」

端的な雪の言葉にも随分慣れた気はするが、出来る事ならもう少し説明が欲しいと思う。まあ墨さんのような親切かつ丁寧な説明を彼に期待するのは無理な話だと解っているが。

「いいから、見る」

「・・・はい」

渋々といった感じでJは書類へと目を通す。それを見て雪が説明を始める。

「『金子^{かねこ} 高久^{たかひさ}』 御歳89歳。男。三日前ご逝去されるも、その身柄・・・魂が中々閻魔^{うま}庁に上がってこず、水先案内人に保護されることになる」

Jは書類に書かれた情報と照らし合わせながら、真剣に話を聞く。「ところが・・・だ。保護され連れて行かれた閻魔庁で駄々をこねてな。これが一筋縄じゃいかないって事で案内人経由で記憶^う管理事務所に来たんだと」

「ちよつと待つて下さい」

Jは説明が一旦途切れた事を確認すると、疑問に思つ事を雪にぶつけた。

「水先案内人に保護・・・って、通常死んだら水先案内人に連れられて閻魔庁に行くんじゃない・・・。それに、どうして来るのが記憶^こ管理事務所なんですか？」

Jの質問に彼は億劫そうに眉を顰めるが、諦めたのが、溜息一つ吐いてから「要するに・・・」と話を再開する。

「水先案内人は基本的に川の岸边で出待ちしてるんだよ。いちいち迎えに行つてたら限がないだろ」

「はあ・・・言われればそうですね」

「っでだ、彼はリストに上がってからも岸边に来る様子はなく、仕方なく迎えを出したわけ」

「……」

無言になるJに対し雪は「理解したか？」と確認を入れる。その言葉にJは首を大きく縦に二度振った。

「ちなみに彼が記憶管理事務所に来た事にも、理由がある」

「どんな？」

話の腰を折られ、先を急がすJに雪はもう一度多大な溜息を漏らす。

「……すいません」

その溜息の意味に気づいてJは謝罪の言葉を述べると、雪は少し曖昧に微笑んで見せる。

「多くの事に疑問を持つのは、良い事だ」

「……」

急に見たこともない表情を見せられて、Jは二の句も告げない。

そんなJの呆けた顔に気づいてか、雪はすぐに「さて」と話を元に戻した。

「彼には心残りがある」

またもや端的に言われ、Jはただ相槌を打つ。

「それは彼の過去に関わるもので、本人は忘れてしまつて……でも、大切だった事は覚えてる」

「はい」

「そういうことつて、あるだろ」

「……確かに」

今のJには記憶が無いが、人間なら誰しも似たような経験を持つものだと思う。例えば、子供の頃見た景色、本、曲……大切な思い出なのに、それが「何だった」のか。肝心なそれは記憶されていなかったり、忘れてしまつたり、うる覚えだったりすることは少なくないだろう。

彼もまたそうなのだろうか。

「それでだ。過去に経験した事なら本人が忘れちまつても、記憶には残る」

「だから記憶管理局に来たんすね」

「はようやく納得という顔で明るく笑う。雪も頷き、目の前の老人を見つめる。」

（何事もなきやいいけどな）

心の中では、何故か、もやもやした感情が渦巻いていた。これは何かの警告なのだろうかと考える。

書類に変な点は見つからない。勿論本人からも嫌な感じ一つしないのに、胸騒ぎは治まらない。

「J、お前は何もしなくていい」

「えっ!？」

唐突な雪の忠告にJは驚く。何もしなくていいとはどういうことだろうか。

「一緒についてくるだけだ。余計な事はするな」

「どういふことですか？」

「いいから、絶対だ」

「・・・」

「上司命令だ」

納得のいっていないJに対し、雪は最後の手段に出る。管理官になった以上、上司に当たる彼の命令は絶対なのだ。Jは仕方なく「・・・分かりました」と了承した。

「とにかく、このご老人を起こして話をしてみない事にはどうすりやいいか分かんねえよなあ？」

雪の指の骨がバキボキと鳴る。Jは彼が何をするつもりなのか想像が出来る自分が怖くなった。

「雪さん・・・お手柔らかに」

「分かってるよ。あくまで仏さんだしなあ」

「はは・・・」

雪の楽しいな表情とは裏腹に、Jの乾いた笑いが室内にこだまし

ていた。

謎の老人・2

木が見える。

故郷の、懐かしい宿り木。よく遊んだ。缶蹴り、だるまさん、鬼ごっこ。

懐かしい・・・思い出。

「で、お爺さんはどうしてここに居るんです？」

「Jが困惑顔で老人と対峙する。ようやく目を覚ました彼だが、一向に口を開こうとしなかった。

問いかけに対し、反応が無いわけではない。氏名、生年月日などには頷いたり、首を横に振ったりする。

「・・・なんでですかね」

「Jは隣に座る雪に、小声で話しかけた。雪は難しい顔で「さあな」とだけ応えると、またもや書類へと目をやる。Jは溜息一つ漏らし、老人へと視線を戻す。

「あの」

「ふいふふああ、ふいふえふあふあふあふえふえふあーふあ」

「は？」

「ふおふおふお」

老人は何かを話したと思ったら、急に笑い出した。聞き取れずに、Jは余計困惑する。

「どこの国の言葉でしょうか？」

「アホ、ありゃ日本語だ」

「ええ!？」

真剣に考えるJに、雪が呆れたように口を挟んだ。まだ訳のわからないという顔をしているJを半ばやりすごし、雪は老人に視線を戻した。

「爺さん」

「ふお」

雪に名前を呼ばれ、老人が返事を返す。日本語には聞こえない。すると次の瞬間、雪が何かを取り出す。取り出されたのは、白い・
・入れ歯？

「入れ歯忘れたんだろ！」

「ふおお！」

今のはJにも聞き取れる。雪の言葉に、老人は確かに「そう！」と返事を返していた。

雪が取りだした入れ歯を受け取り、老人は口の中へとはめ込む。老人も、状況をようやくと理解できたJも、互いにすっきりとした表情になる。Jは心の中で「そういうことか」と納得した。

「どうして分かったんです？」

「ああ？」

「歯がないって」

Jの問いかけに、雪は「ああ」と意味を理解して苦笑いになる。

「たまくに、歯がなくて喋れない老人がいるんだよ」

それは分かる。亡くなる直前まで入れ歯を気にする人は多くないだろう。入れないままお亡くなりになってしまつのは珍しくないとも思う。でも、だからこそ気になる。

「入れ歯って人それぞれですよね？」

「・・・」

「誰の入れ歯です？」

「・・・まあ、その辺はな・・・ほら、こつ都合よく行くもんなんだよ」

「どう都合良くなんです？」

「それは・・・お前」

Jの問い詰めに雪は困惑する。答えを探すように視線を彷徨わせた。

「分かった！」

「・・・」

間髪入れずに「が雪へと詰め寄ると、雪は少し後ずさって唾をゴクリと飲んだ。「が何を言うか想像もつかない。雪は」が次に放つ言葉を待った。

「実は・・・」

「実は・・・？」

「それ」

「これ・・・？」

「雪さんでしょ」

「（そんなことが）あるかー！！」

予想通りというか、「らしいとも言える答えに雪は勢いよく突っ込みを入れてから落胆する。

「付き合いきれない・・・。この『天然男』に付き合ってたなら、俺の身が持たない・・・。」

心の中でのみ思うと、雪は老人へと視線を戻した。

「そ、それより爺さん！これで話ができるよな？」

「雪さん？」

「ほら」、話を聞こうぜ！？」

雪に促され、「は仕方なくそれ以上の追及を逃す。雪が誤魔化そうと必死になっていたからではなく、何より老人の顔つきが先程までとは変わっている事に気付いたからだ。

「・・・」

「・・・」

二人は静かに目の前の老人が、いや、「金子 高久」さんが話したずのを待つ。

老人は二人の視線に気づき、穏やかな笑みを見せる。そして、ゆっくりと口を開いた。

「お若いの、歯をどうもありがとう」

まずは雪への入れ歯のお礼。雪は「どういたしまして」と素っ気なく返事を返す。

「わしは、金子 高久というもんですが、お若いの、お名前は？」
穏やかな口ぶりは見た目とは違い、「」を和ませるものだった。

「あ・・・えと」

「俺が雪。こつちは」。そう呼んでくれ」

「雪さん、そんな言い方・・・」

余りにも端的な紹介に「」は少し苛立たしくなるが、よく考えれば今の彼に名乗る「名」はない。きつと「管理官」としては雪のしている事が正しいのだろう。そう思い直して、言葉を止めた。

「構わんよ、お若いの」

老人は気にするでもなく、かけていたメガネを手に取ると、服の裾でレンズの汚れを拭き始める。そうしながらゆっくりと話を続けた。

「さて、他でもない。わしには昔、とても仲の良い友人がおったんだが、そいつと約束をした気がするんじゃない」

「どんな約束ですか？」

老人の話が相槌混じりに聞きながら、「」が問う。その問いに老人は首をかしげて見せる。

「はて、それが思い出せなんだ、困つとる」

「」は予想通りの答えに曖昧に笑い、隣で腕組をしている雪に助けを求めてみるが、やはり彼は動かない。内心ため息交じりに、もう一つ問いかけてみた。

「友人のお名前は？」

「・・・わからん。今では大切な者の名前も忘れてしまったわい」
老人はそう言って笑ったが、その笑いがどこか淋しげで「」は胸が締め付けられる。

「お爺さん・・・」

「心配はいらんよ。わしや、元気だ」

「・・・」

老人はあくまで明るく振る舞う。その明るさが余計悲しくさせていた。この人と自分は似ている。」はそう思った。大切なモノを忘れ、大切な人の名も忘れ・・・彷徨う。自分もそうだから・・・心から力になりたいと思った。ふと、隣で黙っていた雪が口を開く。

「・・・爺さん、場所は？」

「・・・それも覚えとらん」

「名前じゃなくて、景色とか、音とか、何でもいいぜ」

「景色・・・音・・・のう」

雪の問いかけに、老人は頭を悩ませ始める。何か心当たりでもあるのだろうか。二人はその場で見守る事しか出来なかった。暫くして、老人が顔を上げる。思い出したのだろうか。

「そうだ」

「何か思い当ったか？」

「そうだ・・・確か大きな木と、近くに小さな祠があった」

「大きな木と・・・祠？」

「そう、わしらはよくその木の傍で遊んだんじゃ」

「・・・」

雪は黙りこむ。もう少し何か欲しい。情報となる何か・・・。「爺さん、他にないか？」

雪は思わず聞いていた。老人はまた考える動作をしてから、大きく一つ頷いた。

「そうじゃ、あの祠は火の神様を祀った。町は道が整理されて、綺麗なところじゃった・・・」

（「大きな木」、「祠」、「火の神様」・・・「整理された道」・・・）

雪は老人から齎されるヒントを頼りに考える。その眼はいつになく真剣で、口数も少ない。」は隣で見守ることしか出来なかった。

（駄目か・・・一旦、局に戻るしかねえ・・・）

何となく当てはまりそうなのに、当てはまらない。パズルのピースを頭の中でくるくる回転させてみるが、答えは出そうにない。こ

れなら一旦戻って、雀にでもやらせた方が速そうだ。雪はそう思った。

「爺さん、またなんかあったら教えてくれ」

雪の言葉に老人は考えるのを止め、頷く。そのまま雪は立ち上がると、部屋から出ようと歩き始めた。「ちよっ・・・ちよっと、雪さん！どこ行くんです?!」

「局に戻る」

「戻るって・・・」

「Jは慌てて雪の前に立ちはだかると、困惑した表情で尋ねる。その視線は後ろにいる老人を気にしていた。だが、雪はそれさえも気に留めず「お前はここに居ろ」とだけ言い捨てて、Jの横をすり抜けていく。Jはその手を掴んだ。予想以上に細い手首だった。

「俺だけいるんですか?」

「何もするなよ」

「何もするなつて・・・」

「居るだけでいい」

「・・・何しに行くんです?」

どうあっても自分の事を置いていく気らしい彼に、Jは無理やり自分を納得させ、けれども何をしに行くのかだけは聞くことにする。

「情報を取りに行く」

「情報、ですか」

「ああ」

雪は急いでいる様子で、これ以上のやり取りは無意味になりそうだった。

「気をつけて行ってきてくださいね」とだけ呟いてから、掴んでいた腕を放し、道を開ける。雪は一つ頷いてから「すぐに戻る」と言っつて、去って行った。室内に静寂がおりる。

「・・・待つかね?」

「待ちましよう」

「信じてるのかい?」

「・・・大丈夫。雪さんならきつと高久あなたさんの記憶に繋がる手がかりを探して来てくれます」

「Jは自分に言い聞かせた。互いに向かいあい、取り残された」と「金子 高久」という老人は、そのまま何をするでもなく椅子に腰かける。雪が戻るのを待つことにした。

一方、雪は事務所を抜け、管理局に戻ろうとしていた。色とりどりの部屋のドアを横目にしながら先を急ぐ。その時だった。

「雪」

背後から、唐突に誰かに呼び止められる。そこには「要」がいた。

間章

「雪」

不意に背後から呼び止められ、雪は振り返る。そこに居たのは・・。

「要?」

ノスタルジア管理事務所、及び管理局の最高責任者「要」、その男の姿があつた。

「要、何でここに?」

「お前を呼びに来た」

「呼びに?」

「そうだ」

要は端的に要件を告げる。唐突なその言葉に、雪の頭は追いつかず理解が出来ない。

「どうして?」

「・・・」

「要?」

「分からないか?」

要は不意に真剣な表情になり、雪をきつく見つめた。雪はハツと何かに気づく。

「まさか・・・」

「・・・」

雪の呟きに、要は無言のまま首を縦に振る。何かが起ころうとしていた。

一方、管理事務所内・茶色の部屋。

「金は金子 高久」と向き合う形に座っていた。目の前の老人は目を閉じ、俯いている。また眠ってしまったのだろうか。雪が部屋

を去って5分、会話もなく時間だけが過ぎていく。

(俺も、この人と同じなんだな・・・)

記憶をなくし、居場所を忘れ、「記憶管理局」に留まっている。それを不安とか、淋しいと思っっているわけじゃない。そうじゃないけど・・・。

「大切な人・・・居たのかな」

一人や二人、家族だってそうだ・・・誰か、自分がいない事で泣いてくれる人がいるんだろうか。そんなことを思うと、チクリと胸が痛んだ。

「哀しいかい？」

「・・・!？」

不意に声をかけられて、Jは顔を上げる。そこには老人の優しい眼差しがあつた。

「哀しいのかい？」

もう一度、老人に尋ねられJは瞬きをする。膝の上で手を組み、Jは俯いて応えた。

「分かんない・・・哀しくないと言えば嘘な気がするし。でも、何が哀しいのか、何で胸が痛いのか・・・それが分かんないよ」

昨日までは、こんなこと考えもしなかった。自分が「誰」とか、

「家族」や「恋人」のこととか・・・悲しむ人がいるかもなんて。

「そうかい・・・それは淋しいなあ」

「・・・淋しい？」

「大切な人が分からない。何が分からないのかも分からない・・・それは「淋しい」ことじゃろう？」

老人の言う事に、Jは目を丸くする。Jの感情は老人の言う孤立感・・・虚無感・・・確かにそんな感じに似ていた。

「そつか・・・俺、淋しいんだ」

Jはようやく理解して、顔を上げると老人と目が合う。老人は目を細めて、

「・・・わしらは同じじゃよ」

と、呟いてくれた。何となく、心強かった。独りじゃないという事が、」を安心させる。

「よし！爺ちゃん、俺必ず爺ちゃんを成仏させて見せるよ！」

「ふお？・・・おう」

」は燃えていた。

その頃、管理事務所・廊下。

「要・・・俺、行けないよ」

「・・・どうしてだ」

「だって、俺」

雪は俯いていた顔を上げると、力なくもう一度「俺、」と呟く。

その手は胸のあたりを掴み、着ているベストを皺にする。服の上から、その先にある「何か」を掴み雪は黙り込む。

「今は、行けない」その言葉が頭の中を巡るのに、肝心の声が出ない。出てくれない。分かっている。要が言いたい事は、痛いほどよく分かっている。でも・・・。

「ごめん」

なんとかその三文字だけを絞り出す。それ以上何も言えなかった。暫く沈黙が流れ、やがて要は「分かった」とだけ呟く。自然、要の口からため息が漏れ、辺りに解けて消えていく。雪はまだ要の顔を見れずにいた。足音が近づく。ゆっくりと影が雪のモノと重なり、タバコの匂いが一瞬鼻を掠める。次の瞬間、雪の肩にポンツと大きな手が触れた。

「」^{カレ}を、頼んだぞ

「・・・要」

「またな」

要はそれだけ言うと、管理事務所の奥へと歩いていく。後には雪だけが取り残された。

「・・・ごめん。ごめん・・・俺」

雪は何度も「ごめん」を繰り返し、胸を、服の先にあるモノを掴んで目を閉じる。今は、行けない。でも、必ずいつか・・・そう心に決めて、大きく一つ深呼吸をする。

「よしっ」

自分自身に気合を入れて、雪は今度こそ管理局に向かおうと走り出した。

雪と墨

「雀！いるか?!」

勢いよく扉を開けた雪は、その勢いのままに綾瀬 雀の姿を探した。

「・・・雪?どうしたの?」

「・・・っはあく・・・良いから、雀は?」

走ってきたせいかわ、情けなくも乱れる呼吸を抑え何事かと駆け寄ってきた墨を押し返す。墨は驚いてから「彼なら、出てるよ」と答えを返した。

「・・・で・・・出てる?」

「うん。生憎、今日は戻らないと思うけど?」

「・・・マジ?」

「・・・残念だけど」

墨は、苦笑い気味に溜息をついて見せる。こんな表情の時、墨は絶対に嘘をつかない。

「だあく・・・なんだってこんな時に」

雪は力尽きてその場に崩れ落ちる。膝をつき、入口を塞いだ。

「とりあえず、中に入ってよ」

そんな彼を見て、墨は優しく手を差し伸べると体を起こすのを手伝い中を通してから、入口の戸を閉める。その上、脱力して椅子に腰かける雪に、墨は暖かいお茶を煎れてきてくれた。

「雀に何の用だったの?」

「あく・・・情報をちよつとね」

「情報?」

「うん」

お茶を受け取り、雪はようやく一息つける。湯気のたつカップを両手で持ち、墨へと視線を向けた。

「墨は、用事済んだの?」

「ん？」

「用事、あつたんだろ？」

雪の言葉に、墨は少し考えて思いたしたかのように手を打って見せる。

「あゝ・・・うん、大丈夫！」

「・・・怪し〜」

明らかに不審な墨の動きに、雪は訝しげな視線を向け見つめると墨はフイツと目を逸らした。

「そ・・・それより、Jは？」

話を逸らした墨の態度に、雪はそれ以上追及せずに応える。ここでは深く詮索しないことも暗黙の了解ルルなのだ。

「置いてきたよ」

「置いてきたつてどこに?!」

クライアント
「依頼人のトコ」

笑って吐き捨てる雪に、墨は落胆した。

「どうして、置いてくるかな〜」

「まずかった？」

「・・・まずいでしょ〜、普通」

最後の方は、小声になりながらも墨は雪に向き直す。その眼は真剣そのものだ。

「あのね、雪」

「・・・うん？」

「ここには知られたくないことや、見られたくないモノもあるんだ。それは分かるよね？」

まるで小さな子供を諭すかのように、墨は言い聞かせる。雪も真っ直ぐに墨の目を見つめ「知ってる」と答えた。その答えに墨は更に頭を悩ませる。そうして溜息一つ吐いてから、

「Jを・・・信じてるの？」

と、雪に尋ねてみる。

唐突な問いかけだが、彼が何かをしないという保証も確証もない

のに依頼主と二人置いてきたのには、彼なりにJの事を信用しているからなのでは・・・と墨は思ったのだ。

「・・・」

墨の問いに、雪は目を逸らして考え込む。別にそんなつもりはなかった。目先の「情報集め」に目を奪われ、一人部屋を出てきた。それが最善かどうかなんて考える余地もなかったし、いつもそうして来たから、それが当たり前だと思っってしまう。

「・・・分からない」

信じるも、信じないも、今の彼には生死も分からなくて、記憶も行き場もない。そんな人間を信じる事に何の意味があるのか。それさえも危ういと思えた。

「分からない・・・か」

雪の応えに、墨は少し自嘲気味に笑う。その顔を見て雪は逆に問うてみる。

「墨なら、信じるのか？」

その言葉に墨は目を見開いた。そして今度は困ったような表情をして、笑う。

「僕には、信じられるモノは何一つないよ」

「・・・」

「僕は他人を信じたことはない。神も未来も、自分自身さえも信じない」

「墨・・・」

その眼には、何も無い。何も映してはいない。ただ闇があるだけ。暗く深い闇が揺れていた。二人の間に沈黙が流れる。雪は何も言えずに黙っていた。

「さて、じゃあやろうか」

「・・・!？」

先に口を開いたのは墨だった。

見つめあっていた目を逸らすと、墨がいつもの表情で明るく雪に笑いかける。その眼にはもう、先程までの闇は見えない。今はただ

穏やかに揺れ、その眼に驚いた表情の雪を捉えようと、墨はもう一度溜息をつく。

「情報、探すんでしょ？」

「いや、でも、雀が・・・」

「手伝うよ」

「は？」

「僕もお力添えするってこと」

語尾に「？」マークでも付いてるのかと思えるほど、茶目っけを含めた言葉に、雪はようやく我に返る。

「いいのかよ、忙しいんだろ？」

墨の言外に軽さを感じて、雪は皮肉気に笑みを浮かべた。

「今は、暇だからね」

その皮肉に気づいてか、墨もウィンク一つして見せる。その関係は何とも表現しがたいが、「信用」ではない「絆」が二人にはあった。

「それじゃあ、始めるよ」

「ああ」

二人は頷きあつと、一台のパソコンの前に陣取る。墨が椅子に腰かけ、雪は後ろからその画面を覗きこんだ。

「まず初めのキーワードは？」

墨に尋ねられ、雪は「金子 高久」氏から与えられたキーワードを思い返す。

（「大きな木」、「祠」、「火の神様」・・・「整理された道」・・・）

もう一度考えてみる。どれを入れれば数多の情報を上手く選び出せるか。

「・・・『整理された道』・・・」

「整理された、道？」

雪が呟いた言葉を墨は復唱した。

「本当にそれでいいの？」

「・・・」

聞かれてもう一度考える。そして、一つの疑問が浮かび上がった。きた。

「墨、あの人が生まれた場所って何処？」

「あの人って・・・金子 高久さん？」

「そう」

「ちょっと待って」

唐突な雪の質問に、墨はキーボードをカタカタと叩く。事務所のパソコンを呼び出し、そこから「金子 高久」についての記録ファイルを開いた。

「あつた、これだ」

「・・・」

罊に促され、雪は画面を食い入るように見つめる。そして、そこに書かれている情報を見て落胆した。

「……………くっそ……………」

ぼつりと呟かれた雪の言葉に罊は苦笑いの表情を見せる。何で気がつかなかったのか。最初にキーワードを提示された時に気づかなければいけないはずの情報を、見逃していた。その事実にも、雪は自分に腹を立てて拳を強く握る。

画面に映し出される情報は、全てを繋げた。彼の「記憶」探しモノの在処までは分からなかったが、これから何処に行くべきなのか……………その道を示しだしている。

「どうするの？」

罊が尋ねた。

「行くさ、今すぐにでも」

「まさか、一人で？」

「ああ」

行く場所は決まった。これからするべき事も行けば自然と分かるだろう。ならば、後はその場に赴くだけだった。

「一人は駄目だ！」

不意に罊が声を上げる。その眼は真剣で、有無を言わせない表情をしていた。雪は戸惑う。

「罊？」

その理由を問うように、罊の顔を覗き見る。一瞬合った目が逸らされた。

「いや……………ほら、危ないしね」

何かを誤魔化すように、視線を泳がす。

（罊は秘密ばかりだ……………）

雪は溜息をつくくと、小さく頷いて見せた。

「分かった。一人じゃ行かないよ」

「ホント?!」

「ああ」

心底、ほっとした表情の墨に雪は意地悪げに笑い「一緒に行こうな、墨」と、墨の肩を軽く叩く。

「……?」

「一人じゃいけないんだろ?」

「ちよつと待つ」

「嬉しいな、墨と一緒にしてくれるなんて」

「あの」

「ついだから、」も連れておっこうな?」

「だから……」

墨に反論を許さず、雪は大きな声で呟いて見せる。そこに反論の余地はない。

大きく頂垂れる墨を後目に、雪はにこにここと楽しそうに微笑んでいた。

雀と狐

閻魔庁・マザーコンピューター『記憶の海』。

そこにはこの世界に生きとし生けるもの、その「全て」の記憶や、情報が記録されている。

「雪、記憶の海に行くって本当？」

自席でお茶を飲んでいた雪に、一人の女性が近づき尋ねる。雪も女性に気づき顔を上げた。

「おゝ・・・ホント」

「一人で？」

「いんや・・・新入りと」

淡々と話す二人の会話を気に留める者はいない。女性は「新入り」と言われ少し考える仕種をする。

「Jの事だよ、狐」

その時、墨が静かに後ろから声をかけた。彼女は振り向き、更に首を傾げる。

「J？」

聞きなれない名なのか、彼女はピンとこない様子で辺りを見回した。そしてコピー機の前にいる人間に気づく。Jだ。いつもの「コピー機」に彼はいた。

「J、ちよつと来い！」

雪も彼女の視線の先に気づき、軽く手を上げJを呼び寄せる。声をかけられるなり、Jはすぐに作業を止めて走ってきた。

「・・・なんです？雪さん」

「狐、これが」

「うん」

Jは何の事だか分からずに目を瞬かせるが、目の前にいる女性と目

が合うと少し照れくさそうに笑って見せる。一方、女性の方は笑みを返す訳でもなく、相変わらず淡々と言葉を返す。

見たところJよりも年上の女性はストレートの髪を背中までたらし、涼やかな瞳と、その色が印象的だった。

(あれ・・・なんか見た事ある・・・?)

誰かに似ている気がするが、それが誰だか分からない。Jは頭を悩ませる。

「どうしたの、J?」

その様子に気がついて、壘が声をかけると三人の視線はJへと向けられた。

「いや・・・あの、」

口ごもり、あたふたとするJに三人は不思議そうに顔を見合わせる。その時。

「よっ！新入り！」

「うわあああ」

唐突に肩を叩かれ、Jは叫び声を上げた。こんなことをする人間はひとりしかいない。

「雀さん！」

いつも通り振り向いた先にいる彼に、Jは抗議した。雀は「まあまあ・・・」と一瞬宥める仕種をして、次には他の三人に向き直る。

「狐！捜してんだ」

「何？」

この女性は誰に対しても端的な物言いをする様で、誰もそれを気にしない。むしろこれが彼女にとっての普通なのだ。

二人が話す様子を見ていたJは、そこで初めて「何か」に気づき、そのままを口にする。

「二人・・・似てませんか？」

「狐」を見たときに抱いた感情は、「雀」を横に並べたときに当てはまった。二人はその顔つきから、目の色素までがよく類似している。

」の言葉を聞いて墨は驚き、雪と雀に至っては呆れた表情を浮かべた。

「・・・何を今更」

「知ってるものだと思ってた」

「普通気づくだろう」

三人はそれぞれ思い思いを口にしてから、溜息を漏らす。

不意に雀が狐の肩を抱き寄せ、正面を向いて横に並ぶ。真横に立つと本当によく似ていた。

「こいつら、双子だよ」

茫然とする」に、雪は呆れ顔で告げる。雀は悪戯っ子のように笑みを向け、一方の狐は雀に肩を抱かれたまま立ち尽くしていた。ふと墨が説明してくれる。

「綾瀬 雀・狐。彼らは二卵性双生児の管理官なんだよ。雀は「情報」、狐は雪と同じ「探索方」」

管理局の中で唯一双子の彼らは、その変わった名前も相まって有名ならしい。ただ、お互いに違う仕事を任される事が多く、二人がこうやって揃う事は珍しいそうだ。

「双子・・・」

」はその言葉に納得する。最も性格は大分違うようだが・・・。

「それより、お前ら、行くんなら早くしろよ」

雀が思い出したように三人に声をかける。先程まで彼にじゃれつかれていた狐はいつの間にもやら姿を消していた。

「あゝ・・・行くよ」

雪は頭を掻いて重い腰を上げる。

「記憶の海」・・・」には想像もつかない場所。彼がこんな風に腰を重くするほど、その場所は大変なところなのだろうか。」は思案を巡らせる。

そして、気づくと知らない場所に立っていた。

「あれ、いつの間になんか?」

「今、自分で歩いてきただろうか」

どうやら考え事をしている間に、移動して来たらしい。その間の記憶が抜け落ちていた。

地下室の様なうす暗いコンクリート造りの部屋の中。苦笑いになる「J」を後目に、雪は部屋にあるロッカーを徐に開け何かを取り出した。(ジャンバー?)

雪の手には白いコート・・・いやジャンバーのような物が数枚握られている。

「ほらっ」

それを一枚「J」に向かって投げると、自分もそれに袖を通した。

フード付きのそれは、少し長めで背中は何やら文字が刻まれている。

「N・C・O」そう見えた。

「N・C・Oってなんですか?」

思ったままを口に出す。雪は反対を向いたまま「良いから早く着ろ」と答えてはくれない。

仕方なく言われるままに袖を通し、雪の後に続く。その場には雀と墨も立ち会っていたが、どうやら行くのは俺達二人だけらしく「J」は余計に身を固くする。

知らない「未知の世界」へと、「J」は足を踏み入れようとしていた・・・。

雀と狐（後書き）

前回「記憶の海」編になるとか言っときながら・・・話が逸れちゃった（^―^；）

とりあえず、新キャラ「狐」ちゃんの登場です。やっと出せた・・・
。雀と狐は対の存在なので早めに出したかったのですよ！
・・・というわけで、次回こそ突入します！

記憶の海

白い光が目の前に現れて、変な感覚に包まれる。

暖かいような、冷たいような・・・そして何故か「懐かしい」と思った。

次に気がついた時には、もう知らない場所に立っていて・・・ここが「記憶の海」なのか、と悟る。

隣にいた筈の雪の姿が見えなくて、「は辺りを見回す。

「雪さくん?・・・雪さくん!?!」

大きな声で名前を呼んでみたが、反応はない。あるのは静寂と懐かしい気配のみだった。

(どこにいったんだろう・・・?)

ふらふらと辺りを歩いてみるが、人影はない。緑豊かな自然の中、綺麗な花が咲き、心地よい風が流れた。その時。

・・・タスケテ・・・あの子を・・・

不意に声が聞こえて頭上を見上げる。そこには当たり前前に空があるはずだった。

でも、あったのは映画のフィルムの様になる映像と・・・頭に直接響く声。声。声。

・・・僕がそう望んだ・・・望んでしまったんだよ・・・
(この声、墨さん???)

・・・信じられる訳ない・・・人なんか・・・
目まぐるしく変わる映像と、沢山の声が彼を苦しめる。感じた事の

ない恐怖、悲しみ、怒り・・・感情の波が押し寄せて、頭が割れるように軋んだ。立っていられない。Jは崩れるようにその場に膝をつく。

・・・お前を、ずっと・・・

ゼエゼエと肩で荒い呼吸をし、未だ聞こえてくる声に目をきつく閉じる。どうにかやり過ごせないかと思ったのもあ束の間、またすぐに波が押し寄せてくる。涙が出そうだった・・・思えば何故自分がこんな思いをしなければいけないのだろう。そればかりが頭を巡った。

・・・せつ・・・生きる・・・お前は・・・

「う・・・わああああああ・・・」
不意に口から悲鳴のような嬌声が漏れる。気がつけば額が地面にくほど身体を縮め蹲っていた。

男の声、女の声・・・Jはもう何も考えられない。意識が遠くなりそうだ・・・その時。

「・・・」

頭に何か暖かいモノが触れる。

「えっ・・・??」

痛みが嘘のように引いていくのが分かる。溢れるように響いていた声も次第に小さくなっていく・・・。

Jは驚きで目を見開くと、勢いよく頭を上げる。そこには知らない少女が立っていた。

年の頃は10歳位だろうか。栗色の長い髪が風にふわふわと揺れ、まるで人形のような格好の何とも可愛らしい少女がJを見つめていた。その手は、Jの頭に伸びている。

(この子が・・・?)

目の前の出来事が信じられずに「は黙り込む。その視線に気がついたのか、少女はニコツとほほ笑みを向けてくれる。陽だまりの様な笑顔だった。

「あの・・・あり・・・がとう?」

自信無さげに呟くと、少女は大きな目をもっと大きく開いてからフツと目を細めて、小さく頷いてくれる。思わず見とれてしまうほどの美少女だった。

「J!!」

唐突に大きな声がして、「は後ろを振り向く。遠くから雪が走ってくるのが見えた。

「雪さん!!」

その顔を見た途端、ホツとして身体から力が抜けて行く。本当に涙が出そうだった。

駆け寄る雪の第一声を期待して、「は目を輝かせ待つ。そして。

「J」
「J」
「J」
「J」

浴びせられたのは予想通りの言葉だった。

(あ・・・やっぱり・・・)

少し淋しいような・・・でもやっぱり安心感の方が強くて「は無意識に顔を緩める。

(雪さんは、こうじゃなきゃ・・・)

そう思いながら、「はあることに気づく。目の前で怒る彼はいつもと違っていた。その靴は汚れ、息も乱れている。いつも冷静で、ちよつと無関心な彼からは想像できない姿。彼が必死で自分を探してくれていた事を知る。心が暖かくなった。

「大丈夫だったか・・・?」

彼が眉を顰めて尋ねる。その言葉の意味に気づいて、「は言葉を詰まらせた。今何かを口にしたら涙が出そうで、頷く事しか出来ない。

その様子で察してくれたのか、雪はJの頭をクシャツと撫でた。そして、そのまま自分の方にその頭を引き寄せると耳元で囁く。

一人にして・・・悪かった

その言葉で十分だった。止められない気持ちが涙になって溢れる。

「・・・うつ・・・雪さ・・・ん」

嗚咽交じりのその声も、男なのに情けないと思うこの心も、不安も・・・彼はそれら全てを優しく包んでくれた。

Jの涙が止まるまで、抱きしめてくれていた・・・。

記憶の海（後書き）

久しぶりの更新です。

とうとう「記憶の海」編です。

長い事休憩していたので、改めて読み返してから書きました（＾）
（；）

反省点はいっぱいありますが、書いてて楽しい話しの一つです。

また頑張りたいと思います。

宜しく願います

記憶の海・2

「落ち着いたか？」

雪がそつと腕を緩める。Jは不甲斐なくも泣きだしてしまった自分が情けなくて、顔を上げられずにいた。

（・・・なんで俺、泣いてんだろ）

雪の小さな体を、こんなに大きく感じた事はない。彼は見た目以上に男らしいと思う。見た目は小さくて、華奢で、女の子でも通じそうな程、髪もサラサラ。もしも彼が女なら惚れていたかも知れない。

そんなくだらない妄想を始めた頃、雪が不意に立ち上がり声をかけた。あの少女だ。

「ラヴィ、助かった。サンクスな」

雪はゆっくりとそれだけ言って、親しそうに少女と頬を合わせる。外国式の挨拶。

何とも画になる光景に、Jは言葉を失ってただ見つめていた。

（なんか・・・兄妹みたい・・・）

『ラヴィ』と呼ばれる少女は、雪の問いかけに小さく頷く仕種を返したり、にこやかに微笑んでいる。そこに言葉はない。少女は話す事が出来なかった。

「J、お前も礼くらい言っとけ」

茫然と座ったままのJに、雪は手招きする。その横で少女は可愛らしく雪にくつついていた。

「・・・あの、ありがとう・・・ございます」

年下の筈なのに妙な感覚がして、敬語にするべきか迷う。その様子に雪は溜息一つ吐くと、膝をつき視線を合わせて少女に話しかける。

「ラヴィ。彼は『J』だ。・・・Jが『ありがとう』って」

大きく口をしつかりと動かす。彼女は視線でそれを追って頷いた。

(そうか・・・耳が聞こえないんだ)

話せない事は何となく分かった。でも、どうして話す事が出来ないのか・・・雪の様子を見てようやく悟る。気づけない自分が、申し訳なく思えた。

気落ちするJの手に、小さくて暖かい手が触れる。顔を上げるとラヴィがその手を取って微笑んでいた。気に病まないでとでも言いたそうな、優しい慈愛に満ちた笑顔。思わずこちらが照れてしまう様な・・・Jは直視できずにまた俯く。

「さて・・・とりあえず、中央まで行くか」

「・・・中央・・・ですか？」

立ち上がり空を見上げた雪が、一つ伸びをして頷く。

「ああ」

端的な返事をする辺り、その理由を説明してくれる気はないらしい。こんな時は多分聞いても応えてはくれない。Jは気づかれないように息を吐いた。

その様子に気づかずに、雪はどこか哀しそうな瞳で空を見上げていた・・・。

記憶の海・2（後書き）

ラヴィイ登場です。

ラヴィイは当初違うお話の登場人物だったので、こちらにも関わる事になりました（^|^^）・・・しかもいつの間にか口きけなくなってるし（@|@:）

「記憶の海」編はまだまだ続きます。

三人はその後、黙々と生い茂る森の中を突き進む。

Jは前を行く雪の後ろ姿をちらちら覗いては見るが、振り向いてくれる様子はない。その隣を歩く小さな少女 ラヴィ も雪同様だ。

(仕方ない…か)

Jは小さく首を傾げて息をつくとき、何を話しかける訳でもなく大人しく訳の分からない森の中を歩いた。

『中央』とは、どんな所なのだろうか。

雪は何も答えてくれなかったが、何となくあまり良い感じがしない。そうJの直感が告げている。

胸騒ぎを覚えるような、感覚が、全神経が泡立つ感じ。

(あんまりココには長居したくないな…)

重い気持ちを引きずって、Jは歩く。ただ只管前に行く彼に追いつくように。そして…。

「うわっ」

下を向いて歩いていたせいで、急に立ち止まった雪に気づかずぶつかってしまった。ゴソツと鈍い音が辺りに響いた。

「…ってーな」

思い切り頭突きをされて雪は恨めしそうにJを振り返る。先程まではJの視線に気づかぬふりを決め込んでいたくせに、こんな時だけ素早い…。

「す、すいません」

Jもぶつけた頭を手で押さえ、ただ平謝りに徹した。下手に言い訳をする方が事が大きくなるからである。

「まったく、前くらい見て歩けよ！無駄にでかいんだからよ…」

最後の方の言葉はごによごによと口の中でだけ咳かれたように思える。どうやら彼は身長の事を気にしていたらしい。なんだか…。

(へ〜…可愛い処あるんだ)

そんな彼を不覚にも「可愛い」と思ってしまった。

緩む口元を慌てて手で覆って咳払いをひとつ…大丈夫、彼には気づかれていないようだ。

(危ない危ない…こんなこと知れたら殴られるじゃ済まないよ…)

内心ひやひやとしながら、Jはふとあらぬ方向に目を向けて彼を見ないように努める。今、目でも合おうものなら完全に嘔き出す自信があった。

「おいつ、何処見てんだよ」

勿論、そんなJの心の内を知らない雪は不振に思い声をかけてくる。

「いえ…その、良い天気だな〜と」

…・なんと苦しい言い分だろうか。我ながらアホだと自分を呪った。

「ほ〜?」

「……………」

Jの言葉に雪が近づいてきて同じ方を見上げる。そこにはお世辞にも「良い天気」なんて言えないような、綺麗な「灰色」の空が広がっていた。隣の空気が一瞬ピシッとひび割れた気がした。

「へえ〜?」

「……」

「お前には灰色これが「良い天気」に見えるんだ〜?」

皮肉たつぷりに雪が腕組をするのが分かる。怖かった。

(まずい…怒ってる…)

雪の方を向く事も出来ずに、「はただそのまま「灰色」の空を無
言で見つめていた……。

記憶の海・3 (後書き)

「中央」を目指す三人。

」が感じた違和感とは???

まだまだ「記憶の海編」は続きます (^| ^ ;)

「着いたぞ。…ここが『中央管理局』だ」

生い茂る森の中を歩くこと10分。ようやく開けた場所へと出る。そこには、大きなガラス張りの不思議なドームが建っていた。

「な…なんですか、コレ」

その建物を茫然と見つめるJをよそに雪はすたすたと前を歩いていく。またもや彼の質問は右から左へと流^{スレイ}されてしまったようだ。

内心、肩を落しながらもそろそろこの扱いにも慣れてきていた。

Jはすぐに気持ちを切り替えて雪の元へと走る。

「雪さ〜ん、待って下さいよ〜！」

その後ろ姿は、尻尾を振った柴犬に見えた。

ドームの表面に触れるほど、近くに来た。

雪は無言のまま、左手をドームの表面に当ててその周りを歩いていく。何かを探しているようにも見えた。

(何してるんだろ…)

その後ろをふらふらとついて歩くJの前には、あの小さな少女の姿がある。この子も不思議な存在だと思う。一体何者なんだろうか…。

「あつた」

「え?」

目の前を歩く少女の事を考えていたら、不意に雪が声を上げる。

」は短く驚きの声を漏らしていた。

「何だよ？」

その声に気づいて、彼は怪訝な表情でJの事を見つめる。Jは何も言えずに首を振っては下を向いてしまった。頭上から微かな彼の溜息が聞こえると、今度はごそごそと何かが動く。

「何してるんです…？」

気になって顔を上げてみれば、彼が何やら襟元を開けて服の中に手をつ込んでいる姿があった。

何がしたいのか、毛頭分からない…。謎だ。

「取れないんだよ…引つかかかって」

何が取れないのかは分からないが、彼はしきりにごそごそ器用に手を動かして足掻いている。ただ見ているのも気が引けるが、同性とはいえ人の服の中に手を入れるのも躊躇われた。

(無駄に可愛いんだもん…雪さんこの人)

小さな顔、白い肌、さらさらの髪…この乱暴な言動と、行動さえなければ「儂げな美少年」でも通用するだろう…なんて惜しい事をJは内心ちよつと残念な気持ちになった。

「…つと。取れた！」

そうこうしている内に、彼は目的のモノを手にとってきたようだ。その手の中には小さなシルバーのペンダントトップが握られている。ネームプレートの様な板状の形をしていたそれは、よく見れば文字が刻まれていた。…「Ray」と。

(「Ray」?……らい?…いや、「レイ」か。光?)

その単語に微かに目を凝らし、意味を模索する。直訳するなら「光、光線」などが正しいのだろう。

思いを巡らせて、彼を見る。彼もその様子に気がついたように、ふつと視線を外すとドームへと視線を向けた。

「さて…入るか」

雪が呟く。その手には「Ray」と書かれたプレートが握られて

いる。

「ここは何をする処ですか？」

思いきってJは尋ねる。勿論答えが返ってくるなどと期待をしている訳ではない。でも。

「ここはこのセカイの制御装置プラス検索機械みたいなもんなんだよ。これで、あの『金子 高久』氏のキーワードを当てはめて検索にかける」

予想外に雪は親切にも答えてくれた。拍子抜けしてしまう。

茫然とした表情で見つめているJに気づいて、雪も伐が悪そうに頭を掻くと更に説明を始めた。

「だからだな…記憶つてのは2種類あって、『物に宿る』記憶と『人に宿る』記憶つてのがあるんだよ」

めんどくさそうに話しだす彼の眉根は寄せられている。正直に、彼は「説明」が得意なタイプではないのだろう。もっと、「墨」さんとかの方が向いている気がする。

(…新鮮だけど………すごく…分かりづら)

必死で説明してくれているのは分かる。その気持ちも嬉しい。でも、お世辞にも「分かった」とは言えない彼の説明は聞いてるうちに余計分からなくなってきた。

(これじゃ、聞いても答えてくれない訳だ………下手だもんな……)

何が分からないのかも分からない。そう言いたくなるような「説明」だった。

「だあああああ…とにかくだ！」

そんな「分かりづらい説明」をようやく終え、彼は今までの鬱憤を晴らすかのように雄叫びをあげる。ラヴィはいつの間にかドームにもたれ小さく寝息を立てていた。

(あ…長かったもんね)

Jは苦笑いでその様子を見ると、視線を雪へと戻す。彼は思案顔でその場に立ち尽くしていた。

「……」

彼が口を開くのを待つように、Jも無言になる。そして。

「J!」

「はいっ」

急に名前を呼ばれ、Jも勢いよくそれに反応する。真っ直ぐに視線がぶつかり、彼は口を開いた。

「お前はここにいろ」

「はっ??」

「ここに残れ」

突然の「戦力外通告」にJは戸惑う。何を言い出したのだろうか。そんな顔で雪の言葉を待った。

「ラヴィもいるし、今のお前はココには入れない」

雪は至極真剣な眼差しでそう言う。そこには「入れない」ではなくて「入らせたくない」という拒絶の匂いが漂っていた。

「何ですか!??」

Jも食い下がらず、噛みつく。犬だっただまには逆らうのだ。

Jの言葉を予想していなかったのか、彼は少し目を見開いてから、フツと目を閉じ更に黙る。

「……」

「……」

お互いに黙り込んでいると、雪が小さく息を吐くのが分かった。そして次の瞬間。

「足手まといだから」

確かに彼はそう言った。言ってはいけない一言をJにつきつけていた。一瞬時が止まる。

プツンッ

何かが切れた音がして、突如Jが………キレた。

「あー……、そうですか!!!わかりました!」

「ジエ……J?」

驚いた雪が、窺うように声をかけるが、最早それどころではない。激昂したJに言葉が通じる訳もなく、彼の言葉は止まることを知らず続く。

「もう、勝手にして下さい!!……そんなに一人が良いなら、どこへでも一人で行けばいいでしょう!!」

「……」

雪はただ黙って俯いていた。

「俺は知りません!……貴方なんか……雪なんか知るか!!!!」

最後の方は怒りに任せた思ってもいない言葉だったのかもしれない……。Jはそこまで言い終えてようやく顔を上げると、目の前の雪を見る。

彼はただ俯き、何も言わなかった。

「……」

それが余計に辛くて、Jはその場から走り出す。

二人の道は、完全に分かれていた……。

「……だから」

誰もいなくなったその場に、雪は一人佇む。

ラヴィがいつの間にか居なくなっていたから、多分Jの事を追っ
てくれたんだろう。その事にただ胸を撫で下ろした。

記憶の海で迷子になるのは、やっぱり辛いから……。

居なくなったJの身を案じて、雪は手にしたプレートプレートの文字を指
でなぞる。

「Ray……もう少し、もう少しだけ待っていてくれ……」

その呟きは、風にかき消されていった……。

記憶の海・4（後書き）

中央管理局に辿り着いた三人。

ところが思いがけない雪の一言で、三人は離れてしまう。

「Jは何処に行ったのか？」

果たして雪のもつプレートとは???

次回を、お待ちください。

記憶の海・5

ドームの表面に右手を当てて、雪は静かに目を閉じる。

掌の中には「Ray」と書かれたプレートが握られ、丁度ガラスの表面にその文字が映っていた。

(動作始動…キー確認…ナンバー暗証番号解除…)

言葉に比例するように頭の中でキィインと音が響き、同時に映像が網膜を通して頭の中に映し出される。次から次へと現れては消え、消えては現れ…。その無数の映像の中から雪は目当ての映像ものを見つけた。

「ロック鍵解除」

途端に映像がかき消える。辺りは静けさを取り戻した。

小さく溜息をつくとき、雪は手にしていたプレートを首に戻す。きちんとボタンを止めると、何もなかった筈のガラスに目をやった。そこには先程まではなかった「扉」と「ドアノブ」がある。ドアを開け彼は中に入った。

辺り一面が電子画面に覆われた暗い部屋。雀なら喜んでここに入り浸る事だろう。吐き気がする。

とりあえずメイン画面の前まで行くと、雪はスイッチを入れ手繰り寄せた椅子に乱暴に腰掛けた。

不意に走り去っていったJのことを思い出す。投げ捨てられた言葉も…。

あー、そうですか！！わかりました！

もう、勝手にして下さい!!……そんなに一人が良いなら、どこへでも一人で行けばいいでしょう!!

傷ついたような怒った表情が浮かぶ……それを打ち消すように頭をガリガリと掻き毟ると、クソツと短く悪態をついた。言葉が頭から離れない。

俺は知りません!……貴方なんか……雪なんか知るか!!!

初めて面と向かってぶつけられた言葉、感情。あんな風に気持ち露にすることもあるのか、なんて場違いな事を考えて自嘲の笑みを漏らす。そんな事を思いながらいると、ピピッと電子音が何かを告げる。それは誰かからの連絡だった。

「記憶管理局、空移管・雪」

まるで義務の様な挨拶を口にする。相手は分かり切っている、雀だ。

『ついたか?』

気の抜けたやる気の無い声が返ってくる。ホントにこいつは……。

「ああ、そっちは?」

『イチには話を通したぞ』

淡々と会話は続く。その間にも、雪はメインコンピューターに「金子 高久」氏のキーワードを打ち込む。

(「大きな木」、「祠」、「火の神様」……「整理された道」……)

大方の事は分かっている。彼の生まれた土地、育った場所、現住所……これらから絞り込み、その上で手掛かりになる言葉キーワードを並べていった。

「イチは動けるって?」

『急すぎるからな〜。まあ、渋ってはいたけど墨からのお願いは断れないだろ』

悪戯をしかけた子供のように楽しそうに笑う電話越しの雀。内心、イチに悪いことをした〜と少しばかり良心が痛む。確かに彼は墨からの『お願い』ならば断れないだろう。

「お前、悪いな」

思った事を正直に口にしてみる。もっとも、相手が雀だからこそ出来ることだが…。

『まあな〜』

予想通りの悪びれた様子を微塵も見せない返答。雪は皮肉の笑みを浮かべると、唐突に話題を切り換えた。

「…」と離れた」

その言葉に、電話越しから『はあ〜???』と呆れた声が聞こえる。『なんで、また』

興味も薄そうに聞き返す雀は、電話越しでカタカタとキーボードを叩いているようだ。何かを調べているのだろうか。

「…ちよつと、さ」

」を怒らせた…なんて言えなくて、言いたくなくて、雪は曖昧に言葉を濁すとメイン画面に映し出される情報に目をやった。どうやらキーワードの検索が終わったらしい。

『ふ〜ん…まあ、いいけどね。お前が良いんなら』

「深く関わられても面倒だろ…」

お互い違う事をしながらの会話。そこに意味はないのだが、今無性に誰かと話したかった。

『…つと、あつたぞ』

急激に会話を切る雀。それとほぼ同時に、雪もあるモノを見つける。

「…こつちもだ」

二人の導きだしたモノが「一つ」に繋がった。

見つからなかったパズルのピースが浮かび上がる。

「金子 高久」氏の心残りの「在り処」も…。

『イチにも連絡しとく』

「ああ、頼んだ」

『そつちは一人で大丈夫か??』

「…厄介なことになってなきやな」

『厄介なことになってるだろ…これ。応援頼んどこか?』

「またも冗談めいた楽し気な口調の雀に、雪は表情を引きつらせて苦笑いを見せた。

「楽しそうじゃねえか…」

『そ、そんなことある…わけないだろ』

表情は見えないが、きつと緩んでいるに違いない。雪は心の中で「後で覚えてろよ…」と毒づくくと、メイン画面の情報を腕時計に打ち込む。管理局「空間移動管理官」にのみ与えられた特殊な七つ道具の一つである時計は、人体の生命探知から情報のメモ、座標の記録に至るまで必要な行動動作がこれ一つで行える便利なモノとなっていた。

「とにかく、今から向かうから…」

『命綱、ちゃんとスイッチいれとけよ』

「……」

何故だか癩に障る物言いに感じたが、これ以上こいつとじゃれている暇はない。短く返事を返すと、時計の「人体生命探知」機能のスイッチをオンにして確認する。

「入れた…じゃあな」

『りょくかい。健闘を祈る』

通信が途絶えた。

その場は機械の動く音に満たされ、辺りは薄暗い表情を取り戻していく。

そつと、左足・太もも辺りをスポンの上から触る。ゴツツとした堅い棒状のものが布の上からでも確認出来た。

「…行くか」

小さく溜息をついてから、雪は歩き出す。

出来ることなら、何も起こらなければ良い…そう願ってしまつて自分を押しとどめ、気を引き締めると目的の場所へと向かった…。

一人、記憶の海の奥深くへと、足を踏み入れて行った…。

記憶の海・5（後書き）

雪サイドのお話になります。

大分確信に迫って来たかと…（・|・;）

次回はJサイドになります。

新キャラ登場の予感です（笑）

そう言えば…「イチ」の説明なんも入れてあげてなかった…。

今回は21日の水曜日までに更新しますので、宜しく願います

暗く深い森の中にJは居た。

闇雲に走りついた先には、ただ漠然とした緑の森が佇み彼は自分の立ち位置さえ見失ってしまう。

(もうやだ…。何でこんなんばかり…)

落ち込む暇はない。

本来ならこんな風に勝手に動き回っていい立場でさえないのだ。それなのに…。

彼の言うことに勝手に腹を立てたのは自分。あの場から逃げ出したのも。相変わらず情けなくて嫌になる。

「よしっ!!--」

気合を入れてJは立ち上がると、もう一度辺りを見回した。その時。

風もないのにガサツと音を立てて後の草木が揺れ、緊張が走る。何だろう。そう思って恐る恐る振り返ると、そこには見慣れたシルエツトが立っている。『ラヴィ』、彼女だ。

「ラヴィ!?!」

驚きと安堵から思わず声が出る。彼女もその声に気づくと、ニコツと微笑んでくれた。そのまま真っ直ぐ走り寄ると、彼女はフワツとJに抱きつく。

「えっ、ちよっ、ラヴィ??」

突然の出来事に目を丸くして固まる。

内心ちよっとドキドキしてる辺りが余計に情けないのだが、とに

かく固まっている場合じゃない。

「ラヴィ！…どうしてここに？？」

少女の体を優しく離してJは緑の地面に膝をつくと、同じ目線で少女を見つめた。微笑むラヴィ。彼女に伝えるべき言葉はないが、確かに頷いて笑う。「大丈夫」だと言われているような気がした。簡単な推測が浮かぶ。もしかして…。

「心配してついてきてくれた？」

小さく呟くと、ラヴィは二回大きく頷いてから徐に緑の木々の間を指さす…中央はあっち…彼女はそう伝えている。声はないのに、何故だかそう思った。

「あつちに…雪さんもいる？」

もう一度ラヴィが頷く。Jは拳を作り強く握りしめた。

再び木々の間から葉を揺らす音が聞こえ、誰かの訪問を伝える足音が聞こえる。ラヴィを背に庇うように立つと、Jはいつになく鋭い眼差しでその音のする方を見た。

緊張してその時を待つ。戦うことに自身はないが、もしその時は彼女^{ラヴィ}だけでも逃がさなければ…得体のしれない世界の中でそう呟く。足音が近づき更に緊張が走る。影が伸びてそれらは姿を見せた。

(来る……)

静寂と緊張を引き連れ影^{それ}は現れる。

現れたのは緊張感を喪失させるような若い男が二人…それも細身の凸凹な二人組。害悪のある者には見えない。Jの緊張の糸は一瞬で切れその場に座り込んでしまふ…と、その横を通り抜けラヴィが彼らの元へ走り寄っていく。

「ラヴィ！？」

突然の出来事にJの手は彼女を引きとめることも出来ず空を掴んだ。制止の声も虚しく彼女は彼らに飛び付き、小さい方が彼女の体を抱きとめると「ラヴィ」と歓喜に似た声が上がった。

「何処行ってたんだよ？探したぞ！？」

小さい彼はラヴィを軽々と抱き上げると、頬を軽く合わせる。長

い前髪が邪魔をして、その表情は窺い見ることが出来ないが、雪同様の挨拶を交わすということは彼女にとって近い存在なのだろうか。「スギ、人がいる」

不意に呟いたのは彼よりも少し後ろに立つ背の高い暗い感じの男。二人の視線が一斉に自分に向けられる。明らかな敵意を含んで…。「え…つと」

冷たくも痛い視線を向けられてJは困惑することしかできない。一体、彼らは何者なのだろう…とりあえず『記憶の海』にいらつていうことは「管理局」の人だと考えるのが妥当だろうか。

「あの…もしかして記憶管理官の方ですか？」
恐る恐る尋ねる。

墨はここにはJを含め全部で10人の管理官がいると言っていた。Jが知るのはそのうちの半数ほど…なら彼らが管理官だとしても別段不自然ではない気がする。何より『記憶の海』に出入りしているのだから。

「今…なんて言いやがった？」
反応は予想外のものだった。

「スギ」と呼ばれる小さな男から、重く低い声が発せられる。表情は見えないのに何故かそこに「怒り」が含まれているように思えた。Jは一瞬身構え、もう一人の男へと視線を向けるが彼はただ目を閉じだんまりを決め込んでいた。

「誰があんな記憶管理官と一緒にだ！？…ああ！？」
ラヴィを地面へと下ろすと、彼は勢いよく向かってくる。明らかに怒気を孕んだ雰囲気を感じた瞬間にはJの胸倉を掴んでいた。

「うわっ…」
「お前、記憶管理局のもんか！？」
「ちよつ、ちよつと」

自分より小さいためか、声の割に迫力が無い。近づいてみて感じたが、多分身長的には雪さんと大差ないと思う。胸倉を掴まれ体を強く引かれた為にバランスを崩すが、彼はそんなこと気に留める様

子もなく下から凄んで見せる。ちよつと可笑しい…。

「スギ、誤解だ」

「ああ!??」

意外なところから助け船は出される。

後の方で長身の彼がラヴィを抱き上げ、ラヴィはその腕の中で微笑む。何処となく雰囲気の似た二人はゆっくりとした足取りで近づいてくると、そつと胸倉を掴んでいた「スギ」の手を外してくれた。「…どういうことだ?…凌」

ようやく少し冷静さを取り戻したらしい彼は、外された手を握ると視線を彼カウシに向ける。二人の間で視線が交差する。その間もラヴィはにこにこ微笑み、「は」というと余計に混乱していた。

「言葉の通りだ…馬鹿が」

素つ気なく言葉を返すと、彼はスギの頭を軽く小突く。一方のスギは納得のいかない表情で考え込むしぐさをすると、もう一度視線をJに向けてくる。今度は敵意の無い真つ直ぐな眼差しで。

「お前、なんでココにいる?」

率直な質問にJは戸惑う。彼は『記憶管理局』の事を嫌っている様子で、でも自分はその管理局の差し金でココにいる。仮にはあるが、一応「管理官」として扱われていることも忘れていない。どうすれば彼を刺激せずに話が出来るか、ついつい思案顔になってしまう。

「え」と…」

視線をふらふらと泳がせていると、じれったさそつに腕を組む彼の姿が目に入る。このままだと先程の二の舞になることは目に見えていた。その時。

「…?」

凌に抱かれていたラヴィが不意に彼の頭スギに手を伸ばし。その額に自分の指先を優しく押し当てた。

「ラヴィ…?」

「……?」

その行動の意図に気がついたのか、彼はその小さな手を振り払うこともなく静かに瞼を閉じる。Jには理解できない行動…そういえば彼女と出会ったときも、彼女は自分の頭に触れてくれていたと思い出して、今更ながらに恥ずかしさを覚えた。

「ラヴィ…サンクス」

時間にして1分にも満たなかったと思う。

彼はそつと目を開いてラヴィの小さな手を取ると、その手に口づけしてお礼を述べる。不意に浮かべた微笑みが、その荒々しさとは逆に儂くてJは思わず目を瞬くと彼もそれに気がついたかのように唐突に視線を戻す。一瞬心臓が小さく跳ねた気がした。

「おいっ、悪かった」

飾り気のない真つ直ぐに向けられた謝罪に、更に驚きが増す。彼はこういふ人なのか…初めて少し理解できた気がする。彼の事を。

「いえ…」

曖昧に微笑んで返事を返すと、彼はニツと悪戯な笑いを浮かべ挑戦的な視線を向けてくる。何処かで見覚えのある表情…彼のそんな表情は雪に似ている気がした。

「俺はスギ。そっちは凌しん」

唐突な自己紹介に戸惑うが、すぐにJも返事をする。

話によれば彼らは『時間屋』という存在で、この『記憶の海』内の時間や、現世、来世、過去など時の流れを管理するのが仕事だといふ。

「一応、俺らも閻魔庁の管轄に入ってるんだぜ？」

「閻魔庁の？」

「正式名称は、閻魔庁直属機関『時間管理事務所』。私たちは時間タイ管理官に当たる」

凌が淡々とした口ぶりで教えてくれる。二人で一人…その言葉がぴったりと当てはまるような二人だと思った。

「それで、どうしてここに？」

ふと浮かんだ疑問を口にする…他意はないが気にはなっている。

二人は顔を見合わせて少しの間考える仕草をすると、小さく頷いてから口を開く。

「探し物をしてる」

「探し物？」

「ああ」

話し始めたスギが真剣な表情で言い淀むと、言葉を付け加えるように凌が口を挟んだ。

「正確には物ではなく人…いや、すでにヒトですらないのかも知れない」

その不可思議な言い回しにJは首を傾げる。何が言いたいのだろう…。

「お前は？」

不意にスギが真剣な眼差しで訪ねてくる。

「俺は…」

歯切れの悪い言葉が並ぶ。答えなければいけないことは分かっているが、何を言えば伝わるか…それ以前に自分の不甲斐無さを思うと、言葉に詰まってしまふ。雪を傷つけた…。

「言いたくないなら聞かぬよ」

Jの心を察したかのようにスギは短く言い捨てると、目を閉じ何かを考えている仕草になる。凌もラヴィとその様子を見守っていた。

「スギさん…？」

理解できないJだけが取り残されると、彼らは唐突に空を見上げる。灰色の淀んだ空を。

「…」

「…」

空の色は先ほどよりも少しその濃さをまし、スギと凌はお互いに顔を見て頷くと「まずいな…」と小さく呟いた。

「何が、まずいんですか？」

Jの質問には答えない。ただお互いに視線を交差させると、スギは躊躇いがちに口を開く。

「お前の連れは一人か？」

「えっ？」

「雪は今、一人なのか!？」

切羽詰まったようなスギの剣幕に「は後ずさると」「え…ええ」と
ぎこちない返事を返す。

「まずい…」

「…??？」

スギは相変わらず「には理解できない^{かれ}眩きを並べると、思い立つ
たように動き出す。

トシッ

ラヴィの手を引いてくると、「に押しつけるようにその身を」へ
と預け呟く。

「ラヴィを頼む」

「ちよっ、スギさっ…ん??？」

その一言だけを残すと「が顔を上げた時には、二人の姿はどこにも見当たらなかった。まるで風のように彼らはその場からかき消える。後には未だにこの状態を理解できていない」と、にこにこ微笑むラヴィだけが残された。

「何がまずいんだって…?」

辺りが静まり返り何の音もしなくなると、苦い表情で「はクシヤ
ッと前髪を掻き上げる。もやもやした感じと、どこかで警笛が鳴る
ような妙な胸騒ぎ…。嫌な予感がした。

その時、爆発のような音が辺りに響く。聞きなれない声と共に、
嫌な匂いが辺りに漂って「を不安にさせる。

雪の事よろしくね…

不意に墨さんの声が聞こえた気がした。迷っている暇はない。今はとにかく行かなければ…。

「行こう…ラヴィ」

離れてはいけない…彼の傍を離れてはいけなかった。絶対に。

彼女も頷いてくれる。」はラヴィの手を取って歩き出す。雪の元へ…。

記憶の海・6（後書き）

ようやく更新です。

更新予定をかなり超過し、申し訳ありませんでした（汗）

今後は予定通りに進めていけるかと思しますので、何卒ご理解下さい。

「記憶の海」編、新キャラ登場です。

次回は雪、J、そして新キャラ達も大暴れな予感…乞うご期待！

次回更新は遅くても15日までには頑張ります。

記憶の海・7

辺りはより一層闇を濃くし、空も灰色へと移った。
多分…もうそこまで来ているだろう…。

雪は一人、森の奥まで足を踏み入れ今は目的の座標の前にいる。
多分今頃、地上探索型である「一」も例の場所に向かってくれてい
るはずだった。

（「大きな木」、「祠」、「火の神様」・・・「整理された道」・・・）

「金子高久」氏からの手掛かり…キーワードを打ち込んで導き出
された場所。

この「記憶の海」自体には、その場所は存在しないが…地上とこ
のセカイとを照らし合わせた時に重なる場所はある。それが雪が今
立っているこの場所だ。

何もない、先程までと何も変わらない木々と草の生える寂しい場
所には、暗く怨念のようなものが渦巻いているように見える。

…悲しみの記憶。
誰かの悔恨や悲痛の記憶が、この地で浄化されることなく残った
のだろう。

最初は草木の種ほどの大きさだったものが、いつしかこの地にあ
る他の多くの悲しみの記憶を集め次第に大きな負の塊になった。そ
う考えるのが妥当だ。

空気が重い…。

どんどん辺りは光を隠し、暗く落ちていく。もう、後戻りは出来ない。

(さて、鬼が出るか蛇が出るか…)

含み笑いを浮かべると、雪は徐に左太ももに装着してあった「警棒」を取り出す。これも「管理官七つ道具」のひとつ。全ての記憶を所有する「記憶の海」には、良い記憶もあれば悪い記憶もある…その殆どは時間をかけ、このセカイで浄化されるのだが時折「暴走」を引き起こす事がある。丁度、今のように…。

暴走を止めるには記憶自体を力づくで擦じ伏せるか、あるいはその記憶の元を地上で探し「浄化」させるか…そのどちらかしかない。元がないのなら力づくで擦じ伏せることしか出来ないが、今回の「暴走」には「金子高久」氏の探す「記憶」落し物が深く関わっているのだ……彼が間に合えば良いのだが…。

「頼むぜ…ホント」

迫りくる黒い負の記憶カゲを目前に控え、雪は怯むことなくその時を待つ。彼が地上で探す間の足留めでいい。このセカイに眠る他の記憶を壊さない為に、その為の「盾」となるう。そう決意して息を飲む。次の瞬間、雪は駆け出していた。

「っだああああ…」

渾身の力を込めて一撃を繰り出す。

これ以上その塊カゲを増大させるわけにはいかない。少しでも浄化させなくては…。

雪の一撃を喰らい、塊は一瞬揺らいたが、大気のような不気味な塊は瞬く間に姿を戻し……不意にこちらを見た気がした。そして…

「…っ!?!」

影の中から黒く柔らかい「腕」の様なものが伸び、雪の体を直撃する。体はいとも容易く後ろへと弾き飛ばされ、その衝撃で木の幹へと全身を強く打ちつけられた。爆発の様な轟音と共に、負の塊から叫びにも似た怒声が放たれる。胸が押し潰されそうだ…。

「ぐっ…っはあ…」

肩で荒い呼吸をする。

一瞬の判断で防御態勢を取ったものの、体への衝撃は生易しいものじゃない。

骨が数本折れてるんじゃないかとさえ思うほど、体は軋み痛みを訴えていた。それでも、今ここで負の塊を見逃すわけにはいかない…見逃せば、他の記憶と共に「記憶の海」が危ういのだ。

口内に広がる血の味を吐き出すと、雪はよろよろと立ちあがる。霞む目を擦り、もう一度警棒を握り直すと今度は両手で掴み左右に引きだす…まるで又ンチャクのように細い鎖で繋がれたソレは、原形を留めずに鞭のような形式へと移行した。捕縛用の武器へと持ち替え、雪は再び忍び寄る塊と対峙する。

「チッ…」

全てが一瞬で決まるような予感がした。

近づく塊を捕えるために間合いを測る…もう少し、あと数歩…心の中で詠唱を開始すると武器に気を送る。武器を特殊な靈気でコーティングする為の詠唱。管理官ならば別段、特殊な事ではない。

意識を目前の敵に向けたまま徐々に気を込めると、次の瞬間ソレ

は動き出す。

「くっ…」

予想外に早い動きに雪は大きく右に飛んで、その一撃を避ける。だが、すぐに別の触手が雪を捕え、その小さな体を弾き飛ばした。

「っ…！」

再びの衝撃を覚悟して歯を食いしばる。

今度ばかりは動けなくなるかも知れない…。そんな考えが頭の中を過った。

それなのに…。

衝撃は、いつまで経ってもやっつてこない。それどころか、体の何処にも痛みはない…。

恐る恐る目を開けると、雪の体は宙に浮いていた。

「まったく、無茶なんだよ！ テメエにはな！？」

聞き覚えのある声に振り向く。

そこには同じような背格好の少年が呆れ顔で立っている。

そして、雪の体は優しく地面に下ろされ「大丈夫か？」と気遣う声がかけられた。

「時間屋！？…なんで」

「うるせえな。 テメエは黙って引っこんでろ」

「なっ」

「邪魔なんだよ」

偉そうな物言いの「スギ」に反論しようと雪は体を動かすが、鈍

い痛みに眉を顰める…今更になつて、最初の衝撃が響く。その様子を見てか「凌」は、追いやるように雪の体を優しく背に庇うと、二人は「負の記憶の塊」と対峙した。

「へっ、やっとお出ましか…」

「スギ、無茶はするなよ」

「誰にモノ言つてんだよ」

スギは楽しそうに不敵な笑みを浮かべると、凌に向かって視線を送る。

戦いは始まるうとしていた…。

記憶の海・7（後書き）

「負の記憶の塊」と対峙した雪だったが、圧倒的な力に気押されてしまう…。

その危機を救ったのは、あの変な二人「時間屋」だった。

次回、「J」とラヴィも混入！！

そして、雪の秘密が明らかに（笑）

どうも彩人です^^

予定通りの更新ですが、内容的には半分くらいになっています（汗）それというのも表現力が少な過ぎて…戦闘（乱闘？）シーンは難しいです…。

次回更新は遅くても25日までには…^^；

宜しく願います

記憶の海・8〜衝撃の事実〜（前書き）

9/23 挿絵挿入しました。

イメージを壊したくない方は挿絵機能を「オフ」にしてお楽しみください

記憶の海・8（衝撃の事実）

一方その頃、Jとラヴィイは森の中を走っていた。行先は分からないが、あの轟音と色を増す闇が彼らの居場所を教えてくれている。

そして何よりも辺りに充満する大気が、その異様さを物語り背筋を冷たいものが流れていく。怖いとさえ感じるのに、向かう足は止められなかった…。

「ラヴィイ、大丈夫？」

不意に半歩後ろを小走り気味に走る彼女に声をかけると、僅かに視線を上げてニコツと微笑んでくれる。息一つ乱さず、彼女は走る音もなく、風のように…。まるで宙に浮いているかのように彼女の足音は聞こえてこない。

「……………」

微かな疑問を頭を振って払うと、Jは濃い闇の先を見つめ走った…。

*

ドオオオオン

再びの激しい轟音と共に辺りは砂埃に塗れた。

自分の掌さえ確認出来ないほどの白煙に、息を吸うのさえ戸惑う…。何が起きているのだろう。

(時間屋は…)

雪は痛む胸元を抑え耳を澄ます。

スギと凌が勢いよく飛びかかった瞬間、辺りは一瞬のうちに白く包まれ何の気配もしなくなった。確かに二人の存在を感じていたのに、この静けさは何だろう…。

(妙だ…)

頭の中で、微かに警笛が鳴らされる。

胸が鼓動を早くし、何者かに急ぎたてられていく…そんな感覚がした。

「っ…スギ！凌！」

一人叫んでみても、そこにはなんの返答もない。相変わらず白煙の靄があるだけだ。

眉根を寄せ唇を噛んでみても、この遣る瀬無さは変わらない。それどころか苛々だけが募っていった。そして…

白煙の向こうに黒い影が現れる…。

「スギ！…凌か！？」

その姿を見逃さないように彼は駆け寄る…何かに縋るように。それが見たくもない幻影まほろしだとも知らずに…。

「つつ！？」

靄が晴れ、影に光が差す。

駆け寄った先には、自分と同じ顔が立っていた。

まるで合わせ鏡のように瓜二つのその姿に、雪は言葉を失う…居るはずのない彼に戸惑い目を伏せると、知らずに熱いモノがこみ上げていく。

「なんでっ…Ray」

触れることも叶わずに、雪は手を引き俯く。

目の前の影は何も言葉を発さず、ただ優しい眼差しで見つめてくれている。ゆっくりと手が上がり、その手が雪の頬に触れた…その瞬間身を震わせ顔を上げると、視線が重なる。彼が微笑み、雪は胸を締め付けられたような気がした。

「Ray…」

その手が首筋へと降りてきても、雪はされるがまま動けずにいる。例えその細く白い首に彼の指が絡みつき、徐々に力を増して行くとも…目の前の彼には逆らえない。雪には逆らう術がなかった。その資格さえも…。

「いい…よ…。お前が…それを、望むなら…」

視界がぼやけ彼の顔が滲んでも目は逸らさない。彼になら殺されても惜しくはないと…そう思っていた。ずっと…。

…さん……せつさん…!!…

何処かで声が聞こえる。

薄れゆく意識の中で、確かに聞き覚えのある声があった…これは…。

(ジエ…イ…?)

頭の隅に浮かぶ声の主の名前を呼んだ一瞬、目の前の彼の姿が揺らぐ…。

(違う…これは…)

そう気づいた途端、再び頭の中に警笛が鳴る。今度はかなりの大音量で。

優しく微笑む彼の手を掴み、その感触に驚く。人の手ではない硬さを持ち…なのにごか暖かくて柔らかい。なんとも表現しにくい物体が首に絡まりついていた。

(こんなモノに…欺かれるとは…)

自嘲気味に顔を歪めると雪は意識を取り戻し集中させる。胸元にある一点へと…。

(回路を開く…)

この幻影を解くにはその一言で十分だった。

胸元の鍵キが熱く光を発すると、先程までは何も感じられなかった温度や色が辺りに戻って来る。目の前には不気味な黒い塊が聳え立っていた。

「雪さん!!!」

その黒い塊の後方、木の陰に声の主・Jはいた。

すぐ近くにはスギと凌、そしてラヴィの姿も見える。無事な様子

に安堵する暇もなく自分のおかれている状況を嫌でも理解させられる。

> i 1 1 9 4 6 — 7 1 5 <

体を緊縛するように張り巡らされた黒い触手と木の枝…負の塊が力を増大させ木にまで影響を及ぼしているのだらう。自由にならない体を持って余しながらも、冷静にそんな事を考える。緊張感がないのはこの際許してもらいたい…。

状況をのみ込んだ処で答えが出るわけではない。

声は遠すぎて、お互いの耳には届かないし…何より落ち着いて話をさせてくれそうにはないだらう。

徐々にきつくなる戒めに思わず眉根がよる…さすがにそろそろ苦しくなってきた。

(まずいって…これじゃ…)

スギと凌も同じことを考えているようだ。

ただ、雪の身体が邪魔をして無闇に攻撃を仕掛けられないと言ったところか…。

突破口を開かなければ事態は動かない…それもあちら側からではなく、自分で開かなくては…。

その考えに賛同するように、スギが視線をくれる。

やれるだけやれよ…

そう言われた気がした。

気づかれないように拳に気を込める。不意をつけるチャンスは一

度だけ、このチャンスを逃せば後は自分を犠牲にするほかに手はない。だから…

「…んっのおおっ」

右手に渾身の力を込めその黒い塊に放つ…同時にスギがJの背を押し、凌が別方向から結界の呪を唱え始める。雪の不意をついた一撃に影が大きく揺らぐと、その根元にすかさずJが体当たりを喰らわせた。

「倒れるおおおお…」

勢いよく体当たりすると、黒い塊から悲鳴とも嗚咽とも取れる嬌声上がる。そして…。

「緩んだ!!!」

身体を縛る戒めの力が緩んだ瞬間、雪はまたもや隠し持っていた小型ナイフで闇を切る。宙に浮かんでいた身体はその支えを失い、雪は重力にされるがまま地面へと真つ逆さまに落ちる事になった。

「!?!?!…雪さん!!!」

(…今日はこんなばっかりだ!!!!)

とても着地出来る高さじゃない。

とりあえず致命傷にならなければいいや…そんなくたらない事を考えて歯を食いしばると、何処からか暖かい風が吹き込んだ。

「…!？」

身体が浮き、ゆっくりと地面に辿りつくとその体をJが受け止めてくれる。それ以上の衝撃は襲ってこなかった。

「何ですか…今の？」

足を地面につけて重力を感じると、ようやく息が出来た気がした。Jは何が起こったか分からないといった困惑顔で空を見る。風など吹いていない…。

「あいつだよ…」

雪は視線をそつとスギへと向ける。

今はもう凌の補助へと移り変わっている彼が、先程の風を起こした張本人である事は明確だった。この場所に他に風を操れるものはいない…。

干渉を嫌う「時間屋」である彼が、自らその力を使うとは思わなかった…。どうやら借りが出来てしまったらしい。苦笑いを浮かべると、不意に注がれる熱い視線に気がついた。

Jが凄いい相で開いた襟ぐりに目をやっている。痛々しそうな…妙な視線だ…。

「…何だよ？」

「…血ですよ」

「ああ？」

「血が出てます!…見せて下さい!？」

有無を言わずにJがシャツの前を大きく開く。突然の出来事に驚いて声も出なかった。

「ほらっ血が…それに、こんなに腫れて…？」

」の動きが止まる。

その視線は確かに胸に注がれていた。僅かにだが膨らんだふたつの胸に…。

「何だよ…」

「これって…」

「胸だよ！…見てわかんねえかよ！」

めんどくさそうに溜息を吐く。

いつまでも呆けている」の手を外し、雪はすぐさまシャツのボタンを止め前を正した。

「……」

まるで魂でも抜けたように彼は動かない。

今まで気づかなかつたのだろうか…失礼な奴だ。

「女だよ。正真正銘のな」

追い続けるような」の視線にわざわざ事実を告げてやる。それでも信じなかつたら一発殴つてやるうか、少々腹を立てながら先ほどよりも深く苦笑いを刻んだ。

遠くではまだ黒い塊と対峙している「時間屋」がいるというのに、その黒い塊や時間屋の存在よりも」には^{カシ}目前の出来ごとの方がよほどシヨックだったようで…その後雪によって殴られたのは言うまでもない…。

記憶の海・8（衝撃の事実）（後書き）

ここまで読んで下さった方、ありがとうございます^^
「ノスタルジア」は彩人の作品の中では1話ずつが長い感じになっています。

そして今回「笑撃の事実」が（笑）！！
はい…雪君は実は女の子です^^ベタですか？？誰か一人でも驚いた方がいらつしゃると嬉しいのですが…。
取ってつけたような設定に思えるかもしれませんが、雪が女の子なのは「ノスタルジア」考案の初めから決まっていたよ。
男のふりをする「女の子」が描きたくって作ったキャラクターです
し^^

今後の展開が楽しみです

そして次回…次々回辺りで「記憶の海編」は終了になります。
話が飛んでますが（地上探索方のイチの部分とか）、それも追々描く予定でいます。とりあえず地上と交互だと混乱させてしまうかもしれないので「記憶の海編」では雪達の動きだけを追いました。

もうすぐ「水底の涙」に戻れると思うと、少しホッとしています。
それでは次回も「記憶の海編」でお会いしましょう！

*次回更新は6/15辺りを予定しています。

ようやく辺りが落ち着きを取り戻した頃、雪は近くの木の根に腰掛け黙り込んでいた。

怪我の具合が悪いのか立てた片ひざに腕をのせると、だるそうに頭を擡げている。

「雪さん、大丈夫ですか？」

時間屋の二人が辺りを鎮めているというのに、Jには出来る事がない。“行っても邪魔になるだけだから”と近くに寄る事さえ雪に止められてしまった。

仕方なく腰掛ける雪の傍らに立ち、辛辣な表情の彼に話かけてみるものやはり返答はない。返事がないのはいつもの事だが、雪が“彼”ではなく“彼女”だった事が余計にJの気を落ち着かせない。それどころか“彼女”だと分かった途端に、雪が女性にしか見えなくなってしまうた。

白い肌、細い首、さらさらで色素の薄い髪に、華奢な肩が痛々しい。こんな小さな体で無鉄砲にも立ち向かっていたのかと思うと、胸が締め付けられた。

（墨さんは、知ってたんだよな…）

雪をよろしく…そう言った彼はきつと知っていたのだろう。今更ながらにその言葉の意味を理解して目を伏せる。後悔しても遅い事は分かっている。それでも…こんな無茶は二度とさせたくなかった。

（俺、しっかりしなきゃ）

ラヴィは雪の座る木に寄りかかり、転寝をしている。

先程までの暗い景色は色を取り戻し、今はその影もない。Jは辺

りを見回す。あんなに暴れたにも関わらず、傍には木の枝や葉さえも落ちていない。不思議な光景だ。

「……………」

「幻影だ…」

不意に下から声がして視線を向けると、青い顔を浮かべた雪がこちらを向いている。寄せられた眉根が深く刻まれ、雪はそつと目を伏せた。

「痛むんですか!？」

「は慌てて地面に膝をつく、雪の顔を覗き込む。不意に雪の手が」の肩に触れた…。

「悪かったな…………お前を巻き込んだ…」

聞き取れるか否かの小さな声で彼は…いや、彼女は呟く。伐が悪そうに少し頬を赤く染め視線は僅かにずらされているが、その声は真剣そのものだった。

「…雪さん…」

「……………」

そのまま彼女は黙り込んでしまったが、そこには優しい風が吹き込んでいた。

彼女は巻き込みたくないから、「中央」に残れと言ったのだ。いつもいつも言葉が足りないのだと思う…………でもそれは意図的に、ぶつきらぼうで喧嘩ごしな言葉で相手を遠ざけようとしているのかも知れない。もしくはそういう言い方しかできないのだろうか。それでも…。

彼女は本当は優しいのだと思う。

誰かが傷つくのを見たくない、傷ついてほしくない…辛い思いは自分だけで十分だと、そう思って動いているのだと、この短期間で知った。

(俺が迷子になった時も、必死で探してくれた…)

口では乱暴な事を言うが、それでもしつかりと相手の事を考えてくれている。そう思った。

時にはこの無鉄砲さが、周囲に不安や心配を抱かせる事になるうとも…彼女はずっと一人で、こうしてきたのだろう。彼女の事をもっと知りたい…」は心の中でそう思った。

「お〜い、無事か〜？」

気の抜けた声が遠くから聞こえる。

時間屋の二人が何事も無かったような表情で歩いてくるのが見え
た。

「スギさん！凌さん！」

」は思わず駆け寄った。

二人は多少の切り傷や擦り傷はあるものの、その殆どが砂や埃に塗れて外傷らしい外傷は見当たらない。その事に」は人知れずホツと息を漏らす。

「何だ何だ、犬みたいだな。お前」

可笑しそうにスギが笑う。

自分よりも身長の高い男に“犬みたい”なんてよく言える…そう思いながらも」は反論をするでもなく「無事でよかったです」と笑顔
顔を浮かべて見せた。

「おう、俺らにかかればあんなのの一つや二つ」

「やられそうになってたのは誰だ…？」

「うっ…」

得意げに答えたスギの後ろで、パタパタと埃を落としていた凌が
呟く。その言葉にスギは二の句が継げなくなってしまった。

「…ラヴィ」

二人の姿を見つけラヴィも走り寄って来る。

その身体を凌は優しく抱き上げると、“ただいま”と小さく額を
合わせた。

「っんで、そっちはどうよ？」

絵になる光景にJが視線を奪われていると、いつの間にかスギは雪の隣に立っている。雪は顔を上げると「悪いな」と小さく謝罪の言葉を述べた。

「仕方ねえさ。第一、俺らもあいつを追ってたんだ」

スギは意外な言葉をさらっと言っただけ。Jは「えっ!？」と声を漏らしたが、雪は“やっぱり”という表情で溜息をつく…。

「やっぱりな…」

「あらかた片付いたが、肝心のモノはどうなってるんだ？」

先程までのふざけた様子はなく、至極真面目に彼は尋ねる。その言葉に雪も真剣な眼差しで首を横に振った。

「まだだ…もうすぐだと思っが…」

「そうか」

その言葉を最後に二人は黙り込んでしまう。重い沈黙を崩すように雪の腕時計が甲高い電子音を鳴らした。

「来たか…」

小さく呟いてから雪は腕時計を操作する。慣れた手つきで画面を確認し「空移官・雪」と時計に向かって話しかけると、雑音に混じって聞き覚えのある声が聞こえてきた。

『…雪、無事だね!？』

名乗る事もせずに彼は叫ぶ…その声からは必死さが伝わってくる。

「…っつ」

けたたましく話す彼の声に雪は絶句するが、すぐに「無事だよ」とその一言だけをぶつきらぼくに告げた。

『…まったく、全然連絡が取れないんだもん』

雑音に混ざりながらも彼は一つ嘆息すると、安心したように小言を漏らす。一方の雪は聞いているのか、いないのか、素知らぬ素振りでも明後日の方向に視線を向けていた。

『聞いているの!？』

「…おう」

怪我をして伐が悪いのか、雪の返事は鈍い…だが、そんな返事も

お構いなしに墨は話し続ける。時間屋の二人は「やれやれ」といった顔で溜息をつく、木の影へと移動した。

(墨さんってこんなに喋るんだ…)

Jは感心したように二人の会話を見ていると、その視線に気がついたのか雪が苦笑いで手を左右に振って見せる。相手が落ち着くまでとことん付き合う…それが普段は話を聞かない彼のやり方のようにだった。

「あ…墨？」

話し続ける事五分。ようやく雪が話を切り出すと、時計越しの開いては「なに？」と訝しげな声を出した。顔を窺えないのに何となくその表情が分かってしまうのは墨だからだろうか。

「そろそろイチの方の結果を教えて欲しいんだけど…？」

「……？」

恐る恐る話題を切り出すと、一瞬黙り込んだ彼は「ああっ！」と短く声を上げて肝心の目的を思い出す。辺りから溜息が洩れた…。

『ごめん、ごめん』

「あー、いいから。結果は？」

先を急ぐように雪は遮ると、墨もそれに気づいて話を切り換える。声が変わった。

『雪が検索した通り、指示された座標から記憶の一片が見つかったよ。破片と言うよりは残骸と言った方が正しいのかも知れないけど…』

「そうか…」

墨の言葉を聞いて雪は何かを納得したように頷く。雪の相槌を受け墨も言葉を続けた。

『こちらで出来得る処理は済ませた…彼らはそこに居る？』

「…いるぜ」

確認するように墨が尋ねると、不意に背後から声がかかる。Jは驚いて振り返ると、そこには「時間屋」と呼ばれる二人の姿があった。

「スギさん、凌さん」

「中間者・墨。俺らの役割は把握済みだろ？」

「Jの呼び掛けには答えず、スギは皮肉気な笑みを浮かべて雪の腕にある時計を見つめた。凌もただ目を閉じ黙り込んでいる。」

『…………』

「気にすることはないぜ。俺らの目的も同じだしな」

沈黙する墨に対しスギは軽い口調で続ける。目的は同じ…その為には協力することだってあるのだと、彼はそう言った。

『…分かった』

微かに息を吐く音が聞こえて「感謝する」と墨が硬い言葉で礼を述べると、スギは面白そうに眼を細めて見せる。その光景が何を意味するのか、Jには分からなかった。

そして。

「さて、じゃあ始めるぞ」

「ああ」

墨との会話を端的に終え、Jとラヴィを除く三人は例の負の塊カタマリと対峙するように取り囲んでいる。

Jはラヴィを腕の中に抱いて、その様子を離れた木の陰から見守っている。

雪は、墨との会話を終わると「ラヴィを」とだけ告げて彼らと共に未だ完全には昇華されていないであろう塊の元へと行ってしまった。勿論、そこにJが行く余地はない。

無言の圧力がJをこの場へと留まらせていた…。

（雪さん…）

微かな胸騒ぎだけが止まない…。

ただ見ているだけの無力な自分を呪った。その時。

「ラヴィ？」

不意に掌に温もりを感じてJは我に返った。ラヴィは励ますよう

(君は…だれ?)

答える事のない声に、Jは問いかけた。

何か大切な事を忘れているような気がするのに、誰かが思い出す事に警鐘を鳴らしている。

今はただ、静かに…。

その声に導かれるように、Jはもう一度目を閉じた。

記憶の海・9（後書き）

予定日より遅くなり申し訳ありませんでした。

ようやく更新です^^

内容の方は次回で「記憶の海」編が終わる処まで来ています。

今後、仕事が忙しい時期に突入するので定期更新は難しくなるかも知れませんが少しずつでも更新していきますので、宜しくお願いします。

次回更新予定は未定です。

気がついた時には全てが終わっていた。

「…っい…」っ!

自分の名を呼ぶ声に気がついて、彼は眼を開ける。いつの間に眠ってしまったのだろうか。

辺りは静寂を取り戻し、負の塊があつた場所にも今はただ風が吹きぬけるだけだった。

「雪さん…」

目の前に立つ人物を見上げてJは呟く。その様子を見て彼は呆れた表情を浮かべると「起きろ」とそつと手を差し出してくれた。

「…つたく、よく寝られるよな。こんなとこで」

「…すみません」

伐が悪そうにその手を取ると、Jは身体を起こす。

そこに先程までは確かにあつた“温もり”が消えている事に気が付き彼は短く声を上げる。

「今度は何だよ?」

「いない!?!」

「ああ!?!」

「ラヴィが居ないんです!」

その間拔けな言葉に雪はより一層呆れたように肩を落とした。

「おっ前、今の今まで気付かなかったのかよっ」

「……………」

「あいつらもないだろうが……………」

その言葉に「は辺りを見回し、ようやく気付く……静かだと感じたのは「時間屋」の姿がなくなったせいもあったようだ。

「……………」

「終わったよ」

黙り込む「J」の様子を見て、雪は静かに告げる。

「負の塊」は三人によって昇華したらしい事。昇華出来ずに残った怨みや苦しみは「時間屋」である彼らが持ち去った事。

「後は、時間をかけて輪廻の輪に戻せるまでにするんだ……それが時間屋の仕事」

長く積もり積もった“悔恨の念”は中々消えてなくなる事は無いという。それでも、時間をかけて少しずつその糸を解く事が彼らにとつての「救い」になるのだと、雪は寂しそうに笑って見せる。

風が吹き抜ける中を、二人はただ見つめていた。

「さてっ……………」

不意に雪が何かをふっ切ったように振り向く。「J」もその視線に気付いて顔を上げた。

もう一度差し出される手……少し擦り切れて赤い血と砂が滲んだ掌を「J」に向けて雪は微笑んだ。

「帰るか」

「……はいっ！」

」は力強く頷くと、その手を優しく握り返す。

二人は中央管理局から、記憶管理事務所へと戻って行った…。

*

「雪っ！？」

戻ってきた二人を出迎えたのは案の定、罌だった。

雪の姿を見た途端雀の制止を振り切り、装置の中に入って来るとふらついた雪の身体を支える。

見た目よりも酷い怪我では無いと雪は苦笑いを浮かべたが、有無を言わずに罌によって医務局へと連行されて行った。今更の事だが、雪はかなりの怪我を負っていたのだ…。

なす術もなく」はその様子をただ見つめていると、ポンッと不意に肩が叩かれる。雀だ。

「よっ、お疲れ」

「雀さん」

「無事に帰ってこれたんだな」

「……」

軽い口調で笑う雀に返す言葉が浮かばない。

「記憶の海」で自分がした事は決して褒められるような行動じゃなかった。迷子になり、必死に探してくれた雪と喧嘩した揚句、彼に怪我を負わせた…。それなのに、雪は笑う。

そして、それらを見ていたであろう雀も…。

「どづした？」

さすがの雀もJのその様子に訝しげな表情を浮かべると、俯いたJの顔を覗き込む。Jの眼から大粒の涙が零れた。

「うおっ!?!…おいつ!」
「……………」

素っ頓狂な声を上げた雀が思わず後ろに飛び退く。その涙は純粹で優しいものだった。

「すみません…俺」

ポツリポツリとJが言葉を紡ぎだす…雀は仕方なくその言葉が止まるのを待つ。

「雪さんに迷惑…つか、かけたのにつ…」

涙に混じり眩かれる言葉は、次第に嗚咽混じりになっていく。仕方なく、雀はその肩を抱いてやった。

「…………俺…雪さつ…怪我…」

雪が怪我した事を悔むJに、雀は溜息を一つ吐く。

こつこつ役回りは苦手だ。慰めたり、励ましたりなんてした事が無いと言って過言じゃないのに…。

(仕方ねえなあ…)

「あの子…」

ようやく言葉をかける。相手にうまく伝わる事を祈りながら…。

「上手く言えねーけど、雪の行動でいちいち落ち込むの馬鹿らしいと思うぜ」

それは彼なりの励ましの言葉。雪をよく知る人物だからこそ言える事だったと思う。

「……………」

Jは思わず顔を上げて雀を睨む。そんな言い方…そう思って抗議

の視線を向けたつもりだった。少なくとも彼の表情を見るまでは…。

「雪あいつつてさ、無鉄砲で危なっかしいし自分の事は省みない癖に、人の事には敏感じゃん？…怪我したのだって自分のせいだって思ってるし、むしろお前が怪我しなくて良かったとか、絶対思ってるぜ」

予想外に優しい表情にJは眼を瞬かせる。こんな穏やかな表情を浮かべる雀かれをいまだ見た事がない。それくらい彼は柔らかく眼を細めていた。

「だからさ、こんなことでお前が落ち込んでる方がダメージなんだよっ」

どことなく説得力のある言葉にJは戸惑う。言われれば確かにそうなのかも知れない…雪ならきつと「お前には関係ない」とか「気にするな」とか素っ気ない態度で返すに決まってる。

「でも…」

それでも、簡単にその言葉を受けるわけにはいかない。

次は間違えないように…雪に怪我を負わせないように。彼は…
彼女は自分を守る事をしない人なのだから。

誰かが守らなきゃ…。

Jの中に、確かに何か芽生えた瞬間だった。

そんな二人のやり取りを余所に、勢いよく扉が開く。そこには今まさに話題に上っていた雪と、先程無理矢理に雪を医務局に連れて行った壘が渋い顔をして入って来る。

「雪！まだ動くなっば」

「良いって！もう大丈夫だよ！！」

「そんな訳ないだろっ」
「だっ、放つといてくれ」

制止する墨を振り払い、あちこちに包帯を巻いた雪がズカズカと
」に詰め寄る。その剣幕に」は思わず後ずさった。

「おいつ、お前」
「はっ、はいっ」

雪は小さい身体で下から見上げると、」の胸倉を乱暴に掴んで徐
に顔を近づける。唇が触れそうなほど近くに雪の顔があり、」の胸
は大きく跳ねた。

「自分のせいとか馬鹿なこと思うなよ！」

「えっ？」

「いいか！？お前には関係ない！」

「……………」

「これは俺の怪我だ。誰のせいでもない！」

彼はそれだけ言うと、掴んだ時と同様に乱暴に手を離す。そのま
ま視線を少しずらした雪の耳は心なしか赤く染まって見えた。

気を遣ってくれたんだ…。俺が気にしてると思って…。

素っ気ない言葉や態度とは裏腹な優しい彼女^雪。

それだけを言う為になんか返ってきたのかと思うと、自然に頬
が緩む。

「っ……………ははっ」

「……………」

「はははっ…」

先程まで暗い気持ちで涙を浮かべていたとは思えないほど、気持ちは軽くなっていく。雀と星は驚いた表情でJを見つめ、雪は少し呆れたような表情で優しく微笑んでいた。

こうしてJの「^{カレ}管理官」としての初めての仕事は幕を閉じる。後には、あの不思議な声だけが耳に残っていた。

記憶の海・10（後書き）

記憶の海編（本編）は終了になります^^

「金子高久」氏についての謎が多々残りますが、それは次話・終章

・（同時更新）にて明かされます。

いわゆる「おまけ」的な話になりますが…。

そちらも読んで頂けると、本当の意味で「記憶の海編」は終了になります。

それではまた…。

記憶の海 - 終章 - (前書き)

記憶の海編、完結です^^

次回からは本編の「水底の涙」に移りますので、あしからず…。

記憶の海 - 終章 -

例の部屋に彼はいた。

ただ静かに目を閉じ、その時を待っていた。解放の時を…。

「金子高久さん…」

「おや？これは美人さんじゃのう」

部屋を訪れた墨に、彼は皺くちやの顔に更に皺を刻み柔らかく眼を細める。全てを受け入れるような優しい雰囲気につられ、墨も微笑みの表情を浮かべた。

「長らくお待ちたせしてしまいましたね」

「ふおっ、ふおっ、ふおっ…お構いなしじやよ」

墨は部屋の扉を静かに閉めると、彼の前に腰掛ける。長い髪が肩から滑り落ち、彼はその光景に思いを馳せた。まるで失くした記憶^{もの}を求めるように…。

「どうかしましたか？」

視線に気がついて墨は尋ねる。

物腰の柔らかい墨は、中間管理者としては適している人材といえるだろう…。例えば「雪」ならこうはいかない。

それでも…。

「キミのその笑顔は、寂しいなあ…」

まるで全てを見抜いたような言葉に、墨は顔色を変える。それもほんの一瞬の事、すぐにいつもの柔らかい微笑みを浮かべると、古びた眼鏡の下にあるガラス玉の様な眼を見つめた。その言葉の真意

を問うように。

「…怖いな、まるで全てが見えているようですね」

冗談交じりに笑うと、目の前にいる彼もフツと眼を細めて見せる。その目の前に墨の手が差し出された。

「お探しのモノです」

差し出された手の下にそっと自分の手を添えると、萎びた震える掌にソレは置かれた。小さなガラス玉…模様も色も無い古びて汚れたビー玉だった。

「……」

金子高久氏は、そのビー玉を手にとると両の掌で擦り合わせたり、照明に向けて色を透かしてみたりと…過去を懐かしむように、大事な記憶^{モリ}を思い出すかのように目を閉じる。そこに言葉はなく、墨も一部始終を見守った。

雪が検索した座標を元に金子氏のキーワードをつなぎ合わせた場所に「ビー玉」はあった。人目を避け、火の神様の御神木の根元に埋められていたのだと実際に探しに行ってくれた「地上探索型・一」^{イチ}が教えてくれた。ただ一つ問題がある。

長い眠りから覚めた「ビー玉《記憶の欠片》」は時を重ねいつしか負の感情だけを残し、その形を変えてしまう…大切な約束が、無念の情へと…。

「そうか」

彼は小さく呟く。

その目にはうつすらと涙が浮かんでいる。全てを思い出したのだろうか…。

「……」

墨は、彼が話し出すのを待った。そして。

「ありがとう、美人さん……」

彼は静かに、けれどもどこか満足したように笑う。先ほどとは違う色を眼鏡の下のガラス玉に宿して。

「そうか…彼は逝ったのか…」

天井を見つめ、彼は更にその奥にあるであろう空に思いを馳せた。「彼は長い間苦しんでいました」

「そうじゃのう」

墨の言葉に、彼は小さく相槌を打つ。全てを悟ったように…。「すみません…」

それ以上を告げるのはさすがに躊躇われて、墨はそつと眼を伏せる。その手に暖かな手が触れた。

「ありがとう、彼を救ってくれたんじゃなあ……」

「…いえつ、でも」

「辛い思いをさせた…君にも、彼にも」

「……」

「随分、待たせてしまったなあ……」

そう言つと、金子氏の身体が白い光に包まれていく。

優しく暖かい光に…彼は驚いた様子も見せず墨の方を見た。

「ふおつ、ふおつ…彼が呼んでいる…私はもう行くよ」

「…はい。ご一緒に……」

墨の言葉に彼はもう一度微笑みを向ける。そうして依頼人「金子高久」氏は「記憶管理事務所」を後にした…。

*

ああ、暖かい…。

眩しいお天道様に、木々の木漏れ日が揺れる。

私は彼の背中を何処までも追う。ランニングシャツに短パンを履

いた「裸足の少年」の後姿を。彼は時折振り返り、私の姿を確認しては悪戯っぽく笑って見せた。

早く、来いよー

私はその背中を追いかける。

あの日交わした 再会の約束 は叶わなかったけれど、随分と長い事待たせてしまったけれど…。

一緒に埋めた「ビー玉《宝物》」もこの手に戻ってきた。
懐かしい君の思い出と共に…。

さあ、一緒に行こう。

また…一緒に遊ぼう…。

記憶の海編・完

記憶の海・終章・（後書き）

「記憶の海―終章―」如何でしたでしょうか？
言葉や描写が足らずに、中々上手く伝える事が出来なかったのが心残りです^^；

祝・完結記念

ここで、彼らに登場して貰いましょう（笑）

作者「お疲れさまでした！」

雪「っした」

」「ありがとうございます」

墨「雪、ちゃんと挨拶しなきゃ」

雪の態度に眉根を寄せる墨。どこ吹く風な雪。

作者「いいよ、いいよ、墨」

墨「…すみません、本当に」

雪「お前は俺の親か？」

深々と頭を下げる墨に、呆れ顔の雪。

」「これって本編じゃなかったんですよね？」

作者「う〜ん…本来なら、君の話だったんだけどね…」

雪「や〜い、主役の座奪われてやんの」

」「うっ…」

雪の心無い言葉に傷つく」。慰めようとす墨。

雪「そもそも、よく何の設定も無いのを書こうと思ったよな」

墨「そうですねよ！…どうなる事かとヒヤヒヤさせられましたよ…

??？」

作者「…何か、浮かんじやったんですよ（汗）」

」「何か…で俺の話は消えたんですか!？」

作者「消えてないって…」

作者に詰め寄る」。ちょっと鼻息荒い…。

雪「…で、例の金子のジジイはどうなったよ?」

墨「僕が、ちゃんとお送りしたよ」

「彼の心残りって、結局何だったんです?」

雪「あつ、それ俺もちよつと疑問(笑)」

作者「うん…」

墨「彼は昔、ほんの少年だった頃なんだけど…約束を交わしたんだ」

「約束ですか?」

墨「うん。戦争で離ればなれになる前に、再会…の約束を、あのビー玉と共にね」

「それが記憶の欠片ですか?」

墨「うん、そうだよ。でも約束を交わした相手は、その約束をしたすぐ後に爆撃によって命を失っているんだよ」

雪「あの負の塊の持ち主だな…」

感慨深そうに腕を組む雪。「も黙り込む。

「無念だったろうな…」

雪「ああ」

そつと、首を横に振る墨。

墨「彼も金子氏も、これで救われたんだよ…きつと」

微笑む墨に、頷く二人。作者控え目に…。

作者「説明不足でごめんね…ホント」

雪「まっ、次回頑張れ(笑)」

作者「うう…(涙)」

「次回からは俺の話・水底の涙 に戻ります!」

墨「これも大事な話だしね」

作者「頑張つて書きます…」

雪「それじゃあ、次回」

全「水底の涙」で、お会いしましょう!」

*おまけ「後書き」終了。
ありがとうございます^^

水底の涙 序章・(前書き)

新章突入です^^

またまた雪×Jの凸凹コンビ登場です！

今回の一番最初の投稿時についていたサブタイトルの続きになります^^;

忘れた方は初めの1〜2話位を参照下さい(汗)

それでは、始まります^^

水底の涙 序章

時が経ち、また朝はやってくる。

望んでなどいないのに月は眠りにつき、代わりに闇が太陽を連れ
る。

そうしてまた、俺たちは歩き出さなければいけないのか…。

この終わりなき哀しみの運命へと。

ノスタルジア管理局　水底の涙

「せつ、雪さん？」

心地よい風の吹きぬける静かな屋上に、不釣り合いに賑やかで明
るい声が響く。

今日も一人気持ちよく昼寝を決め込んでいれば…これだ。また厄
介事かと思うと自然溜息が洩れる。

返事をする気にもなれなくて、とりあえず相手が気がつくのを待
つてみる事にした。

「あれ…」

彼はキョロキョロと辺りを見回す。

今日もよく晴れ、屋上からは雲ひとつない青空だけが覗けた。

その時、視界の隅に何かが映る。見慣れた靴底…細い足。これは
…彼だ。

「雪さん!？」

「よ。やっとお出ましか」

彼はいつものように興味のない瞳を向けると、これまた愛想のない表情で告げる。

気が付いているなら声をかけてくれれば良いのに…そんな彼の思惑を知ってか知らずか、雪はお決まりのセリフを今日も告げる。まるで挨拶の代りにでもなったような言葉を。

「落し物記憶は見つかったか？」

「うっ…」

「金子高久」氏の一件が片付いてからというもの、ノスタルジア管理局にも元通りの平穩が訪れた。

まるで何事も無かったかのように日々は過ぎ、気がつけばJがココを訪れてから早くも二週間が経過しようとしている。何の手がかかりもないままに…。

「いい加減、そろそろ何か思い出しても良い頃だと思っただがな…ん？」

頭上で呆れたように頬杖をつく雪をよそに、Jの視線は地を這うと「ははは…」と乾いた笑いが辺りに響いた。「記憶の海」から戻ってきてからというもの、毎日こんな調子である。

「……」

「……雪さん？」

「……どけ」

「えっ？」

「降りるからどけて言ってるの！」

その言葉と同時に有無を言わず雪が降ってくる。

「ちよつ、うわああ…」

影がJに重なり、驚いて左に飛び退く…その瞬間、雪は今まさにJの居た場所へと着地した。

咄嗟の出来ごとにJの心臓は早鐘を打ち、バクバク言う胸を抑え文句も言えない。

「じゃつ、先行つてんぞ〜」

そんな彼の横を素通りして、雪は右手を軽く振るとさつさと室内へと歩いて行ってしまった。

一言くらいあつたつて良いんじゃないのか!?

“俺、被害者!!”と心の中で叫び、小さな背中を見送るとJは溜息を一つ漏らす。辺りは静まり返り、風だけがJの髪を撫でていく。

「…だつてココ、居心地が良いんだ…」

誰に聞かれる事も無いその呟きは、風に溶けて消えていった…。

*

事務所へと続く階段を雪は一人歩いていた。

その足取りは決して軽いモノではない。

あいつは、何かを隠している…。

確証を得たわけではないが、長年“管理官”なんてものをやって

いる経験からくるものか…それとも“女の勘”というやつか、それは分からないけれど“隠している”と思えるだけの何か雪にはあった。

胸騒ぎは今も止まない…。

誰かにずつと呼ばれているような、変な感覚が付きまどっている。

「…くそっ」

「雪？」

不意に階下から声を掛けられ雪は顔を上げる。そこには壘の姿があった。

「壘…」

「何があつたの？」

吐き捨てた言葉の意味を聞いているのか、それとも何とも言えないような表情でもしていたのだろうか壘は“何が”と聞いてくる。こいつも抜けているようで案外鋭い男だ…。

「いや、何でもない」

「…？」

雪の答えに壘は眉根を寄せて腕を組む。こういう表情の時、彼は大抵納得をしていない事が多い。それでもある程度の距離の保ち方を心得ているからこそ、それ以上の追及はしてこないのだ。

こういうところ、物解りが良くて助かるんだよな…。

深く干渉されないのはお互いにとって良い事だと思う。こ局に居るからこそ尚更だ。こ記憶管理

「ところで、雪」

「ん？」

墨は思い立ったかのように口を開く。どうやら自分に用事があったらしい。

「実は…」

「何だよ？」

こんな風に口ごもる彼は珍しいと言える。何事も要領よく的確に話す墨にしては見えない光景だ。ただ今はその態度が余計に雪を落ち着かせない。

「言いたい事があるならばつきり言え」

口をついて出た言葉は、想像以上に冷たい響きを含んで墨へとぶつけられた。お互いにハツとして顔を上げるが、二の句が継げない…辺りには沈黙が広がっていく。

「……ごめん、雪」

「いや…俺こそ、悪い…」

先に言葉を発したのは墨。雪は伐が悪いのか思わず墨から視線を逸らすとそつと目を伏せた。

不意に頭上から墨の溜息が聞こえる。困ったように笑う感覚がして、足音が近づく…そして、そつと耳打ちされた。

彼は生きてる

罍の囁いた言葉に胸が大きく脈打つ。驚いて顔を上げれば、目の前に罍の端正な顔があり、小さくけれど確信を持って彼は頷いた。雪も開いた口を閉じると、しっかりと頷いて見せる。今はこの情報だけで十分だった。あとは…。

「罍…俺」

「大丈夫、好きにやってみると良いよ」

「でも」

「管理官・雪、キミにしかできない事をして」

罍の言葉は優しく降り積もる。

少しの不安も溶かすように、そっと心の枷を外して行く…。

キミにしかできない事を…

一つ呼吸をして、雪はもう一度頷く。

自分にしかできない事、自分だから出来る事…“成すべき事を成せ”と自分に言い聞かせる。

「俺、行って来る」

「…うん」

雪の言葉に罍は優しく微笑みを浮かべると、情報をくれた意外な人物の名を覚えてくれた。

“時間屋” 彼らが覚えてくれたのだと…。

「そっか。じゃあ、間違いないな」

「うん、多分ね」

罍の少し寂しげな表情に、雪はそっと触れる。その冷たい頬に自

分の頬を合わせると、

「…サンクス、墨」

と、小さく囁いて身体を離れた。墨は眼を大きく開いて表情を赤く染めていく…微かに“不意打ちなんて卑怯だ…”と呟かれたが、雪は笑顔でそれを交わすとそのまま降りてきた階段を駆け上がる。目指すはまだ屋上にいるであろう彼 J の元へ…。

*

「J!!」

「うわあっ!?!」

突然の出来ごとにJは素っ頓狂な声を上げると、へナへナとその場にしゃがみこんでしまう。

「…つくりした…」

胸を抑え蹲るJに雪は“どうかしたか?”とその顔を覗き込んで見せる。それが更にJの鼓動を速めるとも知らずに。

「雪さん!!」

「…なんだよ?」

突然いなくなったり、現れたり、なんて心臓に悪いんだらうと憤る心を抑えJはスツと立ち上がって雪の眼を見つめた。その剣幕に雪もきよとんとした瞳を返す。

ホント、無駄に可愛いんだ…この人。

本当は薄々気が付いている。
自分の「記憶の在り処」を…。それでも。

「J?」

黙り込んだのを訝しく思って雪が声をかける。その声に気付いて
Jは自分の気持ちを凍らせていく。今はまだ思い出しではいけない
ここにいたい。この人の傍にいて、この人を守りたい…その気持ち
だけが、今のJを留めていた。

「きゅ…急に現れないでくださいよ〜!?!」

情けない表情で雪に笑いかける。今はまだ気付かないで。気付か
ないふりをして。胸の中にはそんな願いが広がっていた。

「……………」

「……………雪さん?」

不安に怯える胸を抱えながらJは微笑む。その笑顔が涙に濡れて
いる事も知らずに…。

「J、俺と“賭け”をしよう…」

「…何を?」

予想外の言葉に胸が早鐘を打つ。そんな言葉聞きたくない。そう
思うのに雪の言葉は止まらない。止めてくれない。

「期限は一週間。お前が勝てばお前の望みを聞いてやる」

「……………」

言葉が右から入って左へとただ通り過ぎる。思考が追いつかない。

「俺が勝てば、その時は」

「…っ」

耳を塞ぎたくなる衝動を必死で抑え、震えそうになる体を叱咤して、何とかその場に留まる。足が地に付いている感覚がしない。

「お前を現世（もと）に戻す」

「……！？」

言葉は出て来なかった。

決定的なひと言が、「」の胸を抉る。

「どちらが先にお前の落し物（キオク）を探し出すか……」

雪はそつと右手を出す。その手は無言で握手を求めた。

本当は覚悟なんてない。この“賭け”を受けたくない。でも、自分に拒否権は与えられていないのだ…。

俺は、仮の管理官…。

その事実が哀しかった。

仕方なく差し出された小さな手を握ると、雪は満足そうに眼を細めて微笑んだ。

「俺と、勝負だ」

その笑顔は反則だ…心のどこかでそんな事を思いながら「」は頷い

た。

「…はい」

この瞬間、新しい契約ゲームが始まる。

」の失われた記憶を掛けた勝負が……。

水底の涙 序章・（後書き）

ようやく、Jの話に入りました（笑）

前回の後書きに書いたように、忘れてた訳じゃないですよ^^??

ココからが本編！正念場！！

頑張って書きますので、もう暫く「ノスタルジア」にお付き合い
下さい

水底の涙・壘・（前書き）

壘目線でのお話になります。

> i 9 8 5 1 — 7 3 8 <

「みてみん」や「なろう」で仲良くさせて頂いている「タチバナ
ナツメ」様が壘を描いて下さいました！！！！

もう、ホント美人です><

一人で堪能するのは余りにも勿体ないのでUPします
ナツメ様、本当にありがとうございます^^

水底の涙・墨

「えーっ！？」

管理局内に普段なら聞く事の出来ない人の大声が響きわたる。

冷静沈着、温和で微笑みを絶やさない彼 墨 の見る事の出
来ない光景に局内に居た管理官たちは身を乗り出すようにその様子
を確かめた。

「ちよっ、墨。声でかいっ」

迷惑そうに片方の耳を手で塞ぐ仕草をする雪は、何とも怪訝な表
情で対峙する墨の顔を渋々見つめていた。事の経緯はこうだ。

なかなか記憶を探す手がかりの見つからないJに、墨から情報を
貰った担当管理官・雪は勝負を持ちかける。

J、俺と“賭け”をしよう…

それは本来なら“管理官”として行つてはならない禁忌に等しい。
管理官が仮にも“記憶”を扱う者が、その記憶を賭けの対象にす
るなどあつてはならない事だ。その禁忌を冒しても彼 正確には
“彼女”だが はJを、Jの落し物^{キオク}を探そうとしていた……。

そして、今に至る。

今はその賭けについての“事後報告”を中間管理官である墨にし
ている処である…。

「雪、本気で言ってるの!？」

「冗談^{ジョーク}でこんな事が言えるか？」

「…っ」

思いがけない雪の真剣な眼差しに墨は一瞬怯む。そこには覚悟が滲んでいるように見えた。

いつも飄々として真意が読み取れないような彼女が、何を思い“賭け”なんて無茶な事を言い出したのかは分からなかったが一つだけ言えるのは気まぐれとか冗談ではなく本気だと言う事。

「それをJものんだの？」

そんな前例のない条件を、Jは了承したんだろうか…。不意にそんな事が頭を通り尋ねる。雪は少し考える表情をした後、ゆっくりと頷いて見せた。

本当なら、そんな前例のない賭け^{コト}させたくはない…。

きっと、雪がそこまでしなくてもJの記憶を探す道筋はもう見えかけているはずなのに。

果たして、彼女が自分自身を危うくしてまでJを助ける^{カレ}意味があるのか…。

墨は頭の隅の方で冷静に彼女自身とJの記憶を天秤にかける。その結果は明白で、彼女の言う“賭け”を受け入れることなど到底できないと告げていた。

「悪いけど、僕は反対だよ。雪」

「……………」
「言わなくても分かるはずだ」

その言葉の言外に“キミがそこまでする必要はない”と冷たい意

思を匂わせ、毅然とした態度で雪に応じる。逸らされることのない真っ直ぐな瞳が一瞬揺れ、そして雪は黙っていた口を開く。

「分かるさ。そんなこと」

「じゃあ、何故？」

「こうでもしないと、」戻らないだろ…」

雪の言葉に墨は息をのむ。

その可能性は十二分にあるのだ。

自らが望まない限り、彼の記憶は戻らない気がしていた。この数日の間に彼について分かった事がいくつがある。

彼が記憶を取り戻しかけている事。

彼自身が現世に戻る事を望んでいない事。

そして…

「彼が記憶を隠蔽したと…そう言いたいのか？」

「……」

彼女の無言が、何よりもその意味を伝えていた。

二人の周りを取り巻く空気の色が変わる。張り詰めた空気がその温度までも変えた様に肌寒く感じ、ただ無言のまま眼を伏せる雪の表情も冷たく色を失っていく。

「……ありえないよ」

思わず否定の言葉が口をついて出る。信じたくない。その一心なのかもしれない。

その言葉に雪の顔もハツと上を向き、その瞳は何処か迷うように揺れ動いていた。

「どっしてそう思うっ？」
「それは…」

まるで縋るように雪の眼が細められる。
きつと彼女も信じたくないはずだ。Jが自ら記憶を隠蔽したなんて。

「だって、そんなこと通常の人間に出来る筈がない」
「……」

「一時的に記憶から逃れることはあっても、記憶管理局（こひんぎょく）に来るまでに消すなんて不可能だ!!」
「……通常…ならな…」

雪が少しだけ表情を歪めて床に視線を落とす。彼女が何を言いたいのかを察して墨は黙った。

通常なら出来るはずなんてない…。

もし、仮にJ（カレ）がそれを成しえてココに来たのだとしたら…彼は一体どんな思いで生きていたのだろうか。あの屈託のない笑顔の裏に、どんな哀しみを隠していたのだろうか…。

「……分かった」

墨は渋々、雪の策に乗る事を了承した。苦渋の判断だったに違いない。それでも。

「キミにしかできない事を…」 そう言ったのは僕だしね…」

自分の言った事を今更後悔して、苦い笑みを浮かべる。雪もその

様子に気が付いて困ったように笑って見せた。

「契約頼めるか？」

「……仕方がないしね」

本当は反対だけど……。

消化しきれない気持ちを抱え、墨は頷く。今はただ彼女の運に賭けてみるほかにない。彼女を信じることしか出来ない……。

信じられるものなんて、何も無いのにね……。

自分の考えに眉を顰める。

遠い昔に“信じる気持ち”など置いてきたと言っのに、何故またそんなモノに縋るのか……人間なんて所詮、愚かなものだと思うのに。

「墨？」

いつもの笑みが消えかけた頃、雪がその異変に気付き声をかける。彼女は今の自分にとって数少ない“理解者”の一人。哀しい傷を抱えた仲間……。

「何でもないよ」

「平気か？」

「何が？」

「いや……」

お互いに本音を読み取りにくいのだと思う。だから適度な距離を保ち、一緒に仕事が出来ると……。上手くはぐらかしたつもりが、雪には何となくわかってしまったらしい。急に悪戯っぽい笑みを浮

かべると

「俺を信じてろよ」

まっすぐな瞳に射ぬかれ、不意に墨の口元が綻ぶ。

どこまで本気なのか分からないが、その一言で十分だと思った。

今は彼女を信じよう。

例え何が待っていても、きっと彼女なら」を救える。その一言で僕の暗い心を救ったように……。

「信じてるよ。キミと、キミの管理官としての能力を」
「げっ」

墨の言葉に、雪は顔を引きつらせ「一言多いんだよ」とぶつぶつ呟く。二人は穏やかな表情で笑い合っていた。

水底の涙・墨・（後書き）

さてさて墨君目線です^^;

とりあえず、またまた会話：と言つか1シーンになっちゃいました

orz

今回は「契約」について触れる事になると思います！

頑張って書きます!!!!

水底の涙・2

賭けをした。

自分の記憶を使って。

でもこの賭けは狡だと思った。

だって…俺の記憶は　記憶の隠し場所を俺は知っているから。

ノスタルジア管理事務所内、管理局。

定位置コピー機に彼はいた。

「調子はどう？」

不意に後ろから声を掛けられ「は振り返る。そこにはいつもと変わらない墨の姿があった。

「墨さん…」

「賭けのこと、聞いたよ」

苦笑いを浮かべ溜息をつく彼は、どこか疲れているようにも見える。

定位置で書類のコピーを取りながら「は墨から視線を逸らし、

「ははは…」

と、ワザとらしい乾いた笑いを浮かべてはみたが、「はふと気になつていた事を尋ねることにした。

「墨さん、“記憶”ってどうやって探すんですか？」

ここに来てから気になつていた事。

前回の依頼人「金子高久」氏時には雪が一人で事務所へと戻つたため、彼はその方法を知らない。

おおまかに“記憶うっみの海”の『中央管理局』で検索することが出来ると教えてもらったものの、実際に中には立ち入らせてくれなかった。

「うん」

「Jの質問に墨は困ったように微笑むと腕を組んで壁に寄りかかり、考える仕草をする。どう答えればいいものか…そう悩んでいるようにも見えた。」

「墨さん…？」

「…それは今でなければいけない？」

「えっ？」

唐突に真剣な眼を向けられJは怯む。その眼差しの奥に広がる何かが、Jに警鐘を鳴らしていく。

「君はまだ、正式では無いから」

「…あつ」

「残念だけど、今は教えられない」

目の前で開いていた扉が一瞬にして閉ざされたような疎外感。

“仲間”になれたと思っていたのに…俺は未だに記憶を失くした

“哀れな少年”のまま。その事実が酷く哀しくさせる。

俺は“仲間”にはなれないのかな…。

そんなこと、聞く事も出来ずにJは俯く。頭上で墨の困ったように笑う息遣いが触れた。

そつと頭に墨の指が触れ、Jはその顔を上げる。そこには墨の慈愛に満ちた微笑みが待っていた。

「そんな表情をしないで、J」

「……」

「君を仲間だと思っていないわけじゃないんだ」

慰めるように降る、墨の言葉。まるで何かの呪文みたいに彼は言葉を紡ぐ…。

「ただ、僕たちは“不自由”だから…」

静かに墨が空を仰ぐ。コンクリートで囲われた部屋の先にあるであろう“空”を。

「…君は、何も知らない方がいい」

もう一度真っ直ぐな視線がJへと向けられる。

「閻魔庁こんなとこに縛られてはいけないよ」

茫然と立ち尽くすJに、墨は小声で耳打ちする “キミは飛べるから” と。

「墨さん??」

その言葉の意味を問おうとしたが、その口は墨がたてた一本の指によって塞がれた 咎めるように墨が笑う。

“聞いてはいけない”

無言の圧力にJは背筋が冷たくなるのを感じた。

「……」

「じゃあ、頑張つてね」

墨は黙り込んだJにいつものように笑みを向けるとポンツと肩を軽く叩いて歩き出す。不意にJの腕が墨の細い手首を掴んだ。

「墨さん、俺」

「どうしたの、J?」

予想外に冷たい墨の視線にJは固まる。二の句が告げなくなりそうだ。

「あの…そういうえば、雪さんが何処にいるのか知りませんか?」

恐る恐る聞いたのは変哲もない事…。自分が情けない…。

だが、雪の事が気がかりなものも本当だ。普段なら局内にいる騒がしく小さな彼を、今日は朝から見えていない。何処となく局内も静かに思える。

Jの間抜けな質問に墨は拍子抜けしたように眼を見開くと、ニコツと笑う。

「雪は…多分、彼のところかな」

墨の言う“彼”が誰の事をさしているのかは分からない。けれども、それ以上聞いてはいけないような気がした。直感的に…。

「そう…ですか」

「うん?」

「……」

「今度は聞かないんだね」

「揶揄するように墨がクスクスと笑う。」

「だつてっ!」

「耳まで赤くした」の顔を見て、墨が楽しそうに笑いを堪える。「はフイツとそつぽを向いた。」

墨さん、性格悪い…。

「ごめんね、イジメすぎたかな」

涙をうつすら目元にため、ようやく笑い終えた彼は少し考えてから「へと近づき口を開く。」

「雪のことを知りたければ、“賭け”に勝つて…それが“彼女”を救う事になるかも知れないよ」

耳打ちされたのは意外な言葉。

分からない事ばかりを言う墨に、「Jの眉根は次第に寄せられ怪訝な表情を浮かべる。それでも墨は説明の一つもせずただ微笑んでいた。」

「そうそう、雪が戻ったら“誓約”を行うから…」

「誓約?」

「うん」

墨はそつと目を伏せ頷く。「Jは次の言葉を待った。」

「僕らには、それが必要だから…」

「…?」

「意地悪なこの人は、やはり説明責任は果たしてくれないらしい…。不満そうな視線を向けては見たものの“じゃあね”と軽く笑い返されては、それ以上の追及など望めなかった。」

大概、謎だらけなんだよな…。

普段は優しく穏やかな色しか見せない“墨^{かれ}”が、本当は一番“意地悪”で謎なんじゃないかと、Jは思う。後には微かな花の香りが残されていた…。

水底の涙・2（後書き）

こんにちわ^^

前回の「水底の涙 - 罌 -」を1と考えて、今回のが2になります！

今回のお話は、罌の本性が垣間見えた感じかと…^^；

謎だらけの彼らです。もう暫くお付き合いくださいorz

水底の涙・3・契約

「Jは一人地下へと続く階段を下りていく。

コンクリートの壁に囲われた暗い螺旋階段に無機質な靴音が響きわたり、地下で待つ人々に案に自身の訪れを伝えた。

こんなところに地下室があつたなんて…。

辺りをキョロキョロと見回すさまは誰が見ても“挙動不審”以外の何物でもないが、Jはそんなことに気付く訳もなく最下層に辿りつくまでの間その景色を堪能した。

同じ頃、地下最下層。

二人はそこにいた。

会話はなく、至極真剣な面持ちでその時を待っている。Jが辿りつくその時を。

「遅いね、彼」

腕組をしていた墨が困つたように笑いもう一人の相手へと話しかける。

「また、迷子にでもなってるんじゃないの」

そうぶっきらぼうに言つてのけた相手 雪 は、視線を合わせるでもなく壁に寄りかかり眼を伏せた。墨の溜息が地下の冷たい空気に溶けて消える。

ここは『地下祭壇』 誓約を行い、彼らがその代償に“自由”を得る処。

彼らを生みだす処…。

「ここは変わらない…」

不意に雪が眩く。その言葉に墨は上を見上げた。

「…そうだね…」

どこか辛そうに眉を顰めると墨もそつと目を伏せる。何かに思いを馳せるように、二人はまた黙り込んだ。

「お…お待たせしましたっ」

ようやくJが姿を現す。気のせいか息が切れているようだが…ふらふらと覚束ない足取りで階段を降り切り二人の待つ祭壇の前へとやってくる。

「おせーよ」

容赦のない雪の一言が降り注ぎ、いつもならフォローを入れてくれるはずの彼も黙ったまま…その様子にJは苦笑いを浮かべるしかない。

「すみません…」

仕方なく頭を下げ謝罪すると、雪はすぐに真面目な表情になった。誓約する。…来いっ」

顎でついて来るように促され、渋々Jは歩き出す。墨は先程から無表情で眼も合わせようとしない。その妙な空気にただならぬものと居心地の悪さを感じた。

「誓約…ってなんですか？」

唐突に尋ねてみる。端から答えが返ってくるとは思っていないが…。

「誓約つてのは、管理官が“自由”を得るために行う契約だ」

予想を反し前を歩く雪が言葉を返す。あまりにも素っ気なくて聞き逃してしまいそんな程簡潔だったが…。

「墨さんも言っていましたけど、“自由”を得るってどういうことですか？」

詳しく聞こうと更に言葉を続けると、不意に雪は足を止め振り返った。その眼がとても冷たいものを放っている事に気付いて、Jは

思わず後ずさる…。

「俺ら管理官は何かをする際には必ず“中間管理者”の立ち会いの元“契約”を行う。それは“身体”を得るためであり、また”自由”を得るためでもある…」

「……？」

雪の口調は常とは違い、酷く冷めたものに思えた。まるでその続きを語るように先を歩いていった墨も立ち止まり、彼も暗い表情で言葉を発した。

「僕は本来なら閻魔^こ庁に留まるべき者ではないからね。たまに自身の身体を持つてここに来る人もいるけれど、その殆どは霊体だから…動くためには“肉体”が必要でしょう？」

二人はそれが当たり前だと言わんばかりに呟くと、眼も合わせずに歩き出す。それ以上は触れて欲しくないように思えた。

「……自由……」

“記憶管理官”とはもつと自由な者だと思っていた。

「記憶の海」を行き来して、カツコよく人の記憶を探して…漫画とかでよく見るような現世と霊界なんかを飛び回る…そんな風なものだと勘違いしていたのだ。

俺、ちよとだけ羨ましいと思ってた…。

自由に生きている彼らが羨ましかった。辛いことなんて何も無いような表情で、彼らの心は何者にも侵されない程強いのだろうと…。だから尚更前を歩く二人の表情に驚かされる。あんな冷たい表情を浮かべる事もあるのだと。

二人は生きてるのかな…それとも死んでる？

今まで気にならなかった事が頭を廻りだす。

生身の肉体と霊体…触れられるのだから彼らは前者なのだろうか。

そんな考えをしていた刹那、勢いよく何かにぶつかった…思わず顔を上げると、そこには“雪”の渋い顔がある。どうやらまたも彼にぶつかってしまったらしい…。

「お前の眼は飾りか？」

「…いえつ、その…すみません」

明らかに苦い笑いを浮かべる雪に、Jは平謝りで応戦すると彼の口から自然溜息が洩れた。

「…ついたぞ」

「えっ…？」

「“地下祭壇”だ」

言われて雪の奥を見ると、そこには先程までの薄暗い通路とは違い一際高い天井に空から差し込む光…一面に咲き乱れる花、そして綺麗な水路の先に“祭壇”と呼ばれるに相応しい場所がある。なんとも不思議な場所だった。

「…これが…地下？」

「…そう。そして“記憶の海”に繋がる重要な場所でもある」

先に辿りついていた罫が祭壇の前に立ち一本の柱に手を当てている。その表情は何とも哀し気に見えた。そつと彼の細い指が柱に書かれた文字をなぞる…。

「ここは“哀しい場所”であり、僕らの“揺り籠”で“棺”…」

雪も徐に足を進め花の咲き乱れる場所にある、なんともそぐわない石碑の前に立った。

「…ここは歴代の管理官の眠る場所。そして生贄になった彼らの眠る場所だ…」

二人の重い口ぶりにJは戸惑う。言葉は何も浮かんでこなくて、ただ二人の顔を交互に見ていた。

不意に雪視線がJへと向けられる。

「誓約を…」

その声に耳の奥で甲高い音が響く…まるで耳鳴りのように責め立て、鼓動を速める。あまり気持ちのいいものだとはいえない。

「…はい」

痛い耳を抑え、Jは頷く。その足は自然に雪の元へと向かっていった。

「手を出して」

頭上に注がれる声に顔を上げると、そこには墨の姿がある。彼は少しだけ眼を伏せ、それから二人の丁度真ん中に立った。

「手を」

二度目の催促にJは訳も分からず手を開いた。その手を雪が掴む…
「違う、こつだ」

「えっ…はい」

言うが早いか雪は自分の手と重なるようにその手を前に出した。Jの手もされるがままに合わされる…白くて小さな雪の手に、その体温に、耳鳴りじゃなくて鼓動の高鳴りを意識せずにはいられない。

…こんな…不意打ち。

赤くなる顔を隠す術もなく、Jは伐が悪くて俯いた。

その頭上に降るは、二人の“誓約の言葉”

「仲介のもと“記憶管理官・雪”と“彷徨える魂・J”が、ここに契約を交わす」

雪の言葉に反応して地面が光り、また何処かで“リイン”と鈴の音が聞こえた。

次いで墨がその力を解放する。仲介人としての能力を。

「仲介人、“記憶管理局案内人・墨”。この言葉を持ちて、ここに許可を与え、誓約の印を刻む。“記憶管理官・雪”及び“彷徨える魂・J”の言葉を信じ、援け、見守り、導く事を誓う。違えることは罪なり。原罪をもちてその咎を与え、消滅をもちてその罪を贖う。

ただ願わくは、彼らが望むべき結末ゆくえを迎えていることを」

墨の開かれた眼が薄紫色に輝く。

なんとも奇妙で、なんとも美しい光景だった。

墨さん…眼が…。

思わず墨の姿に見とれていると、彼は不意に雪へと手を伸ばす。その手が雪の手と重なり滑るようにその手首を掴んだ。細く白い手首に墨の爪が食い込む。

「つつ」

雪は短く息を詰めると、その爪が手首を辿るのを見守った。

見る見るうちに手首に、その爪が辿った後に赤い筋が浮き出ていく。鮮血で描かれたように紅いソレは不思議な模様を模ると、そつと雪の手首から離れて行った…。

暫くして辺りに広がっていた光が完全に消えた事を確認すると、雪は合わせていた手をそつと離れた。墨も溜息を一つ吐く…その表情には疲労の色が滲んでいるように思えた。

「これで何か変わったんですか？」

あまりにも場違いな質問かとも思うが、何も知らないままなのは釈然としない。どうせ怒られるのは分かっている。ならば、この際だから尋ねる事に決めた。

」の言葉に雪が視線を向けると、暫く考えてから諦めにも似た溜息をつく。寄せられた眉根からは不機嫌さが窺えた。

「阿呆、そういう問題じゃないんだよ」

めんどくさそうに頭を掻いてから彼は傍にあった木に寄りかかる。その眼にはやはり暗いものが映っているように見えた。

「さつきも言ったけど、俺らはその全てが縛られ“自由”を持たない。これは自由を得るために行わなければならない“誓約”なんだよ」

「…よく…わかりません」

彼の言葉に「は困ったように首を傾げると、それを見た雪は徐に自分の腕を見せる…正確には“手首”を。

紅い…鎖？

その白い手首には痛々しい程の紅で描かれた鎖の姿があった。丁度墨が触れていた部分にだ。

「これが誓約の“印”」
「印？」

「破れば、この鎖が手首の血管から身体の中に入り“魂”を蝕む。完全に蝕まれた“魂”は二度と復活はしない。事実上の 消滅 だ」

強調される“消滅”の言葉に、不意に背筋が冷たくなったのを感じる。何か冷たいものが背中を通り過ぎた。

「誓約を行わずに勝手に行動した際にも、同じように見えない“言葉”が発動する…：僕らはここから逃れられない」

不意に墨が口を挟む。その表情は何処か困ったような、寂しい様な色をしていた。

「酷いな、雪。僕は彼に“今は教えられない”って言ったのに」

いつもと同じように微笑むのに、その笑顔に冷たいものを感じて「は少し身を震わせる。その様子に気づいて雪はハッと鼻先で笑って見せた。

「構わないだろ…どうせ」ココにいる間の記憶は消される」

「…そうだけど」

「それでも何か言うやつがいるなら俺のせいにして構わない」

「…そう言う事じゃなくて」

「じゃあ、何だよ」

「……………」

記憶が消される……………???

二人のやりとりをどこか遠くに感じながらも、「は雪の言葉に引つかからずにはいられない。どうして、記憶を消されなければならぬのか　その事に憤りを覚えた。

「どうしてですかっ!?!?」

「ああっ?」

「何で勝手に記憶を消すって!」

「……………」

気付いた時には訳も分からずに雪に対して声を荒げていた。それでも彼は動じることなくまっすぐに見つめてくる。曇りのない瞳で。

「…っつ。なんで…」

最後の方は咳きになって吐息と共に零れた。聞こえない程小さな声に耳を傾ける者はいない。そうまでして記憶をなくした自分を気にかけてくれる必要は何処にもないのだ…。

その事実が余計に哀しかった。

なんで…そんなっ

雪はただ」の事を見つめ、墨は少し呆れたように溜息をつくとき、そつと眼を閉じ首を振った。

不意に足音が近づいて、雪が肩に触れる。勢いよく顔を上げれば、そこには複雑な表情を浮かべて笑う彼の姿があった。

「お前はこんな処に縛られるな」

その言葉に眼を見開く。

あの時、墨も同じ事を言った。

縛られてはいけない…。

何がそんなに彼らを縛りつけているのか…。

それ以上、言葉は出て来なかった。後には聞きそびれた疑問が、」の頭の中を廻った。

こうして、この賭けが始まりを迎えた。

水底の涙・3・契約・（後書き）

契約と誓約を終え、二人の賭けは始まりを迎えた。

雪と墨を縛るモノとはっ！？

そして「は賭けに勝つことが出来るのか…？

二人のお手並みを拝見させて貰う事にするよ…僕は。

彼はそう言つて微笑むと、一人祭壇を後にする。

目の前には何かを考える 雪、そして俺の心は揺れていた…。

*

ノスタルジア管理事務所内・応接間。

Jは一人で与えられたノートパソコンと睨めっこをしていた。記憶の探し方なんて分かるはずもなく、ましてや勝負の相手である彼に聞く事も叶わず、今は大人しく雀から手渡されたパソコンの中に入っているデータを読み漁っている処だ。その時、不意にドアが叩かれると開かれたドアから墨が顔を出す。

「調子はどう?…」

いつもと変わらぬ微笑みを浮かべる彼は、その手にお盆を持ち中に入ってくる。お盆に載せられるは熱い日本茶とお茶づけになるであろう可愛い砂糖菓子。なんとも気のきいた“差し入れ”にJの顔も思わず綻んだ。

「墨さん」

お茶をこぼさない様にそうつと入ってくる彼の手からお盆を受け取り、Jは微笑み返す。日本茶の香りがフワツと広がると、心もなんとなく落ち着いた気がした。

「まだまだですね」
「そう？」

扉を閉めた壘に苦笑いで呟くと、彼は意外そうな表情を浮かべてから徐に頷く。何かを考えている様子だ。

「まあ、簡単でもないかな…」

壁に寄りかかり口元に手を当てる彼は少しだけ悪戯っぽく微笑むと、少し視線を落とした。こういう表情の時、彼らは何かに思いを馳せている。Jが触れてはいけない“秘密”を抱いて。

どうして、そんな表情をするんですか…？

聞きたい言葉はあるのに、この言葉は口には出来ないモノ。
今の自分では何もできないであろう事実が、妙に腹立たしかった。仕方なくJは心とは違う質問をする。もっとも、こちらも気になっていた事なのだが…。

「あ…あの、雪…さんは？」

Jの言葉に壘はハツと我に返ると、“雪？”と小首を傾げる。その確認するような視線にJは思い切り首を縦に振って見せた。

「雪はね…さっぱりみたいだよ」

彼から返ってきた言葉は尋ねた意味とは違っていたが、齎された言葉の意味にJはあからさまな安堵のため息を漏らした。

その事に壘は可笑しそうに肩を揺らして笑う。そしてJは頬を紅

く染めた…。

「笑わないで下さいよ…」

不満そうに視線を彼に投げかけると、墨はその視線を受けて必死に笑いを堪えた。目元にはうつすらと涙まで滲ませて…。

「ごめん、ごめん…あんまりにも君が素直だから…」

一頻り笑い終えると、彼は不敵に目を光らせる。その視線にJの心臓は小さく跳ねた。

「でも、雪は動き出したら止まらないからね」

その言葉の意図する事に気づいてJは思わず息をのむと、墨は少しだけ視線を逸らして言葉を続ける。

「一応、この局の中でもエリート中のエリートなんだよ？ 彼」

「えっ!？」

「見えないと思うけどね」

語尾に？マークでもつきそうなほど愛想よくウイंकで投げかけられると、Jは口を開けたまま暫く呆けた…。まさか彼がエリートなんて…。

どうみても俺と対して変わらないでしょ!？

気が動転しているのかJは意味のわからない突っ込みを自分に入れる。ここは“現実”世界とはかけ離れた“時空”を持つ場所 閻魔庁 なのだ。外見からくる年齢など、そんな常識はいくらでも覆

される事だろう。

「…ホントに見えませんか」

思わずストレートに言葉をぶつける。

その言葉に墨は困ったように苦笑いを浮かべて見せた。

「うーん…あれでも一番の古株何だけど」

複雑な表情で腕組をする彼は、どこか面白くなさそうに眉根を寄せる。その理由によろやく気付き「は口ごもった。たった数週間の付き合いの自分とは違い、雪は彼にとって 仕事仲間 であり古い付き合いを持つ 友人 に他ならないのだ。

うわ…俺、迂闊すぎ。

「すみませんっ、墨さん同僚なのに…失礼なこと言っちゃって」

繕うように墨の顔色を窺うが、その色は変わらない。元より、彼は自分の感情を隠す事に長け過ぎているのだ。

よく分からないよ。

半泣き状態の心とは裏腹に不意に墨が視線を合わせる。その瞳には何も映らない。

「ああ…別に構わないよ」

何事もなかったかのように彼は微笑む。そこには“敵意”こそ無いにしろ、何故か冷たいものが隠れているような気がした。なんと

なく気分が晴れずにもう一度頭を下げる。

「すみません…ホント」

「謝らないで。良いんだ…それより君の“記憶探し”の邪魔になつてるかな？」

「……」

唐突に尋ねられ「は一瞬目を瞬く…何を言われているのか分からなかった。

「記憶…探すんでしょ？」

もう一度彼が不思議そうに首を傾げる。やはり眼には何も映さずに…。

「そう…でした」

小さく呟いた声が溜息に溶けて消える。自分の事のはずなのに、何処か他人事のように思えてしまうのはどうしてなのだろうか。

普通、“記憶”って大事なはずだろ？

大事なはずの記憶を失くしているというのに、焦りもなければ、哀しくもない。別段なくても困る事はないような…そんなモノを探して、何か意味はあるのだろうか。自分自身に問いかける。

俺、どうしてココに来た？

本当は薄々分かっている事がある。

ただ言葉にはならなくて、したいとも思わなくて、“今のままが

続けば良いのに”と願う自分が心の隅にいるのだ。これはいけないことだろうか…。

「俺、記憶探してるんですよ」

「そっだよ」

「なきゃ、困りますもんね…普通」

「うん…」

当たり前の事を聞かれ、墨はただ頷く。俯いたままでは彼の表情を窺い見る事も叶わず」も黙った。

「そっいえば」

その場の空気を変えるように墨が口を開く。「は顔を上げるでもなく墨の言葉が続けられるのを待っていた。そして…。

「雪は今、現世に降りてるんだ」

「……？」

唐突に彼が何を言い出したのか理解できず、思わず顔を上げる。そこには少し自嘲気味に笑う墨の顔があった。

「ピンとこないよね」

「…はい」

「君が居たはずの世界…っつていえば分かるかな？」

「……っ！？」

続けられた言葉に」は驚愕する。

雪さんが……何だっつて？

理解が追いつかずに、頭の中で彼の言葉を反芻させるがそれでも理解できそうにない。馬鹿なのか、それとも理解できる域を超えているのかは定かでない……。

「大丈夫。一人じゃないし」

「いや…あの、そういうことじゃ」

「イチは地上に関しては情報通だからね。ちょっと人間が硬くて口数は少ないけれど…」

「あの…墨さん？」

「雪も初対面じゃないし。そこら辺は上手くやるよね、きつと」

勝手に話を進めて盛り上がる墨に、彼は言葉を失くす…。頭の中は今にもパンクしそうなほどの情報で溢れ、はその場で頭を抱えた。今にも口から泡が出そうだ。

彼の知らないところで“何か”が動き出していた。

海の見える寂しい場所に、彼らは眠っている。

もう誰かに語れるほどの思い出キオクはないけれど、それでも彼にとっ
ては大切な失くしたくないはずの記憶だった…。
温かかったはずの優しい思い出。

父さん、母さん…ただいま。

もう応える人はいないけれど、それでも彼らはきつと微笑んでく
れているだろう。昔のように…。

冷たい墓標には見知った名前が並ぶ。確認するでもなくその名前
を指先で撫でると彼は小さく溜息をついた。

「はあ…」

ここに来るのはどれくらいぶりだろうか。

海から吹く冷たい潮風が頬を撫で、髪を弄ぶかのように揺らす。
まるで誰かに触れられているように…。

お前はココにいない…のに。

逸る胸を抑え切れずに彼は俯くときつく唇を噛んだ。その表情は
見えない。でも。

「あと少し…少しだけ…」

その続きはそつと波音がかき消して行った。

「神谷」

「……」

「神谷 雪」

「……？」

不意に後ろから声を掛けられ雪は歩いてきた足を止める。

聞きなれない声と、呼びなれない名前に反応が一瞬遅れてしまったのは言うまでもない。

“ 神谷 ” ……なんて呼ぶなよ……まったく。

振り向いた先にいる男に雪は苦笑いを返すと、その眼を真っ直ぐに見つめた。

「久しぶりだな、イチ」

「…ああ」

口数の少ないこの男は、『記憶管理事務所』内、管理局に属し“地上探索方管理官”の任を頂く人物 加藤 一喜^{かとう いっき} コードネームは『イチ』だ。
管理事務所内で唯一現世に暮らし、普通の生活を送る現役高校生だ。

「元気そうで何よりだ」

「…お前もな」

「……」

「……」

続かない会話にお互い沈黙を抱く。雪は視線を辺りに泳がせるが、一方の彼はそんな雪の様子を気にするでもなくただ少し俯いていた。

「こいつと普通に会話できるのって“罍”くらいなんじゃないか？」

気まずい間を埋めようと思いを巡らせてはみるが、一向に共通の話題は見つからない。現世に降りるのに“一人じゃダメだ”なんて罍が言うから仕方なく“一”^{カレ}に協力を頼んだもの…これなら一人の方が幾分か過ごしやすかった気がする…。

どうしたもんかね…。

現世の季節は梅雨。

暫く続いていた雨も、今日は泣きださずに済みそうだ。じめじめとした空気は好きにはなれないが、真夏や真冬に訪れるよりは良いように思えた。もっとも真冬には良い思い出がないだけに、一人で来ようなどとは思わなかっただろう。この世界は一人で来るには辛すぎる…。

「そうだ」

「…?」

不意にあることを思い出して口を開くと、目の前の彼は怪訝そうに眼を細めて見せた。その表情に雪は少しだけ微笑みを返す。

「その節は世話をかけた…ありがとう」

「…?」

「金子高久の件だよ」

「……………ああ」

前回の“金子高久”氏の依頼で、現世にいる彼には迷惑をかけた。記憶の海にある欠片だけでは処理できなかったものを、地上にいた彼に探して貰ったのだ。その記憶の残骸を。

「急だったし、悪かったな」

「いや、休みの期間だったからな……………問題ない」

「そうか、助かった」

「ああ……………」

ようやく会話らしい会話が続いたかと思うと、彼はまた黙り込んでしまう。人見知りというよりかは、単にそういう人間性のようだ。雪は一つ息をつくとスツと右手を差し出す。

「とにかく、宜しくナイチ」

「……………」

差し出された手と、その言葉の意味に気付いて彼はその眼を見開く。そしてその眼が不意に細められた。好戦的な輝きを映して……………。

「……………」

交わされた言葉と、固く繋がれた手に、言葉以上の絆を感じられた一瞬だった。

水底の涙・5・雪と一・（後書き）

ようやく地上探索方管理官”イチ（一喜）”の登場です><
口数少ないし、真面目だし、扱いにくい感じの彼なんです。実は
名付け親は高校の時の友人です^^ 凄く普通っぽい名前が意外に
お気に入り（笑）

地上に暮らす設定のせいで、あまり表舞台には立てないんですけど
”墨の幼馴染”なんてものやってたくらいなので、今後墨との絡み
は期待できるかと

とにもかくにも雪&イチ（漢字表記だと分かりにくいので敢えてカ
タカナにします！）の地上探索は続きます（。・。・）

水底の涙・6・雪とイチ

二人はただ街の中を歩いていく。

その足取りは決して軽いものではないが、目的がある訳でもないのだから至極気楽なモノでもあった。

「それで？」

「ん？」

「何かあるから来たんだろ？」

「……まあな」

会話と呼ぶにはあまりにも端的で用件だけを伝える言葉たちに、二人は違和感を抱くでもなく進む。人込みに学生服と少年の格好をした少女が隣合い歩く姿はなんとも異質なものだろう。それでもこの街では行き交う人物を気に留める者は少ない。それがとても心地よかった。

とりあえず……どうすっかな。

特に目的があって降りたわけではなかった。

彼「J」が生きているという確証に近い情報を得たのだから、焦る必要も別段ない。もっとも依頼人であり迷子の「J」が自分の記憶を認める事がないのなら……の話だ。

自分で認めてくれるのなら、まだ救いようがあるんだが……。

それは残念ながら叶いそうにない。

この数週間で何度か彼が記憶を思い出しかけた形跡があるのに、

今もなお“迷子”の状態が続いているのは、それが思い出したくないほど辛い記憶だからなのではないか…雪はそう考えていた。

「神谷」

「??？」

「どうした？」

不意に黙り込んだ事を訝しく思ったイチが雪の肩を叩く。その事に我に返ると、雪は頭一つ分は高いであろう男の顔を見上げた。

少しだけ心配そうに眉を顰めた彼の顔がそこにはある。壘に良く似た根の優しい男…。

「いや、なんでもない」

「考え事か？」

「……ああ」

彼なりに気を使ってくれていたのだろう…人通りの多い方をイチが歩き、雪はその影に匿われるように歩いていた。誰一人ともぶつかることはなく。

その事に気が付いて雪は困ったように笑みを浮かべた。

「あんまり気を使ってくれるな」

まるで“女”のように扱われる事に居心地の悪さを感じると、イチよりも少し前を歩く。壘に何を吹き込まれたか想像することは容易だ。どうせいらぬことをこの生真面目に言ったに違いない。

まったく…困ったもんだ。

“過保護”というか、“心配性”というか…自分の事は少しも省

みない癖に、他人の事には熱くなる性質。それが墨だった。

「身体の具合はいいのか？」

唐突に尋ねられた言葉に雪は眼を見開く。彼が何を言わんとしているのか、それが分からなかった。

「怪我をしたと聞いた。“海”で」
「……」

彼の言う“海”とは『記憶の海』のことだろう。

生身であり、現世で暮らしている彼があそこに入り出すことはないが、管理官ならばその存在は知っていて当然のもの。だが、怪我の事を知るのは……。

墨……だな。

立ち止まる二人は人並みに反しているのに辺りに音はない。まるでそこだけ時が止まっているかのように、お互いに視線を交わす。

「…分かってるだろ。」

「……」
「俺は生きてない」

「……そうか」

肉体があるのならまだしも、この身体は仮初の器に過ぎない。痛みは同じように感じるし、血も出るが生死に関わるような大怪我を負った処で“死ぬ”ことはないと言える。

それきり彼は黙り込んだ。

続く言葉を探すでもなく、あてもない雪の小さな背中を追う……

つかず離れずの微妙な距離の取り方は彼らしいとさえ思えた。

「墨は」

「ん？」

「墨は、元気か？」

。 ……
咳くように聞こえてきた言葉に雪は足を止める。そして、気付く

。 ……
そうか、会う事は出来ないんだっただな…。

墨と一喜^{イチ}は所謂『幼馴染』という間柄だ。

詳しい事は分からないが、彼は“墨”を探して管理局を訪れ、また墨は“彼”を避けて姿を現さないのだと以前聞いた事がある。

探し求めた相手に、そこにいる事が分かっているのに会えないのは辛いだろう…。

それでも、イチは墨の事を思い無理に追う事はしない。もし例え追ったとしても、そこに墨がいないことは分かっているから。

お互いに思う処があるから…。

二人の間に言い表せない何かがある事は分かっている。自分の事を探し続けたイチを墨が嫌っていない事も。

それでも会えない訳…か。

言葉は難しい。

それが分かり合っていたはずの他人なら尚更にだ。

「相変わらず、人の心配ばかりしてるよ」

「……そうか」

「冗談っぽく言ったつもりが、イチは少しだけ困ったように微笑んだ。

仕事の都合上、どうしても連絡を取らなければならない時は墨から一方的な“メール”が届く事になっている。ありきたりな、当たり障りのないソレは、墨の事を教えてはくれない。だから彼はこうして雪に尋ねたのだろう。

「変わらないのなら良い」

「大丈夫だ…ちゃんと見てるよ」

「……」

不意に交わされた雪の意外な一言にイチは眼を見開くと、今度は彼らしい笑みを浮かべる。とても不器用で優しい笑みを。

「……ありがとう」

彼はそう答えるなり、歩きだす。

立ち止まっていた雪の肩を軽く叩いて促すと、二人はそのまま隣り合わせに街の喧騒の中へと紛れて行った…。

水底の涙・6・雪とイチ・（後書き）

前回は引き続き「雪&イチ」サイドです。

ようやくイチと墨の関係が明らかになっ？？…いえ、少し明るみに出ました^^；

この二人の過去については、また別編で詳しく触れるつもりでいます。

とにもかくにも・水底の涙・もう少しです！！

水底の涙・7

お天道様が丁度真上に上った頃、彼はまだパソコンと睨めっこを続けていた。手掛かりは何も得られない。

こうしている間にも雪は行動しているのかと思うと無駄な焦りが滲み、その心は逸って行く…。

時は一刻と迫っていた。

「罌さん！」

「…ん？」

唐突に呼び止められ罌は振り向く。そこには先程まで応接間で頭を抱えていたJの姿があつた。

「何かな？」

にっこりと微笑むと、罌はJの言葉を待つ。明らかに緊張しているであろう彼は罌の微笑みに身を固くするばかりだ…。

少し悪ふざけし過ぎたかな…。

僅かな罪悪感を持ちながらも、それを口にする事はしない。一時は生死の分からない彼を留めておくために仕方なく“管理官”と認めめたが、今は事情が違^{わけ}う。彼は“彷徨える魂”の存在であり、依頼人なのだ。しかも生きている人間なのだと分かった…。

これ以上の詮索や関わりを持たれることは厄介以外の何物でもないだろう。だから。

“甘え”は許されない。

雪が言うように、もしも彼が自分の記憶を意識的に封じたのだとしたら、それは間違いなく“逃げ”の行為であり“管理官”としては許されない事。人間としてもあまり認めたくない。

墨自身、自分の過去から逃げ出したくなる事はいくらでもある。だから…今でも戦っている最中なのだ。

生きることから逃げるのは卑怯だ。

思う処があるから、その態度は自然に冷たい気配を漂わせる。彼を認める事は出来なかった。

「あの、記憶を探す方法を教えてください」

「…?」

「……」

「どつという事?」

唐突に投げかけられた言葉に墨は眼を見張る。Jの表情は至極真剣なものだ。どうやら本気らしい…。

雪に触発された…?

彼が動いていると知った事がJに何かを齎したのなら、雪の行動も無駄ではない。賭けなんて無茶な事を起こした甲斐があるだろう。

「半日考えたんですけど…」

「……」

「俺には記憶の探し方なんて皆目見当がつかないんです…」

申し訳なさそうに彼が頂垂れる。その姿は墨にとって意外なモノ

であり、彼の“素直”さを浮き彫りにしていた。その事に胸が痛む。

…そう…君はそういう子なんだね。

少しだけ困ったように笑うと、Jは子犬のような目で墨を見つめる。その表情に驚きが混じっているのは見間違いではない。彼は少し視線を落とすと勢いよく頭を下げた。

「おねがいしますっ！！！！　こんなこと頼むのはいけない事なのかも知れないんですけど」

「……………」

黙りこむ眼の前の墨にJはただ頭を下げる。その表情は窺えない。

「……………分かった」

墨は頭を下げ続けるJに向かって諦めにも似た溜息と共に了承する。多分、これも“雪”が望んだことに違いない…そう思った。彼に協力することで“雪”が不利になるのか今は分からない。それでも。

僕は信じると決めた。

紛れもない彼　雪　のことを信じると口にした。その言葉は無闇には破られない。心の奥の方で不安に思う自分と、“大丈夫”と強く告げる自分が交差する。信じるはただ一つ　。

「J、キミも下に降りよう」

「っ！？」

下に降りることで起きる弊害を予測するよりも、今できる事を一人にして欲しかった。

例え、そこに何が待ち受けていても……。間違いだとしても……。

「雀に話をする。ついてきて」

「ちよつ、墨さん!？」

言つなり歩きだした墨の背を追い、Jは動き出した。

止まっていたはずの“時間”が動き出した瞬間だった。

・一方、地上・

一頻り歩いて二人は街中の人込みからは少し離れた住宅街へと出た。閑静で割と綺麗な戸建てとマンションが立ち並ぶ場所。その場所ので不意に彼は足を止める。

「神谷？」

「……」

急に立ち止まった彼 雪 に、イチも訝し気に振り向く。そこには俯き加減で黙り込む彼の思案顔があった。しきりに周囲に目をやっつては何かを考えて眼を伏せる いや、何かを聞いているのかも知れない。イチは瞬時にそう悟った。

「……イチ」

「どっつした？」

口元に手を当て、視線を合わせようとせずには彼は名前を呼ぶ。

明らかに何かを考えていることだけは傍からみても理解できる

のだが…。

その先を促すように声をかけるが、彼からの返答はない。もう一度拳動不審気味に辺りを見回してから、ようやくその重い口を開いた。

「この辺に、学校か、病院はあるか？」

「……」

「多分…病院の方が可能性は高いんだけど……」

いつもの自信に満ちた発言では無く、どこか頼りの無いその言葉たちは彼の心情をそのまま表しているようだった。彼の言葉に今度はイチが黙る。数秒ほど考え込んで、イチはすぐに答えを導く…雪の予想に値する答えを。

「病院なら五百メートル以内。高校なら一キロ以内にはある」

「……そう」

「行くのか？」

小さく頷いて聞いていた雪が、イチと視線を合わせた。その眼は少しだけ揺らいでいるように思う…まだ何かを決め兼ねている。そんな表情だった。

「……」

「……そこに何かがあるんだろう？」

「ああ」

「ならばお前は行くはずだ」

「……分かってる」

言葉を幾ら重ねても、彼は動き出そうとはしない。

小さく俯き拳をきつく握る姿は、割り切れない感情に上手く折り

合いをつけようと耐えているようにも、何かに苛立っているようにも見えた。そして。

「お前のすべきことは何だ？ ……神谷 雪」

静かに紡がれたその言葉に彼は肩を震わす。ようやく上げた顔には好戦的な色を灯した瞳が輝いてていた。

「言っじゃねえか…」

「……ああ」

一瞬だけ苦笑いを浮かべ、彼は真っ直ぐに前を見る。その顔に悪戯っぽい笑みが浮かんだ。

「行くぜっ」

声高らかに宣言を掲げると、彼はまた歩き出す。その理由は分からないが、もう立ち止まる事はないだろう…。

決着するか…。

彼が何らかの手がかりを得て動き出したのなら、きっとすぐにでも“記憶”は見つかる。そんな予感がある。

「…」

一つ溜息をついて、イチも仕方なく彼の背を追う。振り回される事には慣れている。ふと空を見上げれば、そこには雲ひとつない青空が広がっていた。

水底の涙・7（後書き）

残り数話で - 水底の涙編 - は終わりになると思います。
雪とJの賭けの勝敗を見守って下さい。

水底の涙・8

閑静な住宅街の路地を進みながら、雪は事のあらましを掻い摘んで説明してくれた。

「前回の依頼中に“海”で気になる声を聞いた」
「声？」

歩く横顔に視線だけ向けると、雪は微かに頷く。その眼は前だけを見ている。

じめじめとした空気を少しだけ涼しく感じさせる木々が風に揺れていた。

「“海”であいつとはぐれた時、あいつは捕まっていた」

「……」
「無論、記憶を食われたりはしていない。でも」
「……なんだ？」

歩く速度は緩めずに、けれども急に視線を落とした彼がその眉根を僅かに寄せる。イチは気になるものの、話の先を急かさずにただ隣を歩いた。また少し沈黙が続き、それから雪が徐に口を開く。何かに納得したように……。

「声が聞こえたんだ」

「……」

「そう……あれは、俺らの声じゃない。」のでも、あいつのでもないんだ」

曖昧なその言葉は自分に再確認しているように見え、イチは結論が出るのを待つ。

いつしか足は止まっていた。

待つ事には慣れてる。

少しだけ眼を伏せ、地面を見る。

揺れる葉が灰色の空から光を受けては微かな影を作り出している。まるで、自分のようだといちは自嘲した。

不安定で消えそうな影…。

この魂は、心や記憶は、半分は現世にもう半分は今^なは失^なき友人の元にあるのだと思う。しかも自らが望んだ結果だ。それでも。

「イチっ!?!」

「…?」

不意に名前を呼ばれ我に返る。

眼の前には彼の不安気に揺れる瞳があり、何故か近距離で顔を覗きこまれている…。あと数センチで唇が触れるほど近くに。

「…なんだ?」

「…なんだ?」じゃねえよ……急に呆けたのはお前だろ!?!」

その言葉に漸く自分の状況を理解すると、彼の頭をそつと押しやっつて距離をとる。どうにも顔を覗きこまれるのは苦手だ。雪は迷惑そうにその手を払うと仏頂面でそっぱを向く…機嫌は余り良くないと言える。

「それで？」

「…あつ？」

「続きはどうした？」

自分から話を止めておいて、彼は尋ねられた事に怪訝そうな表情をする。なんというか…。

軽い奴。

心の中で小さく悪態をつくといちは軽く息をついた。その事に更に気分を害したのか雪が険悪な表情で腕を組むと仕方なしと言った感じに口を開く。

「声だよ」

「誰の？」

「…それが分かれば、こんなとこにいないだろ」
「…」

仕返しのように意地悪く口の端を上げる雪にイちは徐に嫌そうな顔で対抗する。どっちもどっちと言った二人だが、こんな風に子供じみたやり取りをする事は珍しい。だから尚更そのけじめの付け方を知らずに惑う。

「…悪い」

「…？」

「調子に乗った」

「……いや」

静かに言葉を交わすと、二人は何事もなかったように歩きだす。

視線は合わせずに俯いたままで…。

「何となくだけど…あれは“J”の事を呼ぶ声だった気がするんだ」
「…？ 確証はないのか？」

イチの言葉に雪はただ頷く。確信がないから、不確かな事を言う事は出来ない。それが彼の考えている事だろう。

「ただ“タスケテ…”と呟いていた」
「タスケテ…か」

不意に雪が冗談っぽく明るい口調になったかと思えば、彼はとてもない事を言う。

「あいつに触れれば分かる事もあるかと企んではみたものの、結局ダメだった」

「お前でもか？」

「ああ」

「…」

とんだ企みを持って動いたものだと半ば呆れたが、それがとても彼らしく思えた。彼の“能力”を持ってしても分からなかった記憶。それはとても不自然で、曖昧なモノの様な気がする。

歩き続け、木々の隙間から病院らしき建物が見えてくると、雪が立ち止まりふと眼を伏せた。何かに耳を澄ませる。

「水だ…」

微かに流れる水のせせらぎの音に彼は意識を傾ける。他の何にも気を取られない様にじっと動かずに、まるで息をする事さえ躊躇う

ように。

「川か…？」

「多分」

イチの眩きに相槌を打つと、言づが早いか彼は音のする方へと駆け出す。仕方なくイチもその背中を追って駆け出した。

事態は収束へと向かおうとしていた。

水底の涙・8（後書き）

水の音がする方へと走り出した雪。
Jの記憶とは??

物語は佳境へと移ります。

罌に連れられ」は雀の元へと急ぐ。

殆ど座る事のない事務所内の彼の席はやはりというか、今日ももぬけの殻で彼の行先を知るヒントは用意されていそうにない。」は不意に立ち止まった罌の後ろからその席を見つめ溜息をつくとき、それに気づいたように何かを考えていた彼は急に踵を返した。

「罌さんっ?」

「おいで」

「何処につ!？」

「行けば分かるよ」

言葉少なにそれだけを告げると、後ろを振り向く事もせず彼は前だけを見て進む。事務所を出て、その足は何処かへと迷いなく進んでいた。

罌さん、速っ…。

見かけによらず早足で歩く彼を必死で追いかけると、事務所の廊下を抜け地下へと続く階段へと差し掛かる。その刹那、罌がピタリと足を止めた。

「罌さん?」

「ダメだ…」

「???」

短くその一言だけを呟くと彼は徐に腕を組んで考え込む。その間も地下から送られる冷たい風にJの不安は次第に増して行く。心が妙にざわついている。そんな気がした。

「…」

「はいっ」

「……」

「…墨さん？」

名前を呼んだぎり黙りこむ彼の顔を覗き込んで、ハツとする。彼の眼は笑う事なく真剣で、その表情はどこか冷たいものを纏う…彼らしからぬ様子にJは息をのんだ。

何がどうなってるの…？

さっぱり分からない事柄を整理することは困難で、とりあえず自分の置かれた状況を思い出す。

今は墨の言うように彼女の元に行かなくてはいけない。

本能が、そこに何かがあると告げていた。

「ごめんね。」

「えっ？」

不意に謝罪の言葉を言うと、彼は申し訳なさそうに俯く。そして視線も合わせずに“僕は一緒に行けない”と呟いた。

「どづいつことですか？」

「…僕は会えないんだ。彼に」

「彼？」

「…ごめん。僕は君を見送ることしかできない」

「……」

彼の哀しそうな瞳に二の句が継げなくなる。

今更ながらに自分が彼らのことを何も知らないのだと思い知らされた。彼の表情の訳も、彼らを縛るモノの存在も、俺は何も知らない。ただ甘えていただけ。現実から目を逸らし、ココにいたいと駄々をこねてきただけ。自分の力では何もしていない。だから。

対等になんて、なれるわけがない。

“仲間”になりたいなんて 言えるはずもないのだ。

それなのに、どうして自分は仲間になれない事を悲しみ、嘆いたのか。彼らとは背負うモノの大きさが違うのに。

「分かりました」

「…?」

「俺、一人でも大丈夫です」

「でも…」

「平気です。地上には雪さんたちが居るんでしょう?」

笑顔を浮かべ精一杯明るく振る舞う。

本当は怖い。過去なんて、記憶なんてなくなっただっていい。そう思う自分がいる。

そんな感情を見透かしたように眼の前の彼はそつとその眼を眇めた。非難の言葉でも出てくるのではないかと一瞬身構えたが、彼は曖昧に微笑んで首を振る。

「分かった。君に任せるよ」

「…墨さん」

それきり二人は言葉を交わす事なく地下への階段を下りていく。まるでいつかの祭壇を思い出させるような深い闇と、冷たい気配に緊張は高まり鼓動が早鐘を打った。そして。

「J、眼を閉じていて」

「…はい」

辿りついた一枚の扉の前に佇み、彼が言うとおりに瞳を閉じた。ギイイと鈍い音と共に襲い来る光。迫りくる匂いに何かが頬に触れた感触。

「いいよ」

「……」

合図に目を開けば、そこには沢山の機会と管とそれに埋もれるように眼を閉じ眠っている人物 雀の姿があった。これではどこを探しても見つからないはずだ。

「雀…さん？」

Jの声に反応して閉じられていた瞳が開く。

常よりも億劫そうに身体を起こし、視線を二人に向ける。その眼は不敵に紅く染まり、男の人にしては白く透き通るような肌によく映えていた。

「…遅かったな」

「……??」

顔にかかる鬱陶しい前髪を掻き上げると、彼は欠伸交じりに告げる。なんともやる気のないその仕草にJは内心“ホントに大丈夫か

「!?」と不安にさせられるが、その不安を風ぎ払うように彼は一歩前へ出た。

「雀、分かっているよね」

「……ああ」

「彼を、よろしく」

「分かっている」

少し苛立ったように頭を掻くと彼は手近にあるゴーグルをかけ、機会へと向き合う。何を言ってもなくクイツと顎で促されれば、それは“行け”という合図。そこに言葉は存在しなかった。

「気をつけてね」

「はいっ」

「大丈夫。雀は腕だけは確かだから」

「……はは」

機会の前で仏頂面を浮かべる彼に気付かれない様に、墨はそつと耳打ちするとその背を押して転送装置の中へと促す。優しい笑顔で送り出してくれる彼に、胸がチクリと鈍い痛みを伝えた。

「あのっ」

「……ん？」

これが最後だと分かっている。

きつと自分がココに戻ってくる事はないのだろうと。

記憶を取り戻しに行くんだ。

強くなる為に。

前を向いて歩いていくために。そして。

彼らと対等なかまになる為に…

「色々、ありがとうございました！」

元気よく告げるJなりの“別れの言葉”。

“さよなら”なんて言えないけれど、またきつと出会う為に今は別れるのだと信じているから…だから、この気持ちだけを置いていく。

「俺、頑張ります」

「……」

キョトンと不思議そうな表情をしていた罍が不意に微笑む。今までの中で一番柔らかい笑顔。その後ろで、雀が僅かに口角を上げ眼を細めるのが見える。彼も笑ってくれていた。それだけで。

大丈夫。一人でも、頑張れる。

そう思えた。

今度こそ立ち止まる事なく前に進む。

一度体験したはずの“転送”行為なのに、今隣に彼がいらないといっただけで、どうしてこんなにも落ち着かないのだろうか。

微かに震える指先を誤魔化す為に、思わず拳を強く握りしめた。

「いいか。強く、強く、思え」

「……はい」

雀の言葉に目を閉じると、思い浮かぶのはココでの出来事であり、

彼の顔。初めて出会った時の澄ました顔、冷たい目を向けられた呆れ顔。怒った顔も可愛くて、何より“笑顔”が一番好きだと思った。彼が彼女だと知って、その華奢な身体を守りたいと何度願った事だろう…。優しく、強いのに、脆い彼…いや、彼女にどうか届いて欲しい。そう強く思った。

辺りが光に包まれ静寂を取り戻す頃、そこにJの姿はない。

彼は無事に辿りつけたのだろうか 彼女の元へと。

「行ってしまったね」

「へっ、煩いのが消えて清々した」

雀の強がりに、墨は小さく笑う。

彼がこんな風と言う時は決まって表し方の分からない感情を持って余している時だから、言外に彼の寂しさを感じて微笑ましくなってくる。

随分と居た気がするものね。

正確には一月にも満たない時間のはずなのに、彼の存在はそれほど大きかった。もしかしたら縛られた僕らを救ってくれるのではないかと、そんな淡い期待を持っていた。これは嘘じゃない。

きつと、また会える…」。

何となくそんな気がする。

墨は彼の居なくなつた装置の中を見つめ眼を閉じる。

“賭け”はどちらが勝つだろうか…まあ予想は出来ているのだけ
れど。

「健闘を祈るよ…」

そつと呟いた言葉は闇に溶けて行った。

水底の涙・9（後書き）

ようやく更新（＾－＾；）

もう少しで「水底」が終わるのに、なかなか進まず…です。

次回ようやく地上へと下りた」と雪が対峙します。

水底の涙・10

水の中を漂うような、そんな感覚がある。

ふわふわと、ゆらゆらと、何処かへ誘うようなその揺らぎに彼は身を委ね眼を閉じた。

一方、雪はそこにいた。

水の音を追いかけて辿りついた先は病院裏手に位置する小川。丁度病院からも見える位置。

条件は揃ってる。

水の辺で立ち止まると、何かを考えるように口に手を当て考える。あと一步と言うところまで来ている気がするのに、肝心の記憶ものが見当たらない。焦る気持ちと苛立ちを滲ませながら乱暴に前髪を掻き上げる。

くそっ…

自分に悪態を吐いて辺りを見回す。

生い茂る草木に緑の木漏れ日、そして流れるは水の音。どことなく彼の良く知る“記憶の海”の景色と類似しているように思えた。それが余計に彼を落ち着かせない。

「…神谷？」

不意に声をかけられて、そこに彼イチーが居た事に気付くと雪は伏せていた顔を上げ彼に向き直った。

「イチ、お前ならどうする？」

「……」
「失くしたいんだ。忘れないというより、なかった事にしてしまいたい」

「…記憶を…か？」

イチの問いかけに雪は頷く。

忘れたかったんじゃない。最初から何もなかったように綺麗に消してしまいたかっただけ。短い時間だが、彼を見ていてそう思った。

忘れるなんて都合の良い事じゃなくて、記憶自体を削除したかった。そうすることで“自分”を守りたかったように思う。自我が壊れてしまう前に…。

望んだのはこんな事じゃないはずだ。

そうだろう、」？

いつだって素直だった。

からかわれたって、馬鹿にされたっていつでも無邪気に笑って明るく振る舞っていた。不自然なほどの“前向き”さ。彼からはいつもそんな印象を受けた。

一人思案を廻らせれば木漏れ日の隙間を縫って差し込んだ日差しに、何か反射して眩しいほどの光を放つ。

「んっ」

「どっした？」

雪の様子に気が付いて彼もその光の元へと視線を向ける。そこには、やはりアレがあった。

「鍵…か？」

「…ああ」

「何を示す？」

普段は服の下に隠れているペンダントが、今はその手に載せられている。光る鍵には文字があり、反射して輝く光は何処かを指しているようにも見えた。

偶然じゃ…ないよな。

もしもこれが何もない処を指していたのなら、ただの偶然に過ぎないと見過ごすのだろうが…光は謀ったように病院の窓を照らす。同じように反射した光がチカチカと眼に届く位にはつきりと。

その光に導かれる様に、軽く息を吐き出してから雪は足を踏み出そうと一歩前を出す。その刹那。

「俺が行く」

「イチ？」

肩に触れた手に驚いて振り返れば、そこにはイチの真剣な表情が待ち受けていた。何かを悟ったように視線を合わせ頷くと、雪も一瞬目を見開いてから頷き返す。彼が言わんとしている事を察して、“頼む”と呟けば微かに笑みを浮かべたイチは、音もなく病院の方へと姿を消した。

来るのか…」。

一人その場に取り残され雪は空を見上げる。

手の平には道を示したペンダントが強く握られ、その心は複雑だ

った。

また…俺を助けたのか…？

きつく唇を噛めばそこからは鉄に似たさびた味がする。これが“生きている”証拠なのか…そう自嘲気味に笑うと、完全に人気のいなくなつた辺で彼は徐に上着を脱ぐ。上だけタンクトップにすると軽く首を動かしてニヤリと笑みを刻んだ。

「さて…探しに行きますか…」

どうみても浅い小川に彼は入って行く。

冷たい水がじめじめとした外気と相まってとても気持ちが良い。久方ぶりの感触にくすぐつたさを感じると、彼は水面を見つめその先にある場所に意識を集中させる。

「……………」

耳に届く音は水のせせらぎだけ。

その音に導かれるように彼も瞳を閉じた。

*

気が付けば草の上に寝転んでいた。

ゆらゆらと水面だと感じていたものは、どうやら木漏れ日だったらしい。だるい身体を何とか起こすとその景色にぎよっとした。

「ここ、あそこじゃないよね!？」

思いついたのは 記憶の海 あそこに良く似た景色が目前に広が

り」の頭は混乱する。見覚えのある場所。それが“海”に良く似た場所だからなのか、それとも失った記憶に係るものなのかは定かじゃない。それでも、彼はここをよく知っていた。

何で…俺。

また少し鼓動が速くなる。

周囲を見渡せば見えるのは草木だけ。時折風に揺れた葉の隙間から見える太陽に目を細めれば、その向こうに見える建物に」の背筋は凍りついた。

「っ」

思わず息をのむ。

チカチカと目の前が点滅しては消えていく光景を何度となく見つめながら、彼はのそつと立ち上がった。その足取りは軽いものではない。それでも、行く先は決まっていた。

*

ほぼ同時刻。

イチは病院の中を歩いていた。

光が示した方向におおよその見当をつけると、不審者にならない程度に周りに気を配りながら進む。生身の自分にとって人の視線は気を配る対象ではない。妙な行動を起こさない限りは他人は他人同士、詮索もなく距離を置いて付きあって行く事が出来る。それを知っているからだ。

確か、この奥は…。

病棟が変わる渡り廊下を歩きながらふと先程の場所に目をやる。何の変哲もない庭の外れに流れる水は驚くほどに澄んでいて、とても眼を引いた。

「……………」

思わずその場に佇んでいれば不意に人の気配がして振り向く。

…誰だ…。

見覚えのあるその顔に、イチは止まっていた思考を揺り起こす。真っ直ぐな瞳に長く綺麗に切り揃えられた黒髪が上品に揺れ、その人は心配そうな表情で見つめている。その刹那、視線が交わされた。

「あの…どうかしましたか？」

「……………」

「具合でも…？」

同じく黒目がちな瞳が揺れ、彼女は尋ねる。

その姿に彼と同じ面影を載せて…。

「…か。」

眼を細め自分よりも少し年上であろう女性を見る。

顔容から、その造形に至るまで男女の違いはあるうともどことなく似ている。彼女の纏う雰囲気で確信を持つと、イチは不意に女性に手を伸ばした。

「えっ…あのっ」

困惑する女性に触れると、強い耳鳴りと共に鈍い痛みが走る。
その痛みをやり過ぎイチは意識を眼の前の女性へと集中させた。

……けて…。

次第に聞こえてくる声。まるで水の波紋のように繰り返し響き、
それは徐々に音を増す。

たすけてっ……お願いっ。

触れた肌から伝わる気持オモイち、神谷が言っていた声とは彼女の事か
も知れないと瞬時に悟る。そっと離れて彼女を見れば、その瞳に困
惑の色を浮かべ警戒したように身を固くしていた。

当たり前…か。

突然の行動は不審以外の何物でもないだろう。それでも、今出来
る事をやらなければいけない。それは一人の管理官として、そして
迷える者を救うために…。

「不躺な真似をしてすみません。頬が濡れていたもので」

「えっ…？」

「泣いていたでしょう？」

イチの言葉に彼女は押し黙る。

気恥ずかしそうに自分の頬を両手で包みこみ俯くと、その素直さ
故か小さく“ありがとう”と呟いて曖昧な微笑みを向けてきた。そ
の笑顔にイチも目を細めて笑顔を返すと、一呼吸おいてから確信へ
と迫る「」についてだ。

「涙の訳を聞いても？」

「えっ…でも」

「誰かに話した方が気持ちになりますよ」

出来得るだけ親身に、それでいて押しつけがましくならない様に距離を心得て話す。“地上探索型管理官”となつてから身に付けた世渡り術だと言っても過言ではない。必要なのは“他人”という位置と、“適度な距離”そこに少しの安心が加われば殆どの人は事情を話してくれた。まるで悪徳商売にでも手を染めている気分だが、相手の負担にならない行為は悪いものではないだろう。

「…そう…ね」

不安げな瞳が揺れ、彼女は“聞いてくれる？”と寂し気に笑みを浮かべた。

水底の涙・10（後書き）

あゝ…予定通りに終わらない^^；

”記憶の海”と数を合わせようと思ったのに次・終章・にはなりそ
うもありません…；

でも、大分確信に迫ってます

そして、イチが口説いてます（笑） 完全に不審者だよ…イチ。

水に沈み彼は水底から空を見上げる。

ゆらゆらと揺らぐ水面に太陽が降り注ぎ眩しいくらいの光に目を細めた。

綺麗だな…。

澄んだ水はひんやりとして気持ちが良いのに、どうしてだろう…とても寂しくて、哀しみに満ちている気がした。何の音もなく、ただ流れる水に時折混じる哀しみの声。消え入るように小さくなる声を逃さない様に彼は深く深く潜った。

*

「コト…」

暫く歩いて行くと水のせせらぎが聞こえてくる。

胸のざわめきに引き寄せられるままに歩き、彼はその水面に自分の顔を映す。

「っ」

水面に移るは確かに自分の顔のはずなのに、その顔は悲愴に染まり今にも消えてしまいそうなほど脆い。この表情を彼は知っていた。

どうしてっ…。

本当に戻ってきてしまったのだと彼の本能が告げる。もう逃げる

事は出来ない。後ろを振り返る事も……。だってココは…。

俺が記憶を埋めた場所だから……。

その瞬間、彼は暗い記憶の淵へと落ちて行った。

*

「どっぞ」

「ココは？」

彼女に連れられてきたのは個室の病室。

全体的に“白”で整えられたその場所は、清潔というよりは物悲しく映る。色も温度もない室内はまるで死を待つ為にある部屋のような気がした。

心細いだろうに。

イチは不意に目を細める。自分ならこの部屋にいたいとは思わな
いだろう。光の指す昼間ならまだしも、一人きりで過ごす暗い夜の
部屋は何とも孤独と寂しさに溢れ怖い事だろう…と。

「っ」

室内を見回して不意に目に着いたのは同じ白の無機質なベツトに
横たわる男の姿。それは写真でしか見た事のない彼“J”だった。
実際に顔を合わせた事はない。ただ上司要さんから手渡された資料と、彼
らから洩れ聞いた話。あとは神谷の最近の記憶を盗み聞けばそれだ
けでこの死んだように横たわる男が“J”であると判断が出来た。

「弟です」

「…弟？」

「もう一月くらいかしら…眠ったまま目覚めないの」

彼女は哀しそうに呟くと、そつと眠る男の前髪を掻き上げ優しく頬を撫でる。優しく慈しむようなその表情にイチは言葉を失った。

こんなに思われているのに…。

何故彼は“迷子”になどなったのだろうか。

愛され温もりを与えられていてもなお、その心は悲鳴を上げ彷徨うのか。もしそうなのだとしたら、それはとても“贅沢”に思えた。

愛されずにいた者の痛みも知らずに…。

愛す事も、愛される事も叶わなかった彼らの思いも知らずに。チクリと痛む胸を抑え、イチはそれとなく彼女に話しかけた。

「どうして、目覚めないのですか？」

「……」

彼女はそつと目を伏せるとただ首を横に振った。

「分かりません」

「…病気とかではないのですか？」

「病気は…確かに患っています」

歯切れの悪い彼女の言葉を辛抱強く待つと、彼女は“でも”とその先を告げる。病気は治らないモノではないと。

「それはどういうことですか？」
「…先天性の病気でした」

戸惑うイチに彼女はまっすぐに見つめると、事の経緯を語り始めた。

「いや、彼の本名は“瀬名 淳一”せな じゅんいち」。

幼少の頃より素直で、明るく誰からでも好かれる少年だった。小学生からサッカーを始め、中学・高校とその青春時代をサッカーに費やし、将来を有望視されるほどの選手として育っていった。そんな楽しい毎日が続いた高校二年生の夏。それは突然にやってきた。

「つつ」

「淳一!？」

朝練に向かおうと立ち上がった瞬間、襲い来る痛み。彼は言葉もなくその場に倒れ、次に目覚めた時には白い壁に囲われた大学病院のベットの上。募る不安に、襲い来る痛み。それが、先天性の心臓の病気だと告げられた時、彼は一筋の涙を流したという。

「治りますか!？」

呆けた彼の代りにその言葉を聞いたのは、三つ上の姉。普段はほんわかとして天然を地で行くような彼女が、うるたえる事もなく医師に詰め寄ると縋るような瞳でその答えを待った。

「大丈夫…今の医学でならそうそう命を落とす事はないでしょう」
「……っ、よか…たあ」

黙ったまま俯く弟の肩を抱き、彼女は安堵に言葉を詰まらせる。

その場に崩れ落ちてしまいそうな衝動を抑え、彼に“大丈夫だって”と何度も繰り返し返す。だが、医学の進歩により高確率で助ける事が出来ると告げた医師は、同じ口で残酷な宣告をした。

「ただ、激しい運動は…」

その言葉の続きは聞かなくても分かっている。彼の心に“絶望”と言う名の暗闇が広がった瞬間だった。

窓の外を見ていた彼女が、不意に肩を震わす。

「あの子、人一倍優しいから」

「……」

「心配かけないように…いつも笑顔で振る舞ってた」

“大丈夫”、“命が助かるだけでも有り難いと思ってる”

笑顔と共に向けられたのはそんな言葉。時折一人きりの病室で俯いているのを見かける度に胸が締め付けられた。

辛くないわけがない。

本当は哀しいし、悔しいだろうに、彼はそれをひた隠しこの白い部屋で手術の日程を待つ日々を送った。

「異変に気が付いたのは、前日でした」

「異変？」

イチの言葉に彼女は小さく相槌を打つ。

手術が翌日に迫り、彼女がいつものように弟の病室を尋ねると彼は眠っていたという。気持ちが悪そうに、幸せそうに眠る顔を見ていると起こすのも忍びなくて、彼女はそのまま彼が起きるのを待

っていた。

やがて真上の辺りにいた太陽は傾き、部屋に薄暗い闇が来ても彼は眠ったまま。その様子を訝しがって声をかければ、案の定返事はない。それ以来、向けられていた笑顔が返ってくる事はなかった。

「本当に眠っているだけなんです」

「……？」

「何処にも異常はなくて、ただ本当に眠っているんです」

一月も経てば人相も変わる。

一通りの検査を受け、身体の何処にも異常は見つけられずに医師も頭を悩ませる。点滴での栄養は受けているものの、大分痩せ陽に焼けていた肌も今は嘘のように青白かった。そのまま原因も分からず彼は眠り続けているのだと言う。

「当の本人が身体を離れている以上“目覚める”ことはないだろう。」

彼が管理事務所を訪れてからどれ位が経つか。不意にそんなことを思いながら、今の状態があまり好ましくない事を悟る。身体を離れた魂は、その心は脆く傷付きやすい。その状態が一月近くも続いているというのは魂にかかる負荷も大きいはずだ。

「思案を巡らせていると彼女がぼつり呟く。」

「ずっと」

「……」

「名前を呼び続けているんですけど……」

微かに肩が震えその頬を雫が伝う。とても純粹で真っ直ぐな“思い”の涙。どうして、彼には届かなかつたのだらう。誰よりも近くで、こんなに思ってくれている人がいるのに。

「大丈夫」

「っ」

躊躇いがちにイチは口を開く。確信なんてないし、根拠を聞かれれば黙るしかない。それでも。

管理官として、人間として、“^{カレ}”を連れ戻す。

例えそこに待つものが痛みや苦しみだとしても、彼はこの思いを知るべきだ。目の前で涙を流す人の事を 知るべきだ。

触れることはしない。

自分は“管理官”で、他人だから。深く関わってはいけないから、せめて言葉を…。この言葉が少しでも貴方の心を安らげるように。

イチは意思の強い眼差しを彼女に向けて微笑むと、静かに言葉を紡いだ。

「きつと、眼を覚まします」

その一言に彼女が息をのんだのが分かった。

根拠も何もない、気休めにしかならないような“^{ひと}他人”からの言葉に彼女はフツと眼を細める。そして今度ははっきりと“ありがと”と呟いた。

水底の涙 - 終章 - (前書き)

> i 1 2 0 9 8 — 7 1 5 <

ようやく「水底の涙」も最終回を迎えました^^
長い間、ありがとうございました

水底の涙 - 終章 -

光の届かない水の底 哀しく揺れるは 一雫
誰も気づかない この痛み 吐いた嘘は泡沫に
そして 浮かぶは “記憶の欠片”

ノスタルジア管理局 水底の涙・終章

バシヤツ…

全身ずぶ濡れの状態では浅い小川に立ち尽くす。

水の中で寝転んでもここまでは濡れないだろうと言うほどの浅瀬で、いったい何が起きたのか それを知るモノはいない。この短時間で彼が行っていた事。

“海”とこの場所を繋げる事

本来ならば出来るはずの無い事を、雪はこの短時間のうちに行った。もつとも、この場所が“記憶の海”と似た雰囲気を持ち、記憶の海に通じる為に必要な力が蓄えられていたからこそ出来たのだ。それでも…雪にかかる負担は大きい。

「っはぁ」

荒い呼吸を吐きながらふらふらとした足取りで辺へと辿りつく。自力で立っているのもやつとの状態 そう言わざるを得ない程、身体は消耗は激しかった。

くそっ…手間取ったか。

予想以上に持つて行かれた力に雪は眩暈を起こす。遠のく意識に身を任せれば、倒れる身体を力強く支えられた。

「大丈夫か？」

「っ？」

閉じかけた瞼を気だるい動作でどうにか持ち上げれば、顔色一つ変えない男の顔が いや、それでも彼は心配してくれているのだろう。そこにはイチが立っていた。

「遅くなった」

「……いや」

謝罪の言葉を述べる彼に雪は支えられたまま苦笑いを浮かべる。

そして、肩を借りたまま木陰に移動すると、木に寄りかかるように身体を預けた。

「見つかったのか？」

疲労から来るまどろみに意識を手放しかけてイチの言葉にハッとすると、しつかりと頷く。水の奥深くに隠されていたモノ。Jの記憶が、彼の手には握られていた。それを凝視するように見つめてイチは徐に口を開く。

「こっちも当たりだ」

「……そうか」

要点だけを端折って伝えると、彼は口を挟む事もなく最後までた

だ聞いていた。時折目を伏せ相槌を打ち、その手は強く握られる。彼の中にどんな感情があるのかなんて分からないが、それでも結論は同じだと、そう思った。

「どうする？」

「どうも…賭けを終わらせるだけだ」

視線を合わせず告げる彼は、それでもまだどこか考えている風でイチは口を噤む。手の平にコロコロと記憶の欠片を遊ばせて、けれども彼の瞳は驚くほどに真剣だった。

何を思う…管理官・神谷 雪。

自分よりも古い管理官である彼 いや、彼女 に、イチは思いを馳せる。彼の過去は知らない。殆ど顔を合わせる機会もないが、それでも彼が優秀である事は知っていた。そして無茶をしでかす事もその瞳に宿る思いに彼がけじめをつけるのを待つ間、イチは不意に木々に隠された森の奥の方へと視線を送った。そして。

「っ」

ある事に気が付く。

人が倒れているのだ。遠目にも分かるその姿は依頼人 J 彼に他ならなかった。

「神谷、まずい事になった」

「??」

「彼が…」は限界だ」

「っ!」?

イチの言葉に慌てて振り返れば、そこに見えるは倒れている人影。霞んだ目ではその人物を特定することは出来なかったが、イチが“J”だと言うならば多分間違いないはずだ。重い身体を忘れ雪はその人影に走り寄る。

「おいつ、Jっ！！！」

うつぶせに倒れている男の身体を揺すり大声で呼び付けるが、彼からの返事はない。慌てて背中に耳を当てその音を確認する。

音はある…か。

微弱なその音に安堵の息を吐くと、雪は無理矢理に彼の身体を起こそうとした。自分よりも大きい男の身体に細い腕を絡ませて必死に力を込める。息を止めてみた処で、力が入らない彼の身体はびくともしなかった。

「さがれ、神谷」

見かねたイチが雪の肩を掴んでどくように促す。雪はそれに逆らう術もなくすつと後ろへと身体を引いた。

「…J」

仰向けに返し頬を叩きながら名前を呼ぶ。

至極冷静なイチに彼を任せ、雪はただその光景を見つめた。そして、その眉が微かに動き、眼がゆっくりと開いた。

「Jっ！？」

「……」

「分かるか？」

「…雪…さん…」

茫洋とした瞳が雪を捉え、イチへと移る。

“そついえばこいつら初対面か”などと今更気が付いて、雪は苦笑いを浮かべた。

イチは自己紹介をするでもなくJの身体を起こしてから、そつと立ち上がり雪の背後へと身を寄せた。

そつだな…もう、名乗る必要はない…か。

彼の行動の意図する事を汲み取って雪は二人の間に立ちはだかるように膝をつく、静かに差し出した手の平で“ソレ”を彼に見せる。水底で見つけた“彼の記憶”を。

「…つ」

「探し物は、コレだな」

「……」

気まずそつに逸らされた瞳に、雪は確信を持つと一つ溜息を吐く。聞きたい事は色々あった。それでも、それを聞いたら後戻りできない事を知っているから聞けないとも思った。

何がそんなに彼を追い詰め、絶望に追いやったのか。そして、記憶を自身で封じるなどという狂気をどのように行ったのか。

全ては、無言の彼が肯定している。

だから、敢えて聞く事はしない。

辛いのは、お前だからな。

俯き唇を噛みしめる“J”に、それでも残酷な結果を告げる。

“お前は賭けに負けた”のだと。
そうして、この勝負を終わりにしなければいけなかった。彼の為にも。

「勝負は決着した。終わりだ」

「っ！？…待って下さい」

「分かってるだろ？ お前の負けだ、」……いや、瀬名 淳一

「……」

名前を呼ばれ彼が息をのむ。少し意地悪かもしれないが、もうすでに札は揃ってしまった。何より、彼自信が限界なのだ。

「俺…でも」

「言っただけだ。お前が負けたら記憶を」

「管理局に居たいんですっ！！」

雪の言葉は遮られ痛いほどに彼の声が響く。その姿は必死に見えた。

「短い間だったけど、みなさんに出会えてっ……金子さんを救えて

……」

「……」

「楽しかったんです。凄く…凄く充実してた」

「……」

「だから」

「ふざけるなっ！」

」の懇願にも似た言葉を、彼の怒声が押し留める。その瞳は常よりも鋭く、またとても傷付いた色を滲ませているように思う。そんな表情をされて、二の句が継げなくなった。苛立ちを押しとどめた

雪が言葉を続ける。

「こんなに愛されて、思われて…なに逃げてんだよ？ 楽しいとか充実とかくだんないこと言うんじゃないか」

棘のある言葉に身が竦む。

唸るように「お前に何が分かる」と言われて、Jの心は軋んだ。明るくて、前向きな彼がひた隠した“痛み”がここにはある。その事実が一番、痛かった。

「お前に“管理官”になる資格はない。生きることから逃げた奴に、そんな偉そうな口、きかせない」

俯いた彼の表情は窺えない。ただ小刻みに震える肩と、強く握られた拳が彼の気持ちを伝えた。知らずJの頬を涙が伝う。その雫は落ちて…音を立てて割れた。

どうしてっ…、俺が

自由に生きられないのに、この“生命”になんの価値がある…？
怖くない…怖くない…だからっ…

呟き続けた言葉たちが今、自分の上に降り注ぐ。

自分に“平気だ”と嘘をつき続け、笑顔を作った日々はまるで昨日の事のように生々しく、そして虚しかった。こんな風になりたかったわけじゃないのに…。

「…っ…っ…っ」

その場に膝を吐いてJは泣き崩れる。

本当に怖かったのは、哀しかったのは…。

自分が何も出来なくなること…そして、消えてしまうこと。

百パーセントなんてない。高確率で助かってても、その後の生活に影響が及ぶ可能性はある。初めて直面した病気と死の事実が、彼の心を蝕んでいった。

「俺…嘘を吐いたんです」

ポツリ交わされる言葉に雪は顔を上げる。その先に移る「を見つめ、ただ黙った。

「…身体は、生命は助かってても、“選手”としての俺は死んでしまふのかも知れないって…それが怖くて…」

こみ上げる感情を、ただ病室から見える小川の流れに載せた。それが始まり。

きらきらと光る水面を見るたびに、彼はその心の不安を一つ、また一つと自分の中から消した。呪縛の様に強い、意思が成しえた自己暗示。

一人白い天井を見るたびに、目覚めない恐怖と目覚める哀しみに溺れる。そうして積み重なったモノは、彼を現世から泡沫へと彷徨させたのだ。

「気づいてました…自分がそう願ったんだって」

自嘲したように口元を歪め、彼は“でも”と呟く。

「それでも、こんな毎日が続けば良いと思ってしまった」

気付いて行きたびに、自分が壊れていく気がした。

それでも、彼らと居たいと願ってしまふ。嘘をつけば吐くほど身体からは離れ、例え元に戻る事が出来なくても…。

「姉の声は届かなかったのか？」

今まで口を噤んでいたイチが、不意に口を開く。その言葉に「は眼を見開いて“えっ…”と短く声を漏らした。

「お前の姉は、ずっと名前を呼び続けていた。毎日だ」

「…姉さん…」

「俺にも聞こえたよ。必死で“タスケテ”って叫んでた」

「……」

イチの言葉に雪も相槌を返す。

ずっと聞こえていたあの声は、「Jの姉のものであったと今なら確信を持って言える。それほどまでに強い絆や愛情に雪は触れていたのだ。気付かないはずがない。

「Jの表情が歪む。複雑に、けれども何処かスッキリとしたそんな眼をしていた。

「お前を思う人たちの処に帰れよ」

「……」

「分かってるだろ。今のお前を受け入れる事は出来ない」

雪の言葉の中に匂わされた“希望”に、「Jは眼を輝かせる。聞き間違いでなければ彼は“今の”と言ったのだ。それは、つまり…。

「はいっ」

「……分かりやすい奴」

「俺、きつとまた雪さんに会いに来ます」

苦笑いと共に雪は腕を組むと、まるで犬の様に懐くJに“はいはい”と適当な返事を返す。そして。

「契約を解除する」

「…えっ、でも」

中間管理官を挟んで交わされた“契約”を勝手に解除することは出来ない。身体を縛る呪縛は今も彼の手首に埋め込まれ、それを解く権限は“罌”にしか与えられていないはずだ。

「心配すんな。上で罌がサポートしてる」

不安そうな表情を浮かべるJに、雪は悪戯っぽい笑みを浮かべるとその手を取った。不意に伝わる温もりにJの頬が紅く染まる。初めてでもないのに、伏せられた眼に落ちる睫毛の影とか、その唇、声、その全てに目を奪われ…また、忘れたくないと願った。

「この結末を持ちて、管理官・雪と彷徨える魂。Jの契約を解除する」

鈴の様に優しく彼が言葉を告げる。

次第に遠くなる意識に、Jは身を委ねた。

「ありがとう…雪」

その眼に涙を溜め、Jは笑う。

触れていた手を不意に強く引かれ消えかかる身体を雪は強く抱きしめてくれる。突然の出来事に躊躇う余裕もなく言葉は落とされた。

「忘れるな、淳一。“死ぬ”のは怖い事だ…その怖さがあるから
人”は必死に生きようとするんだろ」

触れた身体にJは腕を回し縋る。言葉にはならなくて、感謝と憧
れと、淡い想いが涙となって彼の肩に落ちた。

雪はJが身体に戻り消えるまで、離さずにいてくれた。

優しく、そしてその心の様に強く…。

水底の涙 - 終章 - (後書き)

最終回。

如何でしたでしょうか^^??

かなり最後の方、駆け足になっちゃった気がしますが無事に終われた事に満足しています。

もう一話、「水底の涙」編のおまけ話・後日談?? - があります。

よかったらそちらも読んで下さいね

それでは、またお会いする日を楽しみに…。

ありがとうございました!!!

おまけ「水底の涙」

後日談???

彼はそこに立ち尽くしていた。

彷徨える魂“J”こと“瀬名 淳一”の身体が消え、無事に身体へと辿りつくまで…その身体たましいを抱いて。

「神谷、無事に彼は目覚めたようだ」

「…そう…か」

様子を見に行ってくれていたイチの言葉に頷くと、雪は保っていた意識を手放す。身体も心も限界を訴えていた。

「神谷っ!?!」

いつになく慌てたような彼の声を聞きながら、雪は暗い闇の淵へと沈んで行った。

*

後日、管理事務所内・管理局。

「まったく、ほんとに無茶するよね」

「……悪かった」

「謝って済む問題!?!」

「……」

常になりつつある望のお説教を受けながら、雪は身体を起こさず視線を外へと向ける。もっとも、起こさないのではなく、起こせないの間違いだが。

今回の賭けで雪が背負ったモノは大きかった。

地上と“記憶の海”を無理矢理繋いだせいで、その身体には殆ど霊力ちからが残ってなく、その上、いくら“罌”のサポートがあったからと“契約解除”なんてものまで行った。その代償は大きい。大きいのに…。

「大体、君がそこまでする必要があった!？」

「……そこまでって…」

気まずそうに逸らした視線で言い訳がましく呟けば、彼の冷たい視線が返ってくる。皆まで言わなくとも、“罌”カレが怒っている事は分かっていた。

「僕が気づいてないとでも？」

「っ」

不意に詰められた距離に、雪は身を固くする。

狭いベツトを軋ませて、上から覆いかぶさるように見下ろされれば嫌でも意識させられる。例えばここにこ微笑んでいても、髪が長くとも…彼は“男”なのだ。

文字通り“息がかかりそうな”くらい近くにいくと、その眼がスツと眇められる。常にはない冷たい雰囲気纏い、罌はそつと雪の耳元で低く呟いた。

「彼の記憶をどうしたの？」

「……どう…も」

「本当に？」

「っ」

弱い耳元に息を吹きかけられ、雪は絶句する。

身体の自由が利かない人間をこんな風に扱うなど、きつと普段の墨からは想像も出来ないだろう。

これが、こいつの正体だよ。

焦る心で悪態をつけば、それを見射ぬいたように墨が酷薄な笑みを浮かべる。その笑顔が恐ろしかった。

「まあ、いいさ。苦しむのは君だからね 雪」

スツと頬を一撫でしてから彼は身体を離す。そのことに思わず安堵の息をつけば、墨の表情が苦く染まった。

「これでも心配してるんだよ？」

「…知ってる」

彼はいつだって“仲間”を思う。

それを否定する気はない。それでも。

「間違った事をしたなんて、思っ
てないよ。俺」

真つ直ぐに墨を見つめ雪は言葉をぶつける。

そこに“揺らぎ”は感じられなかった。

成すべきことをしてきたんだね…君は。

諦めにも似た溜息を吐いて墨は立ち上がる。そのまま“お大事に”と軽く言葉を残して彼は部屋を後にした。

一人残された雪は、ただ雲ひとつない青く高い空を見つめていた

水底の涙・完

。

おまけ「水底の涙」

後日談?? (後書き)

「水底の涙」はこれで本当に終わりです^^
ココまで読んで下さった方に敬意と感謝を

次回からは新シリーズ「孤独の音」をお届けします。

「孤独の音」予告

> i 1 2 4 1 4 — 7 1 5 <

Jが「記憶管理事務所」を去って数日。
管理局は何事もなく平和に過ぎていた。依頼や迷子は度々訪れるが、それはいつもの事。振り分けられた担当によって確実に仕事をこなし、その魂をあるべき道へと還す…。
これはそんな、静かな日々が続いたある日の出来事。

どうしようもなく自分が嫌で、自分以外も、世界も、何もかもを憎んだあの時。憎悪の淵で違う存在に変わろうとしていた僕を見つけて手を差し伸べた。

僕を救ってくれたのは、君だったんだ…。

こんな感じです(笑)

メインは”壘”になります。

残念ながら「J」は登場しません 多分(。・。・)
それでも「仕方ないから、見てやるよ!」って方、お待ちしています
ます

それでは、今回は「孤独の音」でお会いしましょう^^

キャラクター設定

物語の舞台は閻魔庁にある機関の一つ、『ノスタルジア記憶管理事務所』。

人は死後、現世での記憶を持ち閻魔庁を訪れる。それは事故・寿命・自殺いずれによっても同じように扱われ、水先案内人により川を渡りて辿り着く。

その後、現世での行いを裁判官ならぬ、閻魔大王様に裁かれ行き先を決められる。

その過程で、時折記憶を落としたり、紛失する人間が稀にいる。そういう奴の面倒をみるのが『記憶管理事務所』内「管理局」の仕事。

ちなみに『記憶』は英語で「メモリー」、『ノスタルジア』は「郷愁」という意味なのです。

本来「記憶管理局」にするのなら「メモリー管理局」とするべきなのかも知れませんが、敢えてこの話では、郷愁という意味の『ノスタルジア管理局』とさせて頂いています。誤解なきように・・・。

『郷愁』 過去のモノや失われたモノを懐かしく思う気持ち。

「ノスタルジア」の方があってますよね・・・。

登場人物一覧

> i 1 4 2 9 3 — 7 1 5 <

挿絵挿入しました！！

ノスタルジア管理局

【管理官】

・神谷かみや 雪せつ イラスト中央の銀髪。

年齢不詳。生死不明。空間移動管理官（空移官）として、「記憶の海」などに入入りする。

管理官の中では古株で、謎も多い人物。

首にはコードネーム入りのペンダントキーを下けているが、何処の鍵なのかは誰も知らない。

口が悪く、どちらかと言えば短気だが、面倒見は良い。

・**驅城 罌** 同じく左から三番目。長髪。

雪と同じく年齢不詳。生死不明。

『中間管理官』として、閻魔庁と管理事務所を行き来している。

その実、水先案内人としても動く事があるとか……。

いつもニコニコ穏やかな彼は、実はかなり暗い過去の持ち主。お姫様カットの長い髪にも理由が。

以前、雪とコンビを組んでいた事があるが……。

・**J** (ジエイ) 中央(雪)の右側。

『水底の涙』の主人公。

記憶を失っている為、名前・年齢などが不明。辿り着いた先は「ノスタルジア管理局」だった。

自分の記憶を探すため、一時期「雪」のもとで「空移官」として行動を共にしていたが雪との賭けに敗れ現世へと戻ることへ。本名は”瀬名 淳一”

基本的に明るくて、素直。どちらかといえば犬であり、やられキヤラ(笑)

・**綾瀬 雀** 一番右端。

推定19歳。生死不明。双子の片割れ。

『情報探索方管理官(情探索)』として、局内の情報は全て彼が管理している。

コンピューターおたくな感じで、基本的に他人に興味がない。雪とはよく喧嘩するものの、仲はいい。

『記憶の海』へ通じる「回路」を開くのも彼の仕事。

・綾瀬 狐 右から二番目。

推定19歳。生死不明。双子片割れ。

雪と同じ『空間移』として、動く。

口数は極端に少なく、また言葉は端的なモノの為誤解される事も多々。人に馴染めないだけで、普通の女の子と変わらない。基本的に雀とコンビを組む。

・加藤 一喜 中央(雪)の左隣。

18歳。現役高校生として暮らしている。唯一生死の分かっている存在。

生身の彼は『地上方探索官』として、普段は地上に落ちている記憶の欠片を探したり情報を集めたりしている。

「管理局」にはたまにしか訪れない。

生真面目で、固い感じの男だが……。

・水谷 聡 左から四人目。

推定年齢10歳。時折管理局に現れては“助言”や“お節介”をしていく。

普段は何処にいるのか、それを知る人物は少ない……。

素直で優しい少年である時は“聡”、皮肉屋で腹黒い感じの悪い時は“暁”と二つの人格が共存している不思議な人物。

時間屋

【タイムキーパー】

・スギ 左から二番目。緑のセーター。

年齢不詳。本名も謎。時の狭間に漂い、“海”と現世の扉を守る者。

小さい体つきながらも風を自在に操り、その能力は高い。パートナーの“凌”とは古くからの付き合いのようだが……。

管理官の雪とは相対する存在ながら、実は似た者同士である。

・凌トシハシ 一番左端。

年齢不詳。本名も謎。

スギと同じく時の管理者で、扉を守る者の一人。

寡黙で冷たい印象を受けるが、その実優しく面倒見の良い男。

スギの暴走をサポートし、ラヴィと繋がる人物。

・ラヴィ 右から三番目。

推定年齢10歳位。

不思議な存在で、いつも”海”の中に留まっている。

時間屋の二人と行動を共にすることも多く、愛くるしい姿は見る者の心を優しくする。

言葉を発さないのではなく、発せない理由があるようだが…。

時間屋の凌と繋がっている。

【管理事務所】

・霧生きりゆう 要かなめ

推定25〜7歳位。死亡済。

管理事務所、及び管理局の『最高責任者』。

ふらふらと一処に留まらず・・・神出鬼没でふざけた男。(雪、

曰く)

煙草を吸っている事が多い。閻魔庁に出入りすることもしばしば・・・。

・遊樹 (あそつ)

24歳位。女性。

要の『秘書』であり、依頼を持ってくる『案内人』。

若さの割にやり手で、要がいなくてもスムーズに依頼がこなされ

るのは彼女のおかげ。

実は「閻魔庁」出身だったりする……。

・月代 つきしろ 椿姫 つばき

27歳。 霊体。

元『空移官』だった女性。雪や要同様古株で、唯一雪達の過去を知る人物。

現在、閻魔庁に勤務している。男っぽい。

【その他】

・記憶の海 きおくのうみ

人々の脳に繋がる壮大な海であり、宇宙。

全ての人の脳や記憶は繋がっている（……そう考えて出来たモノ）。

管理局ではPCを媒体に出入りしているが、別の行き方も存在する。

誰もが入れる訳ではなく、生身の人間では身体に支障を来す恐れあり。また、霊体でも精神に異常を来したり、精神干渉は避けられないとか……。

本体は『閻魔庁』が管理している。

実は、この『記憶の海』こそがこの話の『鍵』となる……。

以前のキャラ紹介を挿絵入りで再編集しました。

時間屋のメンバーも加わり、少しはイメージを持って頂けるかと思えます^^；

逆にイメージが壊れたらすみません…。

まだ登場していないキャラもいますが、今後登場していきますので温かく見守ってやって下さい^^

そして、紹介していないキャラもいますが…（雷とか、戒人とか

…)

また機会があれば紹介します(笑)

あんまり紹介いれると、ネタばれしちゃうので…^^;

それでは、引き続き”ノスタルジア管理局シリーズ”をお楽しみ
ください

孤独の音・序章・

Jが「記憶管理事務所」を去って数日。

管理局は何事もなく平和に過ぎていた。依頼や迷子は度々訪れるが、それはいつもの事。振り分けられた担当によって確実に仕事をこなし、その魂をあるべき道へと還す…。

これはそんな、静かな日々が続いたある日の出来事だった。

ノスタルジア管理局へ孤独の音へ

「せーつ、雪！？」

いつもの朝が今日もまたやってくる。

呼び声の主は探す人物の居場所が分かっているのに声をかけるし、彼は彼で返事をするでもなくただ空を見上げていた。青い空が見渡せる明るい屋上に寝転んで…。

「雪っ」

「お〜」

「“お〜” じゃないよ、まったく」

彼は呆れたように溜息をつくど、いつもと違う雪の様子に些か眉を顰める。何処か具合が悪そうな青い顔をした彼は呼びかけに顔を上げるでもなく気だるそうな溜息を一つ吐く。その溜息に墨は更に表情を歪めた。

「どうかしたの？」

「……何が」

「何がつて、顔色悪いよ」

心配して聞いたつもりが、どうも様子がおかしい。心配されるのが嫌ならば、言葉の一つも返して無理にでも笑顔をつくるはずの彼が、今日は左腕で顔を隠すのみだ。明らかに覇気がない。何があったのだろうか…。

おかしい……あつ。

起き上がらない彼の姿に墨は頭を悩ませるが、ようやく一つの事に思い当たる。

多分、この考えは正しい…。

「もしかして、彼のせい？」

墨のその言葉に、雪の肩がピクッと反応する。どうやら図星らしい。少しだけ笑いたくなる衝動を抑え、墨はそっと彼の隣に腰を落ち着けた。

「苦しいの？」

「……」

顔を覆う左腕の上から覗き込むと、そっと声をかける。勿論返事はない。こういう時の彼はうんともすんとも言わないでただ小さく溜息をつくばかりだ…。

仕方のない子だね…。

不意に苦笑いを刻むと、墨はそっと眼を細める。

雪は彷徨える魂だった彼 瀬名 淳一（コードネームJ） を救うために賭けをした。管理官として前例のない無謀な賭け。勿論彼

はその賭けに勝ち、負けたJは現実世界 肉体 へと戻る事になつたわけだが、雪はJを地上に戻す時にあることを行った。

記憶の欠片を取り除く…自らの体内に取り込む呪法^{まじない}。

本来ならば禁忌とされるこの呪法は彼だからこそ出来たものであり、また彼が決めた事だからこそ墨は黙認した。管理官の補佐役であり目付役でもある“中間管理官” 閻魔庁と管理事務所、その二つを行き来し管理官の行いを閻魔庁に密告することも仕事のひとつとされている。今回の彼の行いは密告に値するもの…けれども、墨はそれをしなかった。他ならぬ 雪 の為に。

「雪、胸を貸そうか？」

苦しそうに溜息を繰り返す雪に、墨は救いの手を差し伸べる。彼がJから取り除いた欠片の名は“恐怖”と“痛み”。記憶はパズルの様なもの…欠片が一つなくなればその人物を形成するであろう情報が減る事に繋がる。それはあまり好ましいものではない。例え必要のない記憶でも欠けてしまうよりは揃う方がいい。だから…。

「…いかない」

「…素直じゃないね」

「……………」

雪はその取り除いた欠片の代りに、まだ何にも染まっていないまっ白な欠片を残した。

これでJは恐怖も痛みも持たずに病気に立ち向かい、日々を過ごす事が出来るであろう…その代償を雪に背負わせて。

個人的には許せないんだけどね…。

知らず溜息が零れる。

雪がこんな風に苦しんでいるのは見たくない…。これは個人的な感情で“中間管理官”としては正しくないことだと分かっているからあえて口にはしない。それでも、いつだって彼を心配している…。

キミは気付いていないかも知れないけど…。

そんなことを知る由もない彼は、今も煮え切らない感情の波に押しされた短い溜息を漏らす。少し乱暴な気がしたが、罍はその身体を無理矢理に起こすと不意に抱きしめた。

「なっ
」

「……………」

「罍っ!?!」

「黙ってて」

慌てて身体を離そうとする雪の頭を肩口へのせ、悪戯っぽくその耳に囁く。まるで艶事のように甘い声で…。

> i 1 5 4 1 8 — 7 1 5 <

「…おっ前」

諦めにも似た眩きが溜息にのって溶けた。

それきり彼は抵抗するのをやめ、眼を伏せる…感情の波に押し流されない様にきつく罍の背中を抱いて…。

ホント、もう少し“自分”の事を省みてくれれば良いのに…。

大人しくなった雪の頭を撫で、息をつく。微かに聞こえた“サン

クス”の言葉にさえ望は自嘲の笑みを浮かべた。

あの時、僕を助けてくれたのは君なんだよ。雪。

どうしようもなく自分が嫌で、自分以外も、世界も、何もかもを憎んだあの時。憎悪の淵で違う存在に変わろうとしていた僕を見つけて手を差し伸べた。

君たちが、今の僕を生かしたんだ…。

孤独の音・序章・（後書き）

ようやく新シリーズ開始です。

今回は”墨”の過去編パート1になります。

」は出てきません。

代わりに変な性格の悪いのが出てきます（。・。・）
それでも良ければ見てやって下さい。

孤独の音〈1-1〉

憎い。哀しい。痛い。もう死にたい…。

冷たい夜風が頬を撫でる頃、彼は何処にも行けずに途方に暮れていた。

手には血のついた刃物が握られ、衣服は血と泥と汗でドロドロに汚れている。涙は不思議と出て来なかった。

「はあはあはあ…っ」

乱れる呼吸をなんとか続け、精一杯空気を吸い込むと喉の奥で変な音がする。“ヒュッ”とその音と共に酸素が肺に入り込むと、その勢いに咳き込んだ。

「ゲホッ、ゴホッ…ハッ…うう…」

まるで獣か何かのように言葉にならない呻きを漏らし彼は人知れず逃げ込んだ森の中で座り込んだ。辺りは暗く、人通りはない。この辺りは有名な心霊スポットで、自殺の名所としても知られている。地元の人でも余程のモノ好きじゃない限り“夜”に来ようは思わないだろう…。今の自分には好都合な場所だった。

「ごめん…」。

肩を激しく上下させ彼は息を吸う。

首にはあの男につけられた指の痕が今もくつきりと残っている。絞められた時のその感触までである。なんとも気持ちの悪いものだった。

ふと頭上を見上げれば、生い茂った木々の間からまん丸いお月さまが顔を覗かせていた。その月明りは、今の彼を際立たせる。紅く染まったその顔までも。

後悔なんてしない…。

今更、そんなことをしてもどうにかなるものではない。このままあの男への憎しみを抱いて命尽きた方が、潔いように思えた。

どうか…幸せに…。

ただ一つ願うのは、守りたかった人の幸せ。

それが叶うのならば、この命を、ちっぽけな自分という存在を、捨てた意味がある。少なくとも 無駄死 ではないと思えた。

いいさっ、道連れでも…。

もう殆ど力の入らない手を見つめ、彼はそつと微笑む。それはいつもの彼と何ら違いの無い穏やかで優しい笑顔だった。

もうすぐ、僕は死ぬだろう…。

そんなことを思いながら胸を上下させる。意識は次第に朦朧とし、眼も霞んでいく。それでも良かった。彼は全てに“満足”していた。それなのに。

『死ぬのか…？』

不意に声が聞こえる。

誰か来たのかと重く沈んでいた意識を必死に浮上させ、彼はもう

殆ど見えなくなってしまうた眼を開いた。

誰…？誰か…いるの。

月の光を雲が覆えば闇は一層その濃さを増し、森の闇に紛れるようにそれは揺らぎ姿を現した。長身に細身、けれども猫背の不思議な姿をした人、らしきモノが立っている。月の灯りもなく視力も殆ど失いかけたこの眼で、その表情が哀しそうなんてどうして思っただらうか…。

『死んでしまうのか…？』

闇の中、彼は再度問いかける。それは耳に聞こえる言葉では無かった。耳はとうに音を感じられなくなっている…だからこれは脳に直接響いているのだと思う。

哀しい…の？

雲が流れ、月が姿を現す。その灯りは眼の前にいる彼の顔を浮かび上がらせた。黒い服に黒い髪、鼻から下の部分は黒い布で覆われ、僅かに覗く肌は青白いというよりは僅かに紫がかって見えた。考える事を止めていた脳を揺り起こすその紅い瞳に、彼は思わず問い返す。表情の見えないそのマスクの下で相手が息をのんだのが分かった。

大丈夫…。

彼はもう一度呟いて、そっとその紅く染まった顔に笑みを浮かべる。いつしか苦しかった呼吸は落ち着き、あと何度呼吸が出来るだろうという処だ…。

不思議と辺りには静寂のみがあり、怖いとか痛いとかそういう感情もない。なんとなく誰かに看取って貰える事がくすぐったくて、彼はフツと眼を細めた。その時…。

「いたのか」

遠くの方から誰かが駆け寄ってくるのが見える。

言葉は分からなかったけれど、その誰かは自分のことを見ると怪訝そうに眉根を寄せた。なんとも綺麗な顔立ちをした少年だった。

こんなところに…子供が…？

なんとも似合わない少年に彼は苦笑いを浮かべる…。そして、意識はそこで途絶えた。

孤独の音へ1・1（後書き）

ようやく本編突入です。

墨の謎多き過去。

多分、暗い話になる…？かも知れません。

序章に引き続き、墨自身の回想的な感じでお送りします。

孤独の音へ1-2

暗い暗い道をゆらゆらと浮かんでいる。

正確には誰かの腕に抱かれ、どこかへと運ばれていた。

それがどこか…そんなこと知る由もなくて、重く沈む意識の淵でただ漠然と“僕は死んだのかな…”なんて人ごとのように思っていた…。

不意に頬を風が掠めていく。

その気配に驚いて彼は閉じていた眼を開けた。

「…っつ！？」

視界に広がるは水面と満開の花々と、そして手の届きそうな位置にある低い空。辺りには風に巻き上げられた花弁が踊り、そっと水面に波紋を写した。

「…っつは…」

そう呟いた自分の言葉に驚く。

先程までは確かに耳も聞こえず、声を出す事も叶わなかったはずなのに…。それが今は何事もなかったかのように行える。その事実が怖かった。

「気づいたか」

「…っつ？」

背後の方で聞こえた声に、彼は振り向く。

その様子は慌てるでも、動揺するでもなく冷静で落ち着いていた。

「ようやく眼を覚ましたか」

声の主に視線をやると、まるで公園のように開けた場所がある。揺れる木々、葉の隙間から洩れる木漏れ日。そしてその木陰のベンチには、あの時最期の一瞬に見た場違いな少年の姿があった。綺麗な黒髪を風になびかせた美少年ともいえる面立ちに、伏せ眼がちな冷たい瞳、少し酷薄な笑みを刻む唇。彼からは冷めた印象しか受けられない。そしてその傍らには、同じ顔をした人物がもう一人。こちらは意思を映さない瞳に、長い銀髪を緩やかに遊ばせ、なんとも印象に残らない感じの子供だった。

「君たちは？」

彼は尋ねる。

その言葉に、酷薄な笑みを刻んだ少年がフツと眼を細めた。まるで軽蔑するように…。

「名乗りは自分から…だろうか？」

「あつ…」

なんとも億劫そうに少年は告げる。

確かに“人に名前を尋ねる時は、自分から名乗るものだ”なんてよく言うけれど、少年の言い方には抵抗がある。もう少し言葉を選んだほうがいい。むしろ“愛想”というモノを学んだほうがいいのではないかと、お節介ながらも思ってしまう。

僕の方が年上だよね…。

相手はどう見ても 幼い少年。それに引き換え自分は中学を今年

卒業する身分だ。

もっとも生きていたらだけれど…。

得体の知れない相手に名乗る事に少々気が引けるが、名乗らなければ話が先に進まない気がする。なぜなら眼の前の少年はそれ以上の会話をするでもなく興味も薄そうに傍らの長い銀色の髪を弄んでいるのだから…。

「僕は駆城 瑠衣…君は？」

渋々、けれども少しだけ微笑みを向けると瑠衣は名乗る。そして少年の言葉を待った。

「ライだ」

視線を向ける事もなく、微笑み返す事もなく、彼 ライ はただ傍らの人物に視線を向けたまま応える。愛想もへつたくれもない、なんて礼儀のない子供だろう…。瑠衣は思わずそんなことを考えた。そして、それを見透かすように少年は鼻先で笑う。

「お前は馬鹿か？」

「っ!？」

「可笑しくもないのに笑い、自分を繕い何になる」

「何って」

「自分を誤魔化すつもりなら、こんなところに来るな」

瑠衣に反論の余地を与えずに、ライはけたたましく捲し立てる。

一体彼の何処にこんなに言葉が詰まっていたのか…そう思えるほど彼の口は雄弁だった。

何が…言いたい？

瑠衣は躊躇いながらも彼の言葉の意味を探る。冷たい眼差しが真っ直ぐに向けられ、見られているという事実が、胸の鼓動を速める…彼が危険な存在に思えた。そして…。

「まあいい。とにかくお前の身柄は預かる。それが奴の願いだ」
「奴って…？」

分からない事ばかり言う彼に対し、瑠衣は怪訝そうな表情で尋ね返す。一体何の話をしているのか…出来る事ならばきちんとした説明が欲しい。生憎、それは叶いそうにないが…。

「話は本人に聞け。もっとも、見えたらの話だがな」

癪に障る口調に瑠衣は思わずムツとなる。どうしてこう頭にくる言い方をするのだろうか。隣に座るもう一人の人物は口を開く気配もなく、ただ遠くを見つめている。その様子に同じように辺りに視線を彷徨わせた。

ここは何処？

見た事もない景色に、見た事もない場所。
知っているモノは何一つないのに、不思議と“怖い”とは思わなかった。

僕はココを知ってる？

心が落ち着く感覚。

安心して眠れる場所に出会えたような安定感。不意に涙が一筋頬を伝う。

「何故泣く」

「えっ…?」

「何が哀しい?」

ライの顔を見ると、彼はとても不思議そうに眼を細めている。自分の頬に流れる滴を拭い溜衣も自分に問いかけた。何故泣いているのかと…。

涙なんて必要ないのに…。

今も鮮明に思い出せるは“紅い記憶”。

憎しみと怒りと、大切な人を守りたい一心で行った罪。それが頭の中から離れない。あれは現実で、この手は紅く血ぬられて…。

僕は汚い…。

いつの間にか綺麗になっていた手や服、顔にあれが現実の事だと証明するものはない。まるで嫌な夢でも見ていたのではないかと錯覚するほどに、今が穏やかだった。

でも、事実を変えられない。

胸に重くのしかかるこの気持は変わらない。充実感も失くしたくはない。それが“罪”なのだとしても…。

「好きにすればいい」

まるで心を読み取ったようにライが口の端を上げる。その視線は下に落とされているが、言葉は瑠衣に向けられたものに違いなかった。その事に少しだけ眼を丸くする。

初めて彼に微笑まれたのだ。その意外な事実は瑠衣を驚かせるのに十分だった。

「…ありがとう」

「…っ？」

「……」

「…礼を言われる筋合いはない」

ライが伐が悪そうに眉根を寄せる。不機嫌を思わせるようなその表情は、彼なりの照れ隠しなのだ。と知るのに、時間はそうかからなかった。

不思議な少年　ライ　と、不思議な空間が、瑠衣を優しく包みこんでいた。

孤独の音へ1・2〈（後書き）

性格悪いのが登場です（笑） えっ？

ようやく、この話の鍵になる人物”ライ”が登場しました。

…ほんとに救いようの無い”腹黒さ”！！！！

墨の名前も”瑠衣”表記になってますが、これが彼の本当の名前に
なります^^

まだまだ序の口な出だしですが、頑張ります^^；

孤独の音〈1・3〉

その場所は、静寂と悲しみに包まれている。

自然に囲まれ聞こえるのは森の木々の揺れる音と、水の流れる微かな音。この頃の僕には、ここがとても懐かしい 楽園 のように思えた…。

「ライ、ちゃんと説明してよ!？」

「……」

「ライっ!」

「くどい」

狭い空間で罍は彼の背中を追う。

どうしてそんなに口を閉ざそうとするのか、何か秘密にしなければならぬ訳でもあるのかと思いつつ朝から追い回しているのだが、その理由は一向に分かりそうにない。

なんで逃げるかな。

何度も辺りを行ったり来たりしては、彼は手にした本の頁を捲る。これだけ歩きまわっても読みたい本の内容とは一体何なのか、だんだんソレも気になってきた…。

今日こそ教えて貰わないと。

ここに連れて来られてから三日。正しくは、もうすでに三日は経っているはずなのだ。

断言が出来ないのは、ここには“季節”とか“時間”という概念がないから…。

暑さも寒さも感じないし、月や太陽というものもあるようでない世界。勝手に連れてきた癖に、この辺の事にまで何の説明もないのはさすがに堪える。連れて来られた意味も、帰り方も分からない。それこそ自分が“生きてる”のかさえ瑠衣に知る由はないのだ。

「ライ！」

少し前に行く彼の肩を掴みその足を止める…だけのつもりだった。彼が予想以上に軽くなければ…。

ドサツ

不意に右肩に走った痛みには彼はその顔を歪める。手にしていた本を地面に落とすと短く息を詰めた。そして…。

「…痛」

「ごめんっ」

片方の膝を地面につくと、彼は左手で肩口を抑える。その額には微かに汗が滲み何かに耐えるようにぐっくと唇を噛みしめていた。瑠衣は慌てて謝ると彼の隣に膝をつく…その手をライはゆっくり払いのけた。

「触るなっ」

「でも」

「良いから」

「……」

そっと瑠衣の身体を押し留めライはふらふらと立ち上がる。地面には落とされたままの本が無残にもそのページに筋をつけ、薄汚れ

ている。彼は本の事など少しも気に留めない様子でそのまま足を進めた。

あれっ、良いのかな…。

立ち去ろうとする背中と本を交互に見つめ、瑠衣は音もなくその本を拾い上げた。古く薄汚れた表紙の本を。

“記憶”と“脳”の関係…??

外装についた汚れを払い筋が残ってしまった頁を元に戻そうとその手を動かす。そこには難しそうな言葉の羅列と共に図式やイラストで描き表された文章がぎっしりと並べられていた。勿論、中学生である瑠衣に理解できるものではない。それどころか、偉い学者や博士号を持った教授クラスが読むであろうモノのように思えた。本当にこんなものを彼は読んでいたのだろうか…。

「おい」

「…!?!」

声に気付いて顔を上げればそこには先ほどよりも不機嫌そうな彼の顔が待っている。眉根は寄せられ上から見下ろされた瞳はとても冷やかだ。どうみても弁解は聞き入れてくれそうにない。諦めて手にした本を素早く閉じるとスツと彼の前に差し出した。

「……ごめん」

言葉少なに頭を下げると頭上から微かな溜息が降る。呆れとも諦めとも取れる溜息だった。

「刻限か……」

小さく呟かれた言葉に瑠衣の心臓が跳ねる。その言葉の意味など知らないのに、身体はそれを知るように小刻みに震えだした。

何…これ…。

身体の奥、心臓とは違う場所が大きく脈打つ。

ざわざわと波風を立て、まるで自身を変えてしまいたいそうほどの衝撃 痛い様な、むず痒いような それが全身を駆け上る。こんな
の知らない。

「あっ…うっ…うっ」

口からは言葉にならない何かが呻きに変わり、瑠衣はその場に両膝をついて蹲った。彼はただ上からその様子を見ている。

瑠衣の中の何かが、大きく変わろうとしていた。

身体の内側から悲鳴を上げ、瑠衣はただその場に蹲る。呼吸を忘れてしまいたいそうなほどの衝撃に僅かながらに息を継ぎながら、言葉通り死ぬほどの痛みと恐怖を味わう。これが彼の侵した“罪”に対する“罰”ならば、喜んで受け入れたかも知れない。だが…。

な…につ、これ…。

理由の分からない苦痛など、拷問と変わらない。拷問でさえ理由があると言えるだろう。ではこれは？ そう問われて答えられる人などいるのだろうか。もつとも、目の前に立ちふさがる彼 ライ以外にその答えを持ち合わせている人物など思いつかないが。

「らっ…いつ」

「…黙れ。舌を噛むぞ」

「っかはっ…」

彼の言葉と共に激痛の波が押し寄せ、背骨が軋み、まるで何もかもが消えていくような感覚。身体の皮膚を剥がされ、爪も、声さえも奪われて行く気がした。意識が遠のく…。

二度も死ぬ瞬間を味わう事になるとは思わなかった。皮肉なことだ。

頭の隅で僅かながらにそう思ったものの、次の瞬間には辺りは混沌に満ちていった…。

眼前でうつぶせに倒れ意識を失くした瑠衣の顔を、ライは遠巻きに眺める。自分よりも少し年上に見えるその顔にはまだあどけなさが残り、少し寄せられた眉根には苦渋と悔恨が垣間見えた。

本当は全て分かっている。

いや、“知っている”と言った方が正しいのかもしれない。

彼に何が起こったのか…。彼がどうしてここに迷い込んだのか…。そして。

本当は“優しい”癖に…。

彼が必死で守ろうとした者の為に、自分自身を犠牲にした事も。こんな馬鹿でお人好しな奴は初めてだった。だから放っておけなかった。

本当なら“閻魔の審判”を受ける身なのに。

“閻魔の審判”

いわゆる死んでから受ける“最期の審判”の事だ。生きてきた間の人生を、その善悪を見極められ往く道を決められる。逆らう術はない。逃れる事も出来ない。普通なら。

不意に背後に人の気配を感じ、ライはその思考を故意に停止させると一瞬で冷たい気配を身にまとった。

「雷らい」

「…要か」

「どうする気だ？」

見知った人物の登場に、ライはその緊張を解く。

「霧生きりゆう 要かなめ」、古い付き合いのある男。完全に信用しているわけではないが、このセカイの中では信じていい相手だと言える。もともと“信用”なんて言葉はあまりにも不確かで好きになれないのだが…。

要の言葉を耳半分で聞き流すと、彼からこれ見よがしな溜息が洩れる。それを気に留めるでもなく鼻先で嘲笑うとライは溜衣の横に膝をついた。

「……………」

スツと首にかかる髪を払い、その細い首に刻まれた怨みの痕 刻印 に触れる。人の念がこもっているモノは消えない…。傷は塞がるかも知れないが“痕”が残る。身体にも、心にも…。

これだけは消せない…か。

「雷、何を企む？」

「…何も」

「何を望む？」

「……しつこいぞ」

彼から浴びせられる質問にうんざりしながらライは瑠衣の身体を持ち上げようと、彼の腕に自分の身体を忍ばせる。軽そうに見える彼を運ぶなど、自分一人でも十分だ…とでも言いたげに。

「っ」

「雷」

「っっ!?!」

「らくいゝさん？」

「っっ!?!」

今にも共倒れしそうな負けず嫌いの彼に、要は仕方なく助け船を出す。第一に、自分より身長も体重もある男の子を担ごうなんて言うのが無理な訳で…。

「よっ …と」

「要っ、余計な事をするな！」

「…お前ねえ…」

「手を離せ!」

「……」

息を切らしながらも彼は顔だけを向けて凄む…。

少し紅潮した頬で睨まれた処で効果のほどは期待しないで欲しい。そんな彼に苦笑いだけ返すと有無を言わずライの身体から少年を奪い取り、要は軽々と横に抱く。この年の少年にしては育ちが悪く、そこらへんの少女たちよりも軽く思えた。

「お前が倒れたら、この子まで巻き添え食うだろ」

「つつ!?!」

「…人命救助。オーケー?」

ワザとらしく上から目線で言うと、ライは少しだけ唇を噛み俯いた。その左手が拳を作り小刻みに震えている…なんて気付く奴はそっけないだろう。

ほんつと、負けず嫌い。

大人びた彼の子供な一面。

こっぴどい処を見ると、我ながらホッとさせられる。普通の子供と変わらない。それがとても大きな事に思えた。

「んで、どこに運ぶよ?」

「……」

「黙るなよ。結構重いんだぜ?」

「……祭壇へ」

悪戯っぽく笑みを浮かべると、漸くライが眼を合わせる。そしてその口は躊躇いもなく彼の行先を告げた 地下祭壇…生まれ変わりと、永遠の安らぎを得る場所を。

「…了解」

その一言でライの考えを読み取ると、二人は足取りも重く地下へと歩き出した。

その腕に彼を抱いて…。

孤独の音へ1・3〈（後書き）

こんばんわ。

手探り状態で書き進めております”墨の過去編1”^^^;
もう暫くこんな古い感じの場面にお付き合いください><

もうすぐ現実に戻りますので／。□／（）／□。（）／

孤独の音〈1-4〉

名前を呼ばれ、その声に振り向く。

振り向いたつもりだった。

そこにあるのが暗闇でなければ、確かにそこには誰かが居てその声の主を知る事が出来たはずなのに…もう前も後も分からない。

ただの闇。

けれども、どこか“絶望”に似ていた。

力…ヲ望むか…？

聞こえた声は低く掠れ、そしてとても哀しそうだった。何処かで聞いた事のある声。知る筈はないのに、知らない誰かの声なのに、何故だか“懐かしい”と思う。

「ちから…？」

望むのか…

声は耳の奥で反響する。

木霊の様に繰り返しては、その度に哀しさは増して行った。どうして、そんな声で語りかけるのか…胸は締め付けられるように痛み軋む。胸を侵食するように広がって行くこの痛みは何なのだろう。

「僕は…そんなもの…いらない」

力なんていらぬ。望まぬ。

もう、何も望まぬ。

不意に声は止む。

同時に闇はゆらりと歪み、蜃気楼のようにかき消えた。

望メ。

望ンデくれ……瑠……イ。

自分の身体が存在するのかさえ分からない空間の中、自分のものとは違う温もりに触れる。微かに香る白檀は優しく、背後から抱きすくめられているような感覚に惑う。そして瑠衣は漸く自分が眼を閉じていた事を知った。

醜いものを見なくて済むように……。

る……イ。

瑠衣……イキテ……望メ。

終わりのない闇の中で、その声だけがとても静かで優しくかった。

瑠衣はそっと目を開ける。

それでも眼の前に広がるのは“暗闇” いや、違う。限りなく闇に近い濃紺……もしくは紫と言った処だろうか。まるで海の中にもいるように時折浮かぶ水泡には、鏡のように自分の顔が映り、けれども自分の顔の筈なのに酷く歪んでいた。

「ここは何処……」

小さく呟いた言葉は聞こえない。声にはならず闇に溶けた。

不意に目の前に現れた水泡に手を伸ばし触れると、映っていた己の顔が酷薄な笑みを浮かべる。その顔は憎悪と血の紅にまみれ恍惚とした笑顔を見せた。

……ズット死ンデホシカッタ……。

「　っ!？」

唇だけがゆっくりと言葉を紡ぎ、その言葉に瑠衣は息をのむ。直視できずに視線を逸らせば、目の前の自分が更にその笑みを深く刻んだ。面白そうに細められた眼に映るのは罪悪感に苛まれる己の姿。

オマエガ…殺シタ…。

心に刃物を突き立てられたような衝撃が走る。ズシリと重く、そして冷たい感情が瑠衣の心を侵食すれば、そこに残るモノは“絶望”でしかない。自分が犯した罪の重さと、それ故に起こる感情の昂りの狭間で心は揺れていた。

「僕が…殺した」

今でも残る感触。

冷たく硬い刃物を掴み、それを肉の間から引きぬいた瞬間に噴き出た　自分のものと違わない　血液。顔にかかるその飛沫が気持ち悪くて、その血を拭おうとした。その手が紅く染まっているとも知らずに　。

鮮明に浮かび上がる記憶に腹の底から湧きあがる憎悪を覚え瑠衣は眉を顰める。

本当は、全てが消えてなくなればいいと思った。こんな自分を生み出した世界も、見て見ぬふりを続ける他人も、そして何より自身が一番汚く思えた……手も足も出せずに回された歯車がどうしようもなく憎かった。

生きることとは、とても哀しかった　。

地下の奥深く、それは存在^あった。

一際高い天井に空から差し込む光…一面に咲き乱れる花、そして綺麗な水路の先に“祭壇”と呼ばれるに相応しい場所がある。そこはなんとも不思議な場所だった。

長い事過ごしてきたこの場所にも、まだ分からない事は多い。嘆き、哀しみ、憎しみ、哀れみ…色々な感情が交差を繰り返し、また同じ速度で浄化されて行く。

その過程を少年はずっと見つめてきた。

祭壇に寝かせた彼の横で、ライはただ静かに本の続きを読む。パラパラと頁を捲る手は速く、視線は左から右へと流れる。時折苦しそうな声を漏らす彼に視線を落としては溜息を吐いて、また本へと視線を戻した。

抗え…溜衣。

例えその先にあるモノが暗く辛い運命だとしても…“生きる”ことを諦めないで欲しかった。どこかに光があるのだと、彼にはそう信じていて欲しい。

俺に見えない“光”を見つけてくれ…。

俺にはもう世界が“闇”にしか見えないから。

天も地も、神も閻魔も、全てが狂ったこの世界に生きる意味があるのだろうか。守るべきものはあるのだろうか。何の意味もないこの命でさえ利用され、彼らは嘲笑う。

この地に眠る彼らの死を悼むものはいない。その命の尊さを知る者も…。

全てが…手遅れなのかもしれない。

それでもこの手に掴めるものくらいは守りたいと思った。だから今ココにいる。大人しく言う事を聞いているフリをして、そしていつか“お前”を救うために。

不意に冷たい手がライの手に触れる。

小さな白い手は躊躇いもなくライの読みかけの本を閉じた。

「…どうした？」

「……」

優しく眼を細めそこにいる同じ顔の頬を撫でる。言葉はない。

瓜二つの顔の中で唯一違う瞳が、慈しみの色を濃く宿しライを真っ直ぐ見つめた。揺れる瞳を閉じ、小さく頭を振るとそっと自分の額をライの額に擦り合わせる。ライも咎めるでもなく同じように瞳を閉じた。

…。

触れた額から伝わる感情。交わされる意思是ライの為のもの。

電子画面の信号のように浮かび上がり切り替わる言葉をライは見つめる。その言葉の羅列を素早く追い、意思を理解する。言葉はないが、それでも心は感情は伝わる。

「そう…やはり」

頷いてライは眼を開く。

同じ顔も、眼を開いて頷いた。そして二人の視線はどちらからもなく未だ真価を問われ続けている彼の元へと向けられる。

ライはそのまま未だ死んだように眠る彼を見つめると、言葉もな

くその手を伸ばした。

「彼に 洗礼を」

その言葉には苦渋の決意が滲み、けれども心の中は穏やかだった。祭壇の水辺に手を浸す。冷たく清らかな水はそれだけで波紋を作り広がっていく。浸す手は左 右手はもう殆ど自由には動かせなかった。

誓約に使う霊力ちからはまだある…少なくともここに眠る同胞は彼を“管理官”と認めるであろう事は分かっている。だから…。

残酷な運命に巻き込む俺を恨め…。

彼の両手、そして額に祭壇の水で証を刻む。

これは儀式であり、新たな楔を打つためのもの。そして自由に動かせる“手駒”を手に入れる為に必要不可欠な行い。

「彼を “ 駆城 瑠衣 ” を “ 管理官 ” に指名する」

名を名乗る必要はない。

元より彼の意識は“記憶の海”メモリーコンピュータに同じ。それを違えるモノはない。そして”運命の歯車”は彼の声により回された。

気が付くと、眼の前にはあの時と同じような光景が広がっていた。固い石造りの寝台の上に横たわり青い空を見つめる。雲は流れ行き、それが時を教える唯一のモノのように思えた。

ただ一つ違うのは空の高さ 手が届くと思えたあの空が、今は一際高い位置にある。

茫然と見つめる視界の中にふわふわと浮かぶ銀糸を見つけ、彼は

眼を大きく見開いた。

「　　っ?」

「気が付いたか」

横たわる自分のすぐ傍で同じ顔が二つ、何やら戯れている。瑠衣の顔を覗き込む人物のふわふわと風に揺れる銀髪を“ライ”がどこか満足そうに弄り、その視線は真っ直ぐに瑠衣を捉えた。そしてその声は告げる。

「お前は“墨”だ　　」

「???」

「意味は“とりで”。それ以上でも、それ以下でもない」

唐突に交わされた言葉に瑠衣の思考はついてこれず、ただ言われるがままに頷く。揺れる意識の淵で瑠衣は自分の何かが変わった事を、変わってしまった事を理解する。それが何なのか言葉に表すことは出来ないが、それでもこの心はそれが何かを知っていた。

「僕は…死んだの?」

何処か人ごとのように自分の生死を問う事になるなんて、あの頃は思いもしなかった。頬に当たる風を感じながら瑠衣の心はとても穏やかに風いでいる。渦巻いていた憎しみや悲しみはいつの間にか心の中からかき消えていた。まるで生まれ変わったように…。

眼の前の少年に視線を向け瑠衣は微笑みかけた。

その笑顔にライは不意に視線を逸らし短く肯定の意を伝えると、頷いて見せる。その瞳がどこか哀しみに煌めくのを瑠衣は見た。

「そう…」

ライの瞳の先にあるモノが何なのか、彼の中に潜む本当の闇を理解する術はない。それでも、今自分の為に哀しんでくれていた彼がいることが瑠衣にとって唯一の光だった。

不意に瑠衣の手に触れる冷たく小さな掌が、もう一人の存在を伝える。ライと同じ顔をした人物。名を雪せつと言った。

「お前は一度その生を終えた」

「…うん」

「…そして、ここで新たな生命を吹き込まれた。“管理官”としての」

「“管理官”…？」

理解できない瑠衣に対しライは微笑む。

その笑顔は彼に出会ってから今までの中で、一番優しい色を纏っていた。その事が瑠衣に更なる安心感を与える。

不思議と“怖い”という感情はない。それどころか違うモノになることに何の違和感も感じられなかった。

「お前はここで“人”を学べ。“人”を学び、その生を知り、そして“記憶”を受け入れろ」

「受け入れる…？」

「それが、お前に出来る事だ」

ライの言葉は難しい。

でも彼は決して理解しろとは言わずに、ただ瑠衣に手を差し伸べた。不思議な二人に見守られ瑠衣は、新しい命を受け入れる。

この瞬間、“管理官・壘”が誕生した。

孤独の音へ1・4〈（後書き）

翌の回想シーンは一旦ここまでです!!

とりあえず管理官になった”経緯”を書きました…が、まだまだその前の部分が開設されていないので謎多きお方です^^;

次回からは、現実世界の”管理局”に戻りますので会話のテンポも元通りになると思われます

何となく…我ながらホッとしてるのは何故だろう…（笑）
そんな感じで進みます^^

孤独の音〈2・1〉

夢を見た。

もう忘れてしまった過去の自分と、今は傍にいないかつての同胞がそこにはいた。きっと昨日の昼間、雪と話したせいだ。彼女の“サンクス”の言葉を聞いたせいだ…そう思う。

寝起きの汗を流すように個室内に取りつけられた簡素なユニットバスに足を運び、冷たいままのシャワーを頭から浴びる。

この瞬間の“楔”のような感覚が墨は好きだった。
汚れた自分の身でさえも清めてもらえているように。。

居なくなつてからは思い出す事もなかったのに…。

彼がいなくなり随分の時が立つ。

時間という概念は管理局にはないが、それでも経た時は取り戻せずに流れていく。墨がここに来て、彼がいなくなり、雪が動き出す。まるで定められた運命という名の歯車が第三者の手によって回されているような違和感の中、それでも彼は盤上に自分の駒となるべくモノを揃えようとしていた。

もう少し…なのか。

応える者はいない。

室内は次第に温かくなったシャワーの湯気で満たされ、水の流れる音と共に墨の溜息さえも飲み込んでいく。それが丁度良かった。

この考えは決して口に出してはいけないもので、言葉にした瞬間に効力を失ってしまうだろうから…。

「そうだろう…ライ？」

ぼつり呟いてシャワーを止めれば、すぐに室内は晴れていく。用意しておいたバスタオルで身体を拭い、髪は簡単に水気をとる。そのまま身体にタオルを巻いた状態で鏡の前に立ち髪を整えると、ふとその視線に気が付いた。

鏡に映る自分の顔を眺め、そこに映る歪んだ笑みに眉を顰める。何も変わらないこの世界で唯一変わった髪の長さだけが、未だ自分の中に“瑠衣”がいることを教えた。長い髪に隠れる首筋には今も消えぬ まるで戒めの様な 痕。憎しみの刻印^{しるし}。自分の顔に見惚れるわけもなく嘲ると、同じように返す鏡の自分に背を向け部屋を出た。

今日は…。

素足で踏むフローリングの感覚を冷たいと感じながら墨は予定を確認しながら歩く。

そのままクローゼットの中から襟足の高い藍色のタートルネックを取り出すと、彼は慣れた手つきで袖を通した。

合わせるジャケットはオフホワイトで、落ち着いた印象の中に清潔感を持たせる。

今日は依頼主^{クライアント}を迎えに行く事になっているから、第一印象には特に気を使うのだ。度々女性に間違われる長い髪を頭頂部で一つに結上げると墨は大きく息を吸った。

「っよし」

しっかりと眼を開けて自分自身に気合を入れる。

いつもより少しだけ気分がよくて、少しだけ憂鬱な朝の始まりだった。

管理事務所内・管理局。

「おはようございます」

「おー……」

誰もいないと思われた夜明け前の薄暗い室内から、気の抜けた声
が返り響は驚く。辺りを見回しても動いているモノはおるか、人影
さえ見当たらないこの場所に一体誰がいるのか……訝しく思いながら
部屋の電気を点けた。

「つつ…眩し〜ぞ…くら」

「っ!?!」

入り口近くのソファに寝転がるオヤジ。もとい二十代後半。が一
人。隠れるでもなく堂々とその大きな身体を投げ出している。サイ
ドテーブルには山のように積まれた吸殻が灰皿いっぱいに乗せられ
今にも崩れ落ちそうになっていた。

その有様に思わず声を荒げる。

「要さん!」

名前を呼ばれた男は気だるそうにソファに投げ出していた足を下
ろし、身体を起こす。そのまま背もたれに深く身体を埋めて見せれ
ば罫は呆れてモノが言えなくなった。

この人はっ……。

溜息一つで会話を終わらせると、墨は自席に荷物を置く。

必要なデータは全て頭の中に入っているが、なにぶん管理局（こ）には雑務が多い。同僚たちの性格上、それらを好んで片そつとする人間はいないし、何より彼らはそんなに几帳面な性格でもない。必然的に自分がこなさなければ物事や埃が溜まって行くのは道理だ。だから荷物も増える…。

邪魔になる上着をきちんとハンガーにかけ共同ラックに吊るすと徐に袖口を捲り上げ彼はキッチンへと移動する。その靴音は明らかに彼の心情を表しカツカツと甲高い音を立てていた。

「…今日もご苦労だな」

怠惰な上司が発する声を右から左へと聞き流し、彼は使い古されたやかんを手にとると

水を溜める。それをガス代へとかけ、足早に今度は談話室内に散らばるゴミ屑やら書類、その他の雑誌などを手早く仕分けしては片づけていく。意図して結上げてきたわけではない頭上の髪が屈むたびに頬に落ちてくるくすぐったさに眉を顰めるが、それでも動きやすさを考えれば下ろすのは得策とはいえない。

落ちてくる髪を一房取れば色素の薄い銀髪がさらさらと指の間を滑り落ちた。

その髪の色に思いを馳せれば、現実を引き戻さんとけたたましく鳴り響くやかんの笛吹く音に追い立てられる。仕方なく片づけを中断して簡素なキッチンに戻ると手を洗い鳴り響く音を止めた。

「要さん、ブラックで良かったですよね？」

コトンツと彼専用のマグカップをサイドテーブルに置き、まだ眠そつに眼を閉じていた男に声をかける。その声に驚く様子もなく生

返事を返す姿を横目で確認して、墨も彼の前の席に腰掛けた。

「どうしてこんな処で休まれてるんです？」

「ん〜？」

「お部屋で休まれた方が疲れも取れるし、効率的でしょ？」

「……」

視線を合わせずに墨は香りたつ湯気に眉を顰める。

珈琲は嫌いではないが、あまり好んで飲みたいとも思わない。普段ならば日本茶か紅茶を淹れるのだが、今日は自分一人ではないため目の前の男が好む“珈琲”を敢えて選んだ。

室内に広がる匂いに要は伏せ眼がちに口をつけると、満足そうにその眼を細めて見せる。

墨も自分のカップの中身を少し揺らしてから火傷しないように口をつけた。

たちまち口腔内に広がる香りと苦み、そして少量のミルクがそれらを中和していく。これくらいなら飲みそうだ。

「うまいな……」

「…？　ありがとうございます」

呟かれた言葉に相槌を打つと、彼は徐に墨へと視線を向ける。その眼が常よりも真剣に見えて、思わず墨も目を合わせた。

「なんです？」

怪訝そうな表情を浮かべ尋ねる。

他人の行動を観察することは好きだが、反対に観察されることは得意としない。それどころか軽い嫌悪感さえ覚えてしまう…。

カップを右手で持ち墨は足を組み直す。静まり返った室内には二人きり…それも考えの読めない 多分、腹黒な 年上の男で、自分の上司にも当たる。居心地の悪さを覚えながら肩にかかる髪を払うと、墨は溜息を一つ吐いてから立ち上がった。その刹那。

「今日会うのか？」

「……？」

「依頼主と」

「……ええ？」

当たり前の事を聞く上司の言葉に墨は眼を見張る。

中間管理者である自分が会わずに誰が会つと言つのだろうか。それ以前に今日会うことになっている依頼主の情報を知っているのは管理事務所の中では要の秘書である女性と、自分しかいないのだ。他のメンバーには仕事を振る際にしか説明されない事になっている。

余計な気を回させたくないし…。

先に情報を与えて、依頼主に感情移入されれば面倒な事になりかねない。同情も、怒りも哀れみも、彼ら“管理官”には必要のないものだと思っている。勿論、それは中間管理人である自分にも言えることだが、墨は完全に割り切って考えていた。

自分には関係ない…と。

稀にそう言う感情にのまれ単独行動をしたり、その代償の大きさに痛い目を見る人間もいるが、些細な問題行動には眼をつぶるしかなかった…。

もつとも感情の波にのまれ問題行動を起こす人間なんて限られているのだが…。

彼は人の痛みを知り過ぎてる…。

自分が傷つくことよりも、人の痛みを恐れ、哀しみ、そして愛する。ぶつきらぼうな言動や態度をとった処で彼の人間性が変わる訳もなく、だから彼を見ていると不安になる。

“優しさが仇になる”のではないかと…。

「罌」

「??？」

「考え過ぎだ…」

「…何をです？」

「……」

知ったようなことを言う上司に些か腹が立つ。

何も知らない癖に。痛みも、哀しみも、そして彼の事も。その上、自分自身の事にまで知ったように口出しするこの男が許せなかった。不意に視線をカップの中の揺れる液体にそそげば、もう冷めてしまったであろう珈琲は罌の顔を映しだす。そこにあるのは紛れもない罌自身だ。

違うな…。

この男は知らないんじゃない。

むしろ何もかもを知った上でここに“最高責任者”としているのではないだろうか。この先に起こる事も、起こそうとしているモノの“結末”も全て受け入れて…。

思い当たる節はいくつもある。

鼻先に香ってきた焼ける紙と煙草の匂いに顔を上げれば、彼は思いに耽るように宙を見つめていた。その先にあるのは“希望”か“

闇”か。

あるいは“両方”か。

陰り始めた自分の思考に罅は自嘲気味な笑みを浮かべる。眼を伏せれば、その雰囲気を打ち砕く足音が遠くから聞こえ、いつしか夜は明けようとしていた。

孤独の音へ2・1（後書き）

時間軸が”現代”に戻りました^^
今回の章は”壘”の過去編なので、またちよこちよこ回想的なシーンが入ってくると思われます^^；
読みづらくならないように頑張りますが、もし何かありましたらお気軽に一報下さい……

孤独の音へ2-2

暗い闇が室内に入り、それと同時に遠くに光る月明かりの眩しさに彼は眼を覚ました。

夢は見ない。悪夢も、良い夢も、正夢も…それらすべてが彼には不要なモノであり欲するべきモノでもないと思う。ただ何も無い空間を漂い、その間に身体は束の間の休息を得る。それだけのこと。それだけの“繰り返し”だ。

夜明け前…か。

長い前髪を掻きあげ、彼は窓の外を見る。

まだ明けない闇の中に不釣り合いに輝く月の眩しさに眉を顰め、けれどもソレに焦がれる。決して手に入らないものだからこそ、欲しいと。掴めるはずもないのにその月にそつと右手を伸ばした。

「……無理…か」

伸ばした手は虚しく宙を掴み、その先にある月は今も変わらず輝いている。諦めにも似た感情と、簡単に“無理だ”と諦めてしまえる自分自身に些か腹は立つが、それよりも彼は困ったように笑いを浮かべていた。苦い笑いが静寂な室内に響く。

俺、なにしてんだろ。

望んだものは“自由”。

その代償に失った自分の半身と、己の記憶。本当の“名前”に彼は複雑な表情を浮かべ一人眼を伏せる。手に入れたモノよりも失

ったモノの方が大きすぎるから、この胸はいつまでも痛むのだろうか…。

いや、多分原因はそれだけじゃない。

まだ胸に燻る“痛み”は、人の記憶を受け入れた代償でもある。

その記憶の名は“恐怖”　そして、“痛み”。それは一瞬の出来事だった。

あの時、現世へと戻る為に薄れていく彼の身体　魂　を思わず掴んでいた。“返したくない”とか、そんな事じゃなくて本能が勝手に身体を動かしたんだと思う。このまま“彼”を返してはいけない…と。

だって…。

不安そうに揺れる瞳と、寄せられる眉根。その表情を見た瞬間言うよりも早く彼の手を握り心の中である言葉を繰り返した　彼の“痛み”を俺に　と。

不安を、恐怖を、痛みを…お前を苛む全てのものを俺が引き受けるから、だからどうか笑っていて欲しいと切に願った。

誰かが“哀しむ”姿は、もう見たくなかった。

だから雪は、ソレを“禁忌”と知りながらも彼の記憶の欠片を抜き取ったのだ。

「その代償があれじゃあ…あんまりだよな…」

昨日の自身の行動に呆れて、彼は自己嫌悪に陥る。

今までにも何度が犯した禁忌だが、今回のソレは常とは違っていた。恐怖も、痛みも、ドロドロとした闇の中に引きずり込まれそうな感覚も…一人で抱えるのには大きすぎる“負の感情”だった。そ

して。

また“墨”に頼った…。

いつだって何も言わないのに大事な時には傍に来て、欲しい手助けをする彼は雪よりも雪自身の事を知っているように思う。

人を信じないという口で、同じように雪の事を労わる言葉を吐き、人を突き放す荒々しさを秘めている腕は、それでも優しい手つきで抱きしめてくれる。その温もりに雪は縋った。そうでもしなければ自分自身を、“雪”という存在を手放してしまいそうだったから…。

「最悪…」

自分自身が望んでここにいるのに、自分で蒔いた種も刈り取れず、彼に自分の尻拭いをさせてしまっている。それが心苦しかった。

墨はなにも言わないから…。

自分の事は後回しで、大切な物をあまり持たない彼。

そして本当は誰よりも一番優しく、一番傷付きやすいのだろうと思う。それ故に“他人”を遠ざけて、自ら壁を作っているように見えた。だから余計に…。

俺は、お前の事が心配だよ。墨。

一つ溜息を吐いて彼はベットから降りる。

素足に冷たい床の感触をしっかりと感じながら彼は両の手を見つめる。この小さな掌に掴めるだけのモノを、一つも逃さないように…ただ、今はそう願わずにはいられなかった。

寝巻代わりの大きなトレーナーを脱ぎ捨て、彼は鏡の前に立つ。何も纏わない白い素肌には窓から差し込む月の灯りが当たり、奥の壁にそのシルエツトを刻んだ。鏡に映るのは自分。そして、君。その眼の見つめる先に似たような“光”と“闇”を映した瞳があることに気が付いて、彼はスツと視線を足元へと落とす。交わす瞳は自身のものではない。そして、この命も…。

全部、お前のものだ…そうだろ？

寄せた眉根に苦渋を浮かべ雪は徐に壁を殴りつける。短い悪態と共に出了た言葉は夜の静寂へと溶けていった…。

小さな二つの膨らみを隠すように彼はその身体に強固なプロテクターをあてがい、その上にワイシャツを纏う。いつもと同じ様にベストを合わせ、ズボンは警棒を取り出しやすいように大きめで短いものを履くことにしている。サイズの問題は腰に回したベルトで調節して…鏡に映るその姿に我ながら“少年”のようだと思う。

癖のある髪に数回櫛を通し、跳ねた髪は水で撫でつけてやると仕上げとばかりに首に冷たい金属の感覚。全てを司る鍵。そして一彼のいた“証”。それは手放す事の出来ない楔。

俺達を繋ぐもの。

一つ溜息を零し、雪はそっと音もなく冷たい部屋を後にした。

ノスタルジア管理事務所内。

薄暗い廊下を辿り、不意に通りがかった“事務所”が明るい事に気が付く。空はいくらか白んできたが時刻はまだ日の出前。こん

な時刻に誰がいるのだろうと訝しがれば彼はその扉に臆することなく手をかけた。そして。

「おはよう。雪」

「っ!?!」

開けたドアの向こうに立つのは、にこやかに笑う彼 壘 の姿…そして、滅多に事務所内には見えない最高責任者 要 の姿。異様な組み合わせに雪は眼を瞠る。何があったというのだろう…。

「なんだ…この組み合わせ…」

思わず口をついて出た言葉に二人は顔を見合わせる。つられて困ったように微笑むのはやはり“壘”だ。軽く腕を組むと右手を頬に滑らせ首を傾げて見せる。その眼は不敵に輝きを放ち、雪をまっすぐに捕えた。

「君こそ、随分早い」

「俺は」

「非難してるわけではないよ。ただ、どうかしたのかな とね」

言外に他意を匂わせ彼は笑う。

いつだって本性を見せないその瞳が今もゆっくりと細められれば、壘の言わんとしている事に鈍い雪もさすがに気が付いた。

「……もう、平気だ」

「…そう」

「悪かった、その、昨日…は」

「……」

言いかけて不意にその口唇を塞がれる。彼の細く長い綺麗な指に

…。
それ以上の言葉を拒むように押し当てられた指先が、彼の視線が困ったような色を映しだし、彼の口唇が“秘密だよ”と静かに模られた。

秘密…？

どうして“禁忌”を秘密にしなければならないのか、雪には皆目見当がつかない。彼が何を思い、考えているのか…どうして言えないのか。

要もだけど…墨も謎なんだよ…。

自分には理解できない難しさを持つ二人の男に雪は小さく溜息をつく。多分、互いに分かっているのではないのだろうが、この二人はよく似ているのだ…と、雪はそう思った。

一人思案を廻らせれば不意に頬を撫でる指先。その指の冷たさに驚いて顔を上げると目の前に微笑む仲間の眼があり、そしてそこに流れる空気はどこまでも優しさと慈愛に満ちていた…。

「雪、今回は僕と組む？」

「…は？」

唐突なお誘いに雪は瞠目する。

そんな彼の表情に少し悪戯っぽい笑顔を浮かべると、墨は雪の癖のある髪を指に絡め更に言葉を続けた。

「今日、クライアント依頼者と会うんだ」

「………仕事…？か？」

雪の言葉に彼は頷く。そして一瞬だけ、多分相手が雪じゃなければ気付けない程の僅かな瞬間　彼の眼が紅い色を灯す。その色に雪の背筋を冷たいものが走った。

この表情かおっ…。

思わず息を飲んだ雪に気が付いて、眼の前の彼は何事もないように微笑む。いつもと変わらない優しい表情…その裏に“なにか”を隠して。

「今回は“案内人”としてじゃなくて“中間人”として動く事になると思うから…」

“中間人”??　珍しいな

「…そう…だね」

その表情がまた僅かに曇る。その隙を雪は見逃さなかった。

なにかを隠してる…。

長年の管理官としての“勘”なのか。それとも“仲間”として共に過ごした時間のせいかは分からない。それでも、今“罫かれ”を一人にするのは危険だと雪の中に警笛が鳴る。多分この胸騒ぎは間違いじゃない。

「……………だめ？」

「……………分かった」

「えっ？」

「一緒に行くよ」

「でもっ」

「お前と組むの久しぶりだけどさ……………」

墨の予想に反して、雪は力強くニツと口角を吊り上げると“たまにはいいんじゃない?”と何処か楽しそうに言つてのける。その笑顔があまりにも頼もしくて墨も自然に笑顔になる。作り笑いでは無く、彼の“本当”の笑顔に…。

陽が昇り始めた窓際で雪は清々しく伸びをして、そのお日様の眩しさに目を細める。とても綺麗だと思つた。そして、もう一度近づいてきた彼に予想外の強さで腕を引かれ

「サンクス…雪」

「っ!?!」

ふと頬に触れる柔らかく温かい口唇。

そして甘く囁かれる“ありがとう”の言葉に雪は固まる。それが“墨”のものだと理解するのに一瞬の間が空けば、次の瞬間聞こえるのは“上司”の溜息。

「お前らさ」

「っ!?!」

その声の存在をすっかり忘れていた雪は肩を大きく震わせて、振り返る。そこにはソファにどっしりと腰掛け煙草をくわえながら呆れた視線を送る 要 の姿。思わず絶句する。

口をパクパクと金魚のように酸素を求め、先程までの行動に赤面する。白い肌が一瞬のうちに赤く染まった。

「仲がいいのは良いんだが、上司を無視すんなよ」

「……か、要?」

「あれ、まだいたんですか?」

恥じらう雪とは対照的に冷たい視線を送る。その表情はにこにここと笑いを浮かべているのに、気配が何故か冷たかった。徐にもう一つ溜息が零れる。

「　　ったく」

“よっこいせ”と年寄りくさくソファから立ち上がると、彼は寝起きばさばさの髪を掻き上げ気だるそうに歩きだす。その背を見送る二人の視線を受けながら数歩行った処で不意にその歩みを止めた。何かを考えるように一瞬視線を空に向け、そうしてまた煙草を燻らせる。その一言は“突然”だった。

「そういえば」

「??？」

「来るぜ…あいつ」

「…あいつ？」

「そう…すぐに……」

意味深な言葉を残すと振り向く事もせず彼はスツと煙草を持った手を挙げ振って見せる。その背はまだ暗い廊下の闇へと飲み込まれて行った。

孤独の音へ2・2﴿ (後書き)

今回は雪目線です。(。・。・)

要の言う”あいつ”とは”!?”

そして”腹黒”墨君の隠し事とは(笑)??

なんとなくネタばれ要素満載ですが…こんな感じに進みます>>>

Web拍手設置しました。

お礼用SS・イラスト増殖中です

孤独の音へ2・3

室内には二人きり。お互いに言葉はなくて、ただ同じ空間の中に違う存在を感じていた。

不意に視線をあげれば、昇り切ったお日様を背に何やら彼は考え事をしているようにも見える。その憂い顔にそっと触れてこちらを向かせたくなるが、その心を何とか抑えて墨は小さく溜息を零す。

「…雪？」

「…っ？」

声をかければ小さな肩を震わせ、交わす視線は揺れている。なんて表情をしてるんだろう…墨は苦い笑いを飲み込むと、温かい日本茶の入った湯呑を彼へと差し出した。まだ熱く白い湯気の昇るソレを手に取り、そっと口をつける。日本茶に適した飲みやすい温度の湯で入れられた玉露の香りが鼻先を攪り雪は不意に目を細めた。一口、また一口と口内に含めば広がる甘い味に肩の力が抜けていく…。そう、こんな感じ…。

気にしても、仕方がない…か。

去り際に告げられた上司 要 からの言葉に思いを馳せ、気が付けば他のメンバーが集まる時間になろうとしている。何をそんなに考え込んでいたのかと我にかえり雪は自嘲の笑みを浮かべた。そして。

「…いーっす」

「おはよう」

嵐のように慌ただしくドアが開き、寝惚けた　まだ眠そうな　雀と、いつもと変わらずきちんとした格好の狐の姿が現れる。狐は二人を見ると、少し意外そうな表情を浮かべた。

「あら…早いよね。雪」

「ん？」

「あ〜？」

雪が間の抜けた声を出すのと、これまた怪訝そうに雀が振り向くのはほぼ同時に二人は顔を見合わせて苦笑いを浮かべる。互いに次の言葉を考えて、先に口を開いたのはやはりというか雀だった。

「そっぴゃ…そっぴゃ」

「……」

「どしたよ、雪」

面白そうに告げられる言葉とは裏腹の心配そうな色を映した瞳に雪は俯く。“どうしたのか”と聞かれて答えられるような“コタエ”など持ち合わせてはいなかった。黙ってしまった雪を見かねて壘がその間に入る。

「おはよう、二人とも」

「おう…」

「雪はこれから僕と仕事だから、また後でね」

「え？」

「雪が“お前”と!？」

壘の言葉に普段は動揺することの無い狐も思わず声を上げる。二人は驚きを隠す事もせず怪訝な表情を雪に向けた。遠慮することを

しらない不躰な視線がまつすぐに刺さる。二人が言いたいことは分かっているから余計に…。

「どういうこと？」

「お前ら、コンビ解消しただろうよ」

「……だから」

納得のいかない様子の二人に雪が口を開きかけた瞬間、後ろから罫の手が伸び徐に雪の口を塞ぐ。その事態に二人はおるか、雪自身も驚きを隠せなかった。声にならない抗議の声を上げるが、その声はただくぐもった息遣いのまま罫の掌へと吸い込まれて消えた。

> i 1 5 6 4 2 — 7 1 5 <

「僕が頼んだんだよ」

「罫お前がつ!？」

「そう…」

ジタバタと腕の中で暴れる雪を適当にあしらいながら罫は何事もない様に二人 雀と狐 に向けて笑いかける。それ以上の詮索を許さないであろう冷やかな視線を投げかけて…。

「…どうして、今更？」

「今更? どうして、そんなことを聞くの。狐」

「だって…」

そう。本当は罫自身にも分かっている。

自分が雪と組むことが“好ましく”無いという事を、彼は知っていた。それでも…。

また君を一人で行かせるわけにはいかないから…。

この提案は雪の為であり、そして墨自身の為でもある。こうすることでお互いを縛る鎖になれば良いと　今はそう願わずにはいられないから。だから例え誰に反対されても今回の事に関して譲るつもりはない。その意思が君にも伝わればいい…。

そんな悠長なことを思っていたら突然腕の中の人物が暴れ出す。

「　　つはあつ…離せやつ!」

「雪つ?」

「俺を殺す気かつ!?!」

「……」

墨を振り返り逆上する雪に対し、当の本人は表情を変えずに小首を傾げて見せる。何だろう…怒る気さえもそがれる微笑みがそこにはあった。

勢いを殺され、雪は盛大な溜息を一つ吐く。これ見よがしなその溜息に彼は苦笑いを浮かべるとスツと自分の髪を掻きあげた。その刹那、見える傷跡　タートルネックの首元と髪に隠れていた首筋に雪は思わず目を伏せる。微かに覗く痕は、彼の憎しみの証だから…。

「?」

「……」

不意に逸らされた視線に気が付いて墨はハッと息を飲む。それから出てきたのは苦い笑いと複雑な表情だった。そしてまた傷跡を隠すよつに髪を下ろす…。

「ごめんね……」

「見てないから」

「うん」

「……」

嫌な物を見せてしまった事を謝れば返ってくるのは素っ気ない返事。それが二人の間にある距離であり、侵してはいけない領域だから……。

僕はまた見ないふりをするんだ。

一層その闇を濃くした瞳を覗きこむ彼に墨は笑いかける。その刹那、

「俺は“墨”だから、一緒にいるんだからな」

「……?」

「分かるか?」

唐突な言葉に目を見張れば、同じようにキョトンとした表情の雀と狐まで巻き込んで彼は力強く口角を吊り上げ上目づかいに笑って見せる。そして状況の掴めていない周囲に向かつてもう一度念を押すように“墨が必要だ”なんて告げた。そんな君だから……。

本当に敵わない……。

黒い感情も、この暗い闇の様な腹の底も、きつと君の中では意味の無いもの。そうやって、暗い自分に囚われようとする“墨自身”^{ボク}を意図も容易く救いあげて光の指す方へと連れ出すんだ。きつと。

「……そう」

微かな溜息が背後から洩れ、狐が少し呆れたように頷く。振り返れば二人は複雑そうに、けれどもお互いに手を取り合って微笑みかけてくれていた。

「貴方達が納得しているのなら、それでいいわ」
「俺らが反対する事じゃないしな」

曖昧な表情で頷いて笑顔を浮かべれば、同じように、鏡のように彼らは表情を返す。その微笑みに“ありがとう”と小さく呟き返していた。そして。

「行こう、罍」

「……？」

“依頼主”が待つてる」

不意に引かれた手の平は温かな温もりに包まれる。驚きに目を見張れば彼は確認するように“そうだろ？”と視線で問いかけた……その手を強く握り返す。

「うん…行こう」

「……おう」

見つめた瞳の中に映る自分が“罍”であることを確かめて、そつと目を伏せて頷いていた。

孤独の音へ2・3〈（後書き）

謎めく会話にネタばれの予感^^；

どうも今後の展開が頭の中をちらついてしまい、こんな風な話の進み方になってしまっています。

気がつけば”J”がいないと管理事務所に集まる人数って限られてるんですよ…。

ちよっと寂しいな〜とか思ったのは作者の気のせいでしょうか…^^
^；

年内にもう一話up出来れば良いな…。(。-。)

孤独の音へ2-4

待つ部屋は“紫色”。

墨と二人向かった部屋の中には、まだ若い 多分十代半ばくらいの女性が緊張した面持ちでソファに腰掛けていた。今時珍しい黒髪にどちらかといえば良い処の“お嬢様”を思わせる彼女は、背もたれに背中をつけることもなく姿勢正しく座る。その姿はとても凛々しく潔いものに見えるのに、寄せられた眉根は微かに震え視線は遙か下の方へと落とされていた。

若いな…。

“若い女性”が依頼人として珍しいということはない。

むしろ依頼人としては多い方だとも言えるだろう。その殆どは自殺がらみだったり、時たま中絶したことを悔み彷徨う人間もいた。それらを真面目に対処する気にはなれなかったが、それでも往くべき道を探し彼女たちを送るのが管理官としての仕事だったから、雪は仕方なくその掟に従ってきた。でも…。

彼女この子は違う。多分。

“自殺”とか“中絶”を悩むタイプには見えない。それどころかとてもよく“誰か”に似ているような…そんな気配を持った子だと思えた。初対面なはずなのに、その雰囲気はよく知る人物と被る…そんなはずはないのに。

「初めまして、僕は中間人、墨です」

「同じく管理官、雪」

「……」

愛想よく笑いかける隣の人物につられ、雪も短く言葉を吐き出す。それなのに、にこにここと微笑みかける墨を前にしても彼女は顔を上げることさえしない。それどころか身体を強張らせるばかりだ。理由は分からないがそれはとても頑なに見え、何より痛々しかった。

何が彼女を苛むのか…眼の前の、自分とそう年も変わらないであろう少女に対し雪は思いを馳せる。答えがそこに無い事を彼は知っている。答えはいつだって“自身”の中にあり、それを他人が覗き見ることは出来ない。それでも…。

想像することくらいは出来る。

痛みを、哀しみを、孤独を。

それらを想像して、彼女の事を思うことは出来る。人間には他人を思いやれる“力”があるはずだと彼は心の奥底で信じていた。

不意に墨の気配が近づき、耳元に彼の囁く声。

「雪、彼女を頼める？」

「……」

訳が分からず訝しげな眼を向ければ、墨は殊更困ったように表情を歪め笑って見せる。そうしてもう一度口唇を雪の耳元に寄せると困ったような声音で囁いた。

「彼女、男性恐怖症なんだ…」

「…っ!？」

その一言に目を見張る。

中間人である“墨”が言う以上、これは中間案内人かれらに“情報”と

して与えられているモノであり、それを管理官おたひに提示しても良いと思えた何かがあったのだろう。そして、それは中間人から“管理官”に対する直接的な「仕事の依頼」にもなる…。

そういうこと…か。

彼の言いたい事を理解して雪は小さく息を吐くと頷く。

その相槌を言質ととって雪は“ごめんね”と口の動きだけで告げ、そつと席を立つ。中間人であり、一応“男”である自分がこれ以上同席するのは話を進める為の妨げになると思つての判断だろうから、雪もそれを咎めるでもなく視線を少女に向けた。それでも。

その一部始終を彼女は見ていたはずなのに、まるで“人形”のように色の無い瞳を地面に落とすと雪がその場を離れるのをただ黙つてやり過ごす。まるで“何か”に耐えるように…。

ドアのしまる音が背後で響くと室内は静寂に包まれ、その音に微かに肩を震わせた彼女に雪は正面から向き合う。長く緩やかな髪が頬にかかり、その表情をより暗いものにしていく。

まるで観察でもしているかのように“彼女”を眺めると、雪は徐々に足を組みソファに深く身体を埋めた。完全に長期化しそうな“依頼主”を前に気長に話し出すのを待つことにする…。

待つことには慣れてる…。

そうはいうものの“見る”ことにも飽きてきて頬づえをつけば次第に襲ってくるまどろみに雪はその眼を伏せる。ふわふわと揺れ動く瞼の裏の視界に色々なものが浮かんでは消えていく。その繰り返しを彼もただ見つめていた。

不意に遠くの方でカタンツと何かが動く気配がして、それでも雪は眼を開けずに時が過ぎゆくのを待つ。そうしていれば次第に見えて

くるのは 黒く大きな影。それがまるで自分に覆いかぶさるよう
に蠢けば彼の身体もまた、ビクンツと大きく震えた。

「 つ!?! 」

見えた映像に違和感と嫌な感覚を覚え眼を開ければ、目の前に迫
るは知らぬ少女の顔。その顔が自分の顔と重なり、一つ息をのんだ。
そんな筈はないのに…。

寄せた眉根に触れた温もりにさらに身体を強張らせれば触れた指
先の代りに、額にはそつと唇が押し当てられた。そう、先程まで
“人形”のようだった少女の柔らかい唇が。

「 なっ
」

「 ……」

驚きと焦りで思わず座っていたソファから転げ落ちる。鈍い音と
共に尻もちをついて、ついでに後頭部を肘かけに強打するとその痛
みに雪は顔を顰めた。

「 つ
」

声にならない悲鳴を上げて蹲れば、目元にはうつすらと浮かぶ涙。
瞼の裏にちかちかと点滅する信号が衝撃の大きさを物語っていた。
そして…。

頭の隅で何か小さな物音がして、人の気配が音もなく忍び寄ってく
る。雪の耳はその小さな物音さえも逃さずに過敏に反応すると、ス
ツと延びてきた白い何かを振り払う。バシンツと乾いた音が響いた
。

「 ??! 」

きつい視線を気配のする方に向ければ、そこには驚いた少女の顔。思わず払ったモノが彼女の細く白い手だと理解するのに、そう時間はかからなかった。行き場を失くした少女の手が哀しそうに引っ込められる…胸が締め付けられそうに痛んだ。

「っ俺、わ、悪いっ…」

「……」

とりあえず慌てて謝罪の言葉を述べる。その視線はあまりの伐の悪さにか僅かに逸らされ、彼女を捉えようとはしない…。ゆっくりと動く気配がして少女が雪の手に触れた。その瞬間。

…っ!?

眼の前に浮かぶは大きな黒い影。左右に蠢き、まるで陽炎のようにかき消える様は異様で、ともすれば次の瞬間には眼の前に迫る感覚。咄嗟のことに雪は眼を固く瞑る。息も出来ないような圧迫感と、恐怖、悲しみ、怒り、哀れみ…全てがないまぜになったような感情が身体の中を駆け回っては過ぎ去って行く。そしてまるで鈍器で殴られたような酷い痛みが頭に走ると、彼はその場に音もなく倒れ込んでいた。

孤独の音へ2・4（後書き）

触れた手から見えた黒い影。
そうして雪の意識は影へと落ちた…。

今年もお世話になりました^^

次回更新は来年になります

例えば、私の初投稿作品が「ノスタルジア」でした。
当初は設定しか決まっていなくて、プロットや話に関しては何も考えずに書きだしたので苦労も一際多く、思い入れがある作品です。

明日（12/31）で”なろう”に来てから一年。

マイペースにですが、今後とも頑張って書き続けたい！！

…そう思っております^^

来年も宜しくお願い致します。

よいお年を^^

孤独の音へ3・1へ（前書き）

ノスタルジア管理局 一周年記念

> i 1 6 3 9 7 — 7 1 5 <

無事に一周年を迎えました^^

読んで下さった方、お気に入りに入れて下さった方、本当にありがとうございました^^
とっとうございます^^

これからも頑張りますのでヨロシクお願いします

（イラストは「みてみん」で頂いたバトン用のものです^^）

孤独の音〈3-1〉

未来が分かれば、人は間違いを犯すことなく生きられるのだろうか。過去と未来と現在の狭間で、彼はただ人の中に生き、時間の中に眠る。沢山の感情と、沢山の思いと、沢山の…。

時折聞こえるのは“彼”の声で、その声はいつだって必死に“答え”を探そうとしている。傷付き倒れ、くじけそうになる心を叱咤して彼は進む。だから、叶わない事を願ってしまう。彼なら、救うことができるのではないかと。

水の中 正確には水のような空間の狭間 に雪は浮かんでいた。

この景色はもう何度見ただろう…無意識の世界で繋がる人の意思 記憶の海 に、彼はその身を委ねる。先程まで身体のうちで渦巻いていた感情たちは今は鳴りを潜め、辺りは静寂に包まれていた。聞こえる音は全て幻 この場所が持つ記憶と、彼の中に眠る過去の記憶が混ざり合い造りだされる音に過ぎない。それでも、その声に胸が痛んだ。

今は 眠れ。

哀しい記憶に立ち止まる暇はない。感傷に浸る時間も。

浮かぶ気泡は触れば簡単に弾け消え、そこに痕は残らない。移り変わる気泡に映る仲間たちの顔を見上げ、雪は一人呟く。ごめん…。

「雪が戻ってこないって!？」

その知らせが彼らに届いたのは陽が天高く上った真昼のことだった。墨と雪、二人が依頼人と会う予定になっていた紫色のドアの室内には横たわる二つの軀。髪の毛長い少女 福山悠里 と、そして管理官 神谷 雪 は、その手を重ねるように触れ合わせ床に伏せている。誰がみても異様なその光景に、墨からの知らせを聞いた雀と狐は入口にただ立ち尽くした。

「 っだよ、これっ… 」

「何が起きたの?」

二人の言葉に、墨はただ静かに眼を伏せ頭を振る。

二人の質問に答えたくとも答えようがない。それが“答え”だ。墨にもあの僅かな瞬間に何が起こったのかなど知る由がなかった。

ただ分かる事は、コレが非常事態であり、彼自身にも予想外の展開だと言うこと。そうでなければその意識の断片さえ、彼の心さえも感じられなくなるほど深く意識を落とすことなどあり得る筈がない。それが管理官としての“神谷 雪”だから。

雪、何が起きた…。

苦い気持ちで奥歯を噛みしめれば、少し軋んだ音がする。知らず握った拳には爪が食い込み紅い筋を作るが、それでも彼は懸命にこの場で起こった“何か”を探そうとしていた。その時。

コンッ

軽く叩いた音がドアをノックする。

その音に三人は振り返り、一つ息を飲んだ
最高責任者・要
がそこにいたから…。

「よう。事情を説明しろや」

「 要さん…」

くわえ煙草に手を添えて、長い黒髪の間から光る鋭い眼差しは何処か億劫そうにさえ見える。はだけた黒いシャツから覗く鎖骨に長い手足がゆっくりと前髪を掻き上げもたれていたドアが小さく軋んだ音を立てれば、革靴の小気味よい音を響かせ彼は室内の中央、二人の少女が横たわる場所へと歩みを進めた。そして。

「これはどういうことだ…罨」

静かに屈み雪の人形のような顔を見つめる。頬にかかった銀髪を払い、その頬に触れても、いつもなら機嫌悪く振り払う手もなければ、睨みつけてくる勝気な瞳さえも今は見えない。あるのは静電気のようなチリっとした痛みだけ…。

「数刻前。

私と、雪は依頼人である少女 福山悠里 と接触を測りました。ご存知の通り、この部屋で」

言い淀んでしまうのはそこにある罪悪感と、僅かな後ろめたさのせいだろうか。本来ならば立ち会うべき自分が席を外したこと、彼に必要最小限の情報しか与えなかったこと、そして。

これを招いたのは、自分だ。

本当は傍に居たくなかった。

依頼人である彼女の境遇は、その記憶は、あまりにも自分の過去を思い出させるから。

哀しくも愛しい女性むすめに良く似ている　から。だから眼を逸らした。

これがその報いか…。

守らなければいけないのは“過去”じゃない。それも遙か昔に置いてきたような郷愁に振り回されていいようなものじゃないのに、それでも雪ユキよりも過去カクゴの人を知らず選んでしまった。

「続きを話せ、案内人」

「っ」

冷たい蔑みの視線を向けられ墨の身体が強張る。感傷に浸る暇などない。今は、目の前の状況を打開する時だ。

成すべき事を成せ。

自分に言い聞かせて彼は一つ息を吐く。その眼に迷いはなかった。

「少女の精神的な面から、自分が立ち合うのは逆効果だと判断し管理官・雪にこの場を委ねました」

「…なら、お前の判断は誤りだったということだな」

「っ」

その言葉に返す言葉が見つからない。

彼の言うことが正しい。これは単純に案内人としての自分の判断ミスだ。だから余計に苦しい。そして何よりも腹立たしかった。

「まあいいわ」

ぼつり頭上に降る声は怒りとも呆れともとれる響きを纏い、それでも頭に乗せられた掌は優しかった。そして…。

「今はこの馬鹿を、呼び戻す事の方が先決だ」

「出来るんですかつ　!?!」

「?!?!」

「私も試みましたが、完全に彼の意識が沈んでるんですよ!?!」

驚いて上げた顔の先には、悪戯っぽく笑う男の顔。自分よりも大人で、感情の読めない　不敵な　男は、煙草を静かに灰皿に押しつける雪ではなく依頼人である少女の傍らに膝をついてその顔を覗きこんだ。重なる二人の手に自分の手（ソレ）を乗せる。そして　。

「汝、この言霊に宿りし誓いを違えぬ者。時の狭間に眠りし者に通じる者。来る時に返し鍵を持ちて、その心に交わる者。忘れし名を求めて止まぬ汝の名は　」

伏せた眼に言霊は集まり、自然に溶ける。その表情を窺い見ることとは出来ないが、その口元が声を持たず動くのを墨は感じた。視界には何も変わらないのに、確かにその空気だけが異質なものへと変化し影を揺らす。少女の身体が僅かに光り、その長い髪を揺らし、て身体を起こした。

「　　つ…?!」

気だるそうに重い身体を起こして、少女は短いスカートの事など気にも留めずに胡坐をかく…そして億劫そうに顔にかかる髪を掻きあげて短い息を吐いた…。

「よつ…お目覚めか?」

「…ああ」

がしがしと頭を掻き彼女は頬杖をつく。先程までとは正反対のがさつな態度に墨は眼を瞬いた。何が起こっているというのだろうか。

「あのっ」

「あ??」

「一体、どういうことですか?」

困ったように眉を顰める彼に、要と少女は顔を見合わせる。互いに視線を交わし出た結論は簡単な物だった。

少女が面倒そうにその事実を告げる　自分が“雪”なのだ…。

「　　つまさか!??」

「つんなこと言っただって、本当なんだから仕方ねえだろ?」

「どうして…?」

混乱する頭に、黙り込む雀と狐。

当の本人である雪の身体は依然そこに横たわったままで、何も変わることもなく人形のように眠っている。この事態を疑いもせず受け入れられるほど、彼らは浅はかではない。だが…。

「信じられないって顔だな。じゃあ」

「　　なっ…:…:触るな変態!」

「　　っ!??」

不意に伸びた手が少女の頬に触れると、少女はその手が触れるか触れないかの処で勢いよくその手を振り払う。向けられた視線と、その反射神経の良さ、そして何より少女には見られなかった悪態が、彼女の“中身”が“雪”なのだと教えてくれた。

三人は息を飲むと、その緊張を解いた。そこにいる人物が誰であろうと、中身が彼ならばその原因を探らなければならないのだ。

「どういうこと？」

「何でお前……」

雀と狐が近づいて変わり果てた彼の身体を凝視する。

面白そうに長い髪を引っ張る雀を睨みつけ、またスカートについた埃を優しく払う狐に照れ笑いを浮かべると、その眼は自然墨を捉えた。

「墨、心配かけた」

「……いや」

「上手く説明できないんだけど。とりあえず、俺の中には彼女が居るはずなんだ」

「……？」

「原因は分からないけど……俺達、入れ替わった」

その言葉は、確かに何かの“始まり”を告げていた。

孤独の音へ3・1〈（後書き）〉

年明け最初のノスタルジア更新です^^;

随分時間がかかりましたが、その分じっくり書いたかと聞かれるとそんな事はありません（-|-;-）

∴ いつも通り、思いつくままに文章を打っております（。-。）

こちらも一周年！

昨年中に第二章に入れてホツとしている作者ですが、ノスタルジアはまだまだ続きます^^;

新キャラも考案したいし∴。

今まで通り今年もマイペースに更新しますので、本年も宜しくお願
い致します。

孤独の音へ3・2

紫の部屋を後にして、彼らは事務所へと居を移す。

なんの手がかりもない現状では、紫の部屋に留まるよりも多くの情報を得る為に機械の傍へと戻った方が良いというのが要の見解だった。そして入れ替わってしまった身体を元に戻す方法を調べる為にも、空っぽになった雪の身体も紫の部屋から事務所へと移動せざるを得ない。

「おえ…やめろよ、雀」

「仕方ね〜ジャン」

意識を失ったままの自分の身体が雀に横抱きに運ばれているのを、彼は目の当たりにさせられてうんざりする。雀よりも一回り小柄な雪の身体は、眼を伏せていればそれなりに整っているし何より色白なその顔と銀色の髪が彼を儂げに演出していた。黙っていれば絵になる美少年の出来上がりだ…。

本来ならば肩に担げばいいものを、それと知っててわざと“女の子扱い”するのは雀のせめてもの仕返し　心配させたことへの“報復”なのかも知れない。

そんな些細な仕返しに痛みだすこめかみを押さえれば不意に墨の肩とぶつかる。ハツとして顔を上げ交わる視線。どこか冷たさを纏うその眼に雪は思わず息を飲んだ。

「お前っ、なんて眼…してんだよ」

「何が？」

「いや…だっってお前」

言い淀む雪に対し、墨は何でもないように曖昧に微笑みを浮かべて一人すたすたと歩いて行ってしまふ。その心の奥に微かな“闇”を宿して。

本当に、どうしてもあゝも複雑なんだ。

他人に頼る事を良しとせず、他人を受け入れる事をしない墨の、その孤独が分かるから余計に胸が痛む。この痛みは彼と通ずるもの。黙り込んだその頭をコツンツと横から叩かれ頭上に優しい声が降る雀だ。

「お前が考えても仕方ね〜ぞ」

「っ」

振り返り見上げればその横に同じように頷く雀と同じ容貌^{かお}。いつもと違う目線の高さに違和感を感じずにはいられないが、雪も同じように頷き返した。

とりあえずは自分 雪 の身体に戻る事が先決だ。

「雀、狐、補助を頼めるか？」

その言葉に一瞬眼を瞠った二人は次の瞬間顔を見合わせ、不敵にその口角を吊り上げる。短く交わされた了承の意に雪も安心したように眼を細めると三人は雪 自身 の身体を抱え事務所へと歩きだした。

*

暗い、暗い世界。

眼を瞑れば見えるのはただの“闇”の筈なのに、彼の瞼の裏には

紅と黒と、そして憎しみの色が揺らいでいる。

依頼人 福山悠里 の身边調査はもうすでに上がっていると
て良い。彼女がここに迷い込んだ理由は定かではないが、最高機関
「閻魔庁」の職員の調べでは彼女の“過去”は全て明らかにされて
いるのだ。その苦痛や悲しみまで全て…。

何故、同じようなことが起こる…？

まだ自分が「駆城 瑠衣」として普通に生きていた頃、その生活
は恵まれたものではなかった。母親は自分を生んだ直後に亡くなり、
父親は母親を愛していた分だけ“瑠衣”を憎んだ。瑠衣自身といえ
ば母親の顔を知らず、父親に憎まれる理由も知らず、降る罵声と暴
力に耐えるだけの幼少期を過ごした。それでも。

それでも瑠衣は幸せだったんだ…。

三つ上の姉と、同い年の幼馴染と、その幼馴染の優しい母親に見
守られた生活は、その人生は満たされていた。辛くなかった訳じゃ
ない。愛して貰えない自分を憎まなかった訳じゃない。それでも生
きてきた年月を、その中で出会った多くの優しい人達を無かったこ
とには出来ない。全てを 全ての過去を断ち切れるほど強くはな
いから…。

だから、こんな風に引き摺ってるんじゃないか…。

無様にも思える自分の姿に彼は自嘲の笑みを浮かべる。

聞こえるのは水の流る音と、自分の呼吸する音だけ。胸に
響くはずの鼓動はとうの昔に失ったから、この胸は高鳴る事を知ら
ない。だから、この胸は“痛み”を感じることもなく冷たいまま“
案内人”としての務めを果たせる。その筈だった。

この痛みは 幻だ。

胸に纏わりつく鈍い痛みに失くした筈の心が震えるなんてあり得ない。全てはただの幻に過ぎないのだ。

そんなことを考えて知らず溜息が零れる。

その溜息は誰に聞かれるわけもなく風に溶けて消えた。そつと空に問いかける。

「ねえ、ライ」

キミは何もかも知っていたんだよね。きっと。

痛みも、悲しみも、絶望も、そしてこの先に待ち受ける全ても。

見上げた空の青さに罨は不意に眼を細めると、ふわり頭上に落ちる影が重なる。いつだってこんな時に現れる人物。それは一人しかいない。

「戒人^{かいと}」

「いるんだろう？ 出てきてよ」

「……」

無言の影に語りかけて罨は静かに瞳を伏せる。少し冷たくなった風から守るように優しく身体を包む影にそつと力を抜いてもたれかかれれば、影はその姿を現し彼を受け止めた。

戒人^{かいと} そう呼ばれる彼の存在を知る者は管理事務所の中では勿論、閻魔庁の中でも多くはない。古くは“月読の民”とされ、その

紀元を知る者もいない　だが古の頃より、人の死を狩り取るのは彼らの役目だった。

もつとも彼らに“心”という概念はない　そんなものがあつては人の死を狩る事に支障が出てしまうから…。

でも、戒人^{キミ}には“心”が生まれた。

瞳を開けば見える肌は紫がかり、その爪は鋭く長い。人よりも長く薄い身体を持ち、その身体に熱を宿す事もないがそれでも墨に迫る風や雨を凌ぐことぐらいはできる。彼からはいつも白檀の香りが漂い、荒れた心を癒す様なこの香りはいつだって墨の気持ちを落ち着かせてくれた。

「ありがとう…」

「……」

交わす言葉を持たない彼は言葉の代りにそつと墨の頬を撫ぜる。その仕草に墨は曖昧に微笑んでから、彼の手に自分の手を重ねた。この冷たい指先は人の命を狩る為のものではない　誰よりも優しい彼が傷付く必要など何処にもないのだから。

「大丈夫。墨^{ボク}は憎しみに囚われているわけじゃないんだ」

彼の肩越しに見える空に眼を眇め、そつと溜息を零す。

その空はやはり暗く寂しいものだった。

孤独の音へ3・2〈（後書き）

自分の身体に戻る方法を探る雪たち。

そして、一人行動を別にした墨。

新たに現れた月読の民 戒人 とは一体？？

おはようございます〜^^

執筆がなかなか進まず思考錯誤の時期に差し掛かっています。

それでも登場させなければならぬ”戒人”を出すことが出来たので、少しホッ…です。

墨過去編は二部構成で書く予定なので、ここであんまり過去に触れちゃうと後の話がネタばれになるし…orz

すでにネタばれ感満載ですが、そこは突っ込まないで下さい^^；
せつちゃんは無事に身体に戻るんですかね〜（。・。・）？

安らぎと云う“闇”の中、彼は過去の夢を見る。

時折混じる血の紅は今もあの日のように鮮やかで、首に纏わりつく感触に息苦しさを思い出す。僕はそのまま死ぬのだろうか。

モウ、オマエハシンデルヨ…。

嘲笑う 自分の 声が耳元を掠め、目元を塞ぐのはソレとは違う
誰よりも低い体温を持つ、けれども誰よりも優しい人の手だ。

だから 罊は漸く眼を開いた。

「戒人？」

「」

ふわり漂う白檀を背に感じ触れる掌をゆつくりと外す。空の青さに眼を細めれば覆い被さるその影はいつだって共にいたモノ。一人では生きられないと悟った時から、優しすぎる死神 戒人 と、憎しみに飲まれた人間 罊 は二人で一つの存在となった。そうしなければ二人とも互いの存在を残せなかったから…。

「キミは僕といて不幸じゃないかい？」

哀しいような寂しいような眼をした罊を戒人はそつと見下ろす。
その眼に宿す色は罊の記憶に残る 紅 と同じ色で、けれども罊はその色が嫌いじゃなかった。月読の民として人の死を狩り取る運命を背負って生まれた彼は、“心”を持つが為にこの世に存在した瞬間

間から異端として侮蔑され、その優しさ故に人の死を受け入れられなかったという。そして。

僕がキミの代りになるよ

それは心の底から生まれた“瑠衣”自身の願い。

優しく傷付きやすい“戒人”の代りに、自分がその“咎”と“役”を引き受ける。そしてこの瞬間から、言葉は“誓約”となり、彼は管理官だけではなく“案内人”としての生命を与えられた。戒人と共に生きる為に。

言葉は“鎖”になる。

吹く風は戒人の身体に阻まれ墨に届く事はない。高い空に手を伸ばして彼の顔を覆う黒布に触れると、不意に彼の肩が震えた。

「僕が怖い？」

「大丈夫…何もしないよ」

わずかに瞳を逸らした戒人に墨は自嘲気味に笑うとそっとその布に手をかける。一思いにはぎ取れば露わになった鼻から口元、そして首筋に指を滑らせて怪しく自分の口唇を舐めて見せる。その指の先、肌の下に流れる“紅”の音を感じて…。

「墨っ！」

その刹那、ガタンツと大きな音と共に手首を掴まれる。陽光を背負う人物に怪訝そうに眉根を寄せて視線をやれば、そこにいるのは見慣れない少女。ソレが“雪”だと理解するのに、少しの時間を

要した。

「雪……？」

「何してんだよっ、お前！」

「……」

「……」

不機嫌を露わにした少女に、墨はただ茫洋とした瞳を向けて黙り込む。二人の視線が交錯し、一瞬にして冷たい風が二人の間に吹き込んだ。そして。

「」

大きな影が二人の上に被さると雪を引き離すように掴まれた手首に向けて戒人がその鎌を振り上げる。磨き抜かれた鎌はその刃を曇らすことなく陽光に怪しく煌めいて、一陣の風と共に雪 正しくは福山悠里、その少女 の手にピタリと当てられた。触れてはいないのに、その手首には紅い筋が浮かぶ。それでも雪はその手を離さなかった。

「戒人 ソレをどけろ」

「」

低く呻る雪の表情は窺えない。

墨は驚いたように眼を見張り、戒人は無言のまま上から二人を見下ろす。一触即発の空気が流れ、最初にその空気を壊したのは墨だった。

「戒人、僕は平気だから……それをしまつて！」

我に返り掴まれていた手首よりも先に“戒人”^{カレ}の鎌に触れる。見上げたその顔は、常になつた黒布を纏い表情はない。“死神”としての彼がそこにはいた。一息を飲んで、もう一度彼の名を呼ぶ。その言葉に“霊力”^{ちから}を込めて。

「戒人」

その声に彼の身体は揺らぎ、手にしていた鎌は霧のように掻き消える。まるで何かに縛られているかのように戒人は空中で動きを止めた。その姿を確認して雪はそつと墨の手を離す。

「雪、ごめんっ…ソレ」

「……いいよ、別に」

離れた手を追いかけようとして触れる瞬間にその手を振り払われる。意図を持って逸らされた視線と、手首に走る紅い筋。見慣れないストレートの黒髪から見える表情は曇りがちで、伏せる瞳には睫毛の影が差していた。よく知る雪^{カレ}のはずなのに、その憂う姿に墨の鼓動は高鳴る。不思議な感覚だった。

「それより」

「…?」

徐に自分の手首に浮かぶ紅い筋を舌でペロリと舐めると、雪は顔を上げずに墨に向き直る。その声は至極真剣なモノだ。

「お前 “血”が欲しいのか？」

「っ」

彼の言葉に鼓動は大きく脈打ち、言葉を発する事も出来ずに息を

飲む。眼を逸らしてきた事をさらりと言い当てられ墨は動揺を隠せない。理性で留めていた“本能”が疼きだしている事も事実だった。

俯いた墨の頭上に諦めにも似た“溜息”が零れる。

それは紛れもなく雪のもので、彼が今どんな表情をしているのかも墨には分かってしまう…。だから余計に顔を上げる事が怖かった。

「とりあえず…もう少し我慢できるか？」

「　　っ??？」

彼の言葉に驚いて顔を上げれば、そこに待っていたのは曖昧に笑う雪の顔。哀しいような、困ったような、そんな複雑が詰まった笑顔がそこにはあった。そして。

「俺が自分の身体に戻ったら、提供してやれるから…」

「雪…」

「さすがに、この身体じゃまずいだろ？」

「　　」

冗談めいた言葉に墨も自然眼を細める。

その眼に、もう“紅”は見えなかった。

孤独の音へ3・3〈(後書き)〉

謎と傷を抱える男 罍。

その眼に浮かぶのは紅、そして一人では生きられない戒人と罍は一つになる。

謎起き「罍過去編」更新です。

こんばんわ〜^^

夜勤明けの変なテンション、すみませんっ！

とりあえず話が大きく横道にそれながらの更新です(。・。・)
このままなんとかなるんだろうか??

そんな感じで続きます

孤独の音〈3・4〉

眠りに落ちた自分の身体を見下ろし、雪は居心地の悪さを感じずにはいられなかった。まるで死んだように白い肌に、光が当たれば銀色に輝く色素の薄い髪。落ちる睫毛の影は儚さを演出し、雀が冗談で言った“黙っていれば美少年”とやらも否定できない気がしてくる…。

柄にもないこと思っなよ…俺。

どうせこの身体は依り代。

とこの昔に失くした身体の代りに、一先ずの間“魂”を留める為に用意された器に過ぎない。それなのに…。

「可笑しいのは、この子だ」

何の靈力も持たない一般人の少女が、管理官である雪と交わるなど。しかも触れた、その一瞬のうちだ。生死の分からない、それも自分の記憶を失くした不安定な状態で入れ替わるなど例え管理官でも危険行為と言えるだろう。

問題は、入れ替わったはずの“雪”の身体に彼女が居ないことだ。

自分の頬に触れ、そこに何者の気配もしない事を訝しむ。体温も呼吸も、その生命の息吹さえも聞こえて来ない身体は何とも無機質で“人形”のようだった。

彼女 福山悠里 は何処へ行ったのだろう…。

「雪…?」

不意にドアを叩く音が聞こえ、それと同時に涼やかな女性の声が響く。この声の主は狐だ。

様子を窺うような声音に雪は聞き慣れない声で「どうぞ」と返事を返す。戸惑っているのは周囲まわりだけじゃない。自身でさえ急なこの展開に振り回されているにすぎないから…。

「彼に連絡がついたわよ」

「……サンクス」

開けられたドアから覗くストレートの髪に、雀によく似た それでいてとても落ち着いた表情の 彼女は短く用件だけ告げると困ったような笑みを浮かべて室内へと足を踏み入れる。彼女もまた雪の姿に戸惑っているのだろうか…。

お互いに言葉はなく、雪はただそこに横たわる自身を眺めていた。別段どうといった感情もわからないが、頭の隅でそういえば彼はこの姿を気に入っていたな…とか、人ごとのように考えている自分に泣きたいような、笑いだしたいような妙な感情が湧きおこる。そして少し遠くにあった気配がすぐ隣まで来て、そつと雪のものじゃない頭に触れる。とても優しい指先。

「大丈夫よ。すぐに戻れるわ」

「……狐」

普段口数の少ない彼女から発せられたのは気遣いの一言。どうしてこの連中はこつても簡単に欲しい言葉をくれるのだろう…。

曖昧に相槌をして笑みを返せば、自分よりも少しお姉さんに見える彼女はまるで鏡のような曖昧な笑みを返した。

「そういえば、よく通じたな？」

「……？」

「俺、罫からしかダメだと思ってた」

普段なら彼への連絡の一切は“罫”が行っている。

それが彼への連絡手段であり、また依頼の方法でもあったからだ。それなのに……。

「今は罫が動いてくれそうにないから……やむを得ずよ」

「うん……」

「それに、このままの状態の貴方を独りで下ろすのは許可出来ない
と“要”さんからも言われたわ」

「要が？」

雪の言葉に狐は無言で頷く。

“最高責任者”というのは名ばかりで本来は殆ど干渉しない男

要 が今回に限り口を出したということが少々気掛かりでならない。

なんかあるのか？

訝しんでしまうのは、それだけ要を信用していかないからだ。普段から負真面目で、飄々とした態度を崩さない。実は存在そのものが冗談じゃないかと思っただ事さえあるほどに彼は不確かな人物で、多分管理事務所の中で最も“信用”という言葉が似合わない男でもある。そんな彼だから何か事を起こした時には裏を考えてしまう……。

「大丈夫よ。サポートはしっかり務めるわ」

「……」

思案顔で俯けば彼女からの頼もしい言葉が肩口に降る。

彼女 狐 は、雪と同じ“空間移動管理官”であり経験も短くはない。どちらかというと言で無言で依頼をこなして行くタイプで、それだけに仲間からの信頼も厚いと言えた。でも…。

「悪い…」

雪は視線も合わせずに頭を下げる。その心に僅かな“罪悪感”を宿して…。

彼女の身体に与えられた誓約は“地上”に降りないこと。

それは彼女と同じ存在である“雀”にも課せられたモノで、それ故に二人はこの狭い世界からは出られない。

二人に与えられたのは、この狭い世界と“記憶の海”での自由だけだ。

だから“地上”には行けない…。

例え逢いたい人が居ても。

それが二人に与えられた“鎖”で、これを破ればその存在は失われる。それが分かっているのに、今回も“地上”での探索に二人を巻き込んだ。

直接的ではないにしろ、間接的に事務局内でのフォロー・指示、そして“記憶の海”との連携は必ずしも必要になってくるだろうか…。

「気にしないで」

「…でも」

「私達は“鎖”を重荷だとは思っていないわ」

「…」

狐が困ったように笑う。

雪の気持ちを汲んでくれた言葉たちは、また一つ雪の心に積もる。きつとこの笑顔を一生忘れないと　そう思った。

「準備が出来次第、地上したに降りなさい　雪」

「……うん、分かった」

狐の言葉に今度はしっかりと眼を見て頷く。

今は“自分に出来ること”を精一杯にやる　それが、自分に与えられた使命だと思う。例えば器は変わっていても自分が管理官せつであるうちは、この魂が口果てるまでは歩く事を止めない。歩き続けて見せる。

そうだろ…ライ。

もう一度、そこに横たわる自分の顔を見つめ問いかける。

差し込む日差しが雲に遮られれば、その姿は闇を纏い黒い髪へと姿を変えて行く…そこにもう一人の自分を見た気がした。

“答え”はないけれど、そこにいるはずの“自分カレ”　。

決意は行動を生み、雪は一人で管理事務所を後にする事になる。

沢山のひと、記憶オモイが交差する“地上”へと　。

孤独の音〈4・1〉

季節はじめじめした雨季を過ぎ、ようやく梅雨もあけたという七月。揺れる木々の間から洩れる木漏れ日は鬱陶しいくらいにぎらぎらと照りつけ、人気の増えた繁華街や駅前には浮足立った若者たちが屯している。どうやら学生は長かった一学期を終え、待ちわびた“夏休み”とやらを迎えているらしい…。そして。

「神　　　　　と、違うか」

「…？　いや、“神谷”で良いよ」

不意に後ろから声をかけられて振り返る。

待ち合わせは渋谷の八千公前。

なんてベタな場所だろうかとも思ったが、色々と都合がいいのでこの場所を指定した。そうして定刻よりも前にやってくるこの律義な男　イチ　が、見慣れない私服だった事に少し驚いてしまう。Ｔシャツとジーンズというラフな格好が余計に雪を落ち着かなくさせた。

こいつも普通の高校生なんだな…やっぱ。

制服の上からでは分からない男性特有の引きしまった身体には無駄な肉が殆どなく、割と細身だと思っていたその胸板は意外にも厚く見える。少し切ったのだらう黒髪が蒸し暑いビル風にのれば、そうとは思えないほど爽やかな雰囲気纏っていた。常よりも高い位置にある目線がイチの顔をより近くすれば、その精悍な顔つきに胸は小さく高鳴る。

どうかしてるだろ…俺。

人が変わればこうも感じ方が変わるのだろうか。

そう思わずにはいられない程、普段ならば煩わしいだけの人混みも、喧騒も嫌では無いと思える。これは身体の主　福山悠里
の感覚なんだろうか…。

やっぱり、入れ替わったと言うより、同調したと言った方が適切なのか？

長い黒髪を結うでもなく真っ直ぐに垂らして、碧いキャップの帽子を深々と被る。一般的な女子高生が着そうな私服とやらを雪が自前で持つているわけもなく、洋服は管理事務所の秘書をしている女性に適当な物を見繕って貰った。そんな彼女の格好にイチが訝し気に眼をやる　まるで値踏みでもされているようなように頭のとっぺんから爪の先までを見ると、困ったように苦笑いを漏らした。

「何だよ？」

「……洋服、自前か？」

馬鹿にしたような、呆れた様な彼の声音に雪は思わず息を飲む顔が熱を持つのを感じた。

「　　つな、そんな訳あるか!!」

カップルの痴話喧嘩かと、八子公前で待ち合わせしていた幾人もの若者が振り返り訝しげな視線を向けるが、それでも二人はお構いなしに会話を続ける。もつとも熱くなっているのは雪だけのようだが…。

「…誰に借りた？」

「……」

「…?」

「……遊樹さん……」

雪の小さく呟かれた言葉に、イチは瞠目してからもう一度彼女の格好に眼をやる。白地に胸元を覆うように黒いレースのついたキャミソールに、スリットの入った短い黒のスカート。しかも生地は光沢のあるものだ。足元は飾り気はないものの、洋服を揃えた人物の趣味が一目で分かるほどの10センチほどの高さのピンヒール…。
かろうじて着ている薄手のパーカーが肌の露出を減らしてはいるものの、明らかな“人選ミス”にイチの頭は痛くなった。

「…人選ミスだな」

「うっ……」

自分でも薄々感じていた処を指摘されて雪は二の句が継げなくなる…。

“探索・調査”に来ておいて、この格好では自由に動く事もままならない。履きなれないヒールに待ち合わせ場所（こゝ）にくるまで何回つまづきそうになった事か。ざっと数えただけでも片手じゃあ足りないだろう…。

軽い溜息を頭上に落とされれば顔を上げた雪の眼に映るのは、思いがけずも優しい眼のイチ。この男はこんな表情をする奴だったろうかと思いつめれば、先に視線を逸らしたのはイチの方だった。

「とりあえず、着替えか？」

「……いや、いいよ」

「その格好で動くつもりか？」

「……だってメンドーじゃん」

雪の言葉に今度は思い切り溜息を吐く。
眉根を寄せて考える仕草を数秒すると、彼は何かに思い当たったのか真剣な眼差しで雪を見た。そして。

「来いっ」

「えっ、ちよっ…イチ!？」

半ば強引に雪の細い手首を掴むと有無を言わずに歩きだす。予想以上の力で引かれた腕は痛み、歩きづらいハイヒールに半ば引きづられるようにしてイチの後ろをついて行くことしか出来なかった。

*

人混みを抜け、木漏れ日の揺れる街路樹の路を抜け、辺りはだんだんと静かな住宅街へと向かう。時折気にかけるように視線を向けるイチの後ろをただ黙ってついでに行く。見た事もない場所にキヨロキヨロと視線を彷徨わせれば不意に黒い影が視界を塞ぐ。イチの手だ。

「あまり見るな」

「…なんで？」

「いいから」

振り向く事もせず雪の視線を遮った男は、その表情も見えないまま口数少なく目的の場所を目指して歩く。そうして辿りついたのは周りを緑に囲われた古びた赤い煉瓦屋根の建物。広い庭先には洗濯竿に干された子供服がゆらゆらと風に揺れ、あちらこちらに遊具らしき物が転がっている。

学校と呼ぶには陳腐で、一般的な一軒家よりも大きいソレは何かの

“施設”のように思えた。

ココは何だ？

「イチ、ココは？」

「……」

相変わらず無言のイチに雪は溜息を吐くことしか出来ない。門扉を開けて中に入るイチの足取りは重くより一層暗い顔をしている。それでも「ただいま」と声をかけ奥へと進んで行った。訳も分らずその後ろを歩く。

ここが…家？

玄関の重いドアを開け、通されたエントランスには無数の靴が転がっている。リビングからは賑やかな笑い声と、はしゃぐ子供の甲高い声。それから。

「ピアノ…？」

「……芽衣だ」

「メイ…？」

ようやく答えたかと思えば誰の名前かも分からない言葉のみ。苦笑いで溜息を漏らせば、暗い廊下を抜けて開けたリビングへと足を踏み入れた。

孤独の音へ4・1〈（後書き）

単身地上に降りた”雪”。

そこに待ち受けていたのは地上探索方”イチ”だった。

彼に引きずられるように辿り着いた建物とは。

そしてイチの言う”メイ”とは。

こんにちわ。

予想外の二話更新です。

実は《4・1》が先に出来ちゃって、それだと余りにも話の展開が急だったので慌てて《3・4》を書いた感じですよ^^;

なので、二話更新。

ようやく「ノスタルジア」も50話まで来れました。

この先、一旦お休みします……が、早めの活動再開を目指します
ので今後ともヨロシクお付き合い下さいm)——(m

それでは、またいつか…。

孤独の音へ4・2（前書き）

連載再開記念

> i 2 0 9 3 7 — 7 1 5 <

長らくお待たせ致しました。

墨過去編「孤独の音」再開です。

孤独の音へ4・2

自分の罪の重さを思うと、いつだって浮かぶ顔がある。

与えられた“咎”がこの僅かばかりの心を支え、そうして今も僕を生かしている。

憎しみよりも。哀れみよりも。

今もこの心を埋めるキミへの“愛情”^{オモイ}だけが、“瑠衣”であることを忘れさせなかった。

ホント、つくづく人って生き物は強欲だよ。

薄暗い室内の冷たい窓ガラスに額を擦りつける。

今日は一段と冷えるのか、その無機質なガラスは白く濁り今にも泣き出しそうな表情をしていた。呼吸でより一層白くしたソレを人差指で軽く撫ぜれば浮かぶ文字は無意識にも人の名前を模っていく。“芽衣”と。

「っは…何やってんだか」

自嘲を漏らした唇は、その眦は哀し気に八の字を描き出して細められ誰に見られる前に彼はガラスに映し出された名前を掌で消した。その刹那。

「墨？ いるの？」

扉越しにかけられた声に思わず肩を震わせ息を飲む。扉のすりガラスに映る人影は華奢な女性のもの。ともすれば、訪れたのは“狐”だろうか…。

「…ぐいぞ」

一つ息を吐いて平静を装つと、墨は立ち止まる人物を部屋の中へと促した。

*

一方、地上。

開けたリビングに通され眼の前に広がった光彩に眼を細める。

古びた木造の建物の中は割と真新しくてきちんと整理された室内の中に所々広がる玩具たちが返って色を出していた。何処となく懐かしい人の気配と差し込む陽の匂いが鼻をつく。一つ呼吸を落として眼を開けばそこにはお世辞にもきれいとは言えない萎びたピアノと、それを叩く綺麗な指のよく知る横顔があつた。墨だ。

「るっ」

「違っ」

思わず出かかった言葉を無理矢理イチによつて塞がれると、耳元に響く微かな声が表情を変える。どうして彼は動揺しているのだろうか…。そして。

「芽衣」

イチの声に反応してよく知る横顔の肩が揺れる。伏せられていた頭は上げられその眼がイチを捉えて瞬間、驚いたように見開かれた瞳。そして少女は控えめに笑顔を浮かべた。

「…一喜？」

「ただいま、芽衣」

少しの距離を置いて視線を交わす二人の間には、何故だか“寂しさ”とか“哀しみ”の色が漂っている。本能的に雪はそう思った。それが何かは分からないが。

深く交わされることの無い会話を流して、芽衣と呼ばれる少女にイチが二言三言事のあらましを説明するとイチの後ろに立つ雪を覗きこんで彼女はそれまでとは違う“笑顔”を向ける。その笑顔に重なるのはよく知る人 壘の面影。

「いらっしやい。こちらへどうぞ」

ふわり漂う花の香りと柔らかな少女の白い手が雪の冷たい掌を覆えば、言葉もなく少女に手を引かれ奥の部屋へと誘われた。着替える為に。

「どんな服が良いかしら」

「……」

独りごとのように呟く少女の背を見つめ雪は茫然とその姿を眼で追う。意図していた訳ではないが、同じようなお姫様カットの長い髪が揺れるたび、その横顔が、長い睫毛の瞳が伏せられるたび、口元が優しく笑みを刻むたびに 彼を思い起こさせた。

違う。こんな風に干渉することはいけないことだ…。

本当は気付いている。

この少女が壘に “ 駆城瑠衣 ” に直接関係する人物である事を。街で偶然すれ違う程度ならば気付かなかったかも知れないが、今は生存していた頃の、普通に人生を歩んでいた頃の瑠衣に一番関わ

りの深かった“一喜”と一緒にいて、そうして彼が連れてきた場所に“彼女”がいた。否定すればするほどに湧き上がる“確信”に雪は独り眼を伏せる。

こんなの“本望”じゃないだろ？

あの頃の記憶はない。

瑠衣が“管理官”になった時のその経緯と思いを“雪”は知らない。

知っているのは彼だ。この記憶は全部彼のモノなのに…それをどうして今思い出す？

何も出来ないのに…してやれることなんて何一つないのに…。

いつの間にか見つめていた少女の瞳と自分の瞳が交差する。どうしようもなく泣きたい気分だった。

「どうしたの？ 大丈夫？」

「」

何も言えなくてただ俯く。

その瞳を真っ直ぐに見つめることなんて出来ない。それなのに。

「大丈夫よ…大丈夫」

「」

不意に引かれた身体を少女の温もりが包む。抱きしめられている事に気づくまでに少しの時間がかかったのは言うまでもない。近づいて余計に強くなった墨の気配を打ち消すように、雪は少女の身体

を勢いよく離れた。

「ごめんっ、あの、俺っ」

動揺を隠せずに雪はただ謝る。その頭上に少女の柔らかい笑みが降った。

「良いの…私こそ急にごめんなさいね」
「……」

正面で見る少女の笑顔はきつといつの日にか瑠衣に向けられたものと同じ。そう思うと余計に胸が苦しかった。その時。

「雪、芽衣」

不意に室内にノックの音が響いてドア越しにイチの声が聞こえる。その声に雪は思わず安堵の息を漏らした。そんな雪の様子に気がついたかどうかは分からない。けれども少女は「今行くわ」とドア越しに声をかけて、それからもう一度柔らかく微笑んだ。

「さあ、これを着て 貴方には成すべき事があるのでしょっ？」

「っ」
「事情は分からないけれど…今貴方に出来る事をした方が良いわ。後悔をしない為に」

「それっ」

瑠衣と同じ言葉を囁く少女を見つめる。

その眼は一点の曇りもなくまっすぐに雪へと向けられていた。

手早く着替えを済ませ木造の建物を立ち去る。

その背には一言「全ては神の御心のままに」という少女の饒
の言葉が掛けられていた。

孤独の音へ4・2（後書き）

お久しぶりです。

一月以上のお休みを頂き、なんとか桜が本格的に開花する前に活動再開ができました^^

読者さま、お気に入りに入れて下さっている方には長らくお待たせしてしまいすみませんでした。

今後の展開としては新キャラ登場、続編の内容もちよっと入れつつ更新していきたいと思います。

言い訳がましいですが、作者の頭の中には何の展開もありません。行き当たりばったりで本人（雪たち）の動きを追っています。

今後も彼らの活躍を生ぬるい目で見守ってやって下さい。

彩人。

街に戻り二人は人混みを避けるように一つの店へと居を移す。地上にいてもなお管理局からの“情報”を得られる場所「インターネツトが使える喫茶店」　いわゆる“ネットカフェ”と呼ばれる場所の狭い個室に二人は密着する形で入りこんだ。

直接触れる肌の感触は自分のモノではないのに、思わず身体を引いてしまう。他人の体温に触れることはあまり好きではなかった…。

「っ悪い」

「…いや」

「…なんか結構狭いんだな」

「…そうか？　こんなものだろ」

畳二枚分くらいの広さの部屋に、ソファが一つと備え付けのデスクに置かれたPC画面が一つ。二人はその画面を食い入るように見つめる。

実は地上探索型管理官であるイチヤ、空間移動管理官である雪が地上に降りて行動するときにはこういった店を利用することが多い。勿論どの店のどの機械でも通じる訳ではなく、ある程度利用できる店と機械は限られているわけだが…。

そこんところが不便だよな…ホント。

長い髪を後ろに払い雪はソファに身体を預ける。

仮の身体ではなく“生身”の身体であるせいか、いつもよりも数段疲労の蓄積が早い。地上に降りている間は、その期間が一週間程度ならば適度な仮眠だけで事足りていたのだが、今回はどうもそう

はいかないらしい。身体が疲労と共に“眠気”を訴えて雪の意識を重く沈めて行く…。

眠りにつく刹那　聞きなれた声を聞いた気がした。

*

一方、ノスタルジア記憶管理事務所内。

いつもより静かな事務所内「管理局」に響くのはキーボードを叩く音と、無機質に動く機械の音だけ。そこには雀と、狐の姿しかなく“墨”は出払っていた。そして。

「　っ」

「…雀？」

不意に息を飲んだ片割れの様子に気が付き書類整理をしていた狐は本棚の間からひよっこりと顔を覗かせる。その瞳が訝し気に揺れた事に気づくモノはいない。

灯りをつけていない部屋の中は薄暗く外から差し入る陽の光と、幾つも並べられたパソコンのモニター画面からの光だけが二人の位置を教えている。互いが互いの存在を感じられる場所に居る事が当たり前だった。

不意に俯く雀の姿を視界の隅に確認して狐は傍へと歩み寄る。彼の隣にしゃがみ込んでその顔を覗けば、何処となく辛そうに寄せられる眉根ときつく閉じられた瞳　そしてその手は首に架かる“戒め輪”へと伸ばされていた。

思わず雀の肩を揺すり、その名前を呼ぶ。そうしなければ不安で押し潰されてしまいそうだったから…。

「雀っ！…！」

「　　っつう」

「　　！？」

「…はっ」

一つ息を吐きだして添えられていた手をヒラヒラと左右に振って見せる雀。自嘲の笑みと開かれた瞳の揺れる色に狐は言葉を失った。逸らす事も閉じる事も出来ずに彼へと向けられた視線が同じ色の瞳と交われば、そつとその冷たい指先が狐の頬へと当てられ彼は微笑む。その口元に“大丈夫”という言葉を刻んで、小さな頭を自分の胸元へと抱きこんだ。不意に力強く引かれ狐は成す術もなく雀の腕の中へと滑り込む。そこに言葉は必要^{いふ}なかつた。

「ちよつと、ドジっただけ」

「……うん」

「探してた情報^{もの}と、俺らの探せない情報^{もの}が偶然重なつてた

「……うん」

互いの表情は見えないけれども、その心は痛いほどに伝わってしまふ。

少し震える彼の指先と、彼の背に添えられた掌の指の冷たさは同じモノ。本来ならば消えてしまつていた“命”を繋ぎとめたのはお互いへの気持ちと執念であり、そして課せられたモノは“誓約”と言う名の“鎖”だった。

気まぐれに留まらされた命が、元は一つであつた命が離れてしまった事が悔しい。でも、それ以上に互いが互いを思い合えるこの距離が二人を支えていた…。

「狐…ごめんな」

「…うん」

「……ごめん」

「………」

謝る彼に何も言うことが出来なくて、狐はただその背を優しくさする。そうすることでこの気持ちが届けば良いと願いながら…。本当は分かっているから、そこに言葉は存在しない。これまでも、そして“これから”も。

「入るわよ　っ!!」

ノックの音もなく豪快に扉が開かれ、辺りに立ち込めていた“憂い”は何処かへと吹き飛ばされる。開いた扉の入り口には廊下の明るい陽を背負った華奢なシルエツトが仁王立ちのように立ち塞がっていた。それは突然の再会。

「なっ、お前っ」

「!?!」

絶句している二人をよそにその年頃の少女は5センチほどのヒールの高さのニーハイブーツをカツカツと打つ鳴らし部屋の奥、二人の前まで歩みを進める。その足音は止む事を知らない。

迷うことの無い足音に、勝気な瞳。肩口で切り揃えられた茶色の髪には青い花飾りが揺れて微かに鈴の様な音が風に響いた。彼女は…。

「邪魔するわよっ」

「お前っ、相原……」

眉根を寄せて少女を見る雀の眼差しは常よりも険しい。狐も何処となく不安気に視線を揺らすと少女の真っ直ぐな瞳を見つめ返す。どちらの瞳にも“戸惑い”の色が見て取れた。

「なんで“案内人”のお前がココにいるっ!?!」

「……………」
「答えるよ」

雀にきつい言葉をかけられても動じることなく少女は上から二人を見下ろす。雪によく似た意思の強さをもつ、けれども管理官とは決して相容れない立場にいる“水先案内人”の少女 相原 心^{あいはら こころ} はただ言葉もなく二人の先のパソコン画面を見つめた。その刹那。

「心 っ」

開け放たれたままの扉から慌てたように飛び込んできたのは罍
そして見慣れない少年の姿がそこにある。罍は困ったような苦笑
いをその口元に浮かべて三人の元へと歩み寄り、その口を開いた。

「ごめん、二人とも」

「罍！ これはどういうことだよ？」

「 どうしてココに彼女が？」

「……………うん」

曖昧に相槌を打つと徐に視線を泳がす罍の後ろから少年は音もなく近づくと、まるでそれが当たり前のごとくのように衝撃的な一言を告げる。

「^{彼女}心は本日付けで“^{候補生}空間移動管理官候補”となります」

「 っ！？」

「 ……何を…」

「 何だよ、それ」

静かな室内に雀と狐の声だけが響く。

心と呼ばれる少女も、罌も、そして謎の少年も誰ひとりとしてそれ以上口を開こうとはしなかった。ピリピリとした緊張感を張り巡らせ、それを壊すのは唐突に繋がる無機質な電子音。その場にいた全員の視線がモニターへと移れば、そこには数字と文字が意味を成さずに羅列となり画面いつぱいに蔓延る。カタカタと操作もしていないのに勝手に打ちつけるキーボードは誰の意味とも取れずに情報の解析を行っていく。

それが終わるのを待たずに雀は徐に回線を横取りすると、違うモニターを立ち上げて何処かへと連結する準備に入る。

事態は動き始めていた。

*

暗い意識の隅に微かに聞こえる電子音と人の声。

これが……ですか……

ああ。

微かに息を漏らす男の笑い声。何処かで聞いた事のあるような……懐かしい感覚に雪は眉を顰めた。

沈んでいた意識の淵に差し込む光は、どこかあの景色に似ている気がする。呻るように重い身体で身動ぐと肘が何かにぶつかった。

「っ」

「??」

「神谷、もう少し寝像よくはできないものか？」

「……えっ」

不意に呼ばれた名前に振り返れば、微かに眉を顰めた男の顔

その手は右のわき腹を抑えて冷たい視線で雪の事を見ている。そこで初めて自分が彼に肘鉄を喰らわせてしまった事に気づいた。なんというか 言葉も出ない。

「……………」

「なんだ？」

「あつ、その、ごめん？」

「…何故疑問符をつける？」

「…うん」

決まり悪そうに視線をずらせばイチが小さく息を吐いた。その眼は依然パソコンの画面へと向けられている。

「えと…どっ？」

「……………」

重い身体を起こして雪は身を乗り出すように彼の横から画面を覗きこむ。狭いせいで密着してしまう身体を気にするでもなく彼はついた頬杖をずらさずに無言のまま視線だけを彼女へと向けた。そして空いた左手をふらふらと彷徨わせると画面の中央へとその骨ばった指を持つてくる。

「……………」

「これから始まる」

「…？」

「先刻、雀から合図が来た」

画面には黒字に緑色の文字の羅列が並んでいる いや、蔓延っていると言った方が分かりやすいかもしれない。勝手に動く文字たちを眼で追うでもなく隣にいる男はただ茫然とその画面を眺めている

る。ちかちかと点滅するようなその動きに雪は一瞬で眼を逸らした
これは、眼に悪い。

「俺、これダメ 眼が痛い」

素直にそう告げると微かに息を漏らす音が耳につく。それが嘲笑
なのか何なのかを知る由もなく顔を上げれば、眼の前に優しい影が
差した。

「うわっ」

「なら、見なければ良い」

「って、えっ?!」

その影を作っているのが彼の無骨な手だと気付くのに時間はかか
らなかった。守られた視界の指の隙間から微かに覗く彼の表情はい
つもと変わらないのに、画面から送られる緑色の淡い光に照らされ
たイチはいつもよりも優しいような気がした。微かに心臓が跳ねる。
それが自分の物なのか、それともこの身体セツの少女 福山悠里 のも
のなのかは分からない。けれどもこの瞬間向けられた“優しさ”は
他でもない自分の為にあるのだと思うと、何となく温かい気持ちに
なる。こんな風に誰かと過ごす時間ならば悪くない。

なんて…柄にもない。

奪われた視界を好都合とでも言うように眉を顰めると、心の中に
一つ溜息を落とす。この優しさは自分に向けられていいものではな
い。そう思うと、温かさとは別の複雑な温度が胸に湧き上がってく
る。だから彼の手をそつとどけて不意に雪は顔を逸らしてしまう。

「神谷？」

「いや…もう大丈夫…だから」

歯切れの悪い言葉たちを並べて雪は深くソファに身体を沈める。
一瞬彼の視線を感じたが、次の瞬間にはその視線は外され何事もな
かったようにパソコンの画面へと戻された。

暗黙の了解…か。

お互いの過去に触れないこと。傷には見て見ぬふりを 関わる
のならば、その“記憶”全てを受け入れる覚悟で臨みなさい。
それが“管理官”の中の暗黙^{ルル}の了解。これがある以上お互いにお
互いの事に干渉することは出来ない。

それを認めた瞬間、俺たちはその“権利”さえ失うんだ…。

関わる事を怖がればそこに待つ暗い過去や、醜い傷に触れなくて
済む。例えまだその傷跡から紅い血が滲んでいようと…。

長い髪の間から深い溜息を零す。その刹那、まるで雪の吐息を打
ち消すように甲高い電子音と共に画面の中の緑の文字たちがぐにや
りと歪んだ。

「来たかつ」

「ああ」

思わず飛び起きるとイチの肩を掴んで身を乗り出す。肩に滑る髪
を後ろに払いのけ雪は徐に腕時計を確認する。時刻に狂いはない。
管理事務所のある閻魔庁と地上では時の歩みが違う だからこれ
は今の閻魔庁の時間。そして、^{メザコンピューター}記憶の海の中にある“核”の時間。
核の起動に必要な動力は莫大、その上負荷も多い 例えば地上で
暮らす人類が一日に必要なとする電力量に相当する。その為、繋がる

時間は極僅かでそれ以上の負荷は核の存在を揺るがすものになってしまう…それが今の閻魔庁と管理事務所の状況。

「出来るか？」

「やるしかないさ」

「頼む」

「……」

カタカタとキーを打ち込む音と次々に移り変わる画面に眼を走らせる。多分今頃は事務所内でも“雀”が同じように作業を行っているはずだ。そうして時計とイチとを交互に見やれば焦る心とは裏腹に彼は呼吸一つ乱さずに与えられた知識と情報を一気に“海”へと流す。その手なれた様子に雪は眼を睜り見守ることしか出来ない。

さすが“地上探索型管理官”を一人で担ってきただけのことはある。

その力量は如何ほどか…。

推し量れるものはないけれども、管理官として古株の雪からしても彼は優秀な人材だと解る。これなら“雀”にも引けを取らないかも知れない。そう思わずにはいられなかった。

次第に浮かび上がる文字の羅列の中に見え隠れする映像　どこか見覚えのある景色と白黒の霧がその視界を遮る。

眼を凝らしてその映像を見つめれば同様に頭に鈍い痛みが走る。まるで鈍器で殴られたような重い痛みと警笛のように耳をつく甲高い音に思わず眉を顰め息を詰めるが、痛みは次第に大きくなるばかり　掻きむしるように頭を抱え雪は眼の前にあったデスクに額を擦りつける。

「　　つつう」

「神谷!？」

「ばかつ…集中して…る」

「ああ」

止まない頭痛の隅で止まる事の無いイチの指の動きに、その音に安堵する。今は情報を集める事を最優先にしなければならぬ。それはよく分かっているはずだ。だから。

「くそっ」

荒い呼吸を吐きながら身体を起こす。自分自身に命令するように“動け”と言い聞かせれば制止するイチの声も今は耳に届かない。痛み眼の前がちかちかと点滅し始め、それでも眉を顰めながら画面を覗く。どこか覚えのある場所。なのに思い出せない。それがもどかしかった。その時

「これ、海”の中ですよ

雪さん”

その声に、鳴り響いた音と頭痛が止んだ。

不意に顔の横を掠める見慣れぬ色の制服に、鼻先を撥る匂い。その聞き覚えのある声に雪は驚いて振り返る。そこには、あの日確かに別れた男“J” 正確には「瀬名淳一」の姿があった。

孤独の音へ4・3〈（後書き）〉

雪が振り返ると、そこにはあの日別れた筈の男「J」の姿があった。彼は何故再び現れたのか！？

そして候補生「相原 心」とは！？

こんにちわ。

普段なら二話に分けて更新するんですが、ちょっと中途半端だったので一話にまとめました^^；
そしたら文字数が珍しく五千越え…。

地上と管理局、二つの場所の動きを交互に追うせいで凄く読みにくいかと思われます。しかも文字数多いし…。

そしてそして、なんと今回からまた更に新キャラが

緋花李さまにお願いしたところ「相原 心」ちゃんと言う素敵可愛いキャラクターを頂けました(。・。・) ありがとう、ひかりん(笑)

彼女の今後にも乞うご期待です！

…：… にも考えていないけど…(^ | ^ ;)
そんなこんなで更新です！

孤独の音〈4・4〉

記憶が交錯する。

いつの日かの存在を思い描くように廻る視界に眼の前の人物が重なった。

夢じゃない。そう、これは 現実。

「なっ お前」

「神谷、集中しろ」

「っ」

振り向いた先にある男の顔を確認した瞬間に隣から冷たく釘を刺され雪は息を詰める。こんなことしている暇はない 今は一刻を争う時だ。そう自分に言い聞かせると慌てて視線を戻し乱れる画面を見つめる。背中に男の気配と温度を感じながら…不思議とそれを嫌だとは思わなかった。

あんなに人の体温が苦手だったのに…。

微かに触れる肩口は自分の肌ではないのに彼の温度を伝え、気がつけば割れるほどの痛みを訴えていた頭からは甲高い音と共に痛みも薄れている。

霞がかっていた視界の先、揺れる画面はまるで複数のパズルが一つの絵を作り上げるように次第に鮮明にその映像を映し出す。そこは。

「 たしかに、ここは“海”だ」

「間違いないか？」

「ああ」

再度念を押すように確認した男に対し雪は画面を見つめたまま相槌を返す。これだけ鮮明に浮かび上がればもうこの景色を見紛う筈もない。ここはよく知る“記憶の海” そのものだった。

「ここに何かあるんですか？」

「……」

「……」

不意に口を挟むJの声には答えずに雪は一人思いを巡らせる。

これが何を指しているのか 彼が何を伝えようとしているのか。皆目見当もつかない。もとより解らない人物だったが言葉を交わさなくなった今では、もう彼の口癖さえも思い出せない。声も仕草も記憶の中に確かにあるはずの何もかもが抜け落ちてしまったかのよう。虚無感がその胸にあった。

「神谷？」

「…解らない」

訝し気に顔を覗きこむイチの声にさえ反応できずに雪は一人俯く。遠くで何かの声を聞いた気がしたけれど、それも一瞬の出来事で今はもう何も聞こえない。画面が再度歪み終わりを告げるエラー音が個室に響いても三人は動けずにいた。

*

同時刻。

管理事務所に集まったメンバーも雪たちと同じ映像を見つめていた。

次第に鮮明になる映像を食い入るように見つめる雀と狐。ただ黙り込み高みの見物の様な視線を送る心。眼を逸らし静かに俯く罍。それぞれが僅かに思う処を持ち時間はただ静かに流れて行く。そして…。

「“海”です」
「!?」

沈黙を破るのは幼い子供の声。

大きな黒い瞳を不敵に細め彼はまるで悪戯を思いついた子供のように楽しそうに呟く。その口角は緩やかに円を描き確かに少年は微笑んでいた。

「これは“記憶の海”^{メザイ}が見せている幻影に過ぎません」
「…何を」
「ですが、本体である彼女は恐らくこの場所に居るでしょう…」
「…」

少年の言葉に訝しげな瞳を向ける双子に対し、黙っていた罍が静かに口を開く “彼女”とは誰の事を指しているのかと。

不意に鼻で笑う気配がする。冷たい空気を背中に感じながら罍はその気配の方を振り返った。そこには案の定“心”の姿がある。

「はっ…福山悠里のことよ」
「福山…悠里」

多少嘲るように告げると彼女は切り揃えられた髪をスツと揺らす。その仕草に合わせて花の髪飾りがリンとまるで鈴のように小さく鳴いた。言葉もなく不機嫌に皺を寄せた眉で雀が睨む 明らかに敵意をむき出しにしたその眼に“心”が少し頬を緩める。

「んで、どうしろって」
「雪たちは地上に居るのよ」

雀の苛立ちを感じ取ったのか狐も間を取り繕うように口を開く。
今までは雪が福山悠里の身体に入り、また福山悠里が雪の身体にいるのだと思っていた。それを否定するだけの材料はなかったし、道理的にもそれで辻褃合わせが可能だと考えていた。なのに。

雪の身体は空虚からしいなのか…。

確かに雪の身体からは何も感じられなかった。

熱も色も、生命には必ずあるはずの息吹も。何もない。本当にただそこにある<ruby><rb>人形

</rb><rp>(</rp><rt>・ </rt><rp>) </rp></ruby>のような違和感。気付かなかった訳じゃない。気がついていたら、けれど、それは彼女が何も持たない弱き“人間”であり、彷徨っている魂だからだと違和感を訴える自分自身を否定した。

それを見抜いたように幼い少年の瞳が揺れ、彼は静かに続きを告げる。

「地上での探索と同時に“海”に管理官を派遣ひくする必要があります」
「派遣…」

「はい。記憶を探すよりも、まずは依頼人である彼女 福山悠里の保護が優先です」

「……」

正論と言えるその言葉に雀は言い返す事も出来ず真っ直ぐと見つめていた眼を不意に逸らす。その先に待つ支持を聞きたくなくて思

わずきつく唇を噛んだ。ピリツとした痛みと共に広がる錆のような味。

気持ちを表しているようなその色舌で軽く舐めると、咎めるようにその唇に優しい指先が触れた。狐だ。

「！？」

驚いて顔を上げれば、ふわりと微笑む狐は何かを悟ったように頷いて、そうして眼の前の少年へと真っ直ぐな視線を向けた。そこに迷いはない。

行くのか…狐。

狐は空間移動管理官だから。雪同様にその任を与えられた時から彼女は一人“空間”を渡ってきた。数えきれない記憶の形を、歪んだ思いをその胸に受け止めて自分自身が傷を負うこともしばしば。雪ほど無謀なことは起こさないがそれでも彼女が任を負うたびに、一人何が起こるか分からない“記憶の海”に渡るその背中を見送る度に、雀の心は軋んだ。一緒に行くことは出来ない。管理局を離れる訳にはいかないから遠くで補助することは出来ても、傷付く彼女の“盾”になることは叶わなかった。

「い」

「私が行くわ」

「っ？」

一つ足を踏み出し「行きます」とそう告げようとした刹那、先手を取るかのように狐の言葉は“心”によって遮られる。潔く力強いその声には寸分の迷いも感じられない。それどころか好奇心にも似た

不敵な色がその瞳に浮かんでいた。そして。

「待って、心はダメだ」

慌てたように制止する墨。その声に心はゆっくりとした仕草で墨を見つめる。

「何故？」
「何故って」

咎めるように鋭い視線を向けて心は墨に尋ねる。その眼には有無を言わせない程の強さがあった。不意に墨は彼女に伸ばした手を引く。

「理由を教えて」
「理由……」
「私が“適任”な筈よ。そうでしょう？」
「……」

少年に相槌を求め視線を送れば彼はそれよりとは明らかに違う表情で口元を歪めて見せる。背筋を這い上がる冷たいものに雀と狐は息を飲んだ。口元で軽く嘆息すると少年はゆっくりと顔を覆う。その黒い瞳が深い碧に色付けば“少年”が“何か”に変わる瞬間を目の当たりにした気がした。

「良いでしょう……」

常よりも凜と通る低い声に、胸がざわつく。

絶対的な“力”を前にした時のような言われの無い焦燥感と不安が押し寄せる。眼の前に居るのは力で敵わないはずの無い幼い少年

に過ぎないのに　それでも逆らうことは出来ないような圧迫感を感じていた。彼の指がゆっくりと上がる。その眼は例外なく彼女の姿を捉えた。

「相原　心。貴方にこの先の運命を託します」

その一言は何よりも重く、全ての色を変えて行った。

孤独の音へ4・4（後書き）

突如現れた」と、浮かび上がる”海”の映像。
それが何を意図するかなんて、知らなかった。
知らず動き出した元・案内人の”心”。
彼女は果たして。

こんにちはわ^^

謎多き「墨過去編」です。

書いてる自分にも展開が”謎”（笑）

まったく今後の展開が見えてきませんが、それでも彼らは勝手に動きます。

新キャラ「心ちゃん」が予想以上に黒い感じの登場なんです…

^^;

彼女に関しては今後をお楽しみに！！とか言っときます

孤独の音〈5・1〉

外の熱気を打ち消すように冷房の効いた店内で彼女はいつものように片膝を立てる。およそその外見にそぐわない態度に、通り過ぎる人々は訝し気に振り返っては眉を顰めた。長い髪に細く華奢な肩、長い睫毛には影が落ちるのにその瞳は偉く勝気でそして攻撃的に見える。中に“存在する”人物が違うと言うだけで、人はこんなにも変わるものだろうか…。

「雪さん…足…」

「ん？」

余程喉が渴いていたのか、ジューズのストローを加えたまま上目づかいでこちらを見る彼女は 正直に可愛いと思えた。

普段の表情よりも少し幼い姿に、彼は息を飲む。

これは反則だろっ。

いくら姿かたちが違うと言えど、中身はやはり彼であり彼女だ。男らしく頼れる部分と、無鉄砲で危なっかしい部分を併せ持つ処は変わらないし、やっぱり守りたいと思ってしまう。いつだって情けない処しか見せていないし、守るより守られることの方が多いとも思う。それでも。

「いつ、」?

「はいっ!？」

突然の呼び掛けに思わず素っ頓狂な声を上げる。

本来ならば消されていたはずの記憶と、懐かしい呼び名に「は瞳

目した。その名を平然と呼んでくれた事が嬉しい。

彼女は椅子に上げていた足を戻し、少し絡めて見せる。組んだ腕をテーブルの上に乗せて身を乗り出すと、その瞳は真っ直ぐにJを見つめ細められた。何を訝しがっているのだろうか。

「何でしょう、雪さん」

殊更優しく問いかけて見せる。

だが、その声にも彼女は半信半疑の瞳を向けた。そして 溜息を一つ。

「お前、何で覚えてんだよ」

「えっ？」

「普通、忘れる筈なんだけど」

「…はあ…」

なんて間抜けな言葉しか返せないのだろうか。

至極真剣な彼女に対し、J自身は聞かれても返せる答えも持ち合わせていないし、何より“記憶”が消されるなんて知らなかった。もっとも“消されていないければならない”記憶を現在まで持ち合わせていられたことは幸か不幸か彼女の元へと導いてくれた訳で、その事実には感謝したいとさえ思う。

俺、やっぱり…。

自分の奥底にある想いに気がついたのはつい最近。

あの場所から、“記憶管理局”を立ち去ってから心はどこか埋まらず、まるでパズルのピースが二、三個抜け落ちてしまったかのよう。心に隙間が開いてしまったと感じていた。その本当の意味にも気づかずに…。

そう、俺は確かに“忘れて”いたんだ。

はつきりとしもないもやもやを胸に抱えて、視界に霞がかかったような世界を生きていた。それは別段可もなく不可もなく、当たり前だと言われればそれを否定する理由もないような曖昧な日常。行き交う人々、流れる時間、退屈を紛らわせるために集まり、笑い合う友達。吹く風に湯きを覚えて空を見上げれば、時折聞こえる懐かしい“声”。

声が聞こえた…だから。

「気が付いたら、ただ“雪”さんを探していました」

告白にも似たストレートな言葉と共に、「Jは真摯な瞳を雪へと向ける。まるでその瞳から逃れるように、彼らしくもなく顔を背けると不意に雪は溜息を一つ零す。

「……俺のせいなのか」

ポツリ、聞こえないように呟いた言葉には後悔と苦渋が滲んでいるように見える。眼の前に対峙していればこそ分かる雪の心の変化に、同じような表情を思い出す。そう、“記憶の海”^{つみ}で見たあの日と同じ表情だ。

負の感情に取りつかれ、心を、記憶を呼び起されていた。あの時。

雪さん…どうしてそんな顔…。

いつもサバサバとしている彼からは想像も出来ない暗く思いつめ

た様な表情にJの胸は締め付けられる。何がそうさせているのかなんて分からなくても、不意に抱きしめてしまいたくなる…。

「雪さん」

「……」

声をかけようとして、その口元に一本白く細い指が戸のように立てられる。先程まで空を見つめていた瞳は知らずJの背中よりも遠く、窓側に向いたカウンター席を見つめ微かに細められた。まるで獲物を狙うかのように光る瞳には一寸の迷いもない。だから…。

「雪さん……」

「動くなよ。じっとしてろ」

「……はい」

小声でのやり取りを続けながら瞬時に雪の行動を理解する。

振り返る事は出来ないが、どことなく感じる冷やかな視線と嘲笑のような下卑た声が微かに耳に届く。多分、年頃はそう変わらない

“男子高校生”だろうか。

見れない相手を知る為に全神経を総動員してJはその会話に意識を向ける。太く低い声はぼそぼそと小声で何かを話す。内容はこうだ。

……二組の……だろ。

そうそう……確か……してたって。

マジ、それ。

席が離れている為か、これ以上の内容は聞き取れない。それでもこれだけは分かる。

雪から教えて貰った今回の依頼主である彼女

福山悠里

は、

」に余り良い印象を与えてはくれないらしい。それどころかその見た目との相反さにうんざりさせられそんな気さえしてきた…。

どんな子なんだよ。“福山悠里”って。

見ず知らずの彼女に思いを廻らせては見たものの、今現在の雪の福山悠里の印象が強すぎて想像に難くない。軽く頼杖をつけて」の身体に隠れるように奥の様子を窺う様は、傍から見れば仲の良い恋人同士にも見えるくらいの距離だった。微かにフローラル系の香りが鼻孔を擽る。

なんか…妙な気分。

眼の前に居るのは“神谷 雪”じゃないのに“福山悠里”で、一度別れてしまった もう会えなかったかも知れない 人ともう一度こうして傍にいる。触れあえる距離。名前を呼べば届く距離に彼女はいるんだ。

「おいっ」

「っ?」

そんな事を一人考えていれば唐突に声をかけられる。眼の前の人物の鋭い視線に」は一瞬で我に返った。

「出るぞ、一旦」

「えっ」

そう言うなり席を立ちあがる雪の後を」は慌てて追いかける。その背にざわめきと、不穏な空気を感じながら…。

孤独の音へ5-2

誰かの為に生きたいとそう思っていた。

人は一人では生きられない事を知っているから、誰かの為に生きようと思った。それが誰だったかなんて、今はもう遠い記憶。

深い深い森の奥を進む。

“記憶の海”を訪れたことは殆どない。過去色んな“中間案内人”が存在したが、その殆どが“記憶の海”に足を踏み入れることはなかった。

現実世界からは隔てられた別時空に存在している“記憶世界”は、常よりも重い空気を纏い、髪飾りを鈴のように鳴らして通り過ぎる風さえも何処か心をざわつかせていく。

揺れる木々の葉に沢山の瞳が浮かび上がる　そんな気がした。

だって、ここは過去を触発させてしまう場所だから…。

居心地が良い訳が無い。

今だって自分自身をしっかりと意識していなければ、いつ彼らに引き込まれてしまうか分からない。その影響は大きい。

案内人に限らず“管理局”に勤めている彼らにだって、影響が無いわけではない。実際に“記憶の海”に足を踏み入れて戻れなくなった“管理官”達も過去には記録されている。

いくら忘れたふりをしていようと、心に残る記憶は隠せない。

「…」。

「っ!?!?」

不意に振り返れば通り過ぎる風が巻き上げた木の葉が、まるであの日のように空を舞う。リン…とまた一つ鈴の音が聞こえた。あの人の“声”みたいに。

「心？」

「」

茫然と空を見つめたまま動かない彼女を不審に思い墨は声をかける。先程からずっと無言で歩いていたかと思えば、急に振り返り彼女は舞う木の葉をみつめ感慨深そうに眼を細める。まるで何かに心を奪われているようだ。

「「こころ、心つ、大丈夫」

軽く肩を揺すり少女の瞳を覗きこめば、そこに映っている色に驚く。その瞳はよく知る人物と同じ色をしていた。深い深い闇の色。

「「つ、ええ」

まるで吐息のように返事を返す彼女に墨はホッとして息を吐く。もうその瞳に“闇”は見えない。一瞬の出来事はきつと彼女自身も気がついていないのだろうと思う。だけど、だからこそ、彼女の事を不安に思う。

心、ここで何かに気を取られてはダメだよ。

戻れなくなる。

そう言いたいわけじゃない。

戻れなくなるだけならばそう問題ではないのだ。

非常事態の時の為に“自分”が居るのだから、何かあれば彼女を

ココから連れ出す位の術も力も持ち合わせている。勿論、彼に“心”の同行許可を求めた時点でそれくらいの事は覚悟していた。何が起きてても可笑しくはない　ここは“記憶の海”だから。

「それで、中央制御室はどこ？」

「うん。もう少し深い処にあるんだ」

「そう」

ぼつりぼつりと端的な会話を続けながら、彼女は辺りを見回して警戒を怠らない。“中間管理官”としての役目が長すぎて、どうにも堅苦しいような生真面目な部分が表に露呈してしまっているように思う。元来の彼女はもつと明るくて元気な子だった印象があるだけに、少し寂しくも思えてしまった。

キミに干渉してはいけないのにね。

バイトオ
相方が違うから、彼女と一緒に仕事をしたことは数えられるほどしかない。それでも彼女のことは知っている。いつも元気で明るい声と笑顔が絶えない　暗い人間関係のある“中間管理官”達の間でも　人気者だった。雪同様、口よりも先に手が出てしまう性質なのも覚えている。

「　　」

思わず思い出したエピソードに墨は口元を軽く歪める。

心に気付かれないようにそつと手で口元を覆うと頬にかかる髪が少しだけ揺れた。その時。

「　　ねえ」

「　　？」

「……」
「……」

不意に口を開いた彼女が立ち止まる。

俯いたきり上げない顔の表情を窺い見ることは出来ない。小さな自分の肩を抱く白い指には力がこめられニツト地の柔らかい洋服に皺を作って行く。まるで何かに耐えているように見えた。

「心？」

「うん」

「何が聞きたいの？」

「っ」

“迷い”を言葉に出来ない彼女に墨は優しく、けれども何処か冷たさを含ませた言葉を投げかける。彼女の肩がピクンツと微かに跳ねた。

「……る、墨は」

「うん」

「墨は記憶の海に何度も来たことがあるの？」

必死に拳を握り告げた言葉たちは静かに風が空へと舞い上げていく。また一つ彼女の髪飾りがリンと揺れた。墨は舞い上がる木の葉を見つめ視線を空に送る。その瞳にはただ何よりも澄んだ“青”が映る。

「うん…そうだね」

「……」

「もう、数えきれないくらいは…来てるかな」

「……」

墨の答えにも心は何も答えない。

ゆっくりと視線を彼女に向け直して、先程まで地面に向けられていたその瞳が真っ直ぐに自分を見ていた事に気づく。同じような色をした眼差しに墨はフツと優しく微笑む。その微笑みに心も困ったように笑顔を返してくれた。

「大丈夫。そのうち慣れるよ」

彼女の質問の意図には触れずに墨は違う不安を取り除く。そうすることでしか彼女の心に触れてあげられることは出来ないから…。

臆病でごめん。キミも、僕も…。

真っ直ぐに続く木々の間を並んで歩く。

それ以上の会話はない。けれども、思いは同じだと思えた。

孤独の音〈5・3〉

うんざりする暑さに思わず眉を顰めなくなる。

太陽の一番高くなる時間。地面からの照り返しも決して生易しいものじゃない。

黙々と前に行く小さな背中を追いかけJは少し足早に人混みをかき分けて行く。彼女の歩く速度が速いなんてあの頃にしてみればいつものことで、別段それに対して焦ったりすることもなかった。それなのに今は、そんな筈はないのに 見失えば、もう二度と逢えない気がして 無性に怖かった。

ここに“雪”^{きみ}はいるのに。

目的地がどこなのこかも聞けず、ただ只管彼女の足取りを追う。時折ぶつかる人の群れに口先だけの謝罪を述べて けれども眼を逸らすことは出来なかった。

「せつ」

呼び止めようとしたその刹那、今更ながらに呼び名に困る。

依頼人である福山悠里^{彼女}の事を知る人物がこの地上にいる以上、彼女を呼ぶ名は一つしか存在しないのだろうか…それとも。

“管理官”の規則^{ルール}には明るくないしな…。

きちんとした理を立てた方が良いのかも知れない。

少なくともただの人間である自分が、何の関わりもない普通の高校生が関与していい物なのかも分からない。ただ一つ言えることは

“雪”の傍に居たい。それだけだった。

「あの」

「っ」

駆け足で追いついて彼女の腕を掴む。

予想以上に細い腕に驚いて、けれどもその手を離したくはなくて
」は不意にその手を引く。そして。

「俺っ、あのっ、えと……」

「……」

「？」

「……」

「…雪…さん？」

ふわりと腕の中に転がる温もりに少し上気した頬、いつもの憎まれ口の一つでも返ってくると思っていた唇からは何も言葉はなくて代わりに気だるげな溜息が零れる。明らかに様子が変だ。身体は熱いのに、額には汗すら浮かんでいない。力のない身体はぐったりと
していて大人しく」の腕の中に収まっている。

「雪さん?!」

「……」

「ちよっ、大丈夫ですかっ？」

「……うるさい……」

閉じたままの瞳で彼女は呟くように吐息に似た声を漏らす。僅かに眉根が寄せられたかと思うと、今度は緩慢な動作で髪を掻き上げ
身体を起こした。また溜息が零れる。

覚束ない足取りで日陰になりそうな路地に入りこむと、人目も気

にせずにするずるとその場に座り込んでしまふ。その表情は見えない。

「雪さん？」

「……」

「…あの」

「うるさい……」

心配で心配で仕方がないのにそんなJの気持ちを彼女は簡単に跳ね除けてしまふ。こんな時、同じ管理官のメンバーならばもっと上手く彼女を助ける事が出来るのだろうか…。

そんなこと考えたって仕方がないのに…。

もしも…なんてそんなくだらない考えに耽っていた処で答えは出ない。

自分が“管理官”ならなんて、そんな夢物語のようなことを思っていたって前には進めないから…。

今、傍にいる。それで充分じゃないか。

先の事を考えて立ち止まった処で何にもならないのなら、今傍に居られるこの瞬間を大事にしたい。そう心から思った。その時。

不意に足音と気配が近づく…それも一人では無い。連れだって歩く人なんて人通りのあるこの場所では珍しいことではないが首の辺りにチクリとした鈍い痛みが刺したような気がした。多分これは気のせいじゃない。

砂混じりの地面に延びる二つの影。

まるで自分たちと対峙するように立つその影を訝し気にJは振り返

った。そして。

「あんだ、福山悠里だろ？」

「……？」

不躰にも程があるような上から目線の男が二人。体格的には自分とそう変わりない様に見えるが、今時珍しい黒い髪に決してチャラチャラとはしてない服装。どちらかというあまり目立たないようなタイプの人間に見えた。一体何の用があるというのだろうか…。

蹲ったままの福山悠里は顔を上げる事もなく反応さえしない。それが余計に彼らのプライドを刺激したのか、隣に立つJのことなんて気にも留めずに徐にその手を彼女へと伸ばした。

「っ」

「お高く止まってんなよ」

「誰でも良いんだろ？」

下卑た笑いの男たちは有無を言わずに彼女を立ち上がらせる。それを制止しようと思わず手を伸ばすがその手は一瞬早く何者かに留められた。雪だ。

「いいから」

「でもっ」

「黙って見てろ」

「っ」

長い髪の間から僅かに向けられた視線が、怪しい色を宿して光る。それだけでもう動く事さえできない。どうしてこの人はこんなにも強い眼差しをしているのだろう。

「学校に来なくなつたかと思えば　もう違う男かよ」
「ホント、あんたも懲りないね」
「……」

雪　福山悠里　よりも頭一つ分以上は高いだろう男たちは彼女を囲って何やらにやにやとお互いに視線を交じ合わせる。まるで値踏みでもするかのような男たちの視線は不意に彼女の胸元へと落とされた。そんな男たちの様子を知ってか知らずか、それでも彼女は一向に動こうとしない。それどころか胸に架かる髪の毛を男の手で掻き上げられても不満の声一つ漏らさずに大人しくしている。絶対に変だ。

普段の雪さんなら、こんな奴ら殴り飛ばしてる。

いくら身体が違つと言えども、中身は“雪”だ。それならば高い確率で彼女の拳か足が飛んできて良い筈なのに……。

「福山さ〜ん？」
「何黙つてんの？　オヤジとは寝れる癖に、俺らの相手は出来ないつてか」

イライラするような男たちの笑い声にJは拳を強く握る。分かっている。

黙っている事に何か彼女なりの意図があることなんて分かり切っているのに、それでも“男”として　そして“彼女”を好きな一人の人間として我慢の限界を迎えようとしていた。

何で…こんな奴ら。

「聞いてますか〜？」

「　　っ!?!?」

男の手がその二つの膨らみへと延びる。その刹那。

「何をしている」

「　　っ!?!?」

「なっ、何だよ…お前」

スツと後ろから延びた手に男の手首は阻まれ、むしろ痛いほどに締めあげられる。突然の出来事に驚いて顔を上げれば、そこには別行動をとっていた彼　イチ　の姿があつた。男たちよりも頭半分ほど高い背に冷たい瞳を嘲るかのように細めた彼は年齢に関係なく“怖い”と思わせるには十分な迫力がある。なんて言うか…彼らの様な目立たない男たちには到底敵わな^いと思わせられるだけのがが、イチにはあるのだ…。

「邪魔だ。どけ」

「　　なっ」

一言。

本当に何の感情も宿っていないような言葉で男たちを一蹴すると、彼は徐に雪の腕を掴み上を向かせる。そして彼女の表情を見た瞬間、持っていたキャップ帽を言葉もなく被せた。

「熱中症だ　馬鹿」

「熱中…症?」

「慣れないか?　言っておくが、いつもと同じだと思って行動していると痛い目を見るぞ」

「　　…でも」

「　　でも」じゃない。　自分の身体くらい例え仮初の身体^{うづわ}だとして

も責任を持って」

「……」

ふらふらと覚束ない足をイチに支えられながら歩く。Jはただ見ていることしか出来なかった。

孤独の音〈5・4〉

涼しげな日陰に入り雪は固い木のベンチを背に天を仰いでいた。もっとも日陰を作るは夏の日差しをたっぷりとその身に浴び、大きく成長した大樹な訳だから視界に入るのは揺れる葉と、その隙間からチラチラと見え隠れする僅かな日の光だけだ。

あゝ…しくじった。

こんなつもりじゃなかった。

普段よりも疲労やそれに対する倦怠感があったものの、それらすべては今の自分が“生身”であるからこそだと勝手に思い込んでいた。生身の身体を利用してはいるから熱くなったり、だるくて身体が重いのだと…。

そうか。これが“熱中症”か…。

額に置かれた冷水で湿らせたタオルを手取る。不思議な感覚。熱いのに身体から排出される汗の量は少ない。身体の中に熱が籠り心臓の鼓動が大きく早く聞こえる。生きているのだと鼓動が知らせる。

生…き…て…い…る…か…。

多少の居心地の悪さに自嘲の笑みが漏れ、それを悟られないように知らず口元を手で覆っていた。訝し気に「が名を呼ぶ　雪さん？　と。」

「どうしたんですか？」

「や…何もない」
「……」

愛想もない口調で答えると納得しない表情で恨めしそうに上から覗く男の影が重なる。覆い被さるようにチラチラと射す木漏れ日を遮った男の黒髪がゆらゆらと視界に揺れ、それが些か気に障った。人から見下ろされるのは決して良い気分にはなれない。例えそれが誰であろうと…。

「何だよ」

「えっ？」

「人の事見下ろすんじゃないよ」

「あつ、すみません」

不機嫌に男を一瞥して雪は身体を起こす。タオルを手に取り握りしめれば顔色を窺うようにJがチラチラと視線を泳がせ不意に口を開く。

「あの…」

「あつ？」

「その…さっきの“理由”を教えてくださいませんか？」

「さっき？」

訝しげな眼でJを見てその細い首を傾げる。とぼけていると言うよりも本当に思い当たらないといった風に眼で問いかける彼にJは溜息を零した。辺りに人はいない。ただ静かに風が頬を撫でて行く中、二人は見つめ合うように向かい合って座る。もつとも可愛い筈の少女が半ば膝を立てている光景など見たくもなかったが…。

「ほら、あの高校生に絡まれたときっ」

「……」
「彼ら“福山悠里を知ってる風だったでしょ？”
……ああ」

ようやく合点が言ったのか彼は僅かに視線を逸らすと口元に手を当てる。考える時の癖なのか、こんな姿を前にも見た事があった。少しの沈黙があり、けれども「は焦ることなく彼が口を開くのを待つ。きつと問いただした処で彼が応えてくれないことなど分かっている。だから、彼が自分の中で答えを出すのをただ静かに待った。そして……」

「分かるんだ」
「……？」

不意に開かれた口はまるで自分に言い聞かせるみたいにゆっくりと語られる。胸元の見慣れたシルバーチェーンを弄りながら彼はどこか遠くを見つめ眼を細めた。思いを馳せるように。

「福山悠里の身体（しん）に居るせいだろうな。記憶が…悪夢はこの子の中にあるんだ」

「えっ……」
「この子は失くしてなんかいないし、忘れてもいない」

曇る表情はそれだけ彼女の記憶に触れているせいなのか、辛そうに寄せられる眉根にさえ掛けてあげられる言葉が見つからない。自分の無力さに握った手に力を込めるが無情にもその頭上に雪の音がぼつり降った。忘れられるはずがない。と。その言葉に、見上げた彼女の表情にチクリ、胸が痛んだ。隣に、こんなにも近くに触れられる距離に居ると言うのに。確かにそこには距離があって、縮められない事に更に胸が痛む。

「雪さ」

「待たせたか」

声をかけたのと同時にJよりも少し低い声が被さる。この落ち着いた声音は“イチ”のものだ。

ベンチに座る二人に冷えた缶ジュースを軽く放ると、彼は汗ひとつ見せない涼しげな表情で辺りを見回す。近くに人が居ない事を確認すると、視線を外したまま雪に向かって何かを投げた。それが紙の切れ端だと気付いたのは、雪が慣れた手つきで受け取りその小さく折りたたまれたメモを Jからは見えない角度で 開いた時だ。わざと見えないようにちらりと横目でJの視線の位置を確認してから雪は文字に眼を通す。

「…そうか」

「さっきの男たちからも大方話は聞いた」

「ふん」

「…いらん事までべらべらと話したぞ。あいつら」

「お前が怖かったんじゃないの？」

「……別に、脅したつもりはない」

メモに目を走らせながらも彼は軽口をたたく。お互いに視線は違う処を向いているが、Jには踏み入れられない強い絆が窺える。Jは何も言えずにただイチから受け取った缶ジュースに口をつける。冷えた液体が喉を通り心も身体も冷やしていく。すっと心に燻った熱が引くのを感じた。

「雪さん。俺にも見せて下さい」

「あつ？」

「それ。彼女に関する事なんでしょう？」

「…おまえ」

言葉は自然と口から出る。

色んな事を悩んだ処できっと“彼”は本当のことを教えてはくれない。それが当たり前で、今までもこれからも変わることはない彼女なりのルールだった。部外者を巻き込まない。少しでも管理局に関われば後戻りは出来ないから 自分のように 管理局に縛られないように、その為に冷たいふりをする。あの短い時間で、一緒に過ごした日々で」が知った雪の真実。

本当はすごく優しくて、すごく不器用な人。

彼女が自分を巻き込めないのなら、自分から関わる他に彼女を助ける術はない。そう知っている。だから。

「俺、知りたいんです」

「……」

「俺にも手伝わせて下さい」

雪は常にも増して冷たい碧い瞳を眇める様に細めた。その瞳の言いたい事を察して口を開くは地上探索型・イチ。彼は唯一生存したまま管理官をしている。いわば」の目指すべきところだ。

「何故、知りたいと思う？」

「俺は」

「興味本位は身を滅ぼすぞ」

「でも」

「悪い事は言わない、今のうちに忘れる」

「っ」

至極冷静に一定の声音で話す彼は、何か重たいモノを抱えて生きているように見える。それがなんなのか知る由もなく」は言葉を詰まらせた。

「前にも言った」

「……」

「記憶は簡単に扱えるようなものじゃない」

「……はい。覚えています」

「“知りたい”とか“救いたい”とか、そんな自分本位な考え方の奴に関わらせることなんて出来ない」

「……」

痛いほどに彼の言葉が胸に刺さる。

分かっている。いや、本当は分かっていたのかもしれない。ただ自分が彼らに救われた様に、同じように誰かを救いたい。誰かの力になりたい。単純にそう思っていただけなのかも知れない。もしくは、ただ“雪と一緒に住みたい”とそう望む。でも……。

それはいけないことなんだろうか？

誰かが自分を動かす“原動力”になる。

それは時に大きな力を生み、何かを作り出しては世界を破壊から創造へと導くような強大なものへと変わる……。確証はない。でも不確かな直感が」の心に生まれて行く。

「それはいけないことですか？」

「あ？」

「“誰か”の事を思って動く事は、確かに自分本位かも知れませんが」

訝し気に自分を見つめる彼らの表情は痛いほど真剣だ。不安と緊張

から渴いて張り付いた口腔内に話しくさを感じながら、それでも
「は眼を逸らさずに二人を見据える。今なら少しだけ“勇氣”が持
てそうな気がした。

「でも決して無駄では無い筈なんです。“人”は“独り”では生き
られないから“誰か”の為に生きられる…。お互いを知りたいと思
う心が“力”を生むんじゃないんですか？」

沈黙が三人の間に降り積もる。言葉が上手く伝えられずにきつく
拳を握り、ちつぽけな勇氣を嘲笑われるような気がして不意に俯け
ば、ふわり頭上に優しい溜息が降った。柔らかく小さな掌が頭に触
れる。言わずとも知れた“雪”の手だ。

「お前の気持ちは分かった」

「雪さん」

「でも」

「……」

「そう簡単にお前を認める事は出来ない」

「どうしてですかっ」

「理由なんてない」

「っ」

二の句を告げなくなるような冷たい視線に息を飲む。眼の前にあ
る彼の顔が、一瞬「の知る人物 神谷 雪」のものとは思えな
い程、黒い色を滲ませる。殺気を滲ませたような鋭い視線を逸らす
事も出来ず、「はその瞳を見つめた。そして。

「そこまでだな」

「？」

「神谷、お前の負けだ」

「なっ、ちよっ、イチ!？」

深い溜息と共に、イチは腕組していた腕を解くとJに向き直す。Jよりも少し高い目線の彼はゆっくりとその視線を合わせると、曖昧に笑って見せた。初めてみる　不器用な　笑顔にJは眼を見開いて、言葉を失う。笑顔とは裏腹のその瞳に映る闇は濃くて、そしてすごく哀しい色をしていた。

「J…だったか？」

「はいっ」

「俺は、お前に賭けてみたい。そう思う」

「…はい」

彼の言葉にただ頷く。

素直に、その言葉の意味を捉えて　隠された本当の意味に気付く事はなく　頷く。そんなJを見てイチは更に自嘲気味に笑い眼を閉じる。

雪はその様子をただ冷たい瞳で、人形のように見つめていた。

孤独の音へ5・4（後書き）

長らくお待たせしました。
ノスタルジア更新です。

孤独の音〈6・1〉

彼は椅子に深く腰掛け、ただ何も空を見つめていた。

その瞳に映るのは“闇”。何も世界。音も光もない、温度さえ感じられない…そんな世界。そっと自分の手を見つめれば、そこには見慣れぬ小さな子供の手がある。片目を覆うのに精一杯という程の小さな掌は自分のモノではない。そんなこと分かっている。この身体は今もただあの時の約束を忘れずに、懸命に守ってくれている。だからこそ相反する二人の意識を混合させないように力加減を測って、優しい彼の魂を傷つけてしまわないように守り続ける。残された時間はそう長くない。その間何もせず大人しく終わりを待てるほど聞き分けの良い子供じゃなかった。

お前が望む事を…。

今更、恐れるモノなど何も無い。

従順なふりを続けるのにも飽いてきた処だ。だから…。

「行動を」

静かに行動を起こさなければいけない。

それが自分の時間を削る事になるのだとしても。

後悔などするはずもない…。

彼はゆっくりと眼を閉じる。

眼を閉じてしまえば見えない事を知っているから。

望んでも手に入らない翼を、飛ぶことの叶わない空を見つめなくてすむから。

そうして、また彼は“闇”に落ちた。

*

一方、森を抜けた二人は“中央制御室”へとやってきた。全面ガラス張りのドームのような形をした不思議な建物。中にある装置を起動させることのできる人物は多くはない。限られた極僅かな人々にしか扱えない。それどころか、中央制御室に辿りつくことさえ難しい。

ここには“資格”を持つものしか辿りつけない。

「……」

「うん。ここが“中央制御室”だよ」

彼女は初めて来たのだろうか。

物珍しそうに建物の表面に触れて、そこに映る自分の顔の更にもう向こうを覗きこむように眼を凝らす。そうして中が見えない事を悟ると、今度は外周をゆっくりと歩きだした。

まるで新しいおもちゃを手に入れた子供のようにキラキラと瞳を輝かせて、彼女は何とも楽しそうに微笑む。久しぶりに彼女の明るい表情を見れて墨も自然と口元を綻ばせた。

興味津々……か。

一通り彼女の気が済むのを待つ為に墨は木陰に入り、腕を組むとそっと眼を閉じる。静かな風と微かに混じる負の感情が叫ぶ声。ここは“記憶の海”だから耳障りな声はいくつも風に混じる。それを否定するつもりはない。けれど肯定したり同意したりもしない。すれば引きずられることが分かっている。

静かに朽ちていけばいいのに……。

音もなく、苦痛もなく、誰に知られるわけもなく朽ちればいい。
そうしてこの心には“痛み”さえ残さずに、誰の記憶にも残らず
に、忘れられてしまえばいい。

そんなこと、無理なのに。

闇を宿した銀色の髪を指先で弄ぶ。

その刹那　風が走り、彼女の悲鳴が聞こえた。

「心？」

「

「心？　心、どこっ！？」

姿は見えない。

慌てて周囲を見回すが鏡のように反射するガラス張りの建物には
自分の顔だけが映る。その表面に触れながらいつになく焦った表情
で外周を走った。そこには　。

「離しなさいよ」

「

「心っ！！」

小気味よく頬を叩く音が辺りに響く。

明るい茶色の髪と、髪飾りを揺らして“心”が誰かを拒絶する。

それは墨にとって見慣れた二人組　薄青く無造作に跳ねた髪を持
つ小柄な男と、物静かどこか暗い雰囲気を持つ男　間違えるは
ずもない“時間屋”の凹凸コンビ。

「時間屋っ！？」

「罍！！ なんなのよつ、この二人！？」

心の叫び声とは裏腹に、彼は表情を一つも変えずに冷たい眼差しを少女に向ける。その瞳は嫌悪と憎悪に満ちていた。掴んだままの右手を離す事なく視線を心から罍へと向ける。

その眼がギラリと怪しく光り、彼らしくもなく静かに語りかけてきた。

「おい…どういうことだ」

「っ」

「どうしてここに“中間管理人”がいる？」

「…スギ」

怒りを含んだ声音に思わず立ち竦む。

いつもなら間に入る相方の凌も、眼を閉じたまま動こうとはしない。沈黙が恐ろしかった。

「僕たちはきちんと手順を踏んでここに来ている。スギ、その手を離してくれないか…」

「…手順？」

「要から任を受けている。それに“彼女こころ”はもう中間人じゃない、管理局に属する人間だ」

「……管理局…属する」

自分に言い聞かせるように反芻して、それから彼は眼を見開いて茫然と罍を見つめた。掴んでいた手の力は緩み心の腕は自由になる。腕を解かれた彼女はすぐに男の傍を離れると間合いを取って罍の後ろへと駆け込んだ。

「罍…こいつら…何？」

「心……」
「いきなり現れて、急に私の手を掴んだのよ」
「そう」

興奮冷めやらぬ心をよそに墨は困ったように眼を細め助けを求めように傍観者・凌へと向ける。その視線に気づいてか凌は不意に閉じていた眼を開けると徐に切れ長の眼を二人に向けた。

「俺たちはこの辺が騒がしいから、見回りに来た」

「そしたらこいつが居たんだ」

「…騒がしい？」

「俄にだが、海が騒がしい」

「原因は分かかってないの？」

「分からないから、中央こゝに来たんだろ」

彼 スギのぶつきらぼうなモノ言いはよく知る人物と重なる。

墨は眉を顰め、心は訳が分からないとでも言いたそうな表情で腕を組み立つ。臨戦態勢のスギをなんとか宥めると、話の分かるであろう凌に向き直す。これは”管理官”としてではなく”中間人”としてをお願い。

「出来れば僕らを中心に置いて貰えないだろうか」

「…中に？」

「これは”管理官”としてではなく、僕個人の”中間人”としてのお願いだよ」

「中間人として…ね」

墨の言葉の意図する処を読んでスギが可笑しそうに皮肉な笑みを刻む。モノ言いたげなその瞳は、より一層きつく光った。ごくりと唾を飲み込んで風が舞い上がるのを感じる。下から這い上がるよう

に風が落ち葉を巻き上げふわり、ひらりとその葉がもう一度地面へと戻って行く…。

「とりあえず何が起こってるのか、聞かせて貰おうか…」

不敵に笑う彼の眼に、微かな灯が点っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2261j/>

ノスタルジア管理局

2011年10月20日00時20分発行